寝屋川市文化財資料12

# 高宮八丁遺跡

（大阪府寝屋川市）

# 木　器　編

1989・3

寝屋川市教育委員会

寝屋川市文化財資料12

# 高宮八丁遺跡

（大阪府寝屋川市）

# 木　器　編

1989・3

寝屋川市教育委員会

櫂

編　物

# 序　　文

「木器編」は、寝屋川郵便局庁舎建設地内高宮八丁遺跡から出土した木製品についての報告書です。

高宮八丁遺跡遺物等整理事業は、昭和６２年度から３カ年計画で実施しており、本編は昨年度の「石器編」に引き続いて第２巻としてまとめたものです。

高宮八丁遺跡は、弥生時代前期中頃から中期中頃に至る古代河内潟北岸の低地に立地した弥生集落であることが確認された遺跡です。

この遺跡からは、当時の農耕のあり方を示す木製の鋤・鍬などの農具が数多く出土しました。

また、両端に水かきのある櫂が出土したことは、簡単な舟を使っての漁撈や往来があったことを示しており、弥生時代の漁撈の一端を示す資料として大きな成果であったと思われます。

その他、道具類・武器類も多く出土しており、これら多くの木製品は、現在も使用している農具や櫂その他の道具類等と材質の違いはあるものの、形状的にはほとんど差異がなく、弥生文化の高さに今さらながら感銘を受けているところです。

一方、多くの木製品を生み出すことができた自然環境をみますと、花粉分析や樹種鑑定により、多種の樹木の生育があったことが確認され、網代とともに出土したドングリにみられるように樹の実などの食料も豊富にあっただろうと思われ、多くの人々の生活を支えられる環境であったことが推測されます。

この報告書は、出土した木製品を種類ごとにその内容をまとめたものであり、多くの未解明な部分を残す弥生時代前期・中期の古代河内潟周辺の弥生社会の歴史と文化を明らかにする一助となり、本市の文化財に対する理解を深める基礎資料となれば望外の喜びであります。

また、本報告書に記載している木製品につきましては、科学的保存処理を講じておりますので近々には公開できる予定であります。

なお、現地発掘調査に引き続いて今回の出土遺物等の整理においても、寝屋川郵便局庁舎建設事業主体者として、遺跡の記録保存のための整理経費の負担など、多大のご協力をいただきました近畿郵政局をはじめ関係各位に深く感謝の意を表する次第です。

平成元年３月

寝屋川市教育委員会

教育長　　山　田　勝　久

# 例　　言

1．本書は、昭和60年10月から昭和61年７月にかけて実施した高宮八丁遺跡（寝屋川郵便局庁舎建設地内）発掘調査の遺物整理調査報告書であり、出土遺物のなかで木製品類に関する調査結果をまとめたものである。

2．本遺物整理調査は、寝屋川市教育委員会が近畿郵政局の依頼を受けて実施したものである。

3．本遺物整理調査に要した費用は、すべて近畿郵政局が負担した。

4．本報告書の作成については、大阪教育大学大学院講師（考古学）瀬川芳則を顧問とし、寝屋川市教育委員会社会教育部社会教育課文化財保護係塩山則之が担当し、調査員として浜田幸司、補助員として中原初美・川畑聰・露口真広・村田幸子・中司久美子があたった。

本書の執筆は、塩山と露口が行い、全体の編集は塩山が行った。写真撮影は、塩山、片岡修（前年度調査員）、浜田、川畑、露口が担当した。遺物実測及びトレースは、調査員及び調査補助員がそれぞれ担当した。

また、樹種鑑定についての玉稿を松田隆嗣氏（財団法人元興寺文化財研究所）から賜わった。

5．本書に掲載した木製品類の実測図・写真・遺物観察表の番号は一致する。

6．遺物の整理及び本報告書の作成にあたっては、多くの方々から御指導・御教示をいただいた。記して深く謝意を表する。

植田正幸氏（守口市教育委員会）、伊藤健司氏（財団法人元興寺文化財研究所）、財団法人枚方市文化財研究所の諸氏、野島稔氏（四条畷市歴史民俗資料館）

7．遺物整理調査の実施にあたっては、近畿郵政局の全面的な理解と協力を得、寝屋川市立池田第二小学校・同池の里小学校の協力を得た。記して厚く感謝の意を表する。

8．本書に記載した主な木製品については、財団法人元興寺文化財研究所に委託してP.E.G.樹脂含浸処理法による保存処理を実施している。

# 高宮八丁遺跡

## 木　器　編

目　　次


巻頭カラー写真図版
序　文
例　言
第１章　高宮八丁遺跡の環境 …… 1
第２章　高宮八丁遺跡における木器出土状態 …… 5
第３章　出土木製品・植物製品 …… 7
　第１節　木製品 …… 7
　　Ⅰ　農具 …… 7
　　a）鍬 …… 7
　　b）鋤 …… 15
　　c）竪杵 …… 16
　　Ⅱ　工具 …… 18
　　a）石斧柄 …… 18
　　b）砧 …… 20
　　c）鏝 …… 20
　　Ⅲ　織機具 …… 22
　　a）布巻具・経巻具 …… 22
　　Ⅳ　容器 …… 23
　　a）椀 …… 23
　　b）方形容器 …… 23
　　槽 …… 23
　　盤状容器 …… 24
　　c）高杯 …… 24
　　d）竪杓子 …… 25
　　e）匙 …… 25
　　f）杓子状 …… 25
　　g）不明容器 …… 26
　　Ⅴ　武器・狩猟具 …… 27
　　a）弓 …… 27
　　b）武器形木製品 …… 31

Ⅵ　漁撈具 …… 32
a）櫂 …… 32
b）タモ枠 …… 32
c）刺突具 …… 33
Ⅶ　運搬具 …… 35
a）橇 …… 35
Ⅷ　用途不明木製品 …… 36
Ⅸ　その他 …… 42
a）用材 …… 42
b）杭 …… 44
第2節　植物・自然遺物 …… 45
第3節　出土木製品観察表及び一覧表 …… 47
第4章　高宮八丁遺跡出土木製遺物の樹種について …… 84
第5章　考　察 …… 100
1）高宮八丁遺跡における鍬の発展 …… 100
2）高宮八丁遺跡における木器の生産 …… 103
第6章　まとめにかえて …… 109

## 挿　図　目　次

挿図1　調査地位置図 …… 3
挿図2　高宮八丁遺跡周辺遺跡分布図 …… 4
挿図3　出土広鍬（Ⅰ～Ⅲ類）型式分類模式図 …… 8
挿図4　出土弓弭部型式分類模式図 …… 27
挿図5　D－4区出土編物実測図 …… 45
挿図6　D－4区出土つる実測図 …… 46
挿図7　木器計測区分(1) …… 110
挿図8　木器計測区分(2) …… 111
挿図9　木器計測区分(3) …… 112
挿図10　高宮八丁遺跡における製材加工工程図 …… 113

## 表　目　次

表1　木器種類別点数一覧表 …… 6
表2　出土鍬類層位別分類表 …… 15
表3　出土木製品観察表 …… 47
表4　出土木製品一覧表 …… 65
表5　鋤・鍬の用材 …… 89
表6　竪杵の用材 …… 90
表7　槌・砧の用材 …… 91

表８　片刃石斧柄の用材 …… 92
表９　高宮八丁遺跡出土農耕具一覧表 …… 108
表10　主要遺跡水田耕作用農耕具と開墾土木用農耕具の出土状況 …… 108

## 図　版　目　次

巻頭　1
巻頭　2
図版　1　広鍬 …… 117
図版　2　広鍬・鍬（破片） …… 118
図版　3　広鍬・狭鍬・鍬（破片） …… 119
図版　4　狭鍬・又鍬・横鍬・鍬（破片） …… 120
図版　5　鍬（破片）・鋤・竪杵 …… 121
図版　6　石斧柄 …… 122
図版　7　織機具・容器 …… 123
図版　8　容器・弓・匙・杓子状木製品 …… 124
図版　9　武器形・タモ枠・刺突具・用途不明木製品 …… 125
図版　10　用途不明木製品・鏝・櫂 …… 126
図版　11　用途不明木製品・杭・用材 …… 127
図版　12　鍬・櫂・用途不明木製品 …… 128
図版　13　編物・弓・容器・用途不明木製品 …… 129
図版　14　櫂・用材 …… 131
図版　15　遺物出土状況　Ｅ７区落ち込み216(北東より)・Ｆ８区溝101用材等(西より) …… 133
図版　16　遺物出土状況　Ｅ－７・８区溝240(西南より)・Ｅ－７・８区溝240(北東より) …… 134
図版　17　遺物出土状況　Ｅ－７・８区溝101(西南より)・Ｄ－７区溝101柵列状(北より) …… 135
図版　18　遺物出土状況　Ｃ－３区落ち込み214（上層）・Ｃ－４区落ち込み214（上層） …… 136
図版　19　遺物出土状況　広鍬（Ⅰ）・壷と広鍬 …… 137
図版　20　遺物出土状況　広鍬（Ⅱa)未製品・広鍬（Ⅱa） …… 138
図版　21　遺物出土状況　広鍬（Ⅱb－b)未製品・広鍬（Ⅱc） …… 139
図版　22　遺物出土状況　狭鍬（Ⅰb)・又鍬 …… 140
図版　23　遺物出土状況　鍬装着状態出土状況 …… 141
図版　24　遺物出土状況　鋤・柱状片刃石斧柄 …… 142
図版　25　遺物出土状況　柱状片刃石斧柄 …… 143
図版　26　遺物出土状況　容器 …… 144
図版　27　遺物出土状況　容器・匙 …… 145
図版　28　遺物出土状況　弓 …… 146
図版　29　遺物出土状況　飾り弓・武器形木製品 …… 147
図版　30　遺物出土状況　櫂 …… 148
図版　31　遺物出土状況　鏝・刺突具 …… 149

図版　32　遺物出土状況　竪杵・Ｆ－９区井戸枠検出状況 …… 150
図版　33　遺物出土状況　容器未製品と用材 …… 151
図版　34　遺物出土状況　Ｄ－４区溝105石斧柄等・編物・タモ枠・つる …… 152
図版　35　遺物出土状況　編物 …… 153
図版　36　出土木製品　広鍬 …… 154
図版　37　出土木製品　広鍬 …… 155
図版　38　出土木製品　広鍬・狭鍬 …… 156
図版　39　出土木製品　狭鍬・又鍬・横鍬 …… 157
図版　40　出土木製品　鍬（破片） …… 158
図版　41　出土木製品　鍬（破片） …… 159
図版　42　出土木製品　鍬（破片・用材）・鋤 …… 160
図版　43　出土木製品　竪杵・石斧柄 …… 161
図版　44　出土木製品　石斧柄・砧・鏝・織機具 …… 162
図版　45　出土木製品　容器 …… 163
図版　46　出土木製品　容器・高杯・匙・杓子状木製品 …… 164
図版　47　出土木製品　容器・杓子状木製品 …… 165
図版　48　出土木製品　弓 …… 166
図版　49　出土木製品　弓 …… 167
図版　50　出土木製品　弓 …… 168
図版　51　出土木製品　櫂・タモ枠・刺突具 …… 169
図版　52　出土木製品　刺突具・武器形木製品・櫂 …… 170
図版　53　出土木製品　用途不明木製品 …… 171
図版　54　出土木製品　用途不明木製品 …… 172
図版　55　出土木製品　用途不明木製品 …… 173
図版　56　出土木製品　用途不明木製品 …… 174
図版　57　出土木製品　用途不明木製品 …… 175
図版　58　出土木製品　用途不明木製品 …… 176
図版　59　出土木製品　用途不明木製品 …… 177
図版　60　出土木製品　用途不明木製品 …… 178
図版　61　出土木製品　広鍬・櫂・用途不明製品・自然遺物 …… 179
図版　62　出土木製品　用途不明製品・井戸枠 …… 180
図版　63　出土木製品　杭 …… 181
図版　64　出土木製品　用材 …… 182
図版　65　出土木製品　用材 …… 183

# 第1章　高宮八丁遺跡の環境

高宮八丁遺跡は、大阪府寝屋川市初町（はっちょう）（小字名北高田）に所在し、北西の本町にもその広がりが推定される弥生時代前期から中期にかけての集落遺跡である。

遺跡の所在する寝屋川市は、大阪府の東北部で、大阪と京都のほぼ中間の淀川左岸に位置し、市の地形は東西6.89km、南北6.74km、面積24km²であり、東部丘陵地帯と西部平坦地帯に大きく別けることができる。

東部丘陵地帯は、大阪府と奈良県の府県境に連なる生駒山系の西側傾面に派生したそのほとんどが洪積層の大阪層群によって形成され、北は京都府八幡市の八幡丘陵（男山丘陵）、南は四條畷市の南野丘陵までの淀川左岸に形成された枚方台地と総称されている広大な丘陵及び段丘の一部である。西部平坦地帯は、沖積層によって形成されている。

高宮八丁遺跡は、西部平坦地帯と東部丘陵地帯（生駒山系の西麓で西側に傾斜をもって大きく舌状に張り出している太秦丘陵の西端）の接点（扇状地末端部）に位置している。

寝屋川市域には、本市の西辺を流れている「母なる北の河」淀川をはじめとして、寝屋川、古川、讃良川、楠根川、前川、南前川、タチ川、打上川等の中小河川が流れ、肥沃な土地を形成しており、淀川と古川以外はいずれもその源を東部の生駒山系の山間に発している。なかでも寝屋川は、本市の市名にもなっており、市の東部寝屋でタチ川と北谷川が合流して「寝屋川」となり、市内を貫流している。高宮八丁遺跡は、その寝屋川の左岸に位置している。

大阪平野の変遷については、梶山彦太郎、市原実両氏のすぐれた研究成果があり[(1)]、高宮八丁遺跡はその復原された大阪平野の地形上では、約3,000～2,000年前に大阪平野の北に大きく形成されていた河内潟の北東に位置し、寝屋川左岸に形成された低湿地に立地している。遺跡内における各溝状遺構及び河川や堆積する各層が、北東から南西方向にゆるやかな傾斜を示していることは、扇状地末端部と接する低湿地に所在する遺跡の立地条件によるものであろう。

弥生時代における周辺、特に北河内地方における前期の遺跡としては、天野川上流の田原盆地で畿内第Ⅰ様式（新段階）の壷形土器を出土した四條畷市田原遺跡があり、この遺跡の立地は生駒山系の盆地内である。古代の河内潟の縁辺では、淀川川床にある枚方市磯島先遺跡において、頸部に段をもつ壷形土器や削出し突帯をもつ壷形土器等が採集されており、四條畷市雁屋遺跡では、畿内第Ⅰ様式（古段階）に属する大型の壷形土器が出土している。古代の交通の要所に位置する大東市中垣内遺跡では、最近の調査においても畿内第Ⅰ様式（中段階）～第Ⅴ様式までの土器の出土が知られている。門真市普賢寺遺跡からは、畿内第Ⅰ様式（新段階）の壷形土器の出土が報告されている。

中期の遺跡としては、竪穴式住居と高床式の堀立柱建物跡や井戸からなる集落の一部と、42基の方形周溝墓の墓域が発見された枚方市交北城ノ山遺跡、中期後半（畿内第Ⅲ様式新段階）に始まり炭化米等が出土し高地性集落として有名な枚方市田ノ口山遺跡、木棺の遺存状態の非常に良い方形周溝墓4基を検出した四條畷市雁屋遺跡、畿内第Ⅱ様式の土器を出土し河内平野と枚方台地の接点の海抜60m前後の丘陵頂部に位置する高地性集落の寝屋川市太秦遺跡がある。

後期になると、寝屋川市域を含め淀川左岸流域、枚方台地上の遺跡の数は膨大な数にのぼる。その代表的な遺跡として枚方市内では、焼けおちた住居跡を検出した長尾西遺跡、津田城遺跡、集落と方形周溝墓の墓域を区画するV字溝等を検出した天野川水系の星ケ丘西遺跡、シカを描いた土器片等出

土した藤田山遺跡、小型彷製重圏文鏡、分銅形土製品、手焙形土器、異形土器等を出土した淀川と天野川をみおろす位置にある鷹塚山遺跡、六角形の竪穴式住居を検出した山之上天堂遺跡、弥生時代最終末～古墳時代初頭の方形墳２基を検出した中宮ドンバ遺跡、後期に成立し古墳時代中頃まで継続する大集落の茄子作遺跡がある。海抜200ｍ前後の生駒山系の山上付近に位置し、通信基地的な性格がつよい交野市南山遺跡がある。寝屋川市内においては、太秦遺跡の北約１㎞の丘陵上には池の瀬遺跡と池の瀬遺跡と谷をはさんで東には寝屋遺跡があり、また、南約１㎞には小路遺跡が知られている。

高宮八丁遺跡の成立は、頸部に明確な段をもつ畿内第Ⅰ様式古段階に属する土器が多数出土しており、ほぼこの時期をもって集落の形成が開始されたものと推察される。また、本遺跡の最盛期は、その遺物の出土量からみて弥生時代前期末（畿内第Ⅰ様式新段階）から中期前半（畿内第Ⅱ様式）の時期であり、畿内第Ⅲ様式の時期に属する遺物は少なくなる傾向にある。

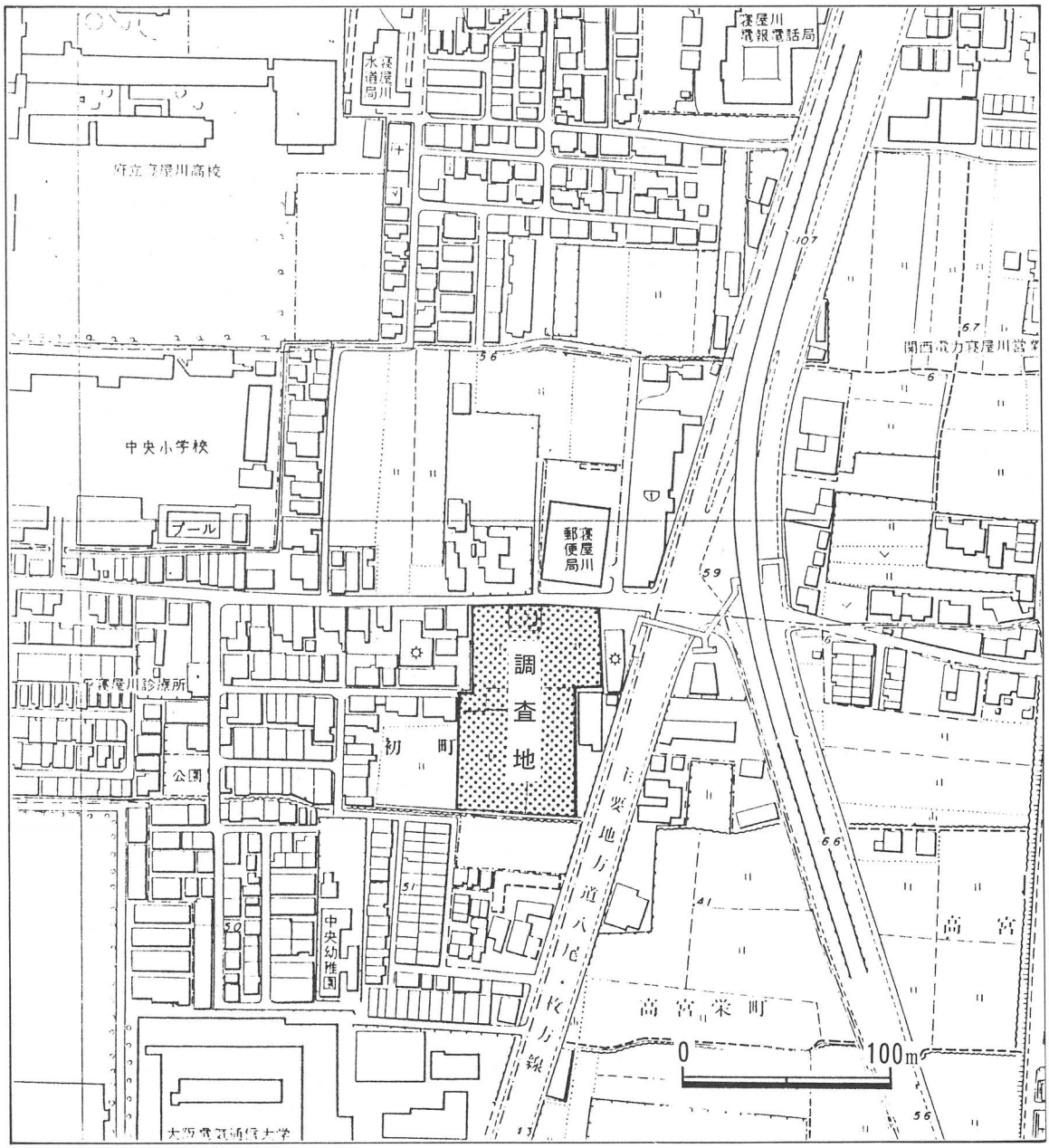
高宮八丁遺跡の東約800ｍの海抜60ｍ近い丘陵頂部付近には、先述の高地性集落太秦遺跡が畿内第Ⅱ様式の段階で出現する。

現在作業が進んでいる土器の整理が進み、検討が行われることによって密接な関係にあると推察される両遺跡の関連が解明されていくものと考えられる。

（塩山）

註

（１）梶山彦太郎・市原実「大阪平野の発達史―$^{14}$ｃ年代データーからみた―」『地質学論集』第７号　1972
梶山彦太郎・市原実『續大阪平野発達史』　1985
梶山彦太郎・市原実『大阪平野のおいたち』　1986


寝屋川水道局
寝屋川環境電話局
府立寝屋川高校
中央小学校
プール
寝屋川郵便局
寝屋川診療所
公園
初町
調査地
主要地方道八尾枚方線
中央幼稚園
大阪電気通信大学
高宮
高宮栄町
関西電力寝屋川営
0
100m

挿図１　調査地位置図

1.茄子作遺跡
2.茄子作下浦遺跡
3.東香里南遺跡
4.成田遺跡
5. 三井南遺跡
6.秦山遺跡
7.国松春日神社しいの社そう
8.秦河勝の墓
9.神宮寺跡
10.太秦廃寺
11.鹿埴輪出土地
12.延喜式内細屋神社
13.廻シ塚
14.池の瀬遺跡
15.太秦北遺跡
16.寝屋遺跡
17.寝屋東遺跡
18.寝屋長者屋敷跡伝承地
19.寝屋南遺跡
20.寝屋古墳
21.太秦遺跡・太秦古墳群
22.トノ山(高塚)古墳
23.韓式土器出土地
24.高宮廃寺跡(国史跡)・高宮遺跡・延喜式内大杜御祖神社
25.小路遺跡
26.国守西遺跡
27.打上遺跡
28.石の宝殿古墳(国史跡)
29.国守遺跡
30.坪井遺跡
31.三味頭遺跡
32.更良岡山遺跡・古墳群
33.忍ケ丘駅前遺跡
34.南山下遺跡
35.忍ケ岡古墳
36.北口遺跡
37.奈良田遺跡
38.砂遺跡
39.雁屋遺跡
40.神田東後遺跡
41.延喜式内高宮神社

**挿図2　高宮八丁遺跡周辺遺跡分布図**

# 第２章　高宮八丁遺跡における木器出土状態

高宮八丁遺跡は、約3,000～2,000年前に大阪平野の北に大きく形成されていた河内潟の北東部に位置し、寝屋川左岸に形成された扇状地末端部と接する低湿地に所在している。

本遺跡における各層は、北東から南西へゆるやかな傾斜を示している。

今回実施した調査地における基本的な層序は、Ⅰ層耕土、Ⅱ層床土、Ⅲ層白橙色砂質土層、Ⅳ層灰色砂質土層、Ⅴ層淡灰色砂層、Ⅵ層淡灰色砂層（砂粒大）、Ⅶ層黒色粘質土層（上層）、Ⅷ層暗灰緑色砂質土層、Ⅸ層暗青灰褐色砂質土層、Ⅹ層淡青灰色砂質土層（白色砂まじり）、XI層黒灰色粘質土層、XII層灰黒色粘質土層、XIII層黒色粘質土層（下層）、XIV明灰黒色粘質土層、XV青灰砂層となっている。

第Ⅲ層上面において、後世の削平をかなり受けた溝、自然河川、耕作痕、井戸を検出しており、井戸以外の遺構の残存する深さは10～15cm程度のもので、出土遺物も極めて少ない。井戸についても土師器、瓦器の少片が出土するもので、時期を決定し得る遺物は乏しいけれども、中世以降のものと推察される。

第Ⅶ層中には、弥生時代前期末から中期中葉にかけての遺物が多量に包含されており、さらに下層の第Ⅷ層を掘り込んで、溝や落ち込み等の遺構が検出されている。したがってこの第Ⅷ層が弥生時代前期末から中期中葉の時期の生活面（ベース面）と考えられる。（時期Ｂ）

第Ⅳ層から第Ⅵ層にかけての各層からは、調査地全域にわたっても遺物の出土が極めて少なく、一部に須恵器の少片が混じる程度であり、この間は低湿地として比較的安定した立地条件であったと推察されるが、人々の生活は営まれていたとは考えにくい。

第XII層から第XIII層には、弥生時代前期中葉から前期末にかけての遺物が多量に包含されており、下層の第XIV層を掘り込んで溝や落ち込み等の遺構が検出されていることから、第XIV層が弥生時代前期中葉から前期末の生活面と想定することができる。（時期Ａ）

さらに下層の第XV層以下の層からは、遺物等はまったく出土していない。

今回の調査地の中央付近で、弥生時代前期中葉から前期末の生活面が約T.P.＋1.8ｍであり、前期末から中期中葉の生活面がT.P.＋2.5ｍを測る。

このように、本遺跡においては、弥生時代前半の２時期の面が検出されている。

今回の調査地域内で検出した主な遺構は、溝、落ち込み、自然河川、土坑、貯蔵穴、柱穴等であるが、土坑、貯蔵穴、柱穴は調査地の北面にわずかにみられる微高地で検出されたものであり、他の大部分の調査地は、溝、落ち込み、自然河川の遺構で占められている。

高宮八丁遺跡から出土した木器の大半は遺物包含層より出土したものであるが、製品及び未製品の中には溝や落ち込み等の遺構内から出土したものも少なくない。

出土している木器の種類は、鍬、鋤をはじめとする農耕具、石斧柄等の工具、織機具、椀などの容器類、武器、狩猟具、漁猟具、運搬具用材等多岐にわたって出土している。また製品はもちろんのこと、その未製品が多く出土していることも注目される。

木器が多く出土している溝遺構としては、調査地の西側で、微高地の縁辺を北から北西へ向って流れる溝238と北東から北西へ向って流れる溝240があげられる。

溝238は、幅1.8～４ｍ、深さ0.3～0.5ｍを計り、断面Ｕ字形の溝であり、Ｆ－７区の溝下層からは、

口頸部間にヘラ状工具で押えて形成した段をもつ壺が出土している。

溝240は、幅２～４ｍ、深さ約0.5ｍを計り、断面U字形の溝である。この溝内には、溝底が約50cmほど深く掘り込まれた貯木状遺構と考えられる箇所が検出されている。遺構は、長さは約10ｍ、幅は約4ｍを計る。この内部からは、両端に水かきのある櫂や一木鋤、弓、鍬の製品はもちろんのこと未製品や他に用材も出土している。このことは、高宮八丁遺跡の木器生産形態を考える上において注目すべき事実である。貯木状遺構内から出土する木製品と共伴する土器は、畿内第Ⅰ様式中段階から新段階のものである。

また、落ち込み遺構としては、調査地北側で検出した東西６ｍ×南北17ｍ、深さ約0.6ｍを計る楕円形の落ち込み214や、調査地中央付近で検出した東西５ｍ×南北17ｍ、深さ約0.5ｍを計るやはりやや楕円形を呈した落ち込み216があげられる。

今回の調査においては明らかな畦畔等の水田遺構は検出されなかったけれども、調査区の南側は低湿地が広がっていたものと推察される。集落周辺に広がる後背湿地は多く水田域として利用されたと考えられており、今回発掘調査と同時に実施した植物珪酸体分析の結果において稲の栽培種（Oryza sativa）も検出され、また炭化米の出土がみられることからも弥生時代前期においてこの地で稲作が行われていたことを示している。

全体として、木製品の出土は調査地の北及び東側と中央付近に集中してみられ、南側においてその出土数は少なくなる傾向がみられる。

（塩山）

**表１　木器種類別点数一覧表**

| 項目 | 種類 | 点数 | 小計 |
|---|---|---|---|
| 農具 | 鍬 | 79 | 82 |
| | 鋤 | 2 | |
| | 竪杵 | 1 | |
| 工具 | 石斧柄 | 18 | 22 |
| | 砧 | 2 | |
| | 鍁 | 2 | |
| 織機具 | | 5 | 5 |
| 容器 | 椀・高杯 | 4 | 32 |
| | 方形容器 | 11 | |
| | 匙・杓子類 | 9 | |
| | 不明容器 | 8 | |

| 項目 | 種類 | 点数 | 小計 |
|---|---|---|---|
| 武器・狩猟具 | 弓・武器形木製品 | 33 | 33 |
| 漁撈具 | 櫂 | 4 | 27 |
| | タモ枠 | 1 | |
| | 刺突具 | 22 | |
| 運搬具 | 橇 | 1 | 1 |
| 用途不明木製品 | | 111 | 111 |
| その他 | 井戸枠 | 1 | 39＋α |
| | 杭 | 14＋α | |
| | 用材 | 20＋α | |
| | 編物・つる | 4 | |
| 総計 | | 352＋α | |

# 第３章　出土木製品・植物製品

## 第１節　木製品

### Ⅰ．農　具（図版１～５・12・36～43・61－１～82）

本遺跡出土木製品のうち、農具に含まれるものとしては、鍬・鋤・竪杵がある。また、亀虎川遺跡において提唱された[(1)]櫂も、農作業に伴う運搬具として農具に含むこともできるが、本報告においては運搬具の別項で記述することとした。　その他、用途不明木製品の中には、「ナンバ」と今日呼ばれる田下駄かと思われる木製品が認められる。

なお、槽を含めた容器について、本書においては日用什器類とみなし区別した。

**ａ）鍬（図版１～５・12・36～42・61－１～79）**

着柄孔を穿った身に、棒状の柄を鋭角あるいは直角に近い角度で装着する農具で、身の形態から広鍬・狭鍬・又鍬・横鍬に分類できる。機能的には、打ち込みによる一般耕起あるいは土木開墾に用いられる打鍬、引き込みによる地ならし、耕土のかくはん・移動を行う引鍬、両者の中間的なものとしての打引鍬の３種が存在すると言われている[(2)]。

本遺跡出土例でも、以下の分類でこれにあてはめることが可能である。

鍬身に柄の装着された着柄例としては３例出土しているが（43～45）、全て鋭角に装着されている。また、確実に鍬柄と認めることが可能な木製品の出土はほとんどみられない。

鍬総数79点（用途不明木製品に含まれた破片・再利用品は除く）のうち未製品は、広鍬15点、狭鍬１点、横鍬３点、用材４点の計23点である。

細かい部位各称については、後述の木器計測区分模式図で示した。その他、着柄突起あるいは着柄隆起を有する面を表面、柄ののびる側あるいは「ゲタ」を有する面を裏面とした。

材質に関しては、樹種同定を行った資料について全てカシであった。木取りは全て柾目の縦木取りであるが、横鍬は横木取りである。

**１）広　鍬（図版１～３・12・36～38・61－１～28）**

上述した鍬のうち、刃幅が15cm～20cm程度で縦長の鍬（最大長が最大幅を下回らない）で、28点出土している。

最も一般的な鍬であり、稲作農耕が伝わった初現期から様々な形式分化・変遷が認められる。本遺跡出土例も、Ⅰ～Ⅴ類の形式分類が可能である。

広鍬の分類は、これまで様々な視点から分類がなされてきた[(3)]。一方で、広鍬・狭鍬の類別が困難であるとし、一括して「平鍬」と統一呼称する向きもある[(4)]。

今回の分類の基準として、まず第一に身の形態の違いについてⅠ～Ⅴ類に分類し、着柄突起[(5)]を有するタイプについてはその形態の違いから、更にａ～ｃに細分した。

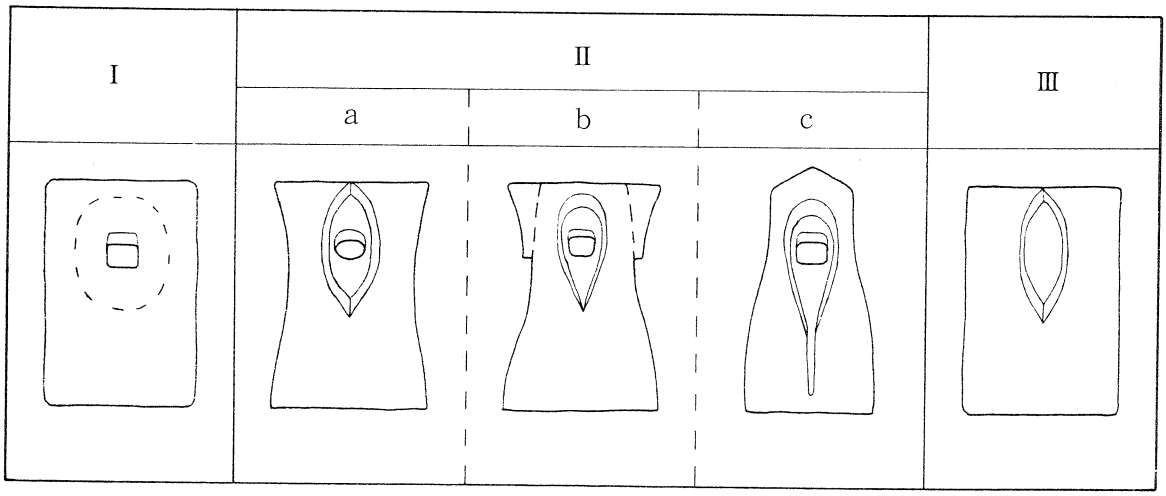
以下、分類したⅠ～Ⅴ類について記述を行う。

**〔Ⅰ類〕（図版１・36－１～７）**

７点出土している。

全体の平面形は長方形を呈し、明確な着柄突起をもたない形態のもの。

このタイプは、「組合せすきB」[6]として「踏み鋤」あるいは「踏み鍬」の機能が考えられ、柄を鈍角に装着した鋤であるとされている。しかしながら、鈍角に関しては鍬の一部の型式では一般的なものと考えられるようになり[7]、たとえ鈍角であっても浅い打ち込み・引き込みがかえって容易になるものと考えられる[8]ため、打引鍬として設定した。




挿図3　出土広鍬(Ⅰ～Ⅲ類)型式分類模式図（縮尺不同）

その他、この型式の特徴としては、刃縁は言うまでもないが側縁が極めて薄く仕上げられており、他型式と大きく異なる。また、着柄孔は方孔が多いが、一部円孔もみられる。

（1）は、右側部及び左側部の一部を欠損するが、34cm×20cmに復原できる。刃縁はさほど薄くはないが、側縁は極めて薄い。

全体に加工痕は不明で、表面着柄孔縁下端と裏面着柄孔縁上端が磨滅しており、縦方向の打ち込み（この場合鋭角に装着したと考えられる）の作業が復原できる。着柄孔は方孔で、着柄角度は約60度である。

（2）は半分余欠損している。全体形は27cm×16cm程度に復原できる。加工等、詳細は不明であるが、（3）と同様、刃縁も薄く仕上げられている（刃部の歪は、復原の際生じたもので、本来は直線を呈する)。

着柄孔は5分の2程の残存ではあるが、形状としては円孔であろう。着柄角度は約60度である。

（3）も半分程欠損している。全体としては27cm×17cm程度に復原できる。全体に幅の狭い加工痕が認められる。着柄孔は方孔で、着柄孔内には柄による磨滅が認められる。着柄角度は約60度である。

（4）はエッジを全て欠損している。従って全体の法量は不明であるが、長さ21cm、幅11cm程残存している。着柄孔は方孔であるが、部分的に非常に磨滅している。

（5）は半分欠損している。刃縁も欠損している。長さ23cm、頭部幅10cm程残存している。着柄孔は方孔である。

（6）は未製品と考えられるが、明確な着柄突起をもたない以上、単なる板材と判別し難い。用材

を切断して、やや着柄隆起部を削りだした程度のものであろう。長さ26cm、幅19cmを計る。遺存状態は良好でなく、詳細は不明である。

（7）も同様の未製品である。長さ31cm、幅18cmを計り、刃縁と思われる部分が薄くなっている。

〔Ⅱ類〕（図版1・2・12・36・37－8～17・19）

明確な着柄突起を有する類のもので、しかも平面形において側縁が彎曲するタイプを指す。着柄突起の形状からａ～ｃに細分し、更にｂ型式については頭部の形状で－ａ・－ｂといった区別を行なった。

ⅰ）Ⅱａ類（図版1・2・36・37－8～14）

平面形が紡錘形（レンズ形）を呈し、突起部上面に同形の明確な平坦面をもつ着柄突起を有する型式である（以下、ａ種と示す）。他に、頭部上縁は直線を呈し、側縁は軽く内彎するのみ、といった特徴を持つ。また、着柄孔は円孔である。

Ⅱ類は概してⅠ類より大型ではあるが、このⅡａ類はその中でも最も大きい傾向がある。近畿地方の広鍬に合わせて考えると、古い形態であると言える。

（8）は、刃部の大部分を欠損しているが、頭部幅、残存長から全体長は30cm後半から40cm程度と考えられる。着柄突起はａ種の典型的な突起を有する。着柄孔は縦長の楕円形であるが、本来はもっと真円に近い形状と考えられる。或いは、真円よりも楕円の方が、柄の固着度が強いためとも考えられる。

着柄突起の両側に、一辺約3.5cmの三角孔をそれぞれ穿っている。着柄角度はほぼ直角である。遺存状態は良好でなく、従って破損後溝に投棄・放置された可能性も考えられる。

類例として、大阪府瓜破遺跡[9]の畿内第Ⅰ様式新段階の土器と共伴した例がある。共通点としては、着柄角度がほぼ直角である点があげられる。

（12）は完形の未製品である。長さ約40cm、幅24cmを計る。全体に丁寧に仕上げられており、完成に近い状態のものである。着柄突起は典型的なａ種である。遺存状態は良好である。

（9）は左側部と頭部右側部を欠損している。長さ31cm、頭部幅9cmが残存しており、全体形も長さがやや増す程度であろう。法量から言えば、後述のⅡｂ類に近く、着柄突起に関しても、平面形はレンズ形を呈するものの突起上面が明確でない。ｂ種の着柄突起に近い特徴を持つａ種の着柄突起と言う事が出来よう。着柄孔は円孔である。

（10）は両側縁及び刃部下半を欠損する。長さ28cm、幅10cm程残存している。着柄突起は典型的なａ種であり、着柄孔は縦長の楕円形を呈す。左側部残存部には三角孔かと思われる切り欠きが認められる。

（11）は側縁を欠く未製品である。左側縁の遺存状態が悪く現存していないが、出土状況において軽く内彎する側縁が認められた。従って本来は長さ34cm、幅18cm程を計るものである。着柄突起は典型的なａ種である。

（13）も左側縁を欠損する未製品である。側縁は内彎というより、頭部下半で屈曲するといった方が適切である。長さ約35cm、幅17cm程残存している。着柄突起はやや寸詰まりなレンズ形を呈する。

（14）も一部欠損する未製品である。側縁の内彎はあまり明確ではない。残存長31cm、刃縁部残存幅15cmを計る。着柄突起はａ種である。遺存状態はあまり良好ではない。

ⅱ）Ⅱｂ類（図版2・12・37・61－15～17）

平面形が逆涙滴形を呈し、突起部上面があまり明確でなく着柄孔以下刃縁部に向かって傾斜しているタイプの着柄突起を持つ型式である（以下ｂ種と示す）。着柄突起を有する２点が共に未製品ではあるが、他のｂ種の着柄突起部の例から、着柄孔は円孔である可能性が強い。

この型式は平面形から更に２種類に分類出来る。即ち、Ⅱａと同じく側縁が緩やかに内彎するものと、刃部と頭部の境で緩やかな段を形成し、刃部が幅広になるものである（以下、前者をⅡｂ－ａ、後者をⅡｂ－ｂと示す）。両者の分類上の一括の意義については、後の考察を参照されたい。

（16）はⅡｂ－ａの未製品である。非常に丁寧なつくりで、かつ薄く仕上げられている。着柄突起は完全なｂ種である。頭部上縁中央には着柄突起上端に至るU字状の抉りを有し、それによって両端が突出した形を呈する。側縁は前述の通り内彎するが、頭部下端で一段内に屈曲して明確な段を形成し、バチ形の刃部と区別している。着柄孔は未穿孔である。また、裏面は平坦である。

（17）もⅡｂ－ａの未製品で、突起部を含めた半分余りを欠損する。（15）同様、頭部下端に明確な段を持つが、頭部側縁は上端に向かって外反しない。その点でⅡｂ－ｂに近い特徴を持つ。長さ約30㎝、復原幅約20㎝を計る。

（15）はⅡｂ－ｂの未製品である。左側部を欠損する。長さ約40㎝、刃縁幅20㎝前後に復原出来る。着柄突起は粗加工の残るｂ種である。丁寧なつくりだが、（17）に比べて厚手である。頭部上縁は幅狭で縁部は丸みを持つ。

最も重要な特徴としては、裏面にいわゆる「ゲタ」を有する。段差は約１㎝を計り、頭部上端に向かって緩やかに傾斜する。着柄孔未穿孔の未製品の為、「ゲタ」には着柄孔部の凹状のくり込みは認められない。着柄孔は未加工で、写真に見える凹みは調査時の傷である。

**ⅲ）Ⅱｃ類（図版37－19）**

平面形等ｂ種の着柄突起の特徴と同様であるが、下端が刃縁部に向かって垂下しており、平面形に屈曲が認められる着柄突起を持つタイプである（ｃ種）。本遺跡におけるこのタイプの着柄突起は、他の中期の遺跡に見られるように、刃縁部まで明確に突出しておらず、横断面でなだらかに隆起するものである。全体の形状としては、Ⅱｂ－ｂ型式に近いが、頭部両端を斜めにカットした形状に特徴がある。本遺跡において、（19）の１点のみ出土している。

（19）は右側部を欠損する。長さ約25㎝を計り、刃縁幅は約18㎝程度に復原出来る。小型で、幅と比較すると長さが短い。着柄孔は方孔である。着柄孔内部に柄が残存しており、材質はカシで、柄はアオハダである。

**〔Ⅲ類〕（図版３・37・38－18・20～26）**

明確な着柄突起を有し、平面形が長方形を呈する型式である。未製品・破損品ばかりで、他型式の未製品・破損品とも考えられ、鏃（破片）との分類が困難なものである。Ⅱ類の細分に準じて、ａ～ｃに分類出来る。

（18）はⅢｂ類の未製品である。長さ約42㎝と大型で、残存幅約15㎝を計る。主に左側縁を欠損する。着柄突起はあまり明確ではないが、ｂ種の突起状の隆起が認められる。

（20）はⅢａ類の未製品で、極めて大型である。連結状態から切断して間もない状態のものであろう。側縁は用材のままであり、調整は何ら認められない。長さ約48㎝、幅約20㎝を計る。着柄突起はａ種が既につくり出されている。

（21）も同様の未製品で、着柄突起の形状からⅢｃ類である。左側部を欠損しており、長さ約33㎝、

残存幅約10cmを計る。頭部厚は約4cmを計り、着柄突起が極めて突出している。

(22) は右半分を欠損する未製品である。着柄突起は表面残存部にわずかに隆起が認められる。残存部からⅢa類に属するものと思われる。長さ約34cm、残存幅約10cmを計る。

(23) は頭部の大部分と刃部の大部分を欠き、両側縁も残存していないⅢb類の破損品である。着柄突起は完全なb種で、着柄孔は円孔である。長さ約16cm、幅約10cm残存している。

(24) も右側辺を欠損するⅢb類の未製品である。左側辺は直線を呈す。長さ37cm、残存幅8.5cmを計る。

(25) も全てのエッジを欠損するⅢb類の破損品である。着柄突起は全体的に逆涙滴形ではあるが、突起の上端は鈍く尖っている。長さ約20cm、幅約8cm残存している。着柄孔は円孔である。裏面には幅約1cm、高さ約1cmの、突帯状の「ゲタ」を有する。

(26) も同様に欠損したⅢb類である。着柄突起は完全なb種を呈する。突起部下半には、使用によるものと思われる磨滅が認められる。長さ約19cm、幅約11cm程残存している。着柄孔は円孔である。

なお、上記のⅠ～Ⅲ類については、特に分類模式図を載せておいた（挿図3参照）。

**〔Ⅳ・Ⅴ類〕(図版2・38－27・28)**

(27・28) の2点のみ出土している。上記のⅠ～Ⅲ類が全て頭部長に対して刃部長の比が大きいのに対し、同比の小さいもの、或いは同率なものを指す。しかしながら、全長が全幅より大きいないし同等である事、木取りが柾目の縦木取りである事から、横鍬とは区別した。

Ⅳ類は、刃縁幅が頭部幅より広いもので、(27) の1点のみ認められる。完形の未製品で、長さ約25cm、刃縁幅約17cmを計る。頭部上縁は丸みをもつ。着柄突起は低く、肉厚な逆涙滴形を呈する。刃縁には角度の急な刃面が施されている。同系列に考えられるものとしては、大阪府恩智遺跡[10]の鍬B（6・中期）がある。

(28) はⅤ類の未製品である。平面形は若干縦長の長方形を呈する。長さ約19cm、幅約16cmを計る小型品である。着柄突起は低い截頭円錐形を呈する。刃縁に比べ、側縁が薄く仕上げられている。

**2）狭　鍬（図版3・4・38・39－29～35）**

広鍬同様、着柄角度が鋭角ないし直角をなす農具で、刃幅が10cm前後の幅狭・縦長の鍬である。弥生時代に限って発達した鍬で、古墳時代には認められなくなる[11]。

狭鍬については、大きく見れば片刃のものと、いわゆる「諸手鍬」と言われている両刃のものとの2種に分ける事ができる。

本遺跡出土総数6点のうち、確実に諸手鍬と認められるものはなく、着柄突起部片 (34) 1点があるのみである。

そして、片刃のものについては、明確な着柄突起を持つもの（Ⅰ類）と、明確な着柄突起を持たないもの（Ⅱ類）との2種に分類できる。材質・木取りについては広鍬と同様である。

**〔Ⅰ類〕(図版3・39－34・35)**

2点出土している。広鍬における着柄突起の分類に準じて、細分が可能であり（Ⅰa；Ⅰb）、後出のⅡ類に比べ精巧で強靱なつくりである。

(34) はⅠa類の破損品である。着柄突起は半分欠損するが、a種と認められる。残存長約20cm、残存幅約8cmを計る。側縁は直線を呈すが、頭部に向かって顕著に外傾する。従って諸手鍬よりは片刃の狭鍬である可能性が強い。側面形は諸手鍬のような反りを有する。しかしながら、全体的には広

鍬Ⅱａ類の事後変形の可能性も高い。頭部厚は5.4cmを計る。着柄孔は円孔である。着柄角度はほぼ直角である。

（35）はⅠｂ類の完形品である。極めて精巧なつくりで、頭部上端は裾広がりとなり、中央部にV字形の切れ込みを有する。頭部から刃部にかけての境界部の両側縁に小さな三角形の突起を有する。着柄突起はｂ種で、上端が鈍く尖り気味のタイプである。着柄孔は方孔で、着柄角度は約75度である。刃縁部には、左側縁に特に顕著な磨滅が認められ、利きによる若干斜めに力の加わった打ち込みが想定できる。

**〔Ⅱ類〕（図版3・38・39－29～33）**

明確な着柄突起を持たないタイプで、広鍬Ⅰ類の特徴に酷似するが、刃縁が10cm前後になるものである。4点出土している。

そのうち、全体の法量が明確なものはなく、幅のわかる程度の破片のみである。

（29）は、右側縁がわずかに残存しているもので、残存長約17cm、残存幅約7cmを計る。着柄孔は円孔で、着柄角度は約75度である。刃部はかなり磨滅している。

（30）は、残存長さ約22cm、幅約11cmを計る。着柄孔は比較的大きい円孔で、着柄角度は約80度である。遺存状態はあまりよくない。

（31）は、長さ約26cm程残存し、幅は約12cmを計る。着柄孔は方形で、着柄角度は約65度である。着柄孔には柄による欠損が認められる。

（32）は右側部及び左側縁の一部を欠損するが、長さ約29cm、幅10cm程度に復原出来る。着柄孔は方孔で、着柄角度は約70度である。

（33）は未製品である。半分欠損しているが、残存幅約10cmを計り、広鍬である可能性もある。極めて薄いつくりである。刃縁部には切断時の粗加工が認められる。

**3）又　鍬（図版4・39－37～39）**

3点出土しており、全て使用・廃棄段階のものである。半円形の頭部に数本の歯がつく鍬で、砕土・耕起に用いられる打引鍬として考えられているが[12]、本遺跡出土例の場合強靱なつくりでなく、歯も細長いので、むしろ引鍬と考えられる。

（37）は唯一、全体形が復原可能なもので、四又鍬である。頭部残存幅約13cm、歯部長約13cmを計る。歯4本のうち、1本半残存している。

歯部は磨滅が著しい。着柄孔は円形に極めて近い方形で、着柄角度は約65度である。

（38）・（39）は共に頭部半分程の残存であり、歯については一切不明である。（38）は残存長9cm、残存幅約8.5cmを計る。着柄孔は円孔である。

（39）も残存長約11cm、残存幅約12cmを計る。着柄孔は円孔で、着柄角度は直角に近い。

**4）横　鍬（図版4・39－40～42）**

3点出土しているが、全て未製品である。いわゆる横長（全幅が全長を上回る）の鍬で、他の鍬と違い、横木取りであるため、土の移動及び田面の調整に用いられる引鍬と考えられており、中期後半～後期にかけて、「えぶり」にとって換えられる鍬[13]である。鋭角～鈍角の広い範囲での着柄角度が考えられている。

本遺跡出土例3点は全て形態が異なるため、型式分類を行わず、横鍬で統括した。

（40）は完形の未製品である。平面形は隅丸の台形を呈する。着柄孔部には隆起のみ認められる。

全長約22cm、全幅約30cmを計る。刃縁は厚手だが丁寧に仕上げられている。側縁はエッジが調整されていない。材質はホオノキである。

（41）は不整ながら、いわゆる「丸鍬」の未製品である。全長約24cm、全幅約30cmに復原できるが、側縁は未調整であり、刃縁、頭部縁も同様である。

（42）は「えぶり」に近い形態のもので、右側部を欠損する。長さ約18cm、残存幅約24cmを計る。残存部には低い着柄隆起が認められる。

**5）鍬（破片）（図版2～5・40～42・61－36・43～75）**

エッジを全て欠損して、平面形が不明となった着柄突起部片や、刃部の破片と思われるものがこれにあたり、着柄突起部片27点、刃部片7点出土している。

**〔着柄突起部〕（図版2・5・40・41・61－43～69）**

総数27点のうち、a種が14点（着柄例3点を含む）、b種の着柄突起が11点、いわば着柄隆起をなすものが2点である。

a種の着柄突起（43～56・56）に関して、更に2種に分類する事が出来る。即ち、広鍬Ⅱ類で述べた典型的なa種と、b種の着柄突起に近い特徴を持つものである。前者は着柄孔が突起のほぼ中央に穿つのに対し、後者は若干上寄りに穿つ傾向がみられる。また着柄突起の高さに関しても、前者の方が高い。

（43・47・48・56）が前者の例と言え、残りは全て後者である。

（43）は着柄例で、身の大部分を欠損する。全体に反りを持ち、裏面には低い段を有する。柄の着装について、実測図、写真共出土状況を基に復原しているが、本来はもっと突起部側に突出していたと考えられる。柄は着柄孔の長軸方向に合わせて作られており、着柄孔短軸側の磨滅を見るかぎり、柄の両側に楔を打ち込んだ可能性も考えられる。柄残存部下端には両側穿孔による方孔が半存しており、一担柄が折損した後、残存部に穿ったものと思われる。それによって、本例はいわば「手唐鍬」的な用途に用いられたと推察できる。着柄孔は円孔で、着柄角度は約70度である。

（44）も着柄例であるが、突起部残存長16.5cm、柄残存長29cmを計る。着柄角度は約68度である。

（45）も着柄例であるが、全面炭化している。柄は、突起部内装部分のみ、炭化を免れている。着柄孔は円孔で、着柄角度は約65度である。

（47）は残存長23cm、残存幅7cmを計る。着柄孔は円孔で、着柄角度は約70度である。

（48）は残存長13cmを計り、4.5cmの円形の着柄孔を穿っている。

（56）は半欠するが、楕円形の着柄孔を穿つ。着柄角度は約65度である。

後者の着柄突起の特徴としては、前述の着柄孔の位置と、もう一つ突起部上面が明確でなく、上端・下端に向かって下降していく特徴を持つ。

（46）は残存長16cm、残存幅5.5cmで径4cmの円形の着柄孔を穿つ。

（49）は残存長約15cm、残存幅5cmを計り、半欠するが円形の着柄孔を穿つ。着柄角度は約75度である。

（50）は全長31cm、残存幅6.5cmを計る。着柄孔は5×2.5cmの楕円形を呈す。

（52）は着柄突起が完存しており、16×4cmを計る。長軸4.5cmの楕円形の着柄孔を穿つ。

（53）は半欠するが、（45）と同一個体かと思われるものである。

（54）も突起部が半欠しているが、長さ15cmの着柄突起を有する。着柄孔は楕円形を呈する。

b種の着柄突起に関しても、2種に細分する事が可能である。即ち、下端が短いもの（55・57～60・63・65）下端が長いもの（61・62・64・66）に分ける事が出来る。

（67）は下半が欠損の為不明である。

（57）は完形の着柄突起で長さ15cmを計り、着柄孔は円孔である。

（58）は下端が欠損する。着柄孔は円孔で、着柄角度は約65度である。

（59）は下半のみの残存だが、方形かと思われる着柄孔が一部残存している。

（60）は突起部が完存しており、長さ18.5cm、幅5.5cmを計る。長軸4.5cmの円形の着柄孔を穿つ。

（63）は上半を欠損し、残存長9cm、残存幅4cmを計る。円形の着柄孔が半分残存している。

（65）は下半のみ残存しており、長さ7.8cm、幅4.1cm残存している。方形と思われる着柄孔を穿つ。

（55）も下半のみ残存の小破片で、長さ4cm、幅2.7cm残存している。円形の着柄孔が半分残存している。

突起部下半が長く伸びるものとして、（61）は下半のみ残存しており、長さ約10cm、幅約4cm程度を計る。円形の着柄孔が半分残存している。

（62）は上半右側部を欠損し、長さ28cm、残存幅約5cmを計る。着柄孔は円孔である。

（64）は頭部・刃部の一部が残存しており、残存長25.5cm、残存幅3.5cmを計る。着柄孔は円孔である。

（66）は上半右側部を欠損する。着柄孔は方孔で、着柄角度は約60度である。

（67）は突起部上半が肥大したb種である。残存長22cm、残存幅7cmを計る。着柄孔は円孔である。左側縁はほぼ完存である。

その他の着柄突起部としては、いわゆる着柄隆起を呈するものがある。

（68）は着柄孔部のみ残存しており、残存長10cm、残存幅6cmを計る。着柄孔は円孔だが、3.5cmと小型・不整である。

（69）は着柄孔左側縁が欠損しており、着柄隆起を有する。残存長9cm、残存幅6cmを計り、円形の着柄孔は5.6cm（残存）と極めて大きい。

**〔刃部片〕（図版2・5・39・42－36・70～75）**

7点出土している。頭部まで残存している例（36・70～72）と、刃縁部のみ残存している例（73～75）が認められる。用途不明木製品の中にも、鍬の刃部片の転用品が認められる（201・251）。

（36）は左側辺のみ残存し、残存長26cm、刃部残存幅約9cmを計る。頭部上端は欠損しており、Ⅱa類の破片と思われる。残存部には三角孔が認められる。

（70）は長さ3.8cm、幅6.7cm、厚0.8cmを計る。一辺1.8cmの三角孔がみられる。刃部割面が磨耗して薄くなっており、何らかの再利用が考えられる。三角孔両側の凹みは復原時のものである。

（71）はやや疑問のある刃部片で、長さ27.5cm、幅7cm残存している。残存部に認められる楕円形の孔は、長軸6.5cmと大きく、着柄孔とは断定し難い。

（72）は（70）と同様の破片で、残存長30.5cm、残存幅7cmを計る。残存部には一辺約3cmの三角孔を穿つ。

（73）は遺存状態の悪い刃部片である。長さ約11cm、幅約7.5cm残存している。

（74）も板状の刃部片で、刃縁が明確に認められる。

（75）は刃縁の一端を含む破片で、丸みを持った縁部が残存している。

### 6）鍬（用材）（図版42－76～79）

4点出土している。未製品の原形段階や、整形段階以前と考えられている[14]ものをあげた。

（76）は着柄隆起部を残す破片である。残存長26cm、残存幅7cm、最大厚5cmを計る。a種と思われる着柄隆起を有するが、断定はできない。

（77）は広鍬Ⅰ類か狭鍬Ⅱ類の整材段階と考えられるものである。長さ38cm、幅12.5cm、厚2.5cmを計る。着柄隆起は若干認められる。

（78）は原材段階である。長さ約87cm、幅約17cm、突起部厚10.5cm、厚4.5cmを計る。着柄突起は明確ではないが、a種と推察される。

（79）も原材段階で、つくり出された2個の着柄突起が接しているところから、2ふりの鍬身と頭部合せの反対向きに加工したものであろう。長さ約130cm、幅約30cm、突起部厚10cm、身部厚4.5cmを計る。なお、残存部下端には、着柄突起と思われる隆起が、一部観察できる。

出土鍬類の時期については、表2を参照されたい。

以上、鍬類に関して言及したが、木製品の性格上、破損の為型式分類が完全であるとは言い難い。広・狭鍬の区別や細かい型式分類については、これからの比較検討を必要とする。

表2　出土鍬類層位別分類表（不明分は除く）

| 器種＼層位 | | A（下層） | 〔計〕 | B（上層） | 〔計〕 |
|---|---|---|---|---|---|
| 広鍬Ⅰ類 | | 2・3・6・7 | 4 | 1・4・5 | 3 |
| 広鍬Ⅱ類 | a | 8・10～14 | 6 | 9 | 1 |
| | b | 15・16 | 2 | 17 | 1 |
| | c | 19 | 1 | —— | 0 |
| 広鍬Ⅲ類 | a | —— | 0 | 20・22 | 2 |
| | b | 18・23・26 | 3 | 24・25 | 2 |
| | c | 21 | 1 | —— | 0 |
| 広鍬Ⅳ・Ⅴ類 | | 27・28 | 2 | —— | 0 |
| 狭鍬Ⅰ類 | | 34・35 | 2 | —— | 0 |
| 狭鍬Ⅱ類 | | 31 | 1 | 29・30・32 | 3 |
| 横鍬・又鍬 | | 37～39・40～42 | 6 | —— | 0 |
| 鍬（破片・着柄突起部）※ | a | 43・47～50・52・54～56・78・79 | 11 | 44～46・51・53 | 5 |
| | b | 57～61・63～65・67 | 9 | 62・66 | 2 |
| | その他 | 68・69 | 2 | —— | 0 |
| 鍬（破片・用材） | | 72～77 | 6 | 36・71 | 2 |
| 総計 | | 56 | | 21 | |

※鍬用材にみられる突起も含む。33・70については層位不明のため除く。

### b）鋤（図版5・42－80・81）

鍬と並んで、弥生時代の農耕具を構成する器種である。用途として、一般耕起及び土木開墾に伴う土の反転・移動、また溝の掘削作業に用いられる。構造から一木鋤と組合せ鋤とに分ける事ができ、前者は身が柄と平行につくられており、後者は身が柄に対して鈍角に装着される。

本遺跡においては、一木鋤・組合せ鋤が1点ずつ、計2点出土している。

i）一木鋤（80）は身の先端部と柄の上半を欠損する。身の形態としては、基端が裾広がりを呈し、直線的な側縁、刃縁につながる。中軸と縁部には断面半円形の隆帯を有する。身部基端左上縁は右上

縁に比べ磨滅しており、掘削作業による踏み込みによるものと思われる。柄部は断面六角形気味で、残存部中程で若干径が小さくなる。

握部については欠損の為不明であるが、瓜生堂遺跡[16]における完形品から、逆三角形くり抜き形になるものと考える。その他、山賀遺跡[17]や鬼虎川遺跡[18]など近畿地方の主要遺跡に限って認められる型式であり、古い形態に属する。

ii）組合せ鋤（81）は身部のみの未製品である。柄の受け軸になる突起はつくり出されているが、着柄孔は未穿孔である。長さ43cm、基部幅12cm、最大幅15.5cmを計る。着柄軸は長さ2.5cm、幅3.5cmを計る。全体の粗雑さから、下半は不要部と思われる。いずれにせよ、組合せ鋤か否かという事については、まだ疑問の多い鋤である。

材質・木取りについて、（80）はカシ・柾目の縦木取りである。

**c）竪　杵（図版5・43－82）**

竪杵は1点出土しており、搗部の一方を欠損する未製品である。残存長66.6cm、搗部長52.3cmを計るが、握部は現状では歪を生じており正確な長さは計測不可能である。搗部径は6.2×6.4cm、握部径（最小部）2.9×1.6cmである。搗面は調整途中で未調整面を残す。残存端部から16cm程の所に、加工による浅い溝を全周に巡らせる。握部及び搗部の境界部には何の装飾も認められない。握部残存端部には節帯が設けられているが、算盤玉状を呈さず、握部にゆるやかにつながるものである。欠損のため握部の全体相は不明であるが、唐古遺跡出土例[19]からすると、更に1ヵ所設けていると考えられよう。木取りは芯持材を用いており、材質はヤブツバキである鬼虎川遺跡[20]におけるA類とB類の中間的なもの、池上遺跡[21]の第Ⅰ型式（鬼虎川のB類に相当）、合田氏分類[22]のA類にあたる。

（露口）

註

（1）『鬼虎川の木質遺物　―第7次発掘調査報告書　第4冊』（財）東大阪市分化財協会　1987

（2）①黒崎直「木製農耕具の性格と弥生社会の動向」『考古学研究』第16巻第3号　1970

②　同　「くわとすき」『弥生文化の研究5』　1985

③根木修「木製農耕具の意義」『考古学研究』第22巻第4号　1976

などがある。

（3）註2の①、②の他、近畿地方の主要なものとしては、

小野久隆・奥野都『池上遺跡　第4分冊の1　木器編』（財）大阪文化財センター　1974

（4）上記註1文献や、

①『唐古・鍵遺跡第16・17・19次発掘調査概報』田原本町教育委員会　1984

②毛利光用子「木製品」『恩智遺跡Ⅰ（本文編）』瓜生堂遺跡調査会　1980（鍬で総称）

（5）本書において、着柄突起とは従来言われてきた舟形突起の事を指し、広鍬Ⅰ類や狭鍬Ⅱ類のような着柄孔部は着柄隆起として区別した。

（6）註2文献の②に同じ

（①における広鍬a種）

（7）註1文献に同じ

（8）『雁屋遺跡』四條畷市教育委員会1987における野島稔氏の見解

（9）杉原荘介・神沢勇一「大阪府瓜破遺跡」『日本農耕文化の生成』　1961

（10）註4文献の②に同じ

（11）谷口徹「近江を中心に見た農具（鍬・鋤）の変遷」『木製農具について』埋蔵文化財研究会第14回資料　1983

（12）註2文献の②に同じ

(13) 註２文献の②の他
山田昌久「くわとすきの来た道」『新保遺跡Ⅰ』　1986
(14) 註２文献の②に同じ
(15) 註２文献の③に同じ
(16)『瓜生堂遺跡　資料編』瓜生堂遺跡調査会　1972
(17)『山賀（その３）』大阪府教育委員会・(財) 大阪文化財センター　1984
(18) 註１文献に同じ
(19) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第16集　1943
(20) 註１文献に同じ
(21) 註３文献に同じ
(22) 合田茂伸「弥生時代の杵と臼」『網干先生華甲記念考古学論集』　1988

## Ⅱ．工　具（図版６・10・43・44－83～99）

本遺跡出土の工具としては、石斧柄、砧、鍑があげられ、総数17点を数える。後述の用途不明木製品の中にも工具としての機能を有したものや、また使用されたものもあると考えられるが、ここでは製品として判別可能なものについて報告する。

### a）石　斧　柄（図版６・10・43・44－83～99）

総数13点を数える。太型蛤刃石斧用、柱状片刃石斧用、扁平片刃石斧用のいずれもが出土しているが、後２者については遺存状態や損傷度、あるいは未製品という諸条件により、完全に分類できたとは言い難い。昨年度報告分の石斧類[5]と合わせて検討してゆく必要がある。

#### １）太型蛤刃石斧柄（83・84）

２点出土している。いわゆる縦斧であり、原木を伐採し、割り材に加工する工具と考えられている石斧の柄である。

（83）は完形の未製品である。着装孔は未加工である。台部は石斧着装部より上部が刃部側へ突出する。着装部以下は幅広くなった後、握部に向かってゆるやかに細くなり、境界部で段を設けて区画する。握部は断面楕円形を呈して、一定しており、グリップエンドの浅いかえりが末端部に認められる。全体に丁寧な加工が施されており、着装一歩手前の段階と言えよう。木取りは柾目の縦木取りで、材質はカシである。

（84）はほぼ完形の精巧品である。台部の上半は石斧の基部方向へ鉤状に屈曲し突出する。台部の厚みはやや薄く、実測図において基部側の着装孔平面形を示したが、太型というには薄い石斧を装着せざるを得ない。下半は幅広くつくり出し、握部との境界部で低い段を設ける。握部は断面楕円形で太さがほぼ一定する。グリップエンドはまず握部とを低い段で区画し、野球のバットのグリップエンド状のかえりをつくり出す。側面には紐かけ用の孔を斜めに穿ち、底面に穿った孔と貫通する。（83）と比べても格段精巧に仕上げられており、全体を加工する削り痕や鉤部を加工する非常に幅の狭い加工痕、磨き上げた擦痕などが認められる。台部下半の石斧挿入側が欠損する。着装孔挿入側（着装孔Ａ）の寸法は6.3×2.6（復原）cmを計る。昨年度報告した太型蛤刃石斧59点のうち、幅の判明するもの24点と厚の判明するもの25点によって得られた平均値は6.4×4.1cmを計る。計測部の違いなどを無視してはいるが、太型蛤刃石斧の名に相違ない数値と言える。機能部分としての太型蛤刃石斧の厚に満たない縦斧の柄であるという点と、実用品としての石斧柄に投入された非常に精巧な仕上げという点をどう捉えるべきであろうか。他の用途や他の石製・金属製利器を装着した可能性も考慮すべきである。着装部や台部の欠損が、使用によるものと十分考えられる３点と合わせて検討すべきものである。材質はサカキである。

#### ２）柱状片刃石斧柄（85・86・88・89・91・95）

後述の扁平片刃石斧柄と同じく、木工具としての横斧を装着する柄である。柱状片刃石斧柄と明確に判別できるものの他に、未製品や製品の破片に至っては扁平片刃石斧柄と判別不可能のものもある。自然木の枝別れの部分を利用してつくる一木造りのものがほとんどであるが、１点のみ組合せ式の柄が認められる。

（85）は台部先端を欠損するものである。着装溝幅・厚は3.9×3.5（残存）cmを計り、大型の柱状片刃石斧を装着したものと考える。着柄角度は65度である。台部の着装溝直下には石斧緊縛用の紐か

け孔を穿ち、着装部にかけて紐かけの溝が認められる。基部は後側方に長くのび、端部に平坦面を有する。紐かけ孔の下部にも更に三角孔を穿ち、グリップエンドの孔と合わせて肩かけ紐を結えたものかと思われる。台部と握部の境界部には非常に低い段が認められるが、握部の方が一回り大きい。握部は断面楕円形を呈し、太さは中程が細くくびれる。グリップエンドはすべり止めのかえりを持ち、端部には方孔を穿つ。握部は使用により磨滅する。台部およびグリップエンドは細かい加工痕が明瞭である。先端は欠損するが、紐かけ溝の位置からしてそれほど長くのびないと考える。従って、相当に長い柱状片刃石斧を想定しなければならない柄である。

(86) は完形の未製品である。台部長26cm、台部厚4cm、握部長45cm、握部径2.5cmを計る。着柄角度は約57度である。柄はほぼ直柄である。着装溝は認められない。台部断面形は丸みをもった逆三角形を呈する。握部断面形は偏平な楕円形である。

(88) はやや疑問のある破片で同じく未製品である。台部残存長20cm、台部厚4cm、握部残存長42cmを計る。着柄角度は約75度で、柄はやや反りをもつ。台部両端は欠損する。着装溝は認められない。台部断面形は円形で、握部断面形は扁平な楕円形を呈する。台部は芯持であり、小型の柱状片刃石斧柄としたが疑問の残る木器である。

(89) は台部と柄の一部のみ残存し、損傷が激しく詳細は不明である。台部残存長25cm、台部厚3cm、着装部（溝は明確ではない）長さ7.5cmを計る。基部幅は1.5cmと薄い。柄径は6.3×2.2cmを計り、扁平な楕円形を呈す。台部の幅が極めて狭いので柱状片刃石斧柄としたが、柄が貧弱なつくりである点から (88) と同様疑問の残る木器である。

(91) は柄と若干の台部のみの残存で、残存長51cm、台部幅4cm、厚5.8cmを計る。柄はやや反りをもち、断面2.5×1.7cmを計る扁平な楕円形である。着柄角度は約50度だが、台部の残存状態不良のため正確さを欠く。損傷が著しい。柱状片刃石斧柄としたが、疑問の残るものである。

(95) は組合せ式の柄で、台部のみ残存する。台部残存長18cm、台部・基部幅8cm、台部厚7cmを計る。着装溝には着柄孔が貫通し、台部側面には紐かけ溝が認められる。台部先端は鈍く尖る。基部は着柄孔以後が大きく欠損する。着柄孔は方孔である。同様の柱状片刃石斧柄としては大阪府恩智遺跡[1]例があげられるが、着装部は本例より長くのびてつくり出される点が異なる。柾目の縦木取りである。

以上を柱状片刃石斧柄としたが、以下のような分類も成り立つ。即ち、判別できる (85・95) の着装部が極めて短い特徴を柱状片刃石斧柄として捉えるならば、着装部の長い (86・88・89) は扁平片刃石斧とすべきであろう。

**3）扁平片刃石斧柄 (87・90)**

今回扁平片刃石斧柄として報告した2点は、法量的に柱状片刃石斧柄よりひとまわり小さい[2]点、台部の厚が薄い点から判断したものである。

(87) はほぼ完形品で、台部長17.2cm、台部幅3cm、台部厚2.8cm、握部長28cm、径2cmを計る。着柄角度は約70度で、柄はやや反りをもつ。着装部4.9cm（残存）、幅2.8cm、着装部厚1.1cmを計る。柱状片刃石斧柄に見られる着装部側面は認められず、下面には紐かけ溝をつくり出す。基部は細く後方にのびる程度である。着装部幅は狭いが、昨年度報告分の扁平片刃石斧の幅判明分15点の平均幅が2.4cmを計るのであながち否定しがたい。

(90) は台部と柄幹部が残存する破片である。現状では着装部が割れ損じているが、元は台部長22

cmを計り、着装溝の認められない未製品である。基部厚は3cmを計り、柱状片刃石斧柄では認められない薄さである。着装溝は認められない。柄残存部は長さ8cmを計り、断面は長径2cmの扁平な楕円形を呈する。

4）石斧柄（破片）（92～94）

柱状片刃石斧柄（組合せ式）と判別できる破片を含め4点が出土している。（95）は柱状片刃石斧の項で報告しており、ここでは他の3点について報告する。

（92）は握部のみ残存する。やや反りを有し、扁平片刃ないし柱状片刃石斧の柄と思われる。全面にわたって丁寧な面とりと行うが、加工痕は不明瞭である。芯持で、現状では裂け目を生じる。

（93）は小破片で握部の端部のみ残存する。残存部を見る限り反りは認められない。断面楕円形を呈する。径が小さいことから扁平片刃石斧柄と思われる。

（94）は握部と柄幹部の残る破片である。表面は平滑である。直径5cm程度の自然木の枝分岐部を利用している。

b）砧（図版44－96・97）

本遺跡出土の木器のうち、砧と考えられるものは2点を数える。その他、形状的に近いものとしては、用途不明木製品の中に4点認められる。

（96）は槌部のみ残存する。残存長（槌部長）19.5cm、槌部径6.5×5.5cmを計る。槌部断面形は楕円形を呈する。打面には横方向の浅い凹み状の傷が認められる。握部は欠損のため不明である。木取りは芯持材を用い、材質はヤブツバキである。

（97）は槌部と握部の一部が残存する。残存長30cm、槌部長24.5cm、槌部径10.5×8.5cmを計る。槌部断面は（96）同様楕円形を呈する。よく使用されており、打面には広く浅い凹み状の使用痕が認められる。握部は斜めの裂け目状に欠損しており、使用による折損をうかがわせるものである。木取りは芯持で、材質はクスノキである。

両点とも使用による平坦面を有するために、断面楕円形を呈する。

砧の用途については、現代のものよりもっと広範な用途を有していたことは十分考えられる。福岡県那珂久平遺跡[3]では、大規模な樋遺構に伴って杭の打ち込みに用いるかけや、つちが多量に見つかっている。本遺跡においても杭列が検出されており（図版17参照）、井戸枠（309）の裏込め土中から大型の砧状の用途不明木製品（250）が見つかっている。また、農耕集落としての高宮八丁遺跡を考えると、農作業に用いる砧としての性格も考慮に入れる必要があろう。使用痕、法量、出土状況等から検討を進める必要がある。

c）鍬（図版10・44－98・99）

前述した鍬と共に、鬼虎川遺跡[4]において提唱された器種で、本遺跡出土木製品のうち、それに相当するものは2点を数える。鍬よりひとまわり小さく、狭鍬の未製品とも使用樹種・着柄突起の高さが異なるものをここにあげた。

（98）は、完形の未製品と考えられるもので長さ24.2cm、幅12.7cm、板状部の厚み3.7cmを計る。把手部は長さ21.5cm、幅5.1cm、高さ3.7cmを計る台形状の突起である。全面に幅の広い削りによって仕上げる。左側縁は直線を呈すが、右側縁は上部が不整、下部が加工により丸みを帯びる。裏面の下端部が傾斜をもって下方側面につながることと考え合わせると、使用面の反りを意識したものかと考えられる。把手部に穿孔等は認められない。材質はアオハダである。

(99) はやや疑問のある未製品で、長さ34cm、残存幅11.5cm、全高5cmを計る。把手部は長さ23.5cm、幅5cm、高さ1.5cmの低い台形状の突起である。裏面は外彎する。側縁は厚0.5cmと薄く仕上げられている。把手部周辺を更に深く削り込んで鍑とすることが考えられる。しかしながら、法量的には広鍬の未製品とも考えられるものである。

(露口)

註

(1)『恩智遺跡Ⅰ(本文編)』瓜生堂遺跡調査会 1980 P.171、Fig119－50
(2)『池上遺跡 第4分冊の2 木器編』 1978 P.23、fig.12を参照した
(3)『那珂久平遺跡Ⅱ』福岡市教育委員会 1987
(4) 芋本隆裕『鬼虎川の木質遺物－第7次発掘調査報告書 第4冊』(財) 東大阪市文化財協会 1987
(5)『高宮八丁遺跡 石器編』寝屋川市教育委員会 1988

## Ⅲ．織機具（図版７・44－100～104）

本遺跡出土の織機具は５点を数える。いずれも経巻具あるいは布巻具と考えられるもので、内１点は開口具・中筒とも考えられるものである（102）。棒状のもの（100・101）と板状（102～104）のものに分けることができ、両端が棒状に突出するものと溝ないし側縁に凹みをもたせるものに細分できる。

（100）は棒状のもので両端は棒状に突出する。長さ34.9cm、幅2.4cm、厚1.2cmを計る。身部断面形は扁りある扁平な扇形を呈し、紐かけ部断面形はレンズ形を呈する。身部断面形は逆転を防ぐための処置と考えられる。鎬を有さない面は比較的粗雑で凸凹が認められる。刃縁は上半が若干凹む。身部長は約26cmを計り、20cm余の布幅／経糸幅が復原できる。材質はヒノキを用いている。

（101）も棒状のもので残存長27.5cm、幅2.9cm、厚2.3cmを計る。紐かけ部は端部に溝を掘ってつくり出すが、片端は欠損し、もう一方も半損している。身部断面形は卵形を呈し、側辺が内彎する方に突端が向く。全体に丁寧に仕上げられており、使用のためか加工痕を一切留めない。紐かけ部には面取りした加工痕が認められる。身部幅は約25cmを計り、彎曲部約22cmを布幅としたものと思われる。この場合、刃部の内彎は整経に不都合であることを考慮すべきであろう。

（102）は板状のもので、長さ24.4cm、幅5.2cm、厚１cmを計る。前述の通り、静岡県登呂遺跡出土例の中筒[(1)]に類するものである。身部断面形は扁平な長方形を呈し、両側面は平滑であるが、両平面は表面が粗雑である。紐かけ部は側辺に浅い凹みを削り込むことで仕上げている。身部幅は約17cmを計り、14～15cm程度の布幅／経糸幅が復原できる。材質はヒノキを用いている。

（103・104）も板状のもので、接合しないが同一個体と考える。（103）は残存長23cm、幅６cm、厚2.2cmを計り、（104）は残存長32.3cm、幅6.2cm、厚1.6cmを計る。身部には、厚みがあり端部に平坦面をもつ刃部と、段を設けて薄い刃状の側縁を突出させる背部を有する。背部の状況は、過去の類例[(2)]と正反するものである。刃部断面形は中軸に対して歪を有し、（103・104）とも同方向である。紐かけ部は棒状に突出させるものである。身部幅は約17＋29cmであり、43cm以上と大型の布幅・経糸幅を復原できる。原始機（弥生機）の部材を構成可能な最大幅のものと思われる。材質はともにサカキである。

以上、５点（実質４点）について報告したが、その他、緯打具かと思われる木製品が３点、用途不明木製品の中に含まれている（244・247・248）。いずれも破片であり断定し難い。

布巻具あるいは経糸具５点のうち、（100・101）は身部幅がほぼ同じである。そもそも弥生時代織機具の布幅はある程度一定したものと考えられている[(3)]が、この２点はペアである可能性を考えてもよいだろう。（102）に関しては中筒かという問題があるが、単独出土ということもあり断定はしがたい。（103・104）については布幅が異常に広いが、織る意図さえあれば、特別の腰当てを用いて織ることができよう。衣服以外のものに用いる布を織るためのものと考える。

付）織機具の部位各称については、民俗例を含めた名称が多種存在するが、本報告書においては、竹内晶子「織機・衣服」『弥生文化の研究　５』1985に拠った。

（露口）

註

（１）後藤守一編『登呂　本編』日本考古学協会　1954

（2）註1文献の他

『亀井遺跡Ⅱ』（財）大阪文化財センター　1984の大型のものもあげられる。

（3）竹内1985に同じ

## Ⅳ.容器（図版7・8・45・46・47－105～136）

高宮八丁遺跡から出土した容器類は32点を数える。その他、用途不明木製品の中にも容器片と考えられるものもある（202・213・214・292）。

種類としては、椀・方形容器（槽・盤状木器）・高杯・堅杓子・匙・杓子状木製品・不明容器があげられる。加工は全て刳物と挽物（高杯）であり、曲物等は出土していない。使用樹種に関しては、クスノキ、シイノキ、ヤマグワ、ケヤキ、シャシャンボ、カシといった広葉樹を用い、器種毎の選択性はあまり認められない。木取りに関して従来のものに相反するものはない。

### a）椀（105・106）

2点出土しており、小型で特徴はそれぞれ異なるものである。

（105）は復原口径8.8cm、器高3.4cmを計る。底部は平底で、体部はやや外開きに立ち上がる。口縁部は平坦面を有する。加工は丁寧で、幅狭の鋭利な工具の使用が考えられる。板目の横木取りで、材質はヤマグワである。

（106）もやはり小型のもので、復原口径12.4cm、残存高7.2cmを計る。4分の3ほど欠損する。丸底で体部はやや外開きにまっすぐ立ち上がる。口縁部は丸くおさめる。（105）同様内面は体部と底部の境が明瞭である。外面は平滑に仕上げ、内面は約6㎜幅の加工痕が認められる。後述の堅杓子に類似するものであるが、外面における体部と体部の境が明確でない点、口縁端部を丸くおさめる点、全体に比較的薄手のつくりである点から、堅杓子とは区別した。板目の横木取りである。樹種は不明であるが、広葉樹である。

### b）方形容器（107～117）

総数11点を数え、槽と盤状容器に分類できる。上面形が隅丸方形あるいは楕円形を呈するものを方形容器とした。

#### 1）槽（107～114）

農具（田舟）としての性格も考えられる汎用容器であり、8点を数える。細部の特徴から3種に分類できる。

（107～111・113）の6点は一般的な槽で、外形が隅丸方形・内形方形を呈する特徴をもつ。

（107）は破片で、残存長33cm、残存幅11cm、口縁部厚（短辺側＝以下Aと示す）7.5cm、底部厚2.5cmを計る。平底の底部と丸みをもって立ち上がる短辺体部との境は不明瞭である。短辺部側縁も丸みを帯びる。田舟に適した形態である。材質はシイノキである。

（108）も破片で、残存長7cm、残存幅約3cm、器高2.6cm、口縁部厚（A）2.5cm、底部厚0.5cmを計る。特徴は（107）に準ずるが、短辺側の体部厚を長辺側のものと比較すると、その厚みの差が顕著である。材質はシャシャンボである。

（109）はかなり欠損しているが、出土時（図版26上参照）には長さ63cmを計った。残存幅11cm、口縁部厚（A）5.5cm、口縁部厚（長辺側＝以下Bと示す）2.5cm、底部厚1.5cmを計る。材質はシイノキである。

（110）は底部と体部下半を残存するもので、残存長50.5cm、残存幅18cm、底部厚2.5cmを計る。材質はクスノキである。

（111）は残存長34.3cm、残存幅10.3cm、底部厚1.7cmを計る。容器としての深さは長辺側と短辺側で異なる。

（113）は残存長34.1cm、残存幅13.5cm、底部厚0.6cmを計る。底部と長辺側の体部の境がやや不明瞭である。

（107～111・113）とは別の特徴をもつ槽として、（112・114）がある。それぞれ異なる特徴を有する。

（112）は残存長69cm、残存幅11cm、底部厚2.1cmを計る短辺側の口縁から底部にかけての破片である。特徴としては、平底の底部から極めて広角度の外上方へ立ち上がった後、直上方に屈曲して立ち上がる体部を有する。ちょうどスキーの滑走板の端部を折って直上方に立ち上がらせたような断面形である。外面の直立する側面の高さは4.3cmを計る。口縁部厚（A）は他の例に比べ薄く、次の（114）も同様である。材質はケヤキである。

（114）は杯ないし大型の椀に近いものであるが、わずかに残存する側縁が直線を呈し、全体に楕円形を呈しているところから槽と判断した。残存長24cm、残存幅13cm（底部を意識しない最大残存幅）、厚1cmを計る。底部は丸底で不明瞭のまま体部に続く。用途不明木製品（有孔板－220）と共伴するが、材質は異なりケヤキである。

**2）盤状容器（115～117）**

3点を数える。全て断片的な資料であるため確定は困難ではあるが、槽とは形態的に異なるものをあげた。即ち、槽が何らかの体部外面加工を施して比較的深みをもつのに対し、端部が隆帯状に突出するのみで容器としての深みにやや欠けるものである。材質の感じと残存状況から鋤の破片の可能性も考えられる（116・117）が、（115）はクスノキである。機能的には何らかの作業台と考えられる。

（115）は短辺側の隆帯が残存するもので、残存長45cm、残存幅18cm、短辺側隆帯幅（体部厚）4cm、器高5.5cm、底部厚2.5cmを計る。長辺側の体部は一部残存しており、口縁部厚は1.5cmを計る。平底で、短辺側の体部外面は面自体不整ながら垂直に立ち上がる。材質は前述の通りクスノキである。

（116）は長辺・短辺とも隆帯がよくわかるもので残存長27.4cm、残存幅10.3cm、器高3cmを計る。底部平底で、隆帯は直上方に立ち上がる。隆帯断面形は丸みを帯びた台形である。底部内面は極めて平滑に仕上げられている。表面が一部火にあたり炭化している。材質の感は堅固であり、遺存状態は良好である。

（117）はやや残りの悪い破片で、残存長25.9cm、残存幅8.7cm、器高2.2cmを計る。長辺側の隆帯は比較的残存しており、断面台形を呈する。短辺側は極めて不整で欠損がはげしい。底部内面には残りが悪いが幅広の加工痕が認められる。扁よりのある柾目材を用いており、材質は（116）同様堅固で遺存状態が良い。

**c）高杯（118・119）**

高杯は比較的少なく2点出土しているのみである。それぞれ形態的・技法的に異なる特徴を有する。

弥生時代木製品の中で、この時期に伝わったとされる木工ロクロの存在と、それに伴う鉄製工具の存在を認めさせる器種ではあるが、本遺跡出土の高杯については、比較的均等な（118）でも若干疑問が残る仕上げである。

(118) は脚部のみ残存し、脚裾径13.6cm、脚柱状3.4cmを計る未製品である。ゆるやかに裾広がる脚部を有する。脚柱部には削り出しの突帯が3条（1条は部分的に残存）認められる。脚柱部上面は平面ではないが、表面は非常に平滑で、木目方向と無関係の方向に欠けた形となっている。従って上部欠損とは考えにくく、奈良県唐古遺跡[1]や静岡県登呂遺跡[2]、大阪府池上遺跡[3]や恩智遺跡[4]等で出土している柄穴と柄を組合せで作る高杯であると考える。継手に関しては、唐古例のような2部材（＋雇柄1）構成ではなく、登呂・恩智例のような3部材構成であろうと考える（細長い脚柱部を有さない点から）。円周方向に認められる加工痕から、木工ロクロの使用が考えられるが、全体及び突帯の不整さが問題となろう。脚縁は不整で未調整である。脚部内面は削り込んでいるが、脚柱部は中実である。木取りは板目の横木取りで、材質はケヤキである。

(119) は杯部の一部と脚柱部が残存するもので、脚柱径5.4cm、残存高6.1cmを計る。(118) とは違い、一木造りのものと考える。杯部は外上方にまっすぐ立ち上がる。脚柱部は外面が不整で中実である。脚裾部は欠損のため不明である。板目の横木取りで、材質はサクラである。遺存状態はあまり良くない。

**d）竪杓子（120）**

竪杓子と考えられるものが1点認められる。

(120) は柄を含む3分の2程を欠損し、口径10.8cm（復原）、残存高6cmを計る。椀に比べて厚手につくられており、底部の丸底と直上方に立ち上がる体部との境は明瞭である。口縁はやや外傾した平坦面をもつ。また、木取りも他の椀とは異なり、縦木取りである。従って、頑丈なつくりの身に直上方向の柄をつくり出した竪杓子である可能性が強い。材質はクスノキである。

**e）匙（121～125）**

5点を数える。身（匙部）と柄を明確に区別してつくるもの（121・122・125）と、身と柄の境が不明瞭なものでいわゆる「レンゲ」状を呈するもの（123・124）とに分かれる。

(121) は、ほぼ完形で、長さ23.6cmを計る。身はほぼ楕円形を呈し、丁寧に仕上げられる。柄はゆるやかに幅広くなった後、両端部をカットして尖らせる。先端は割れて欠損する。材質はシャシャンボである。

(122) は、未製品で、長さ19.0cm、身部幅5.5cm、柄部厚1.3cmを計る。楕円形の身と細長い柄の祖形が認められる。

(123) はほぼ完形で、残存長16.9cmを計る。極めて薄いつくりで、柄からゆるやかに幅広くなる身に平面逆卵形の掘り込みを施したものである。器壁が薄いために現状では歪を生じている。

(124) は主に柄が残るもので、残存長12.7cmを計る。(123) より幅広ではあるがほぼ同様の特徴を有する。表面は製作工程の一つである焦がし[5]によるものかと思われる仕上がりで、黒色を呈し光沢を帯びる。

(125) は身部のみ残存する未製品である。残存長10cm、全幅6cm、口縁部厚1.5cmを計る。厚いつくりで、掘り込みは浅い。材質はヤマグワである。

**f）杓子状木製品（126～128）**

身と柄が平行してつくり出される横杓子や匙に類似するが、身部の凹みを有さないもの、ヘラに近い形状のいわゆる「しゃもじ」状を呈するものをまとめた。3点を数える。

(126) は匙の形態に近いもので、残存長22.9cmを計る。身部はほぼ円形を呈する。身と柄は厚が

ほぼ同一で、0.7cmを計り、身には何ら掘り込みは認められない。加工は丁寧である。材質はヤマグワである。

（127・128）ともいわゆる「しゃもじ」状を呈するもので、広鍬ないし櫂の破片に類するものである。共に片側縁を欠損する。

（127）は長さ16.9cm、幅5.2cm、厚1.1cmを計る。片側縁は欠損して直線を呈すが、あるいは残存する側縁を利用するヘラに近い用途に用いられるものかもしれない。

（128）は、身と柄の幅差が大きいもので残存長17.6cm、幅6.7cm、厚0.8cmを計る。片側縁はほとんど欠損するが、身端に丸みを帯びる側縁が若干認められる。（127）より表面が平滑に仕上げられている。材質は2点ともカシである。

**g）不明容器（129～136）**

欠損のためその全体形を復原し難いものの、何らかの容器として考えられるものが7点出土している。

（129・130）は匙と思われるものである。

（129）は比較的浅い身部のみ残存し、残存長7cm、残存幅3.8cm、口縁部厚1.2cmを計る。口縁部は下端に若干残存している。材質はサクラである。

（130）は大型で、残存長34cm、身部幅18cm、身高11cmを計る。全体に不整な未製品である。掘り込みの深さは7.6cmを計る。柄は9cm程残存する。匙というより横杓子に近いものではあるが、加工痕はほとんど認められず、また用材と共伴しており、自然木あるいは加工くずの可能性が極めて強いものであり、遺存状態は不良である。

（131～136）は杯あるいは高杯または皿と考えられるものである。

（131）は大きく弧を描く口縁部を残すもので、長さ37.8cm、幅16.9cm程残存し、口縁部厚1cmを計る。体部は浅い凹みを呈すると思われる内面と、丸みを帯びていてつながる口縁部から内彎して下方に向かう外面とから成る。内面は（124）と同じく焦がしにより黒色を呈する。

（132）も同様のもので端部を残存しない破片で、残存長12.5cm、残存幅7.5cm、厚1.4cmを計る。縦断面において屈曲し、横断面において丸みを帯びる。内面は焦がしにより黒色を呈する。

（133）も（131）と同様のもので、残存長11.5cm、残存幅3.5cm、口縁部厚0.6cmを計る。大きく弧を描く口縁が一部残存する。体部は丸みを帯びる。

（134）は高杯の脚部と思われるもので残存長29cm、残存幅10cm、脚裾厚0.9cmを計る。脚裾は未調整である。ゆるやかに立ち上がる脚柱部が残存する。（135）は（131）と類似する破片で、大きく弧を描く口縁が残存する。内外面とも焦がしにより黒色を呈する。（136）は高杯の口縁部と思われる破片で、復原14.8cm、口縁平坦部幅2cmを計る。体部は内彎しながら側上方にのび、丸みを帯びつつ外上方に立ち上がって口縁部平坦面につながる。平坦面には円孔が半存する。材質はヤマグワである。

（露口）

**註**

（1）末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第16集　1943

（2）後藤守一編『登呂　本編』日本考古学協会　1954

（3）小野久隆・奥野都『池上遺跡　第4分冊の2　木器編』（財）大阪文化財センター　1978

（4）『恩智遺跡Ⅰ（本文編）』瓜生堂遺跡調査会　1980
（5）山田昌久「木製品」『縄文文化の研究　7』　1983
同　「木製品に残された加工痕について」『鳥浜貝塚　1980年度調査概報』　1981
本遺跡にみられる黒色で光沢を帯びる仕上げを施した容器については、他遺跡で認められるような黒漆の塗布とは若干異なる印象をもつため、あえて黒漆との見解を避けた。

## Ⅴ．武器・狩猟具（図版８・９・13・48～50・52－137～169）

本遺跡出土木器のうち、武器・狩猟具には弓、武器形木製品があげられる。総数33点を数える。

### a）弓（137～169）

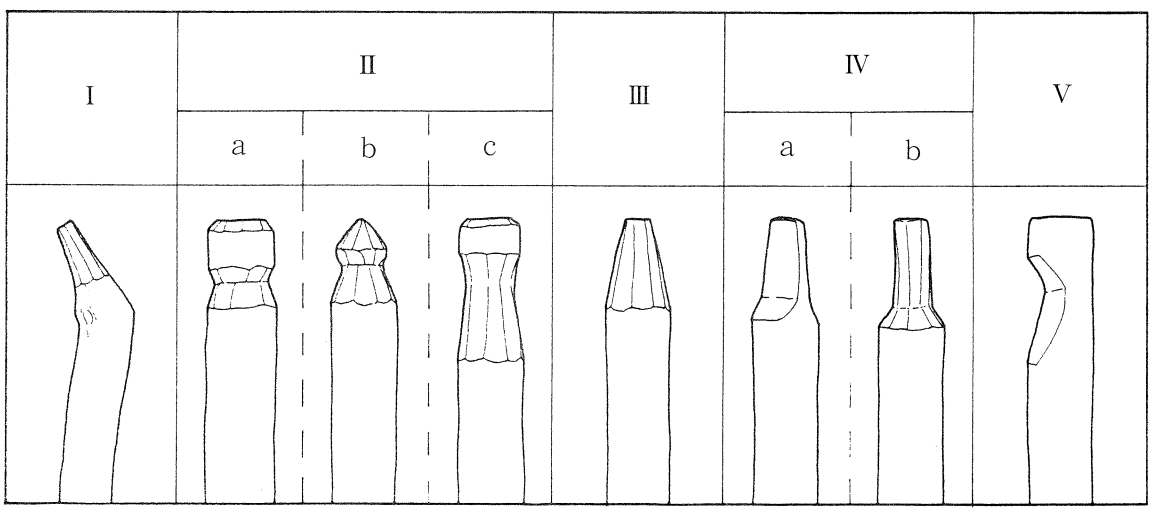
完形・破片を含め32点出土している。弓弭部を有さない小破片には同一個体の可能性のあるものや棒切れにすぎないものも含む。丸木弓がほとんどで飾り弓も数点認められる。完形品ないしそれに近いものが合わせて２点出土しており、80cmから１mのいわゆる短弓の類[1]に含まれるものである。弓弭部が残るもの18点については、その特徴から型式分類を行った（挿図４）。材質に関しては、イヌガヤ・カヤ・ヒノキといった針葉樹と、マユミ・サカキといった広葉樹を用いている。木取りは特に記述がない場合は芯持材である。

#### Ⅰ類（137・156）

特徴として、端部を屈曲させ弓弭とするもので、２点確認できる。原材の枝幹を利用したものとも考えられる。

（137）は完形品の丸木弓で、長さ79.9cm、径１cmを計る。Ⅰ類の弓弭は末弭で、本弭は後述するⅣｂである。弝はいわゆる「短下長上」で上半は、大きく彎曲する。断面円形を呈する丸木弓である。丁寧に加工され、樹皮は残存しない。各所に削った枝の節が認められる。材質はイヌガヤである。

（156）はやや疑問の残る丸木弓破片であるが、弓弭は自然木の屈曲を利用したものと思われる。（137）同様彎曲しており末弭である。表面には樹皮が残存する。




挿図４　出土弓弭部型式分類模式図（縮尺不同）

Ⅱ類（138・141～143）

特徴として、端部を若干残し、溝状に削りを加えて弓弭とするもので、池上遺跡の分類[2]のB類、渡辺一雄氏分類[3]のⅢ類に相当する。細かい特徴からａ～ｃに細分できる。

ⅰ）Ⅱａ（138・141）

残した端部が弓幹と同一径のまま未調整のもので、２点を数える。

（138）は丸木弓である。残存部を見る限り直弓であり、本弭と思われる。残存長28.2cmを計る。弓弭部は加工痕が明瞭に残る。断面はほぼ円形を呈し、全体に丁寧な仕上げである。樹皮は全て削り取られ残存しない。径2.4cmと頑丈なつくりである。遺存状態は良好である。

（141）は飾り弓で残存長55cm、径２cm。残した端部が部分的に欠けており、Ⅱｂと区別し難い。断面円形を呈する。折損部付辺が彎曲する。桜の樹皮を弭部を含め４ヵ所に３回程度巻きつけ、竹の節状の装飾を施す。材質はカヤである。

ⅱ）Ⅱｂ（142）

残した端部に更に加工を施し、先端を尖らせた装飾性も持たせた弓弭で、１点のみ認められる。

（142）は、残存長26.4cm、径1.1cmを計る丸木弓である。折損部付近が若干彎曲するが、全体に直弓である。弓弭は先端から１cmの周囲に浅い溝を施し、端部を丸く仕上げる。断面は弓幹では円形、弓弭部付近では方形気味である。全体に丁寧な仕上げである。弓腹には一部、焼けにより黒く炭化する。材質はイヌガヤである。

ⅲ）Ⅱｃ（143）

Ⅱａの端部を有し、溝の下半がなだらかにのびるもので、１点のみ認められる。

（143）は丸木弓である。残存部を見る限り直弓である。弓弭は先端から４cm程度の部分でつくり出し、中程をやや細めるくらいのものである。全体に丁寧なつくりで樹皮は一切残存しない。折損端部には加工によると思われる孔が半存する。材質はヒノキである。弓弭の形態としては弦を結縛・固定しづらい不適切な形態と考える。端部の孔が本来施されているものとすれば、石製武器の柄（柄としては細すぎる）か、手網の柄（組合せ式か）の可能性も考えられる。

Ⅲ類（144～148・150・151・155・157）

残存する弓弭の形態としては最も多く、９点を数える。端部を削って杭状に尖らせ、弓弭とするもので、池上分類のｃ類、渡辺氏分類のⅠ類にあたる。尖らせる長さには差異があり、極端に短いものもある。後述のⅣｂは、このⅢ類の使用状況を示すものとも考えられる。

（144）は丸木弓で弓弭の削り出しは長い。残存長88cm、径2.5cmを計る。先端は部分的に欠損しており、ⅡｂないしⅡｃに近いが、削り残しの可能性が強く、Ⅲ類とした。表面には樹皮が残存し、削った枝の節が４ヵ所認められる。表面に樹皮が残存する。材質はイヌガヤである。

（145）も（144）と同様のもので、先端は削り残す。残存長81cm、径３cmを計る。弣部以下は彎曲するが背と腹が逆である。残存する弓弭が本弭で、弦を張らない状態では直弓を呈するものかもしれない。材質はイヌガヤである。

（146）は飾り弓の破片である。残存部のほとんどに桜の樹皮を巻きつけ強化している。折損側の端部には再加工を施し、何らかの再利用が考えられる。弓弭部は加工によるものか欠損によるものか不明であるが、現状においては先細りを呈する。本遺跡唯一の木弓ではあるが、ヤマグワという材質から考えて、弓以外の器種の可能性を考慮する必要がある。

(147) は、弓弭の削りが極端に短かい丸木弓で、残存長23cm、径2.1cmを計る。残存する弓幹は彎曲するが、弓弭の形態から本弭部と思われる。全面丁寧に加工しており、樹皮は残存しない。断面円形を呈する。

(148) も弓弭が極端に短かいもので、残存長34.5cm、径2.4cmを計る丸木弓である。弓幹は直弓を呈し、本弭部である可能性が強い。断面は円形だが、弓弭付近では楕円形を呈する。樹皮は一切残存しない。

(150) は完形に近い形状の丸木弓で末弭のみ残存する。弣より上半は大きく彎曲しており、下半は直弓を呈する。残存長108cm、径3×2.5cmを計る。断面は半円形を呈する。弓弭は比較的長めに削り出す。材質はサカキである。

(151) は残存長73cm、径1.5×1cmを計る。弓幹は大きく彎曲し、断面は方形を呈する。弓弭の尖りは鋭い。材質はイヌガヤである。

(155) は長さ76cm、径2.5cmを計る丸木弓である。弓幹は大きく彎曲する。弓弭の尖りは鈍い。

(157) は長さ82cm、径1.5×1cmを計る。断面方形を呈する。弓弭は鈍く短い。弓幹は残存部を見る限り直弓である。

**Ⅳ類 (149・137・152)**

弓弭端の側面を削り落とし、段を設け弓弭とするものである。完形品の本弭も含め3点認められる。

**ⅰ) Ⅳa (149)**

両側面のみ削り落として段を設け、扁平な突起をつくり出すもので、池上分類のA類、渡辺氏分類のⅣ類に相当する。

(149) は長さ54cm、径2.3×1.8cmを計る。弓弭部は先端から2cm程度削り込んで突起をつくりだす。さらに3.9cm以降幅狭になるが、隆帯をつくり出しているかどうかは不明である。弓弭の突起は弓背側が大きく反っており、磨滅の末に弦が抜けたものと思われる。弓幹は大きく彎曲する。断面形は楕円形を呈する。材質はマユミである。

**ⅱ) Ⅳb (137・152)**

全周を削り落として段をつくり出すもので、Ⅲ類の使用・磨滅したものかと思われる。あるいは、Ⅳbが成品でⅢ類が未成品なのかもしれない。

(137) はⅠ類の弓弭を末弭とする完形品である。先端は丸く鈍い。加工した部位と弓幹との段が明確である。弣部以下は直弓である。Ⅲ類のものにも直弓を呈するものが多く、Ⅲ類やⅣb類が本弭の形態として用いられたことを示すものである。

(152) は残存長29.5cm、径1.6cmを計る丸木弓である。弓弭部は長さ2.5cmを計り、加工による段が明確である。先端は丸く鈍い。残存部上半において原材の節による屈曲が認められる。弓幹は直弓を呈する。全面丁寧に加工されており、樹皮は残存しない。材質はイヌガヤである。

**Ⅴ類 (153)**

1点のみ認められる。弓背端部に「く」の字状の切り欠きを施し、弓弭とする池上のF類、渡辺氏分類のⅡ－1類に近いものである。しかしながら本遺跡例は弓腹側に施されており、再考の余地はある。弓幹が反復した状態と考えるには若干困難な資料である。大阪府山賀遺跡[(4)]に同様の弓弭をもつ弓が出土している。

(153) は残存長63cm、径2×1.5cmを計る。弓弭の凹みは浅く長いものである。弓幹は大きく彎曲

する。表面には樹皮が残存する。材質はイヌガヤである。

**弓（破片）（139・140・154・158～168）**

弓幹のみ残存する破片で、飾り弓１点、丸木弓14点の計15点を数える。

（139）は飾り弓である。残存長62cm、径2.5cmを計る。弓幹は残存部においては直弓を呈する。残存部上端から27～30cmの間、56～60cmの間には桜の樹皮を巻きつける。断面は方形に近い。表面には樹皮が残存する。材質はマユミである。

（140）は丸木弓で、残存長87cm、径2.5cmを計る。残存部中央の弭部をはさんで、彎曲する弓幹が認められる。断面円形を呈する。表面には樹皮が一部残存する。

（154）も中央に弓弭を有し両側がそれぞれ彎曲するもので、残存部99cm、径３×2.5cmを計る。断面は楕円形を呈する。表面には一部樹皮が残存する。

（158）は残存長58cm、径２×2.1cmを計る。表面は不整で損傷が著しい。断面は円形を呈する。

（159）は残存長44.7cm、径1.7cmを計る。弓幹は大きく彎曲する。断面円形を呈する。表面は一部樹皮が残存する。

（160）は残存長54cm、径2.7×1.8cmを計る。弓幹は大きく彎曲する。断面方形を呈する。損傷が著しく、遺存状態は良好ではない。

（161）は残存長16＋7.2cm、径はそれぞれ0.8×0.7cmと1.0×0.9cmを計る。接合しないが同一個体と思われる。ほぼ直弓を呈する。断面は楕円形を呈する。

（162）は残存長21.5cm、径2.2×1.3cmを計る。弓幹は直弓を呈する。断面は楕円形を呈する。

（163）は残存長15.5cm、径1.3×0.8cmを計る。残存部は直弓を呈する。断面楕円形で、円周に直交する裂け目を生じ端部は歪む。

（164）は残存長38.5cm、径2.4×2.1cmを計る。弓幹は若干彎曲する。断面楕円形を呈する。表面には樹皮が残存し、削り残した枝幹が残る。

（165）は残存長27.5cm、径1.8×1.4cmを計る。（164）と同様の破片で同一個体と思われる。断面楕円形を呈する。表面には削った枝の節が残存する。

（166）は残存長42.5cm、径2.2×2.1cmを計る。断面円形を呈する。表面には樹皮が残存する。

（167）は残存長37cm、径1.5×1.3cmを計る。残存部の一端は丸味を帯び、加工されたものと思われるが、弭としては明確ではない。断面ほぼ円形を呈する。

（168）は小破片で、残存長6.5cm、径1.4×1.2cmを計る。断面楕円形を呈する。表面は焼けて黒く炭化している。

弭の諸形態について、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳb・Ⅴ類は本弭に、Ⅰ・Ⅳa類は末弭に用いたと考えられる。前者は弦を直接緊縛するのに、後者は弦輪を装着するのに適当[5]である。この場合、Ⅲ・Ⅳb類とも同じ特質を持つとし、加えて残存部が直弓を呈するものが多いことも合わせて、本弭として弦を緊縛した[6]と考えるべきであろう。Ⅰ類については、弦を張る際弓幹をしならせ、弦輪をひっかけるという造作も考えられよう。弓の形態については、「短下長上」で上半が彎曲し、下半が直弓を呈するものが多いのは完形例や弓弭の形態毎の弓幹の傾向からしても明らかである。しかしながら、本弭に比定すべき弓弭を有するものにも彎曲するものがあり、全体形が弧を描く形態や、弭を有する破片で明らかな、上・下とも彎曲する形態の弓も存在するものと考える。

付）報告文に用いた部位各称については渡辺一雄「弓・矢」『弥生文化の研究　5』1985を参考にしたが、直弓については残存する部分に限った形容として用いており、弓の形態を想起する意味は持たせていない。

b）武器形木製品（169）

ナタ状（青龍刀状）を呈するものが1点認められる。完形で長さ52.7cm、幅4.6cm（最大）、厚2.5cmを計る。刃部にあたる部分は一方の側へ反りをもち、端を切ったような端部につながる。握部にあたる部分はゆるやかに先が細くなり、球形に近いグリップをつくり出す。端部（グリップにあたる）は先細らせる加工が認められるが先端は鈍い。刃部中程に平面不整長方形を呈する孔を穿つ。両側穿孔だが非常に扁りあるものである。全体に装飾は特に認められない。本報告においては、この木製品を武器形としているけれども、縄文時代の青龍刀形石器とも形態が異なり、類似する形態としては、鳥形木製品が考えられる。弥生時代の主な木製祭祀具の一つであり、本遺跡においても出土する可能性は十分ある。本木製品を鳥形木製品とするならば、不正な穿孔には別木造りの翼を装着するものと考えられる。しかし、杆を挿入するための孔が認められないため、未製品とすべきであろう。しかしながら、鳥形とするにも形態が若干抽象的で即断し難く、今後検討を加える必要がある木製品である。

（露口）

註

（1）全長が射手の身長を越えない弓として、150cm以下の弓を指す。弥生時代の弓が短弓であることについては、上記付）文献の他、山田昌久「縄文・弥生時代の木製品」『シンポジウム弥生人の四季』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編　1987他の諸氏により述べられてきたところである。

（2）小野久隆・奥野都『池上遺跡　第4分冊の2　木器編』（財）大阪文化財センター　1978

（3）上記付）文献に同じ

（4）『山賀（その3）』大阪府教育委員会　1984、P.125、W－19

（5）上記付）文献に同じ

（6）大阪府鬼虎川遺跡の完形例2点も共に本弭としている。『鬼虎川の木質遺物』（財）東大阪市文化財協会　1987　PLATE　93、216・217

## Ⅵ．漁撈具（図版９・12・14・51・52・61－170～196）

本遺跡出土の、漁撈具としては、櫂、タモ枠、刺突具があげられる。

刺突具については、ヤスという用途を重視し、漁撈具に含めるものとする。河内潟に面した高宮八丁弥生集落の生業の一つとしての漁撈活動を実証するものである。

### a）櫂（図版12・14・51・61－170～173　）

今回の調査で漁撈具としては、櫂・タモ枠・刺突具が出土した。特に、櫂において注目すべき遺物が４点出土している。

（170）は完形品で全長173.1cmを計り、両側に水をかく部分がつく、カヌーの「パドル」タイプのものである。棒状の柄が両端に向ってしだいに幅広くなっているが、水をかく部分の幅（7.6～6.9cm）と握部幅（４cm）とは大差なく、握部と水をかく部分との境界は明確ではない。全面には、丁寧な加工が施されている。水をかく部分は、両方ともほぼ楕円形を呈しているが、一方（図版14－170の左側）は先端が丸くおさまるのに対し、他方（同図の右側）はやや尖り気味である。さらに、一方（同図の右側）の水をかく部分にのみ「くり込み」を施しており、他方（同図の左側）は平坦面を呈している。材質は、カシを使用している。後述の（172）と隣接して溝240の下層より畿内第Ⅰ様式中段階から新段階の土器と共伴して出土している。（巻頭カラー写真図版）

両側に水をかく部分の櫂の出土例は、全国的にも知られていないけれども、本例に近いタイプのものとしては、唐古・鍵遺跡SD－204中層出土の櫂状木製品[1]や用途は異なるが、亀虎川遺跡の掘棒[2]があげられる。

本例の出土により、他遺跡出土の同タイプの棒状木製品についての再検討が必要であると考えられる。

（171）は、全長81.2cmを計り、水をかく部分は先端がやや幅広の楕円形を呈し、他方は幅狭で長さ26.5cm、幅4.7cm、厚さ2.5cmの方形を呈している。幅狭の方形端部は明確に造り出されているが、櫂中央と同様握部と考えられる。中央の握部も、３cm×2.4cmの方形を呈している。

材質は、シイノキを使用し全体に丁寧な加工を施している。Ｄ－６区落ち込み216から畿内第Ⅰ様式新段階から第Ⅱ様式の土器と共伴して出土した。

（172）は全長64.5cmを計り、全体に厚いつくりで断面扁平な楕円形の杭状を呈するものである。

櫂部先端は丸く加工され、握部端は、やや薄くなり、全体に鈍く尖るが、先端は丸味をもっている。この櫂状木製品については、全体にやや幅広の加工痕が認められるものの、細部調整は認められないことや、その形状から他の木製品（掘棒や堅杵等）としての用途も検討する必要が考えられる。

使用材質はカシである。先述の（170）と隣接して出土している。

（173）は水をかく部分の3/5程度の残存であり、やや薄い幅広のものである。

### b）タモ枠（174）

今回報告するものは１点である。全体の反りの大きさから、弓とは異なりタモであると判断した。残存長35.7cm、径1.1×1.2cmを計る。全周の５分の２ほどの残存で、かなめの部分は認められない。彎曲度はやや扁りがあり、屈曲度の大きい側がかなめに近い側と考えられる。自然の枝を利用し、樹皮を多く残す。彎曲する内面は加工痕が認められ、屈曲するための加工と考えられる。一部火にあたった痕跡が認められる。残存端部には結縛のための加工が認められず、握り部につながる部位と考え

られる。

c）刺突具（図版9・51・52－175～196）

22点出土している。元来統一名称をもたない器種で、器種自体にあまり特徴がなく、用途も限定し難いものであるため、各種の呼称で報告されている。ただ、材質に関しては、モミである傾向が強い。本遺跡においても、刺突具という名称を用いたが、正確には「刺突に適した先尖りの端部を有する小型棒状木製品」といった意味を込めて用いている。本遺跡出土例では、桜の樹皮を巻いた例（176）があり、刺突具を何らかの棒に装着して使用した可能性が考えられる。従って、ヤスとしての刺突具を考慮して、漁撈具に分類した。本遺跡出土例は、両端を削り尖らせたもの、片端を削り尖らせたもの、全体に粗雑なものの3種に分けられる。なお、文章中における、上・下端は図・写真に掲載した状況に基づくもので、実際の使用状況に基づくものではない。

（175）は長物で、長さ75cm、径1.0×1.5cmを計る。断面方形を呈する。両端は先細りに加工されているが、尖らない。他の例より格段に長く、全体の印象として棒状木製品に近いものである。全体の様相としては鬼虎川遺跡出土の軸付紡錘車の軸に類似するが、本例の方が長大である。

（176）は残存長7.8cm、径0.9×0.6cmを計る。一端は丸みをもって尖る。中央に幅0.3cmの桜の樹皮を3回以上巻く。木鏃の可能性もある。

（177）は長さ8.4cm、径0.7cmを計る。材質はモミである。両端を共に尖らせているものである。断面は楕円形に近い。

（178）も両端が尖るもので、長さ8.5cm、径0.8×0.4cmを計る。断面は楕円形を呈する。

（179）も両端が尖るもので下端を欠損する。断面は円形に近い。表面はなめらかに仕上げられている。

（180）は長さ約9.2cmが残存しており、径0.6cmを計る。上端は斜めに欠損しているが、先細りの状況を残す。下端は鋭く尖る。

（181）は下端のみ尖るものだが端部を欠損する。上端・断面形とも不整である。残存長8.1cm、径1.0×0.8cmを計る。

（182）も下端のみ尖るものであるが、上端及び下端端部を欠損する。上端は欠損するが、先細りの状況は認められない。長さ8cm、径0.9cmを計る。側縁が一部炭化している。

（183）は両端とも尖りが鈍いもので、一端は一部欠損する。長さ17.2cm、径1.2×0.9cmとやや大型である。

（184）は長さ8.5cm、径1.0×0.7cmを計るが、全体に歪を生じており、正確な全長は不明である。下端は鋭く尖る。断面は扇形を呈する。遺存状態はあまり良好ではない。

（185）は両端とも鈍く尖りが不明瞭なもので、全体に不整である。未製品かと思われる。長さ16.8cm、径1.2cmを計る。遺存状態の良好な箇所で断面形は方形を呈する。

（186）も両端とも尖りが鈍いもので、長さ16.8cm、径0.8×0.6cmを計る。完形品と思われる。加工も丁寧で、断面楕円形を呈する。

（187）は大型のもので、下端のみ尖る。長さ34.6cm、径2.7×1.8cmを計る。上端は丸みを帯び鈍い。上端から2cmの箇所には深さ0.6cmの未貫通の凹みを有し、それに続く溝が上端まで続く。断面形は上端において楕円形、中央から下部において円形を呈する。材質はヒノキである。

（188）は長さ11.8cm、径0.8cmを計る完形品である。両端ともに尖りは鈍い。断面形は円形に近い。

（189）は裏面及び上端を欠損する。残存長13cm、径1.0×0.7cmを計る。下端は丸く仕上げる。断面は裏面欠損のため半円形を呈する。

（190）は片端のみ尖るもので、長さ14.6cm、径0.8×0.6cmを計る。下端を加工により尖らせる。裏面欠損のため、断面形は半円形を呈する。上端は扁平だが、欠損によるものか仕上げによるものかは現状では不明である。

（191）は全体に粗雑な未製品である。現状では両端とも尖る。長さ19.1cm、径0.9×0.5cmを計る。全体に歪んでいる。

（192）は下端のみ尖るもので全体に粗雑である。上端は不整で、下端は尖るが加工痕等不明である。長さ14.5cm、径1.3×0.5cmを計る。断面形は三角形に近い。

（193）も（181）·（184）·（192）に類似するもので長さ15.9cm、径1.1×0.8cmを計る完形品である。上端は扁平に仕上げられている。下端は加工により細く鋭く尖る。断面は台形に近い。

（194）は両端が尖るもので、長さ10.2cm、径0.9×0.5cmを計る。完形品で、下端が特に鋭い。断面は長方形を呈する。

（195）は未製品で、両端とも尖る。長さ13.8cm、径1.1×0.7cmを計る。表面は極めて粗雑であり、側縁部が特に著しい。断面形は三角形に近い。

（196）は杭に類似するもので、残存長4.3cm、径1.0×1.1cmを計る。下端が加工により鋭く尖る。断面形は楕円形に近い。全体に焼けて炭化している。

これらの刺突具に関して、その平均値は16.4cm（大型のもの2点を含む19点）、大型のもの2点を除く平均値は11.9cmである。小型のものに限って分析すれば、両端が尖るもの10.6cm（尖り具合は無視）、片端が尖るもの11.0cmの平均値を計る。

尚、（185·186·190·191·192·193·195）並びに（180·194）はそれぞれ一括資料である。特に前者は3種全てを内包し、整然と並んだ状態で出土しており（図版31下参照）、刺突具の製作過程をうかがわせるものである。数多く一括しておくことは、大量の需要を要するものあるいは消耗品的な性格をうかがわせる。いずれにせよ、今後の資料の増加と細かい検討を必要とする器種である。

（塩山·露口）

註

（1）『唐古·鍵遺跡 第16·18·19次発掘調査概報』田原本町教育委員会 1984

（2）『鬼虎川の木質遺物 －第7次発掘調査報告書 第4冊－』（財）東大阪市文化財協会 1987 図74

## Ⅶ. 運搬具（図版10・52－197）

鬼虎川遺跡において提唱された橇と同形状のものが、本遺跡からも出土しており、先述のごとく農作業に伴うものとして農具に含むこともできるが、本報告においては運搬具として項を独立させて報告する。

### a）橇（図版10・52－197）

1点出土している。正確には橇状木製品ないしは橇未製品と考えられるものである。

長さ52.9cm、幅15.5cm、厚8.1cmを計る。全体形は長方形を呈し、中央に縦長の方形突起を有する。突起断面形は台形である。短辺端部は原材切断時のままであるが、下方のものは欠損の可能性もある。上半部は反りを有し、厚みを増す。長辺両縁部はほぼ平行で、側面を有する。裏面は若干中ほどが隆起し、断面形は丸味を帯びる。全体に幅の広い加工痕が明確に認められる。材質はクスノキである。

瓜生堂遺跡[(1)]の出土例について春成秀爾氏[(2)]が見解を述べて後、橇は鬼虎川遺跡出土例[(3)]において確認・断定された。その判定基準に関してまだ不明瞭な点は残るものの、今後の類例増加によって確立してゆくものと思われる。そういった意味からも、本遺跡出土例はその参考例として検討してゆく必要がある。

付）本遺跡出土例は、鬼虎川遺跡出土例の内、法量からc類に属する。類例としては同報告書の（119）～（122）の橇未製品があげられる。

（露口）

註

（1）『瓜生堂遺跡　資料編』瓜生堂遺跡調査会　1972

（2）春成秀爾「道と運搬法」『弥生文化の研究　7』　1986

（3）『鬼虎川の木質遺物　－第7次発掘調査報告書　第4冊－』（財）東大阪市文化財協会　1987
芋本隆裕「弥生時代の橇」同上　1987

## Ⅷ. 用途不明木製品（図版９～13・53～62・198～308）

これまで列記してきた木器類とは別に、何らかの理由によりその性格を復原しかねるものについて、ここではそれらを用途不明木製品として一括した。本遺跡出土木製品中最も多数を占め、総数110点を数える。用途不明木製品の中には、丁寧に加工が施され、全体の形状が明確であってもその用途が見出せないものや組合せ部材等使用状況が復原し難いもの、破片のため詳細不明なもの、若干の加工は認められるが単なる木片（木端）であるかもしれないものも全てをまとめた。

往々にして名称を設定したものもあるが、あくまで形状に関して形容したものであり、用途や機能的意味をもつものではない。

（198）は祖型琴[(1)]と考えられるものである。

基本形は上端が幅広く、篦状の身部につながるものと思われる。上端中央には両面から削り込まれた加工面を有し、それにより両端が突出した形になるが、現状ではほとんど欠損している。身部には幅７㎜の突帯２条が削り出されている。断面形は楕円形で厚みがあり、その点からすれば、儀杖ないしは装飾のある石斧柄とも考えられるものである。材質はカシである。

同様なものに琴形木製品（295）がある。広鍬ⅡａないしⅡｂ－ａの再利用と考えられ、頭部上辺には幅４㎜、深さ２㎜の凹みが認められ、側辺には鋸歯状の突起を３ヵ所ほど削り出している。身部には広鍬の際の三角孔が残る。極めて薄手のつくりで、現状では歪が生じている。

（201）は琴柱状木製品である。現状では小さい台形状を呈しており、加工は丁寧である。

（199）・（200）は筒状木製品である。

（199）は管状を呈しており、表面には条線が数本認められる。遺存状態は良好でなく、材質も軟質である。

（200）は長さ15cm、外径16cm、内径６cmを計り、全体の形状は不明である。全面炭化している。

穿刻棒状木製品（208）は完存している。断面正方形のしっかりした部位と、握部かと思われる断面不定形の部位とがゆるやかに区別してつくり出されている。同様に刻みを施した棒の類例としては、大阪府瓜生堂遺跡例[(2)]、時代は異なるが群馬県三ッ寺遺跡例[(3)]等が挙げられる。

（210）は戈状木製品である。他遺跡例[(4)]と異なり、切先が鈍くて刃幹に紐孔も認められないが、全体形が近い形状のものとして設定した。断面形も厚みのある扇形を呈しており、織機具（緯越具）とも考えられる。あるいは、石剣の模造木製品の可能性も考えられる。

（209）は錐状木製品である。残存する一端が、非常に磨滅しており、火錐具の可能性も考えられるが先端は炭化しておらず断定し難い。

（215）・（216）は連輪状組合せ部材とした。いずれも丁寧に穿孔されており、他の部材を装着した可能性が十分考えられる。

（215）は残存長14cm、最大幅4.5cmを計り、おそらく１孔を欠損するものと思われる。従って、中央に方孔、その両側に円孔２孔を配するものと考えられる。

（216）は残存長13＋9.5cm、最大幅５cmを計る。（215）とは異なり、穿孔部間がくびれる特徴がある。中央に円孔、その両側に方孔２孔を配する。

有孔板は７点出土している。穿孔してあることで後述する板状木製品より何らかの使用が明確であるため区別した。

(204)・(233) はナンバ（田下駄）と思われるものである。

(204) は0.6～1.1cmの円孔が３孔認められ、１孔は半損している。かなり薄手のつくりである。

(233) は残存長31cm、残存幅18cmを計り、長径3.5cmの方孔２孔（内１孔は半損）を有する。類例としては、大阪府恩智遺跡の前期の例[5]が挙げられる。

それ以外に、精巧品として (221)・(232)、破片として (220)・(234)・(243) がある。

(221)・(232) とも短冊状を呈し、(221) は２＋２孔（内１孔は半損）、(232) は長さ15.5cm、幅3.9cm、厚0.8cmを計り、１孔を有する。

破片 (220) は、槽 (114) と共伴しており、槽とは直接関係ないものの、他の容器の補修片であることは十分考えられる。同様の補修片は池上遺跡からも出土している。

(234) も小片で長さ９cm、幅８cm、厚0.5cmを計る。孔は楕円形を呈する。

(243) も破片で長さ25cm、幅８cm計り、長径２cmの不整形の孔１孔を有する。

(206)・(207) は木槌状木製品である。どちらも上下端が削りにより尖る特徴がある。

(206) は側部に削り残しの平坦面が認められる。

(207) は長さ8.5cm、径７cm×5.5cmを計る。全面とも完全に削り出し面を呈し、上端は特に丁寧に削り尖らせている。表面の割れからも判るように、芯持材を用いている。

(203) は弓弭状木製品である。材質は極めて軟質の感があり、弓とは異なる材質と考える。上端が丸味を帯びる以外は、何ら使用の痕跡が認められない。

(205) は柄頭状木製品である。全面丁寧に加工されている他は何の特徴も見出せない。極めて薄手のつくりである。

以上、何らかの名称を与えた木製品について報告したが、次に、他の木器の破片及び再利用品とも考えられるものについて述べる。記述の順は、木器の報告順にあてはめて列記して行く。

鍬については、５点あげることができる。

(219) は広鍬Ⅰ類ないしは又鍬の破片と考えられるものである。長さ・幅とも10cm残存しており、現状では欠損しているが、元の状況から計測すると、径4.3cmの方孔が穿ってある。厚は2.7cmを計り、穿孔の角度はほぼ直角である。着柄孔を有する破片は２点 (217・266) 認められる。

(217) は残存長19.5cm、残存幅9.0cmを計り、全体形は不明である。扁平な板状を呈し、何ら隆起は認められない。径4.5cmの方孔が認められ、ほぼ直角に穿っている。これらの諸条件から、鍬というより何らかの組合せ部材とした方が適切かもしれない。

(266) は着柄孔周辺のみの残存である。長さ７cm、幅5.5cm、高1.5cmほど残存している。径約５cmの円孔を有し、角度も傾きを有する。しかしながら、残存部上端の面が、断面形において直であり、また木取りも横木取りで材質も極めて軟質であることから、鍬でない可能性も十分あり得る。

刃部片は２点を数える (209・251)。

(209) は長さ22.5cm、幅4.5cm程残存しており、厚0.7cmを計る。全体形はナタ状を呈しており、残存部上端には三角孔らしき凹みが認められる。

(251) は残存長22cm、残存幅８cm（頭部においては６cm）程残存しており、厚は0.5cmを計る。

頭部には三角孔が完存しており、その側部には浅い段が認められる。また、下端は削り込みにより凹形を呈している。

次に工具関係で言えば、砧（ツチ状）とも考えられるものが４点ある (250・254・264・265)。そ

の内、(250)・(264)・(265) については、槌部と握部の境が明瞭なものである。

(250) は極めて大型で残存長21＋10cm、最大径18×16cmを計る。非常に丁寧なつくりである。井戸 (井戸枠309) の裏込め土からの出土であり、井戸構築の際用いられた工具の可能性が考えられる。

(264) は槌部のみ残存しており、握部を含めた槌部下半を欠損する。残存長11cm、径７cmを計る。上端を短く尖らせ側部は軽く内彎する。従って砧とも考えられるが、杭 (破片) の可能性もある。

(265) も槌部のみの残存で、残存長15cm、径８cmを計る。上端には先細らせる加工痕が認められるが握部に続くものかどうかは不明である。芯持で一部樹皮が残存する。(264) 同様杭の可能性もある。なお、(264)・(265) については、槌部の径から、握部を別に仕上げたものと判断した。

槌部と握部の境が不明瞭な物として (254) がある。長さ62cm、槌部径9.5×6.5cm、握部径3.5×2.5cmを計る。槌部はカマボコ形の断面形を呈する。使用痕は認められない。扁平なつくりで、砧とは即断し難い。類似するものに棒状木製品 (296) がある。

(218) も工具関係と思われるものである。残存長10.5cm、残存幅7.5cm、厚2.5cmを計る。側辺は外反しており、残存部上下端にそれぞれくり込みが半存する。柱状片刃石斧柄 (85) に類する石斧の柄幹部と考えられる。材質も堅固である。

織機具については前述の通り、緯打具[(6)]と思われるものが３点認められる (244・247・248)。

(244) は、残存長38cm、残存幅７cm、厚1.5cmを計る。一端が残存しており先細りを呈している。端部の隆帯はあまり明確でなく、未製品であろう。

(248) は両端を欠き、残存長27cm、残存幅５cm、隆帯部厚0.8cmを計る。非常に薄手のつくりである。側縁部には幅１cmの隆帯が通る。

(247) は小破片であるが、薄い刃部と側縁に隆帯をもつことから緯打具片とした。残存する刃縁からすれば、再利用の可能性もある。

容器類としては４点が挙げられる。

(202) は不明容器 (132)・(135) に酷似するものである。しかしながら、残存部下端が非常に磨滅して丸味を帯びており、何らかの再利用が考えられる。

(214) は蓋である。半損しており、16×６cm残存する。直径約20cmの円板形の蓋が復原できる。厚１cmを計り、薄手のつくりである。表面一部炭化している。

(213) も同様のものと考えられる。

(292) は残存長６cm、残存幅2.5cm、厚1.3cmを計る。前述の２点同様、蓋と考えられる。

その他、刺突具に類するものとして (212)・(222) がある。

(212) については、紐又は帯状のものが叉状に巻かれていたと考えられる細い一定幅の圧痕が表面に認められる。

(222) は長さ110cm、径７×４cmを計る大型のものである。断面三角形を呈する。先細りとなっている他に特徴は認められない。

以上、他器種の可能性のあるものについて述べてきた。それ以外の特徴あるものについて数点を述べた後、板状木製品、棒状木製品、木片の順で報告する。

(260) は角柱状木製品である。１面を欠いているが、残存長37cm、幅13.5cm、残存厚8.5cmを計る。一面に半円形の溝を削り込んでいる。下端は段を設けて一周り小さくなる。

(261)・(262) は隆起をもつ板片である。

（261）は残存長13cm、残存幅９cm、最大厚4.3cmを計る。中央にａ種の着柄突起に似た隆起を有する。

（262）も同様のもので、残存長21.5cm、残存幅11cm、厚5.1cmを計る。中央の隆起は（261）より不整である。表面一部炭化している。両点とも鬼虎川遺跡の鍬A類[(7)]に類似する。

〔板状木製品〕

今回報告するものは12点を数える。程度の差を除外すれば点数が増加することは避けがたく、後出する棒状木製品や木片も同じである。後述する用材との相違については、用材はあくまで材であり更なる加工が考えられるもの、板状木製品は状態悪く木片に近いものとして区別した。しかしながら観察不十分で両者を完全に隔別するのは困難である。（236～239）は、用材に近い板状木製品である。

（236）は、長さ15.6cm、幅16.6cm、厚3.0cmを計り、平面長方形の板状を呈する。

（237）も同様のものである。

（238）は上辺が丸味を持ち、下辺が傾きを持つ。

（239）は上・下端とも板切断時の両面からの加工痕が認められる。長さ10cm、幅11cm、厚２cmを計る。

（240）は板片で長さ５cm、幅3.8cm、厚0.4cmを計る。

（241）は上端が側面加工により鈍く尖る。下端は未調整で現状では歪を有する。

（242）・（245）・（246）は幅狭の板である。

（242）は長さ25.5cm、幅4.3cm、厚1.7cmを計り、表面が焼けて炭化している。

（245）は長さ82cm、幅5.5cm、厚2.5cmを計り、一部焼けて炭化し、尚かつ表面は一部樹皮が残る。

（246）は長さ32.5cm、幅３cm、厚0.9cmを計り、板状を呈する他は未調整である。

（253）は長さ20cm、幅10cm、厚0.5cmを計り、鍬（破片）（70）と酷似する。

（282）は上・下端に切断面を有する。

〔棒状木製品〕

13点について報告する。

（223）は鍬の柄と考えられるもので、木取りは柾目の縦木取りである。表面は平滑に仕上げられており、端部を丸く成形する。

（224）は長さ61cm、幅5.5cm、厚２cmを計り、全面が焼けて炭化している。

（225）は長さ38cm、径2.2×2.0cmを計り、使用によるものか傷状の痕跡が認められる。

（226）は長さ28cm、幅1.7cm、厚1.4cmを計り、断面は方形を呈する。

（227）は長さ15＋10cm、幅３cm、厚1.5cmを計る。

（228）は長さ13.5cm、幅2.8cm、厚1.4cmを計り、下端が焼けて炭化している。

（230）は長さ18.2cm、径2.2×1.3cmを計る。下端は両面に加工痕が認めれる。表面には一部樹皮が残存する。

（231）は長さ10cm、径３×５cmを計り、下端が杭のように加工されている。

（263）は長さ62cm、径６×3.5cmを計り、下部15cmほど、表面欠損して細くなる。

（267）は長さ26.3cm、幅４cm、厚3.6cmを計り、一面に樹皮が残存する。

（284）は両面が先細りに加工されており、上端は更に加工されて平坦面を有する。

（285）も（284）と同様のもので長さ17.6cm、径４cmを計る。下端を欠損するが、両端とも加工に

より先細りになる。

（296）は前述の（254）に類似するものである。上半は断面三角形を呈して幅広の加工痕が認められるが、下半は断面楕円形を呈して加工も細かく、表面が磨滅している。上部に見られる傷は調査時のものである。

〔木　片〕

木端の類と考えられるもので、43点について報告する。扁平なものや棒状のもの、その他の３種がある。

（229）は長さ20.7cm、幅5.6cm、厚1.7cmを計る。

（249）は不整な木槌状のものである。

（252）は長さ20cm、幅7.5cm、厚0.6cmを計り、非常に薄い板状を呈する。

（255）は長さ８cm、幅6.9cm、厚2.3cmを計る。

（256）は長さ9.5cm、幅10cm、厚２cmを計り、中央が丸く隆起する。

（257）は棒状で長さ５cm、径1.5×1.2cmを計る。残存する端部は丸く肥大しており、径2.5cmを計る。

（258）は長さ10cm、幅3.5cm、厚0.5cmを計る。

（259）は長さ7.5cm、幅４cm、厚0.4cmを計り、全体に反りを持つ。

（268）は長さ18.5cm、幅５cm、厚１cmで、何ら加工の認められない木片である。

（269）も同様で、長さ50cm、幅10cm、厚7.3cmと大型で、みかん割り材の廃材である。

（270）は長さ8.5cm、幅2.7cm、厚２cmを計る木くずである。

（271）も長さ24.5cm、幅７cm、厚３cmを計る木片である。

（272）は長さ8.2cm、幅2.8cm、厚1.6cmを計る。

（273）は長さ９cm、幅2.8cm、厚1.1cmを計る。

（274）は長さ24cm、幅７cm、厚6.9cmを計る木槌である。

（275）は長さ36.2cm、幅10.2cm、厚７cmを計り、断面楕円形を呈する。

（276）は長さ43.5cm、幅７cm、厚1.3cmを計る削りくずである。

（277）は枝切れで長さ19.5cm、径４×3.8cmを計り、全周樹皮が残存している。

（278）は長さ34.5cm、幅５cm、厚3.5cmを計る断面三角形の製材くずである。

（279）は長さ30cm、幅4.5cm、厚0.5cmの木くずである。

（280）は長さ62cm、幅６cm、厚２cmを計り、遺存状態が悪い。

（281）も長さ76cm、幅５cm、厚1.5cmを計る同様の木片である。

（283）は長さ6.5cm、幅5.1cm、厚4.1cmを計り、切断面が極めて平滑なことと、ラベルデータも不明であることから、現代のものかもしれない。一部樹皮が残存する。

（286）は長さ40.7cm、幅4.5cm、厚3.4cmを計り、断面台形を呈する。

（287）は長さ50cm、幅6.9cm、厚４cmを計る棒状の木片である。

（288）も同様で、長さ30.8cm、径3.6×3.4cmを計るものである。

（289～291）は棒状の木くずで、

（289）は23×1.8×1.2cm、

（290）は47×3.8×2.6cm、

(291) は33.5×2.7×1.3cmを計る。

(293) は長さ5.7cm、幅3.7cm、厚3.3cmを計る木槌である。

(294) は木の断片で、27.6×４×0.7cmと13.7×4.2×1.5cmの２本の棒状の木片に復原できる。

(297)・(298) 炭化木片である。両点共、全体の形状及び残存部形状が正しいかどうかは不明である。

(298) には側縁に平行する溝が認められる。

(299) は (289～291) に類するもので、長さ27cm、幅５cm、厚３cmを計る

(300) は全面に加工痕らしきものが認められる木片で8.5×2.2×1.7cmのものと5.2×2.0×1.4cmのもの２点がある。

(301) は長さ11.5cm、幅3.4cm、厚2.2cmを計る断面不整台形を呈する木片である。中央に浅い凹みが認められる。

(302) は平面形台形を呈し、長さ2.7cm、幅３cm、厚2.2cmを計る小木片である。

(303) は長さ４cm、幅4.5cm、厚1.5cmを計り、上半に両面加工によるくり込みが認められる。

(304) は７×３×0.5cmを計り、本来は円形を呈する板片かと思われる。

(305) は杭状に先が細くなる木片で長さ9.5cm、径２×1.5cmを計る。

(306) は長さ10cm、幅４cm、厚1.5cmを計る小木片で、層位的に見ると現代のものかもしれない。

(307) は２点あり、５×３×0.7cmを計るものと６×2.5×0.8cmを計るものの２点がある。共に樹皮が残存する木くずである。

(308) は炭化木片である。長さ5.5cm、幅2.6cm、厚1.4cmを計る。受火による歪、破砕が著しい。

以上、木片を含めた用途不明木製品について報告したが、前半の特徴ある木製品に関しては、今後の検出例の増加により、その性格が明らかになるものと思われる。また、木片（木端）に関しては、今後、調査方法がより精密なものになれば、石器におけるチップの分析同様細かい分析が可能であり、木器製作遺構の様相や加工技術の解明に貢献するであろう。

（露口）

註


（１）岡崎晋明「最近出土の琴」『花園史学』第８号　1987
　　水野正好「琴の誕生とその展開」『考古学雑誌』第16巻１号　1980
（２）『瓜生堂遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会　1981　・・・・類例を数例あげている
（３）『三ッ寺Ⅰ遺跡』(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988
（４）『恩智遺跡Ⅰ（本文編)』瓜生堂遺跡調査会　1980
（５）註４文献に同じ
（６）竹内昌子「織機・衣服」『弥生文化の研究５』　1985
　　『唐古・鍵遺跡　第13・14・15次発掘調査概報』田原本町教育委員会　1983
　　原口正三・田代克己「安満遺跡」『月刊文化財』第66号　1967
（７）『鬼虎川の木質遺物－第７次発掘調査報告書　第４冊－』(財) 東大阪市文化財協会　1987

## Ⅸ．その他

本遺跡出土の木製品のうち、その他の項において報告するものとして、杭と用材があげられる。

ａ）用材（図版11・14・64・65－320～340）

20点＋α出土している。用途不明木製品の中で述べた通り、木器製作の原材・整材段階にあるものとして考えられるものをまとめた。

高宮八丁遺跡における木器の生産を裏付け、生産の解明に寄与する資料であると言える。

平滑に整えられた板材、遺存状態の良悪にかかわらず不整なもの、断面扇形を呈するみかん割材に分けることができる。

（320）は長さ42cm、幅10cm、厚さ2.5cmを計る板材である。表面は平滑に仕上げられており、断面も扁平な長方形を呈する。

（321）も長さ33cm、幅６cm、厚2.5cmを計る板材である。断面扁平な方形を呈する。表面の一部が焼けて炭化する。

（322）は長さ30cm、幅5.5cm、厚1.5cmを計るみかん割材である。断面の扇形は15度程度を計る。

（323）は両短辺が不整な非常に薄い板材で、長さ23cm、幅７cm、厚0.5cmを計る。両平面は平滑である。遺存状態はあまりよくない。

（324）は棒状に近い板材で、長さ109cm、幅４cm、厚1.5cmを計る。表面は平滑に仕上げられている。

（325）は不整な板材である。長さ24.5cm、幅9.5cm、厚１cmを計る。表面は粗雑である。遺存状態は良好でない。

（326）はみかん割材である。長さ26cm、幅７cm、厚２cmを計る。表面は粗雑である。断面20度弱の扇形を呈する。

（327）は長さ44.5cm、幅12.5cm、厚1.7cmを計る板材である。遺存状態はあまり良好ではない。

（328）は不整なみかん割材で長さ21.5cm、幅4.6cm、厚1.7cmを計る。断面形は三角形に近く、20度程度のものである。

（329）は長さ15cm、幅３cm、厚１cmを計る不整な板材である。断面はやや扁平な方形を呈す。

（330）は板材である。表面は平滑に仕上げられている。

（331）は表面不整な板材で、長さ16cm、幅14cm、厚3.9cmを計る。両短辺端部は切断時の両面からの加工痕が認められる。

（332）は特徴ある板材で長さ21.5cm、幅21.0cm、厚3.1cmを計る。中央やや下寄りに長さ11cm、幅５cm、高1.1cmをはかる平面楕円形の隆起が認められる。さらに各周縁部には平面形方形を呈する段を設けており、最縁部より５～７mmほど隆起する。従って最縁部を含む三段構造を呈する板片である。裏面は平坦である。広鍬Ⅰ類あるいはⅣ・Ⅴ類の用材の可能性が考えられる。材質はカシである。

（333）は長大な板片で、長さ11.9cm、幅19cm、厚３cmを計る。表面は平滑に仕上げられており、断面カマボコ形を呈する。両短辺端部には切断時の加工痕が認められる。材質はカシである。

（334）は長さ66cm、幅20.5cm、厚３cmを計る板材である。断面は、両端をカットしたレンズ形を呈する。

（335）は、長さ73cm、幅21cm、厚10cmを計るみかん割材であるが、幅広の部分はみかん割材の断

面扇形（実質は三角形）の状況を残す。断面やや方形に整えられた部分は、幅18.5cmを計る。大きく屈曲する部分は枝幹の節抜けか、あるいは枝木を削ったものと思われる。みかん割の角度は約26度である。材質はカシを用いている。

（336）は平滑に仕上げられた板片で、長さ46cm、幅20cm、厚6.5cmを計る。表面（A面）には中央が鎬状に隆起し、2面を形成する。長側面は左右で厚が異なり、みかん割材の様相を残す（角度は約35度）。裏面が平坦な点を含めて考慮すると、みかん割材を板材あるいは鍬（用材）に加工してゆく1段階前のもの、と考えられる（挿図10参照）。ただし、木器生産の一段階として設定し得るかどうかに関しては、更なる分析と今後の資料増加を待ちたい。両短辺端部には切断時の加工痕が残る。

（337）は長大な板片で、長さ181cm、幅23cm、厚8cmを計る。（336）と同様の特徴をもつ。みかん割の角度は約28度である。材質はカシである。

（338）は長大なみかん割材で、長さ158cm、幅25cm、厚15cmを計る。断面は台形（扇形に近い）を呈し、約28度の角度を有する。表面は平滑に仕上げられている。カシ製。

（339）は幅の狭いみかん割材で、約30度の開きをもつ。遺存状態は悪い。幅の狭い点と表面が不整な点から、みかん割りの際、良好な原材を獲得するための調整として割り取ったものと考える。片端には原木伐採段階のものと思われる加工痕が認められる。

（340）もみかん割材である。長さ9.5cm、幅8.5cm、厚4cmを計る。断面形における扇形の開きは約28度である。

以上、用材20点について報告したが、長大な板材やみかん割材に関しては、材質もカシである点を含めて、鍬類の製作に用いるものと考えられる。これら用材と木端、未製品と製品を細かく検討してゆくことによって、木器の生産と原木伐採から製品完成に至る過程の特質が、より明らかになるものと考える。

（露口）

文註）本文中に示したみかん割の角度に関しては、極めて大まかなものであり、製材の正確な分割角度を示すものではない。廃材の出土等を考えるだけでも、原木の分割は一様ではないからである。

関野克「構造用部材」『登呂』日本考古学協会　1949
後藤守一編『登呂　本編』日本考古学協会　1954
町田章「木工技術の展開」『古代史発掘　4』　1975
同　「木器の生産」『弥生文化の研究　5』　1985

b）杭（図版11・63－310～319）

本数にして14本＋α出土している。遺構に伴うものや、しがらみの中に混じって出土するものなど、出土状況はさまざまである。

（310）は長さ71cm、径４cmを計る。先端は細長く削り出されており、加工は丁寧である。木取りは芯持材である。

（311）は長さ80cm、径４cmを計る。先端は大きな面取りの加工によって短く鋭く尖らせる。加工痕は稜が明確で平滑に削られている。未加工面には樹皮が残存し、木取りは芯持材を用いている。

（312）は折損しており、残存長23.3cm、径8.1×6.5cmを計る。先端は短く鈍い。加工痕は細かく２段階でもって尖らせる。やや鋭利さに欠ける工具によるものと思われる。未加工面には一部樹皮が残存する。木取りは芯持材を用い、現状では裂け目を生じている。

（313）は先端部のみの残存である。残存長11.4cm、径5.4cmを計る。先端はやや長く端部は鈍い。加工痕は稜が不整で不規則である。木取りは芯持材で、乾燥による裂け目を生じている。

（314）は出土位置等不明であるが（313）と同様のものである。残存長21.2cm、幅５cmを計る。先端の状況も同様であるが、加工痕は（313）より稜が比較的規則性があり、面も平滑である。芯持材を用いる。乾燥による裂け目を生じる。

（315）は３点を数える一括資料である。全て同様の加工を示すものである。長さ50cm、21cm、39cmを計り、径は４cm、3.5cm、４cmを計る。先端は長く鋭い。加工痕は平滑な面をもち稜も明確なもので、（310）のものに類似する。木取りは全て芯持である。

（316）は２点で長さ66cm、径４cmを計るものと、それよりやや太い長さ33cmのものとがある。先端は曲がっており、加工痕は若干認められる。もう一点は先端が欠損している。全面樹皮の残存する芯持材を用いている。

（317）は先端部のみの残存で、残存長25cm、径３cmを計る。先端は長く鋭い。加工痕は極めて鋭利な工具によるものである。一部樹皮が残存する。芯持材を用いている。

（318）は２点を数え、共に先端のみの残存である。先端はどちらも長く鋭い。加工痕も同一工具と思われ、平滑で稜の明確なものである。芯持材である。

（319）は先端が残存していないが、杭として出土したものである。長さ61cm、径3.5cmを計る。先端は欠損するが、加工面が残存端部に認められる。加工痕は鋭利な工具によるものと思われる。表面には樹皮が残存し、芯持材を用いている。

以上、杭と判別できるものに関して報告したが、遺存状況や検出過程において棒状木製品になったものもあると思われる。

尚、遺構において検出された柵列の杭については遺存状態の不良・検出後の損傷などにより、現在では観察に耐えるものがないため言及し得なかった。

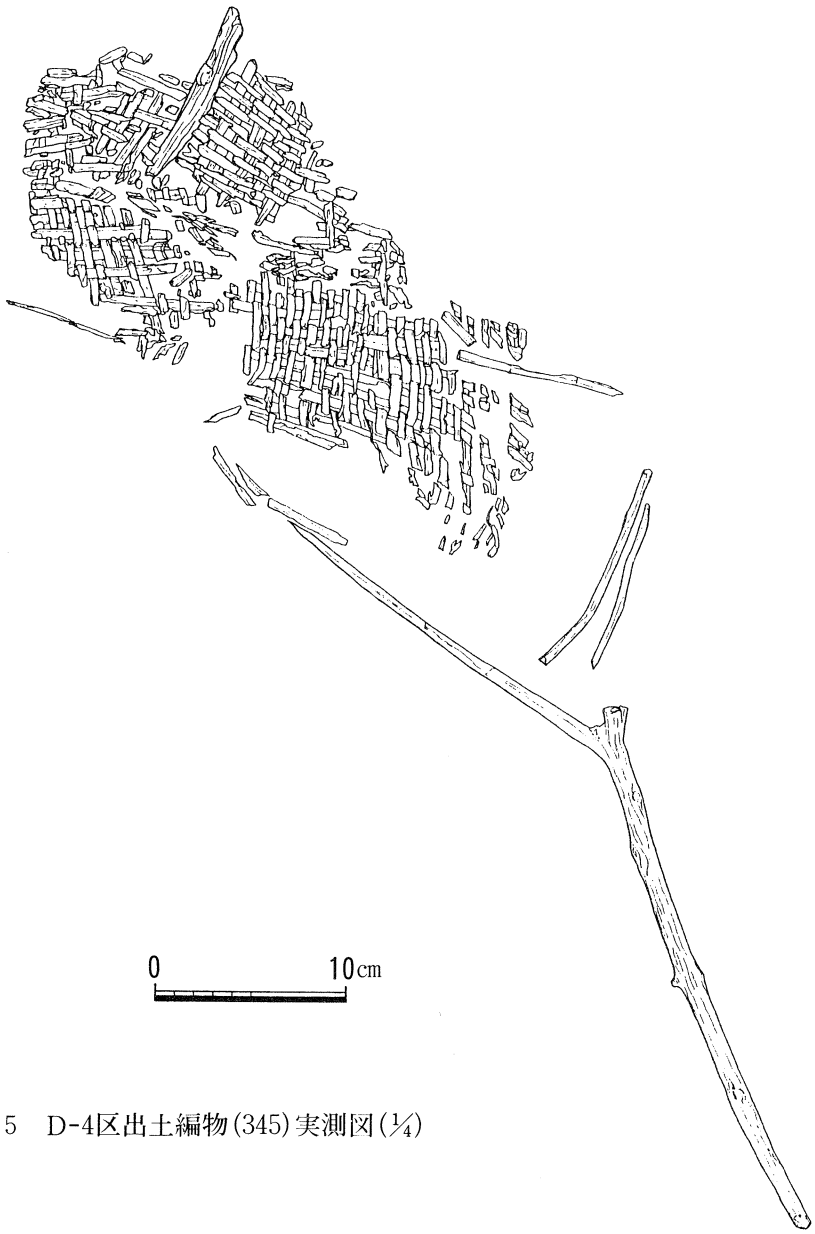
現在進めている遺構の検討が完了すれば、杭の占める位置というものがより明確になるものと考えられる。

（露口）

## 第２節　植物・自然遺物（挿図５・６、図版13・34・35・61・62－341～346）

本遺跡出土の植物・自然遺物としては、編物・つる（挿図６・図版34）・炭化米・猿の腰掛・ヒョウタン等の他多くの種子類が出土している。

編物については、カゴ・ザル等の用途が想定されるものの、その出土の多くは部分あるいは断片的な資料であるためその全容については不明であるが、一部判明しているものも出土している。




挿図５　D-4区出土編物(345)実測図(¼)

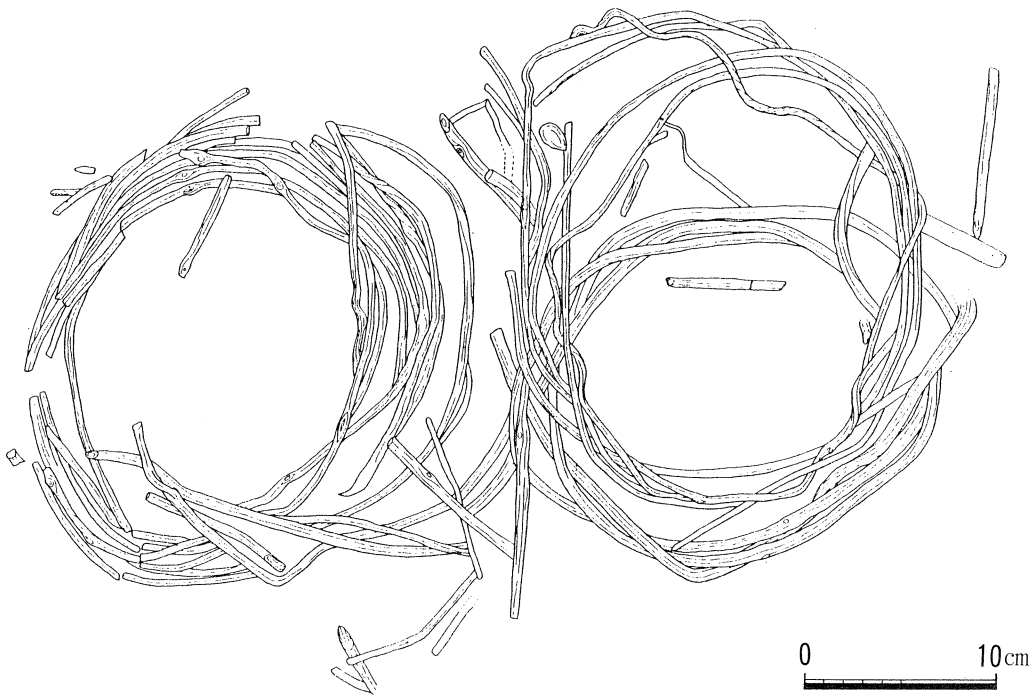
D－3区で直径約90cm、深さ約50cmを測る円形の貯蔵穴の遺構を検出した。貯蔵穴内からは、コンテナパット10箱分の多量のドングリが出土した。その貯蔵穴の底に敷く様にして編物が検出された。

編物は、長径約72cm、短径約62cm、深さ約23cm程が残っており、貯蔵穴の側壁上部はほとんど残っていなかったため、全体規模については不明である。

編み方は、幅5㎜前後の条を用い、この条を5～7条重ねたものを1本1単位とし、1本超え、1本潜りのザル目編みの箇所と、2本超え、2本潜り、1本送りの箇所がみられ、敷物状のものを2枚合わせて貯蔵穴の底部に敷いたような様相を呈している。

他の1点は、D－4区で出土した編物である（巻頭カラー写真図版・図版13・35）。編み方は幅5㎜前後の条を用い、この条を2条重ねたものを1本と1条のものを1本を1単位とし、1本超え、1本潜りのザル目編みである。外枠の一部も残存しており、中央部付近には「力竹」様のものの残存も認められる。この「力竹」様の両端は、出土状況から外枠に結ばれていたと考えられる。

（塩山）




挿図6　D-4区出土つる(346)実測図(¼)

## 第3節　出土木製品観察表及び一覧表

### Ⅰ．農具

○広鍬（Ⅰ～Ⅴ類）

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm)〔注〕(　)は残存 | | | | | | | | | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全長 | 頭部幅 | 頭部長 | 頭部厚 | 刃部長 | 刃縁幅 | 刃縁厚 | 柄孔径 | 着柄角度 | | | |
| 1·36<br>1 | E－7<br>——<br>灰黒色粘質土層 | 34.0 | (14.1) | 13.8 | 3.5 | 20.2 | (15.1) | 1.0 | 3.9<br>×<br>3.6 | (A) 62°<br>(B)112° | B | カシ | Ⅰ類<br>着柄孔は方孔 |
| 1·36<br>1 | F－8<br>溝240<br>灰黒色粘質土層<br>（木片多し） | 27.9 | (7.3) | 11.5 | 1.7 | 16.4 | —— | 0.4 | (2.3)<br>×<br>(1.3) | (A) 52°<br>(B)107° | A | —— | Ⅰ類<br>着柄孔は孔 |
| 1·36<br>3 | D－4<br>——<br>白灰色砂層 | 26.9 | (9.3) | 9.9 | 2.2 | 17.0 | (6.5) | 0.5 | (3.7)<br>×<br>(2.5) | (A) 60°<br>(B)111° | A | カシ | Ⅰ類<br>着柄孔は方孔 |
| 1·36<br>6 | C－5<br>——<br>暗黄灰色砂質土層<br>（粘土まじり） | 26.0 | 17.0 | —— | 4.0 | —— | 19.2 | 1.0 | —— | —— | A | —— | Ⅰ類の未製品<br>か |
| 2·36<br>8 | E－3<br>溝238<br>明黒灰色粘質土層 | (17.7) | 21.1 | 12.1 | 3.7 | —— | —— | —— | 4.7<br>×<br>3.2 | (A) 98°<br>(B)108° | A | カシ | Ⅱa類<br>柄孔は円孔 |
| 1．37<br>12 | C－3<br>——<br>灰黒色砂質土層 | 40.5 | 23.8 | —— | 4.5 | —— | (25.1) | 1.0 | —— | —— | A | カシ | Ⅱa類の未製品 |
| 12·37<br>15 | E-7·E-8<br>F-8·E-8<br>間観察用断面<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>（木片多し） | 39.1 | (10.0) | —— | 4.1 | —— | (14.3) | 1.3 | —— | —— | A | カシ | Ⅱa-b類の<br>未製品 |
| 2·37<br>16 | E－6<br>暗黄灰色砂質土層<br>（粘土まじり） | 33.6 | (17.0) | 8.9 | 3.6 | 24.7 | (22.0) | 0.5 | —— | —— | A | カシ | Ⅱb－a類の<br>未製品 |
| 12<br>17 | E－5<br>落ち込み205<br>黒灰色粘質土層 | 29.6 | (9.7) | 10.1 | 1.3 | 19.5 | (9.9) | 0.9 | —— | —— | B | —— | Ⅱb類の未製品 |
| 3·38<br>22 | F－8<br>——<br>灰黒色粘質土層 | 34.4 | (8.4) | —— | 3.7 | —— | (9.5) | 0.9 | —— | —— | B | —— | Ⅲa類の未製品<br>か |
| 2·38<br>27 | P－7<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>（砂まじり） | 24.9 | 14.6 | —— | 2.5 | —— | (13.2) | 1.3 | —— | —— | A | カシ | Ⅳb類の未製品 |
| 2·38<br>28 | D－9<br>——<br>白灰色砂層<br>（粘土まじり） | 18.6 | 15.8 | —— | 2.5 | —— | 16.0 | 0.7 | —— | —— | A | カシ | Ⅴ類の未製品 |

○狭鏃（Ⅰ・Ⅱ類）

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm)〔注〕(　)は残存 | | | | | | | | | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全長 | 頭部幅 | 頭部長 | 頭部厚 | 刃部長 | 刃縁幅 | 刃縁厚 | 柄孔径 | 着柄角度 | | | |
| 3・38<br>29 | E－5<br>溝238<br>黒灰色粘質土層 | (16.9) | (7.8) | 7.4 | 2.5 | 9.5 | 6.6 | 0.6 | 4.2<br>×<br>3.0 | (A) 73°<br>(B)115° | B | | Ⅱ類<br>柄孔は円孔 |
| 3・38<br>30 | D－6<br>——<br>黒色粘質土層 | (21.8) | (11.8) | 11.2 | 2.4 | (10.6) | —— | —— | 4.5<br>×<br>4.4 | (A) 80°<br>(B)103° | B | カシ | Ⅱ類<br>柄孔は円孔 |
| 3・38<br>31 | D－7<br>——<br>暗黄灰色砂質土層<br>(粘土まじり) | (26.0) | (8.3) | (11.0) | 2.0 | (15.0) | (3.5) | 0.5 | 4.3<br>×<br>3.5 | (A) 62°<br>(B)111° | A | | Ⅱ類<br>柄孔は方孔 |
| 3・38<br>32 | D－7<br>落ち込み216<br>灰黒色粘質土層 | (28.7) | (5.9) | (12.0) | (1.5) | (16.7) | (0.8) | 0.4 | 3.7<br>× | (A) 74°<br>(B)120° | B | | Ⅱ類<br>柄孔は方孔 |
| 4・39<br>33 | C－3<br>落ち込み214<br>—— | 27.7 | (10.1) | —— | 2.0 | —— | —— | —— | —— | —— | —— | —— | 未製品 |
| 3・39<br>35 | D－4<br>——<br>黒灰色粘質土層<br>(砂利まじり) | 33.0 | 15.3 | 14.2 | 3.7 | 18.8 | 11.2 | 0.4 | 4.3<br>×<br>3.3 | (A) 70°<br>(B)114° | A | カシ | Ⅰb類<br>柄孔は方孔 |

○又鏃

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm)〔注〕(　)は残存 | | | | | | | | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全長 | 頭部幅 | 頭部長 | 頭部厚 | 歯部長 | 歯部径 | 柄孔径 | 着柄角度 | | | |
| 4・39<br>37 | E－8<br>溝240<br>黒色粘質土層 | 20.9 | (13.1) | 6.8 | 2.1 | 11.8 | 1.6<br>×<br>1.4 | 3.0<br>×<br>3.3 | (A) 60°<br>(B) 98° | A | カシ | 四又鏃<br>柄孔は円孔 |
| 4・39<br>39 | E－6<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(砂まじり) | (11.2) | (11.6) | (7.0) | (2.0) | —— | —— | 3.7<br>×<br>3.6 | (A)——<br>(B)104° | A | —— | 頭部のみ残存<br>柄孔は円孔 |

○横鏃

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm)〔注〕(　)は残存 | | | | | | | | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全長 | 頭部幅 | 頭部長 | 頭部厚 | 刃部長 | 刃縁幅 | 刃縁厚 | 柄孔径 | 着柄角度 | | | |
| 4・39<br>40 | E－7<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 22.3 | 29.8 | —— | 5.0 | —— | 22.3 | 1.0 | —— | —— | A | ホオノキ | 未製品 |
| 4・39<br>41 | E－3<br>西側観察用断面<br>——<br>青黒色砂質土層 | 24.2 | 29.9 | —— | 5.3 | —— | —— | 0.7 | —— | —— | A | —— | 丸鏃の未製品 |

○鍬(破片)

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量 (cm)〔注〕下線は完存( )は残存 | | | | | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長 | 幅 | 厚 | 柄孔径 | 着柄角度 | | | |
| 2・40<br>43 | E－7<br>西側観察用断面<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 20.5<br>柄:<br>21.9 | 7.0 | 4.3 | 孔4.4<br>——<br>×<br>3.1<br>——<br>柄3.5<br>——<br>×<br>1.9<br>—— | (A) 70°<br>(B)105° | A | 身:カシ<br>柄:カシ | 着柄突起部と柄<br>柄孔は円形 |
| 4・40<br>45 | D－5<br>落ち込み214<br>黒色粘質土層 | 11.4 | 5.0 | 1.3 | ——<br>×<br>3.4<br>—— | (A) 64°<br>(B)112° | B | —— | 着柄突起部と柄<br>柄孔は円形 |
| 5・40<br>47 | E－7<br>溝239<br>青黒色砂質土層 | 23.0 | 7.2 | 3.7 | 5.0<br>——<br>×<br>3.7<br>—— | (A) 72°<br>(B)118° | A | —— | a種<br>柄孔は円形 |
| 5・40<br>49 | D－6<br>——<br>暗黄灰色砂質土層<br>(粘土まじり) | 15.4 | 4.0 | 2.0 | 5.0<br>——<br>×<br>2.7 | (A) 75°<br>(B)—— | A | —— | a種<br>柄孔は円形 |
| 5・40<br>53 | D－5<br>落ち込み214<br>黒色粘質土層 | 9.3 | 5.1 | 4.1 | ——<br>×<br>3.6 | (A) 75°<br>(B)—— | B | —— | a種<br>柄孔は円形 |
| 5・61<br>56 | D－7<br>——<br>暗黄灰色砂質土層<br>(粘土まじり) | 11.1 | 5.5 | 3.2 | ——<br>×<br>4.0 | (A)——<br>(B)113° | A | —— | a種<br>柄孔は円形 |
| 5・41<br>58 | E－7<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 14.8 | 4.7 | 3.3 | 4.5<br>×<br>3.0 | (A) 66°<br>(B)108° | A | —— | 突起前面の破損面に加工痕が認められる。再利用の可能性 |
| 5・41<br>61 | E－7<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 10.5 | 4.4 | 3.3 | —— | (A) 59°<br>(B)—— | A | —— | |
| 12・41<br>66 | E－5<br>溝238<br>黒灰色粘質土層 | 20.6 | 3.4 | 3.6 | —— | (A) 58°<br>(B)—— | B | —— | II b類(?) |
| 3・<br>70 | D－5<br>排水溝<br>——<br>—— | 23.8 | 6.7 | 0.8 | —— | —— | —— | 不明 | 一辺1.8cmの三角孔有 |
| 5・42<br>74 | F－8<br>溝239<br>青黒色砂質土層 | 12.9 | 4.8 | 0.8 | —— | —— | —— | —— | |
| 5・42<br>75 | E－6<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(砂まじり) | 9.4 | 6.3 | —— | —— | —— | A | | |

○一木鋤

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm)　〔注〕(　)は残存 | | | | | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全長 | 柄部長 | 柄径 | 身部長 | 身部幅 | | | |
| 5·42<br>80 | E－8<br>——<br>灰黒色粘質土層 | 67.6 | 38.5 | 3.7<br>×<br>3.2 | 29.1 | 16.3 | A | カシ | |

○堅杵

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm)　〔注〕(　)は残存 | | | | | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全長 | 追部長 | 追部径 | 握部径 | 握部長 | | | |
| 5·43<br>82 | E－6<br>——<br>白灰色砂質土層 | 66.6 | 52.3 | 6.2<br>×<br>6.4 | 2.9<br>×<br>2.6 | 10.9 | A | ヤブツバキ | |

## Ⅱ．工具

石斧柄

○太型蛤刃石斧柄

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm) 〔注〕(　)は残存 | | | | | | | | | | | 時期 | 樹種 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全長 | 台部長 | 台部幅 | 台部厚 | 握部長 | 握部径 | 握部断面形 | 着装孔径(A) | 着装孔径(B) | 着装断面形 | 着柄角度 | | |
| 6·43<br>83 | D－7<br>落ち込み216<br>灰黒色砂層 | 61.6 | 13.0 | 8.9 | 6.3 | 48.6 | 3.5 | 楕円形 | —— | —— | —— | —— | A | カシ |
| 6·43<br>84 | D－4<br>溝105<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 68.4 | 17.7 | 4.8 | 3.2 | 50.7 | 2.8 | 楕円形 | 6.3<br>×<br>—— | 5.3<br>×<br>1.9 | 縦に扁平な<br>楕円形 | ? | A | サカキ |

○柱状片刃石斧柄

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm) 〔注〕(　)は残存 | | | | | | | | | | 時期 | 樹種 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全長 | 台部長 | 台部幅 | 台部厚 | 握部長 | 握部径 | 握部断面形 | 着装溝長 | 着装溝幅 | 着装溝深 | 着柄角度 | | |
| 6·43<br>85 | E－7<br>——<br>灰黒色粘土層 | 50.6 | 16.5 | 5.1 | (5.5) | 39.7 | 3.2<br>×<br>2.9 | 楕円形 | (9.0) | 3.9 | (3.5) | 65° | B | カナメモチ |

○石斧柄(破片)

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm) 〔注〕(　)は残存 | | | | | | | 時期 | 樹種 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全長 | 台部長 | 台部幅 | 台部厚 | 握部長 | 握部径 | 握部断面形 | | |
| 6·44<br>92 | F－8<br>——<br>黒色粘質土層 | (27.0) | —— | —— | —— | —— | 4.3<br>×<br>3.3 | 楕円形 | B | —— |
| 6·44<br>93 | C－4<br>——<br>灰黒色粘質土層 | (12.5) | —— | —— | —— | —— | 3.5<br>×<br>2.4 | 楕円形 | B | —— |
| 6·44<br>94 | D－7<br>落ち込み216<br>黒色粘質土層 | (15.4) | (5.6) | (4.6) | (2.8) | (12.0) | 3.1 | 円形 | B | —— |

○鍑

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm) 〔注〕(　)は残存 | | | | | | 時期 | 樹種 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全長 | 幅 | 厚 | 把手部長 | 把手部幅 | 把手部高 | | |
| 10·44<br>98 | D－7<br>——<br>灰黒色粘土層<br>(砂まじり) | 24.2 | 12.7 | 3.7 | 21.5 | 5.1 | 3.7 | A | アオハダ |

## Ⅲ．織 機 具

○布巻具または経巻具

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺 構 名<br>層 位 名 | 法 量(cm)〔注〕( )は残存 | | | 時期 | 樹種 | 備 考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長 | 幅 | 厚 | | | |
| 7·44<br>100 | E－7<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 34.9 | 2.4 | 1.2 | A | ヒノキ | 棒状を呈する |
| 7·44<br>101 | E－3<br>溝238<br>明黒灰色粘質土層 | (27.5) | 2.9 | 2.3 | A | —— | 棒状を呈する |
| 7·44<br>102 | D－6<br>落ち込み216<br>黒色粘質土層 | 24.4 | 5.2 | 1.0 | B | ヒノキ | 板状を呈する |
| 7·44<br>103 | C－4<br>——<br>灰黒色砂質土層 | (23.0) | 6.0 | 2.2 | A | サカキ | 104と同一個体か? |
| 7·44<br>104 | C－3<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(砂まじり) | (32.3) | 6.2 | 1.6 | A | サカキ | 103と同一個体か? |

○方形容器(槽)

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺 構 名<br>層 位 名 | 法 量(cm) 〔注〕( )は残存(A)は長辺，(B)は短辺を示す | | | | | | | | | | 時 期 | 樹 種 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全 長 | 内 長 | 口縁部厚(A) | 口縁部厚(B) | 全 幅 | 内 幅 | 底部長 | 底部幅 | 器 高 | 深さ(A) | 深さ(B) | |
| 7·45<br>111 | E－4<br>溝238<br>明黒灰色粘質土層 | (34.3) | (28.5) | 3.0 | 1.1 | (10.3) | (7.1) | —— | —— | 7.5 | 1.8 | 5.4 | A | —— |
| 7·45<br>113 | E－7<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(砂まじり) | (34.1) | (26.3) | 1.1 | 3.4 | (13.5) | (9.3) | 26.5 | 3.5 | 6.3 | 5.3 | 2.3 | A | —— |

○方形容器(盤状木器)

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺 構 名<br>層 位 名 | 法 量(cm) 〔注〕( )は残存(A)は長辺，(B)は短辺を示す | | | | | | | | 時 期 | 樹 種 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全 長 | 内 長 | 口縁部厚(A) | 口縁部厚(B) | 全 幅 | 内 幅 | 器 高 | 深 さ | | |
| 7·46<br>116 | E－6<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(砂まじり) | 27.4 | 24.0 | 2.1 | 3.2 | (10.3) | (9.0) | 3.0 | 1.3 | A | —— |
| 13·46<br>117 | E－9<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(砂まじり) | 25.9 | 15.8 | (4.0) | 2.5 | (8.7) | (6.0) | 2.2 | 1.0 | A | —— |

## Ⅳ．容器類

○椀

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺 構 名<br>層 位 名 | 法 量(cm) 〔注〕( )は残存 | | | | 時 期 | 樹 種 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 器 高 | 口 径 | 深 さ | 底部厚 | | |
| 8·45<br>105 | D－7西側<br>観察用断面<br>——<br>暗黄灰色砂層 | 3.4 | 8.8<br>(復原) | 2.9 | 0.6 | A | ヤマグワ |
| 8·45<br>106 | D－4<br>——<br>暗黄灰色砂層<br>(木片多し) | (7.2) | 12.4<br>(復原) | 5.6 | 1.6 | A | 不明<br>(広葉樹) |

○高杯

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm)　〔注〕(　)は残存 | | | | 時期 | 樹種 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 器高 | 口径 | 脚柱径 | 脚裾径 | | |
| 8·46<br>118 | D－4<br>溝105<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | (8.1) | —— | 3.4 | 13.6 | A | ケヤキ |
| 8·46<br>119 | F－7<br>溝239<br>青黒色砂質土層 | (6.1) | —— | 5.4 | —— | A | サクラ |

○竪杓子

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm)　〔注〕(　)は残存 | | | | 時期 | 樹種 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 器高 | 口径 | 深さ | 底部厚 | | |
| 8·46<br>120 | E－5<br>溝238<br>黒灰色粘質土層 | (7.4) | 10.8 | (6.0) | 1.4 | B | クスノキ |

○匙

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm)　〔注〕(　)は残存 | | | | | | | 時期 | 樹種 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全長 | 柄部長 | 柄部幅 | 柄部厚 | 身部径 | 身部高 | 身部厚 | | |
| 8·46<br>121 | E－7<br>——<br>青黒色砂質土層 | 23.6 | 12.5 | 3.6 | 1.2 | 11.1<br>×<br>6.3 | 3.0 | 1.1 | B | シャシャンボ |
| 8·46<br>123 | D－5<br>落ち込み214<br>黒色粘質土層 | (16.9) | (7.9) | 2.4 | 1.0 | 9.0<br>×<br>(4.0) | 1.7 | 0.7 | B | —— |
| 8·46<br>124 | E－7·D－7間<br>観察用断面<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | (12.7) | (8.4) | 2.7 | 1.1 | (4.0)<br>×<br>(3.1) | 1.3 | 0.6 | A | —— |

○杓子状木製品

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm)　〔注〕(　)は残存 | | | | | | | 時期 | 樹種 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全長 | 柄部長 | 柄部幅 | 柄部厚 | 身部径 | 身部高 | 身部厚 | | |
| 8·47<br>126 | E－7<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(砂まじり) | 22.9 | 17.4 | 3.4 | 0.7 | 4.9 | —— | 0.7 | A | ヤマグワ |
| 8·47<br>127 | D－7<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(砂まじり) | 16.9 | —— | 3.6 | 1.1 | 5.2 | —— | 1.2 | A | カシ |
| 8·47<br>128 | E－7<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | (17.6) | —— | 3.5 | 0.7 | 6.7 | —— | 0.8 | A | カシ |

○不明容器

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm) 〔注〕( )は残存 | | | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 器高 | 口径 | 器厚 | | | |
| 13·47<br>135 | C－4<br>——<br>灰黒色粘質土層 | (5.8) | (32.8) | 0.9 | B | —— | 杯あるいは高杯<br>表面黒く炭化<br>(光沢を帯びる) |

## V．武器·狩猟具

○弓　　〔注〕( )は残存

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm) | | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長 | 径 | | | |
| 8·48<br>137 | D－7<br>落ち込み216<br>灰黒色粘質土層 | 79.9 | 1.0 | B | イヌガヤ | 丸木弓(完形品)<br>弓弭部Ⅰ&Ⅳb |
| 8·48<br>138 | D－4<br>溝105<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | (28.2) | 2.4 | A | —— | 丸木弓<br>弓弭部Ⅱa |
| 8·49<br>142 | D－6<br>——<br>青黒色砂質土層 | (26.4) | 1.1 | A | —— | 丸木弓<br>弓弭部Ⅱb |
| 8·49<br>143 | D－7·E－7<br>間観察用断面<br>——<br>灰黒色粘質土層 | (38.2) | 2.5 | B | ヒノキ | 丸木弓<br>弓弭部Ⅱc |
| 8·49<br>146 | E－6<br>——<br>暗黄灰色砂質土層<br>(粘土まじり) | (7.2) | 2.0 | A | ヤマグワ | 飾り弓<br>弓弭部Ⅲ |
| 8·49<br>147 | E－7<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | (23.0) | 2.1 | A | —— | 丸木弓<br>弓弭部Ⅲ |
| 8·49<br>148 | D－5<br>溝108<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | (34.5) | 2.4 | A | —— | 丸木弓<br>弓弭部Ⅲ |
| 8·50<br>152 | E－7<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | (29.5) | 1.6 | A | イヌガヤ | 丸木弓<br>弓弭部Ⅳb |
| 13·50<br>159 | D－7<br>落ち込み216<br>黒色粘質土層 | (44.7) | 1.7 | B | —— | 弓身部<br>樹皮残存 |

○武器形木製品

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm) 〔注〕( )は残存 | | | | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全長 | 刃部 幅<br>厚 | 柄部 幅<br>厚 | 断面形 | | | |
| 9·52<br>169 | C－3·D－3<br>間観察用断面<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 52.7 | 4.6<br>×<br>2.5 | 3.0<br>×<br>2.5 | 楕円形 | A | —— | ナタ状を呈するが，<br>鳥形木製品の可能性<br>も十分ある |

## Ⅵ．魚撈具

○櫂

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm)<br>全長 | 櫂部長 | 櫂部幅 | 櫂部厚 | 櫂部内長 | 櫂部内幅 | 櫂部内深 | 握部 | 握部径 | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 〔注〕(　)は残存，櫂部は比較して精巧な側を(A)，未製ないし粗製な側を(B)とする | | | | | | | | | | | |
| 14·51<br>170 | E－7·E－8<br>間観察用断面<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 173.1 | (A)——<br>(B)—— | (A)6.9<br>(B)7.6 | (A)2.5<br>(B)1.9 | (A)21.0<br>(B)—— | (A)6.0<br>(B)—— | (A)1.2<br>(B)—— | —— | 4.0<br>×<br>2.9 | A | カシ | |
| 14·51<br>171 | D－6<br>落ち込み216<br>灰黒色粘土層 | 81.2 | (A)17.9<br>(B)26.5 | (A)7.8<br>(B)4.7 | (A)1.4<br>(B)1.8 | (A)——<br>(B)—— | (A)——<br>(B)—— | (A)——<br>(B)—— | 36.8 | 3.0<br>×<br>2.4 | B | シイノキ | |
| 14·51<br>172 | E－7<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 64.5 | —— | 7.4 | 4.3 | —— | —— | —— | —— | 5.0<br>×<br>2.5 | A | カシ | 櫂状 |
| 12·61<br>173 | E－7<br>溝238<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | | (22.9) | 10.3 | 0.9 | | | | | | A | | 櫂部3/5ほど残存 |

○タモ枠　　〔注〕(　)は残存

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm)<br>全長 | 径 | 時期 | 樹種 |
|---|---|---|---|---|---|
| 9·51<br>174 | C－5<br>落ち込み214<br>灰黒色粘質土層 | (35.7) | 1.1<br>×<br>1.2 | B | —— |

○刺突具　　〔注〕(　)は残存

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm)<br>全長 | 径 | 時期 | 樹種 |
|---|---|---|---|---|---|
| 9·51<br>176 | D－7<br>落ち込み216<br>—— | 7.8 | 0.9<br>×<br>0.6 | —— | —— |
| 9·51<br>177 | F－8<br>西側観察用断面<br>溝240<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 8.4 | 0.7 | A | モミ |
| 9·51<br>178 | D－4<br>——<br>黒色粘質土層 | 8.5 | 0.8<br>×<br>0.4 | B | —— |
| 9·51<br>179 | E－6<br>落ち込み218<br>灰黒色粘質土層<br>(砂まじり) | 10.2 | 0.8 | A | —— |
| 9·51<br>180 | D－5<br>——<br>黒色粘質土層<br>(下層) | 9.2 | 0.6 | A | —— |
| 9·51<br>181 | C－3<br>北側観察用断面<br>——<br>黒色粘質土層 | 8.1 | 1.0<br>×<br>0.8 | B | |
| 9·51<br>182 | E－6<br>——<br>暗黄灰色砂質土層<br>(粘土まじり) | 8.0 | 0.9 | A | |

○刺突具

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm)<br>全長 | 径 | 時期 | 樹種 |
|---|---|---|---|---|---|
| 9·52<br>183 | E－7<br>南側観察用断面<br>——<br>黒色粘質土層 | (17.2) | 1.2<br>×<br>0.9 | B | |
| 9·52<br>184 | D－4<br>——<br>黒色粘質土層 | 8.5 | 0.95<br>×<br>0.7 | B | |
| 9·52<br>185 | E－8<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 16.8 | 1.2 | A | |
| 9·52<br>186 | E－8<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 16.8 | 7.5<br>×<br>5.5 | A | |
| 9·52<br>187 | E－6<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(小石まじり) | 34.6 | 2.7 | | ヒノキ |
| 9·52<br>188 | E－6·E－7<br>間観察用断面<br>——<br>暗黄灰色砂質土層 | 11.8 | 0.8 | A | |
| 9·52<br>189 | E－4<br>溝238<br>灰黒色粘質土層 | (13.0) | 1.0<br>×<br>0.7 | B | |

○刺突具

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm) | | 時期 | 樹種 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 全長 | 径 | | |
| 9·52<br>190 | E－8<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 14.6 | 0.8<br>×<br>0.6 | A | |
| 9·52<br>191 | E－8<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 19.1 | 0.85<br>×<br>0.5 | A | |
| 9·52<br>192 | E－8<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 14.5 | 1.3<br>×<br>0.5 | A | |
| 9·52<br>193 | E－8<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 15.7 | 1.1<br>×<br>0.8 | A | |
| 9·52<br>194 | D－5<br>——<br>黒色粘質土層(下層) | 10.2 | 0.85<br>×<br>0.5 | A | |
| 9·52<br>195 | E－8<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 13.8 | 1.1<br>×<br>0.7 | A | |

**Ⅶ. 運搬具**

○橇

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm) | | | | | | 時期 | 樹種 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 全長 | 幅 | 厚 | 突起部長 | 突起部幅 | 突起部高 | | |
| 10·52<br>197 | C－3<br>落ち込み214<br>暗黄灰色砂質土層<br>(粘土まじり) | 52.9 | 15.5 | 4.1 | 26.3 | 6.5 | 3.8 | —— | クスノキ |

## Ⅷ. 用途不明木製品

○用途不明木製品

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm) | | | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長 | 幅 | 厚 | | | |
| 9·53<br>198 | F－9<br>——<br>青黄灰色砂質土層<br>(粒子の粗い小石まじり) | (11.7) | —— | —— | A | カシ | 琴<br>径3.9 |
| 9·53<br>199 | B－3·B－4<br>間観察用断面<br>——<br>灰黒色粘質土層 | 14.6 | | | B | | 外径2.5×2.7<br>孔径1.1×1.1 |
| 9·53<br>201 | D－6<br>——<br>灰黒色粘質土層 | 2.1 | 3.1 | 1.7 | B | | |
| 11·53<br>202 | E－6③<br>——<br>暗黄灰色砂質土層<br>(砂まじり) | (7.8) | (6.1) | (1.0) | | | |
| 9·53<br>203 | D－4<br>——<br>白灰色砂層 | (8.9) | 3.0 | 1.8 | | | 弓弭部の可能性あり |
| 10·53<br>204 | D－6<br>落ち込み216<br>黒色粘質土層 | (14.2) | (12.3) | 0.9 | B | ヒノキ | 孔2＋1(1欠?)ヵ所 |
| 11·53<br>205 | D－5<br>——<br>灰黒色粘質土層 | (9.4) | 4.7 | 1.4 | B | カシ | |
| 9·53<br>206 | C－3·C－4<br>間観察用断面<br>——<br>灰黒色粘質土層 | 9.2 | 6.6 | 4.2 | B | | |
| 9·54<br>208 | C－4<br>——<br>灰黒色粘質土層 | 34.2 | 5.0 | 4.2 | B | | |
| 11·54<br>210 | E－8<br>溝100<br>暗黄灰色砂質土層<br>(粘土まじり) | 22.7 | 2.7 | 2.0 | A | ヒノキ | 片端を尖らし，もう片端部には使用によるくびれが認められる |
| 11·54<br>211 | E－7<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 27.8 | | | A | | 一端には回転による磨滅痕あり |
| 11·54<br>212 | F－8<br>溝239<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | 44.9 | 2.0 | 2.0 | A | | 断面方形<br>紐による圧痕らしきものが認められる |
| 10·54<br>213 | F－9<br>——<br>暗黄灰色砂質土層 | 15.2 | 7.0 | 1.1 | A | | |
| 9·54<br>220 | D－6<br>——<br>暗黄灰色砂質土層<br>(粘土まじり) | 6.0 | 2.7 | 0.5 | A | クスノキ | 孔3ヵ所 |

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量(cm) | | | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長 | 幅 | 厚 | | | |
| 10·54<br>221 | F－9<br>落ち込み206<br>青灰色砂層 | (24.8) | 5.3 | 0.9 | A | | 孔2＋1ヵ所 |
| 11·55<br>223 | D－5<br>——<br>黒色粘質土層 | (26.3) | —— | —— | B | アカメガシワ | 径3.6 |
| 10·55<br>232 | D－6<br>落ち込み216<br>黒色粘質土層 | 15.5 | 3.9 | 0.8 | B | | 孔1ヵ所 |
| 10·55<br>235 | C－4<br>落ち込み214<br>灰黒色粘質土層<br>(砂まじり) | 28.2 | 5.5 | 1.6 | A | | 両端部使用による磨滅痕あり |
| 11·56<br>236 | E－5<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(砂まじり) | 15.5 | 16.6 | 3.0 | A | | 横鍬未製品の一部か |
| 11·56<br>237 | ZZ | 20.1 | 19.8 | 3.4 | | | |
| 11·56<br>238 | F－8<br>溝240<br>暗黄灰色砂質土層<br>(粘土まじり) | (20.7) | 21.7 | 2.1 | A | | |
| 9·56<br>241 | D－5<br>溝108<br>灰黒色粘質土層 | (29.2) | 5.9 | (2.4) | B | | |
| 11·57<br>247 | D－7·E－7<br>間観察用断面<br>——<br>暗黄灰色砂質土層<br>(粘土まじり) | 12.7 | 5.9 | 1.2 | A | カシ | 鋤破片の再利用か |
| 10·57<br>249 | D－4<br>溝105<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | (15.0) | 8.4 | 1.7 | A | | 植物根による孔多数認められる |
| 9·60<br>285 | E－7<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>(木片多し) | (17.6) | | | A | | 径4.0 |
| 12·61<br>295 | E－5<br>溝240<br>明黒灰色粘質土層 | 34.2 | 7.5 | 0.8 | A | | 琴形木製品 |
| 13·61<br>296 | D－6<br>落ち込み216<br>灰黒色粘質土層 | 34.3 | 3.4 | 2.1 | B | | 棒状<br>握部径2.5×1.6 |
| 13·61<br>297 | D－6<br>——<br>暗黄灰色砂質土層<br>(粘土まじり) | 14.6 | 4.2 | 1.7 | A | | 全面炭化 |
| 13·61<br>298 | D－6<br>——<br>暗黄灰色砂質土層 | 9.1 | 5.3 | 1.8 | A | | 全面炭化 |

## Ⅸ．その他

○杭

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量（cm） | | 時期 | 樹種 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 長 | 最大経 | | |
| 11·63<br>313 | D－4<br>——<br>灰黒色粘質土層 | 11.4 | 5.4 | B | |
| 11·63<br>314 | ＺＺ | 21.2 | 5.0 | | |

○用材

| 図版番号 | 出土地区名<br>遺構名<br>層位名 | 法量（cm） | | | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長 | 幅 | 厚 | | | |
| 11·64<br>330 | D－7<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>（砂まじり） | 27.0 | 15.6 | 2.1 | A | カシ | |
| 14·65<br>339 | E－8<br>——<br>灰黒色粘質土層<br>（木片多し） | 124.9 | 14.1 | 4.0 | A | | 柾目材（みかん割り材） |

表4　出土木製品一覧

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺　構　名 | 層　位　名 | 時期 | 樹　種 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 広鍬（Ⅰ） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | カシ | 実測図有 |
| 2 | 広鍬（Ⅰ） | F－8 | 溝240 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 3 | 広鍬（Ⅰ） | D－4 | —— | 白灰色砂層 | A | カシ | 実測図有 |
| 4 | 広鍬（Ⅰ） | E－6 | 落ち込み218 | 黒色砂質土層 | B | カシ | |
| 5 | 広鍬（Ⅰ） | D－7 | 落ち込み216 | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 6 | 広鍬（Ⅰ） | C－5 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | 実測図有・未製品 |
| 7 | 広鍬（Ⅰ） | C－5 | 溝109 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 未製品 |
| 8 | 広鍬（Ⅱａ） | E－3 | 溝238 | 明黒灰色粘質土層 | A | カシ | 実測図有 |
| 9 | 広鍬（Ⅱａ） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 10 | 広鍬（Ⅱａ） | E－7 | 溝238 | 青黒色砂質土層 | A | | |
| 11 | 広鍬（Ⅱａ） | E－8 | 溝240 | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | カシ | 未製品 |
| 12 | 広鍬（Ⅱａ） | C－3 | —— | 灰黒色砂質土層 | A | カシ | 実測図有・未製品 |
| 13 | 広鍬（Ⅱａ） | E－7 西側観察用断面 | 溝243 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | カシ | 未製品 |
| 14 | 広鍬（Ⅱａ） | F－8 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | | 未製品 |
| 15 | 広鍬（Ⅱｂ－ｂ） | E－7・E－8／F－8・E－8 間観察用断面 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | カシ | 実測図有 裏面に「ゲタ」有 |
| 16 | 広鍬（Ⅱｂ—ａ） | E－6 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | カシ | 実測図有・未製品 |
| 17 | 広鍬（Ⅱｂ） | E－5 | 落ち込み205 | 黒灰色粘質土層 | B | | 実測図有・未製品 |
| 18 | 広鍬（Ⅲａ・ｂ） | D－3 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | カシ | 未製品 |
| 19 | 広鍬（Ⅱｃ） | E－6 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | カシ（刃） アオハダ（柄） | |
| 20 | 広鍬（Ⅲａ） | C－5 | 落ち込み214 | 灰黒色粘質土層 | B | | Ⅱａ類の未製品か |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺　構　名 | 層　位　名 | 時期 | 樹　種 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 21 | 広鏃（Ⅲｃ） | F－8 | —— | 灰黒色砂質土層（砂まじり） | A | カシ | Ⅱｃ類，Ⅱｂ類の未製品か |
| 22 | 広鏃（Ⅲａ） | F－8 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | 実測図有<br>Ⅱａ類の未製品か |
| 23 | 広鏃（Ⅲｂ） | E－8 | 溝240 | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | |
| 24 | 広鏃（Ⅲｂ） | D－3 | —— | 黒色粘質土層 | B | | |
| 25 | 広鏃（Ⅲｂ） | C－4 | 落ち込み214 | 灰黒色粘質土層 | B | | Ⅱｂ類の破損品？<br>裏面に「ゲタ」有 |
| 26 | 広鏃（Ⅲｂ？） | D－3 | 土壙205 | 黒色粘質土層（下層） | A | | Ⅱ類の破損品と思われる |
| 27 | 広鏃（Ⅳｂ） | D－7 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | カシ | 実測図有・未製品 |
| 28 | 広鏃（Ⅴ） | D－9 | —— | 白灰色砂層（粘土まじり） | A | カシ | 実測図有・未製品 |
| 29 | 狭鏃（Ⅱ） | E－5 | 溝238 | 灰黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 30 | 狭鏃（Ⅱ） | D－6 | —— | 黒色粘質土層 | B | カシ | 実測図有 |
| 31 | 狭鏃（Ⅱ） | D－7 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | カシ | 実測図有 |
| 32 | 狭鏃（Ⅱ） | D－7 | 落ち込み216 | 灰黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 33 | 狭鏃（Ⅱ） | C－3 | 落ち込み214 | —— | —— | | 実測図有・未製品 |
| 34 | 狭鏃（Ⅰａ） | C－4 | 落ち込み214 | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | | 表面側に反りをもつ諸手鏃か？ |
| 35 | 狭鏃（Ⅰｂ） | D－4 | —— | 黒灰色粘質土層（砂利まじり） | A | カシ | 実測図有 |
| 36 | 鏃（破片） | C－4 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | Ⅱａ類の破片か |
| 37 | 又鏃 | E－8 | 溝240 | 黒色粘質土層（木片多し） | A | カシ | 実測図有 |
| 38 | 又鏃 | D－8 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | |
| 39 | 又鏃 | E－6 | —— | 灰黒色砂質土層（砂まじり） | A | | 実測図有 |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺構名 | 層位名 | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 40 | 横鏃 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | ホオノキ | 実測図有<br>未製品 |
| 41 | 横鏃 | E－3<br>西側観察用断面 | —— | 青黒色砂質土層 | A | | 実測図有<br>未製品（丸鏃） |
| 42 | 横鏃 | E－3 | 溝238 | 明黒灰色粘質土層 | A | カシ | 未製品 |
| 43 | 鏃（破片・着柄突起部と柄） | E－7<br>西側観察用断面 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | a種，広鏃Ⅱa類と思われる・実測図有 |
| 44 | 鏃（破片・着柄突起部と柄） | F－8 | 土壙211 | 灰黒色粘質土層 | B | カシ（突起部）<br>カシ（柄） | a種，広鏃Ⅱa類と思われる・実測図有 |
| 45 | 鏃（破片・着柄突起部と柄） | D－5 | 落ち込み214 | 黒色粘質土層 | B | | a類，広鏃Ⅱaと思われる・実測図有 |
| 46 | 鏃（破片・着柄突起部） | C－3 | 落ち込み214 | —— | B | | a類 |
| 47 | 鏃（破片・着柄突起部） | F－7 | 溝239 | 青黒色砂質土層 | A | | a類<br>実測図有 |
| 48 | 鏃（破片・着柄突起部） | D－6 | —— | 青黒色砂質土層 | A | | a種 |
| 49 | 鏃（破片・着柄突起部） | D－6 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | a種 |
| 50 | 鏃（破片・着柄突起部） | D－7 | —— | 白灰色砂層 | A | | a種 |
| 51 | 鏃（破片・着柄突起部） | D－8・E－8<br>間観察用断面 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | a種 |
| 52 | 鏃（破片・着柄突起部） | D－7 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | a種 |
| 53 | 鏃（破片・着柄突起部） | D－5 | 落ち込み214 | 黒色粘質土層 | B | | a種<br>実測図有 |
| 54 | 鏃（破片・着柄突起部） | D－4 | 溝105 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | a種 |
| 55 | 鏃（破片・着柄突起部） | E－7 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | b種 |
| 56 | 鏃（破片・着柄突起部） | D－7 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | a種 |

| 番号 | 名　　称 | 出土地区名 | 遺　構　名 | 層　位　名 | 時期 | 樹　　種 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 57 | 鏃（破片・着柄突起部） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | b種 |
| 58 | 鏃（破片・着柄突起部） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | b種<br>実測図有 |
| 59 | 鏃（破片・着柄突起部） | D－5 | 溝108 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | b種 |
| 60 | 鏃（破片・着柄突起部） | E－8 | 溝240 | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | b種 |
| 61 | 鏃（破片・着柄突起部） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | b種<br>実測図有 |
| 62 | 鏃（破片・着柄突起部） | F－8 | 溝105 | 灰黒色粘質土層 | B | | b種<br>実測図有 |
| 63 | 鏃（破片・着柄突起部） | E－3<br>西側観察用断面 | —— | 暗褐色砂質土層 | A | | b種 |
| 64 | 鏃（破片・着柄突起部） | E－6 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | b種 |
| 65 | 鏃（破片・着柄突起部） | D－4 | —— | 暗黄灰色砂質土層 | A | | b種 |
| 66 | 鏃（破片・着柄突起部） | E－5 | 溝238 | 黒灰色粘質土層 | B | | b種<br>実測図有 |
| 67 | 鏃（破片・着柄突起部） | D－4 | 溝105 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | b種 |
| 68 | 鏃（破片・着柄突起部） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 69 | 鏃（破片・着柄突起部） | D－4 | —— | 青灰色砂層 | A | | |
| 70 | 鏃（破片） | D－5排水溝 | —— | —— | | カシ | 実測図有 |
| 71 | 鏃（破片） | D－7 | 落ち込み216 | —— | B | | |
| 72 | 鏃（破片） | D－4 | 溝105 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 73 | 鏃（破片） | E－5 | 溝238 | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | | |
| 74 | 鏃（破片） | F－7 | 溝239 | 青黒色砂質土層 | A | | 実測図有 |
| 75 | 鏃（破片） | E－6 | —— | 灰黒色粘質土層 | A | | 実測図有 |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺　構　名 | 層　位　名 | 時期 | 樹　種 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 76 | 鍬（用材） | E－8 | 溝240 | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | |
| 77 | 鍬（用材） | —— | 溝240 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 78 | 鍬（用材） | E－6 | —— | 白灰色砂層 | A | | a種だと思われる着柄突起を有する |
| 79 | 鍬（用材） | E－3 | 溝260 | 青黒色砂質土層 | A | | a種の着柄突起を2個有する |
| 80 | 一木鋤 | E－8 | 溝240 | 灰黒色粘質土層 | A | カシ | 実測図有 |
| 81 | 組合せ鋤 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | クヌギ | |
| 82 | 堅杵 | E－6 | —— | 白灰色砂層 | A | | 実測図有 |
| 83 | 太型蛤刃石斧柄 | D－7 | 落ち込み216 | 灰黒色砂層 | A | | 実測図有・未製品 |
| 84 | 太型蛤刃石斧柄 | D－4 | 溝105 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 85 | 柱状片刃石斧柄 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 86 | 柱状片刃石斧柄 | D－5 | 溝108 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 未製品 |
| 87 | 扁平片刃石斧柄 | F－8 | 溝239 | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 88 | 柱状片刃石斧柄 | D－6 | —— | 黒色粘質土層 | B | | 未製品 |
| 89 | 柱状片刃石斧柄 | E－3 | 溝224 | 明黒灰色粘質土層 | A | | 台部一部のみ残存 |
| 90 | 扁平片刃石斧柄 | E－7 | 溝238 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | サカキ | 未製品 |
| 91 | 柱状片刃石斧柄 | D－7 | 落ち込み216 | 灰黒色粘質土層 | B | | 未製品 |
| 92 | 石斧柄（破片） | F－8 | —— | 黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 93 | 石斧柄（破片） | C－4 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 94 | 石斧柄（破片） | D－7 | 落ち込み216 | 黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 95 | 石斧柄（破片） | C－3 | 落ち込み214 | 灰黒色粘質土層 | B | クヌギ | 組合せ式で柱状片刃用と思われる |
| 96 | 砧 | C－4・D－4間観察用断面 | —— | 白灰色砂層 | A | ヤブツバキ | |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺構名 | 層位名 | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 97 | 砧 | E－3 | 溝238 | 明黒灰色粘質土層 | A | クスノキ | |
| 98 | 鍬 | D－7 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | アオハダ | 実測図有<br>未製品 |
| 99 | 鍬 | D－6 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | |
| 100 | 織機具（布巻具or経巻具） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | ヒノキ | 実測図有 |
| 101 | 織機具（布巻具or経巻具） | E－3 | 溝238 | 明黒灰色粘質土層 | A | | 実測図有 |
| 102 | 織機具 | D－6 | 落ち込み216 | 黒色粘質土層 | B | ヒノキ | 実測図有 |
| 103 | 織機具 | C－4 | —— | 灰黒色砂質土層 | A | サカキ？ | 実測図有<br>103と同一個体か？ |
| 104 | 織機具 | C－3 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | サカキ | 実測図有<br>102と同一個体か？ |
| 105 | 椀 | D－7<br>西側観察用断面 | —— | 暗黄灰色砂層 | A | ヤマグワ | 実測図有 |
| 106 | 椀 | D－4 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | 不明（広葉樹） | 実測図有 |
| 107 | 方形容器（槽） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | シイノキ | |
| 108 | 方形容器（槽） | D－7 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | シャシャンボ | |
| 109 | 方形容器（槽） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | シイノキ | |
| 110 | 方形容器（槽） | D－7 | 落ち込み216 | 灰黒色粘質土層 | B | クスノキ | |
| 111 | 方形容器（槽） | E－4 | 溝238 | 明黒灰色粘質土層 | A | | 実測図有 |
| 112 | 方形容器（槽） | E－4 | 溝238 | 明黒灰色粘質土層 | A | ケヤキ | |
| 113 | 方形容器（槽） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | | 実測図有 |
| 114 | 方形容器（槽） | D－6 | —— | 青黒色砂質土層 | A | ケヤキ | 用途不明木製品220と共伴・丸底を呈す |
| 115 | 方形容器（盤状木器） | E－5 | 溝238 | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | クスノキ | |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺　構　名 | 層　位　名 | 時期 | 樹　種 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 116 | 方形容器（盤状木器） | E－6 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | | 実測図有 |
| 117 | 方形容器（盤状木器） | E－9 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | | 実測図有 |
| 118 | 高杯（脚部） | D－4 | 溝105 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | ケヤキ | 実測図有<br>未製品 |
| 119 | 高杯(杯～脚柱部) | F－7 | 溝239 | 青黒色粘質土層 | A | サクラ | 実測図有 |
| 120 | 堅杓子 | E－5 | 溝238 | 黒灰色粘質土層 | B | クスノキ | 実測図有<br>全体の約1/3 |
| 121 | 匙 | E－7 | —— | 青黒色砂質土層 | A | シャシャンボ | 実測図有 |
| 122 | 匙 | E－3<br>西側観察用断面 | —— | 暗黒色砂質土層 | A | | 未製品 |
| 123 | 匙 | D－5 | 落ち込み214 | 黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 124 | 匙 | E－7・D－7<br>間観察用断面 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 125 | 匙 | E－5 | 溝238 | 暗黒色砂質土層 | A | ヤマグワ | |
| 126 | 杓子状木製品 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | ヤマグワ | 実測図有 |
| 127 | 杓子状木製品 | D－7 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | カシ | 実測図有 |
| 128 | 杓子状木製品 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | カシ | 実測図有 |
| 129 | 不明容器 | D－7 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | サクラ | |
| 130 | 不明容器 | E－3 | 西側（溝内） | 暗黒色砂質土層 | A | | 未製品 |
| 131 | 不明容器 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | ケヤキ | |
| 132 | 不明容器 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 133 | 不明容器 | D－8・E－8<br>間観察用断面 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | |
| 134 | 不明容器 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺構名 | 層位名 | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 135 | 不明容器 | C－4 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 136 | 不明容器 | C－5 | 落ち込み214 | 灰黒色粘質土層 | B | ヤマグワ | |
| 137 | 丸木弓 | D－7 | 落ち込み216 | 灰黒色粘質土層 | B | イヌガヤ | 実測図有 |
| 138 | 丸木弓 | D－4 | 溝105 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 139 | 丸木弓 | D－7 | 落ち込み216 | —— | —— | マユミ | |
| 140 | 丸木弓 | D－4 | 溝105 | 灰黒色粘質土層（粘土まじり） | A | | |
| 141 | 飾り弓 | D－8 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | カヤ | |
| 142 | 丸木弓 | D－6 | —— | 青黒色砂質土層 | A | イヌガヤ | 実測図有 |
| 143 | 丸木弓 | D－7・E－7間観察用断面 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | ヒノキ | 実測図有 |
| 144 | 丸木弓 | C－4 | 落ち込み214 | —— | —— | イヌガヤ | |
| 145 | 丸木弓 | C－4 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | イヌガヤ | |
| 146 | 飾り弓 | E－6 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | ヤマグワ | 実測図有 |
| 147 | 丸木弓 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 148 | 丸木弓 | D－5 | 溝108 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 149 | 丸木弓 | D－8 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | マユミ | |
| 150 | 丸木弓 | D－4 | 溝105 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | サカキ | |
| 151 | 丸木弓 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | イヌガヤ | |
| 152 | 丸木弓 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | イヌガヤ | 実測図有 |
| 153 | 丸木弓 | D－6 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | イヌガヤ | |
| 154 | 丸木弓 | C－3 | 落ち込み214 | —— | —— | | |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺構名 | 層位名 | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 155 | 丸木弓 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 156 | 丸木弓 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 157 | 丸木弓 | D－4 | 溝105 | 暗黄灰色砂層 | A | | |
| 158 | 丸木弓 | E－5 | 溝238 | 黒灰色粘質土層 | B | | |
| 159 | 丸木弓 | D－7 | 落ち込み216 | 黒色粘質土層 | B | | |
| 160 | 丸木弓 | D－8 | —— | 黒灰色粘質土層（砂まじり） | A | | |
| 161 | 丸木弓 | D－4 | 溝105 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 162 | 丸木弓 | D－8 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | | |
| 163 | 丸木弓 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 164 | 丸木弓 | E－4 | 溝238 | 明黒灰色粘質土層 | A | | 165と同一個体 |
| 165 | 丸木弓 | E－4 | 溝238 | 明黒灰色粘質土層 | A | | 164と同一個体 |
| 166 | 丸木弓 | D－5 | 溝108 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 167 | 丸木弓 | C－4・D－4間観察用断面 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 168 | 丸木弓 | D－4 | 溝105 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 169 | 武器形木製品 | C－3・D－3間観察用断面 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 170 | 櫂 | E－7・E－8間観察用断面 | 溝240 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | カシ | 実測図有 |
| 171 | 櫂 | D－6 | 落ち込み216 | 灰黒色粘質土層 | B | シイノキ | 実測図有 |
| 172 | 櫂 | E－7 | 溝240 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | カシ | 実測図有 |
| 173 | 櫂 | E－7 | 溝238 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 櫂部3/5程度残存 |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺構名 | 層位名 | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 174 | タモ枠 | C－5 | 落ち込み214 | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 175 | 刺突具 | D－4 | 溝105 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | ヤマグワ？ | |
| 176 | 刺突具 | D－7 | 落ち込み216 | —— | —— | | 実測図有 |
| 177 | 刺突具 | F－8 西側観察用断面 | 溝240 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | モミ | 実測図有 |
| 178 | 刺突具 | D－4 | —— | 黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 179 | 刺突具 | E－6 | 落ち込み218 | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | | 実測図有 |
| 180 | 刺突具 | D－5 | —— | 黒色粘質土層（下層） | A | | 実測図有 |
| 181 | 刺突具 | C－3 北側観察用断面 | —— | 黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 182 | 刺突具 | E－6 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | 実測図有 |
| 183 | 刺突具 | E－7 南側観察用断面 | —— | 黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 184 | 刺突具 | D－4 | —— | 黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 185 | 刺突具 | E－8 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 186 | 刺突具 | E－8 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 187 | 刺突具 | E－6 | —— | 灰黒色粘質土層（小石まじり） | A | ヒノキ | 実測図有 |
| 188 | 刺突具 | E－6・E－7 間観察用断面 | —— | 暗黄灰色砂質土層 | A | | 実測図有 |
| 189 | 刺突具 | E－4 | 溝238 | 灰黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 190 | 刺突具 | E－8 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 191 | 刺突具 | E－8 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 192 | 刺突具 | E－8 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺　構　名 | 層　位　名 | 時期 | 樹　種 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 193 | 刺突具 | E－8 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 194 | 刺突具 | D－5 | —— | 黒色粘質土層（下層） | A | | 実測図有 |
| 195 | 刺突具 | E－8 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 196 | 刺突具 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 197 | 楔 | C－3 | 落ち込み214 | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | クスノキ | 実測図有 |
| 198 | 用途不明木製品（祖形琴） | F－9 | —— | 青黄灰色砂質土層（粒子の粗い小石まじり） | A | カシ | 実測図有 |
| 199 | 用途不明木製品（筒状木製品） | B－3・B－4間観察用断面 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 200 | 用途不明木製品（筒状木製品） | D－7・E－7間観察用断面 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 201 | 用途不明木製品（琴柱状木製品） | D－6 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 202 | 用途不明木製品 | E－6 | —— | 暗黄灰色砂質土層（砂まじり） | —— | | 実測図有<br>容器片 |
| 203 | 用途不明木製品 | D－4 | —— | 白灰色砂層 | —— | | 実測図有 |
| 204 | 用途不明木製品（板状木製品） | D－6 | 落ち込み216 | 黒色粘質土層 | B | ヒノキ | 実測図有 |
| 205 | 用途不明木製品 | D－5 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | カシ | 実測図有 |
| 206 | 用途不明木製品 | C－3・C－4間観察用断面 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | 実測図有<br>木塊状 |
| 207 | 用途不明木製品 | C－4・D－4間観察用断面 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | 木塊状 |
| 208 | 用途不明木製品（穿刻棒状木製品） | C－4 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺　構　名 | 層　位　名 | 時期 | 樹　種 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 209 | 用途不明木製品（ヘラ状木製品） | D－4 | 溝105 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 鍬（破片） |
| 210 | 用途不明木製品（棒状木製品） | E－8 | 溝100 | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | ヒノキ | 実測図有 |
| 211 | 用途不明木製品（棒状木製品） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 212 | 用途不明木製品（棒状木製品） | F－8 | 溝239 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 213 | 用途不明木製品 | F－9 | —— | 暗黄灰色砂質土層 | A | | 実測図有 |
| 214 | 用途不明木製品 | E－3 | 溝238 | 明黒灰色粘質土層 | A | | 木蓋？ |
| 215 | 用途不明木製品（連輪状組合せ部材） | E－8 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | カシ | 孔×2<br>〔方孔×1<br>円孔×1〕 |
| 216 | 用途不明木製品（連輪状組合せ部材） | E－8 | 溝240 | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | | トチノキ | 孔×3<br>〔方孔×2（両側）<br>円孔×1（中央）〕 |
| 217 | 用途不明木製品 | D－6 | —— | 黒色粘質土層 | B | ヒノキ | |
| 218 | 用途不明木製品 | C－3 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 219 | 用途不明木製品 | E－8 | 溝240 | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | 又鍬？ |
| 220 | 用途不明木製品（有孔板） | D－6 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | クスノキ | 実測図有 |
| 221 | 用途不明木製品（有孔板） | F－9 | 落ち込み206 | 青灰色砂層 | A | | 実測図有 |
| 222 | 用途不明木製品（棒状木製品） | E－3 | 溝238 | 明黒灰色粘質土層 | A | | |
| 223 | 用途不明木製品（棒状木製品） | D－5 | —— | 黒色粘質土層 | B | アカメガシワ | 実測図有 |
| 224 | 用途不明木製品（棒状木製品） | D－5 | 溝108 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 225 | 用途不明木製品（棒状木製品） | F－8 | 溝240 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 226 | 用途不明木製品（棒状木製品） | D－4 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺構名 | 層位名 | 時期 | 樹種 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 227 | 用途不明木製品（棒状木製品） | E－4 南側トライアル | —— | —— | A | | |
| 228 | 用途不明木製品（棒状木製品） | D－4 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | |
| 229 | 用途不明木製品（木片） | —— | —— | —— | —— | | 現代のものか？ |
| 230 | 用途不明木製品（棒状木製品） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 231 | 用途不明木製品（棒状木製品） | D－4 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | |
| 232 | 用途不明木製品（有孔板） | D－6 | 落ち込み216 | 黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 233 | 用途不明木製品（有孔板） | E－7 | —— | 白灰色砂層（粘土まじり） | A | | |
| 234 | 用途不明木製品（有孔板） | D－4 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | |
| 235 | 用途不明木製品（板状木製品） | C－4 | 落ち込み214 | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | | 実測図有 |
| 236 | 用途不明木製品（板状木製品） | E－5 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | | 実測図有 |
| 237 | 用途不明木製品（板状木製品） | Z Z | —— | —— | —— | | 実測図有 |
| 238 | 用途不明木製品（板状木製品） | F－8 | 溝240 | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | 実測図有 |
| 239 | 用途不明木製品（板状木製品） | D－7 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | |
| 240 | 用途不明木製品（板片） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 241 | 用途不明木製品（板状木製品） | D－5 | 溝108 | 灰黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 242 | 用途不明木製品（板状木製品） | F－8 | 溝240 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 243 | 用途不明木製品（有孔板） | E－7・E－8 間観察用断面 | —— | 暗黄灰色砂質土層 | A | | |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺　構　名 | 層　位　名 | 時期 | 樹　種 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 244 | 用途不明木製品（板状木製品） | C－3 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 緯打具か |
| 245 | 用途不明木製品（板状木製品） | E－5 | 溝238 | 黒灰色粘質土層 | B | | |
| 246 | 用途不明木製品（板状木製品） | E－8 | 溝240 | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | |
| 247 | 用途不明木製品 | D－7・E－7間観察用断面 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | カシ | 実測図有 |
| 248 | 用途不明木製品 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | サカキ | 緯打具か |
| 249 | 用途不明木製品（木片） | D－4 | 溝105 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 250 | 用途不明木製品 | F－9 | —— | 青黄灰色砂質土層 | A | | 砧 |
| 251 | 用途不明木製品 | D－5 | 溝108 | 灰黒色粘質土層 | B | | 鍬（破片） |
| 252 | 用途不明木製品（木片） | D－5 | 溝224 | 黒色粘質土層 | B | | |
| 253 | 用途不明木製品（板状木製品） | D－5 | 溝108 | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 254 | 用途不明木製品 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 255 | 用途不明木製品（木片） | C－4 | 落ち込み214 | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 256 | 用途不明木製品（木片） | D－4 | —— | 黒色粘質土層 | B | | |
| 257 | 用途不明木製品（木片） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 258 | 用途不明木製品（木片） | E－8 | —— | 暗黄灰色砂質土層 | A | | |
| 259 | 用途不明木製品（木片） | D－4 | 落ち込み216 | 黒色粘質土層 | B | | |
| 260 | 用途不明木製品 | F－8西側観察用断面 | 溝240 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | ケヤキ | |
| 261 | 用途不明木製品（木片） | E－5 | 溝238 | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | | |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺構名 | 層位名 | 時期 | 樹種 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 262 | 用途不明木製品（木片） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | | |
| 263 | 用途不明木製品（棒状木製品） | D－7 | 落ち込み216 | 灰黒色粘質土層 | B | | ツチ状 |
| 264 | 用途不明木製品 | D－8 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | つちのこ状 |
| 265 | 用途不明木製品 | E－4 | —— | 黒色粘質土層 | B | | |
| 266 | 用途不明木製品 | E－6 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | |
| 267 | 用途不明木製品（棒状木製品） | C－4 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 268 | 用途不明木製品（木片） | E－5 | 溝238 | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | | |
| 269 | 用途不明木製品（木片） | E－8 | 溝240 | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 270 | 用途不明木製品（木片） | F－8 | 溝240 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 271 | 用途不明木製品（木片） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 272 | 用途不明木製品（木片） | E－4 | 落ち込み203 | 明黒灰色粘質土層 | A | | |
| 273 | 用途不明木製品（木片） | E－6 | —— | 白灰色砂層 | A | | |
| 274 | 用途不明木製品（木片） | —— | —— | —— | —— | | |
| 275 | 用途不明木製品（木片） | F－7 | —— | 暗黄灰色砂層 | A | | |
| 276 | 用途不明木製品（木片） | D－5・D－6間観察用断面 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | |
| 277 | 用途不明木製品（木片） | C－4 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 278 | 用途不明木製品（木片） | E－4 | 落ち込み203 | 明黒灰色粘質土層 | A | | |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺構名 | 層位名 | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 279 | 用途不明木製品（木片） | D－7 | 落ち込み216 | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 280 | 用途不明木製品（木片） | D－6 西側観察用断面 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 281 | 用途不明木製品（木片） | E－6 | 溝224 | 黒灰色粘質土層 | B | | |
| 282 | 用途不明木製品（板状木製品） | F－8 | —— | 黒色粘質土層（砂利まじり） | A | | |
| 283 | 用途不明木製品（木片） | F－10 | —— | ZZ | —— | | 現代のものか？ |
| 284 | 用途不明木製品（棒状木製品） | E－6・E－7 間観察用断面 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | 実測図有 |
| 285 | 用途不明木製品（棒状木製品） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | 実測図有 |
| 286 | 用途不明木製品（木片） | C－4 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 287 | 用途不明木製品（木片） | D－5・D－6 間観察用断面 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | —— | | 現代のものと思われる |
| 288 | 用途不明木製品（木片） | C－4 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 289 | 用途不明木製品（木片） | C－4 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 290 | 用途不明木製品（木片） | C－4 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 291 | 用途不明木製品（木片） | F－8 | 溝240 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 292 | 用途不明木製品（木片） | D－3 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 293 | 用途不明木製品（木片） | E－4 | 落ち込み203 | 明黒灰色粘質土層 | A | | |
| 294 | 用途不明木製品（木片） | E－4 | 溝238 | 明黒灰色粘質土層 | A | | |
| 295 | 用途不明木製品（琴形木製品） | E－5 | 溝240 | 明黒灰色粘質土層 | A | | 実測図有 |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺構名 | 層位名 | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 296 | 用途不明木製品（棒状木製品） | D－6 | 落ち込み216 | 灰黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 297 | 用途不明木製品（木片） | D－6 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | 実測図有 |
| 298 | 用途不明木製品（木片） | D－6 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | 実測図有 |
| 299 | 用途不明木製品（木片） | C－4 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 300 | 用途不明木製品（木片） | D－6 | —— | 明灰黒色砂質土層 | A | | |
| 301 | 用途不明木製品（木片） | C－3 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 302 | 用途不明木製品（木片） | D－4 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | |
| 303 | 用途不明木製品（木片） | D－4 | —— | 暗黄灰色砂層 | A | | |
| 304 | 用途不明木製品（木片） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 305 | 用途不明木製品（木片） | 南面 | —— | 黄灰色砂質土層 | B | | |
| 306 | 用途不明木製品（木片） | 南面 | —— | 灰色粘質土層 | —— | | |
| 307 | 用途不明木製品（木片） | E－5 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | | |
| 308 | 用途不明木製品（木片） | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 309 | 井戸枠 | F－9 | —— | —— | —— | クスノキ | |
| 310 | 杭 | D－8 | —— | 暗黄灰色砂質土層（粘土まじり） | A | | |
| 311 | 杭 | E－6 | 溝224 | 黒灰色粘質土層 | B | | |
| 312 | 杭 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 313 | 杭 | D－4 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | 実測図有 |
| 314 | 杭 | ZZ | —— | —— | —— | | 実測図有 |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺構名 | 層位名 | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 315 | 杭 | C－4 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 316 | 杭 | B－5<br>東側観察用断面 | —— | 暗黄灰色砂層 | A | | |
| 317 | 杭 | D－5 | 溝108 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 318 | 杭 | D－7 | 溝101 | 白灰砂層（粘土まじり） | A | | |
| 319 | 杭 | D－5 | 溝108 | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 320 | 用材 | D－8 | —— | 暗黄灰色砂層 | A | | |
| 321 | 用材 | D－4・D－5<br>間観察用断面 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 322 | 用材 | D－3 | 土壙7 | 黒色粘質土層 | B | | |
| 323 | 用材 | D－5 | —— | 黒色粘質土層（下層） | A | | |
| 324 | 用材 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 325 | 用材 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 326 | 用材 | —— | 溝240 | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 327 | 用材 | C－5 | 溝108 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 328 | 用材 | D－4 | —— | 黒灰色粘質土層（砂利まじり） | A | | |
| 329 | 用材 | F－8 | 溝240 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 330 | 用材 | E－8 | 溝240 | 明黄灰色砂質土層 | A | | |
| 331 | 用材 | F－8 | —— | 灰黒色粘質土層 | B | | |
| 332 | 用材 | D－7 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | A | カシ | |
| 333 | 用材 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | カシ | |
| 334 | 用材 | ZZ | —— | —— | —— | | |

| 番号 | 名　称 | 出土地区名 | 遺構名 | 層位名 | 時期 | 樹種 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 335 | 用材 | D－7 | 溝102 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | カシ | |
| 336 | 用材 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 337 | 用材 | E－7 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | カシ | |
| 338 | 用材 | F－8 | 溝101 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | カシ | |
| 339 | 用材 | E－8 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |
| 340 | 用材 | C－3 北側観察用断面 | —— | 黒色粘質土層 | B | | |
| 341 | 植物果実 | D－4 | —— | 灰黒色粘質土層 | —— | | ウリ科（ヒョウタン？） |
| 342 | 樹皮 | F－8 | —— | 灰黒色粘質土層（砂まじり） | —— | | サクラ？ |
| 343 | 猿の腰掛 | F－9 | —— | 灰黒色粘質土層（木片多し） | —— | | |
| 344 | 編物 | C－4 | —— | —— | —— | | |
| 345 | 編物 | D－4 | 溝105 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | タモ枠状木製品と共伴 |
| 346 | つる | D－4 | 溝105 | 灰黒色粘質土層（木片多し） | A | | |

時期

A——弥生時代前期中葉～前期末

B——弥生時代前期末～中期中葉

# 第4章　高宮八丁遺跡出土木製遺物の樹種について

㈶元興寺文化財研究所　　松　田　隆　嗣

## 1．はじめに

高宮八丁遺跡からは、弥生時代に属するおびただしい量の木製遺物が出土している。今回の調査では、広鍬、狭鍬、杵、鋤などの農耕具や織機具、椀、高杯、皿、容器類、匙などの生活用具、丸木弓、刺突具などの狩猟、漁労用具などが出土している。

これらのうち100点の遺物について樹種鑑定を行った。

## 2．同定方法

樹種の同定は、各遺物から木口、柾目、板目面から切片を採取し、これらの内部形態的特徴を顕微鏡により観察することにより同定をおこなった。

## 3．同定理由

### A．針葉樹

イヌガヤ　*Cephalotaxus harringtonia K.* Koch *F. drupacea* Kitamura　（イヌガヤ科　Cephalotaxaceae）

樹脂道は存在していない。材は仮道管、樹脂細胞、柔細胞、よりなる。樹脂細胞は材全体に散在し、その数は多い。春材から夏材への移行はゆるやかで年輪界は極めて不明瞭である。仮道管内壁にラセン肥厚を認める。分野壁孔は、崩壊が進んでおり正確に判断できないが、ヒノキ型である。

モミ　*Abies firma* S. *et* Z.　（マツ科　Pinaceae）

樹脂道、樹脂細胞とも存在していない。材は、仮道管及び放射柔細胞よりなる。春材から夏材への移行は急激である。分野壁孔はスギ型である。放射柔細胞壁末端に顕著なじゅず状末端を認める。

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* S. *et* Z.　（ヒノキ科　Cupressaceae）

樹脂道は存在していない。材は、仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞、よりなる。春材から夏材への移行はゆるやかである。樹脂細胞は、夏材部に接線状に配列する。分野壁孔はヒノキ型であるが、崩壊が進み正確に形態の確認できる部分は極めて少ない。一分野に　個存在している。

### B．広葉樹

クヌギ　*Quercus acutissima* Carr　（カシ科　Fagaceae）

円形から楕円形の大きな道管が年輪界に沿って配列する（環孔材）。すべて孤立管孔からなり、道管の膜厚は厚い。孔圏外で道管はその径を徐々に減じる。穿孔は単穿孔。チロースの存在が著しい。放射組織は同性で、広放射組織と単列放射組織よりなる。

カシ類　*Quercus spp.*　（カシ科　Fagaceae）

円形から楕円形の大きな道管が放射方向に配列する（放射孔材）。すべて孤立管孔からなり、道管の膜厚は厚い。穿孔は、単穿孔。チロースを認める。

放射組織は、同性で広放射組織と単列放射組織よりなる。

**シイノキ** *Castanopsis spp.* （カシ科　Fagaceae）

楕円形の道管が放射方向に配列する（放射孔材）。その径は急激に減少し晩材部では極めて小さくなり、多数が複合し火炎状に配列する。柔細胞は散在している。道管は単穿孔。放射組織は異性で集合放射組織と単列放射組織を認める。

**ケヤキ** *Zelkova serrata* Makino （ニレ科　Ulmaceae）

円形から楕円形の道管が年輪界に沿って1列に配列する（環孔材）。孔圏外で道管はその径を減じるとともに、多数が不規則に接続する。顕著な周囲柔組織を認める。穿孔は単穿孔。放射組織は異性で1～6細胞幅。

**ホオノキ** *Magnolia obvata* Thunb. （モクレン科　Magnoliaceae）

道管はほぼ均等に分布する（散孔材）。分布数はあまり多くない。道管の多くは2～3個が放射方向に接続する。ターミナル柔組織を認める。道管は単穿孔。ラセン肥厚を認める。放射組織は異性で1～2細胞幅。

**ヤマグワ** *Morus spp.* （クワ科　Moraceae）

楕円形の道管が年輪界に沿って1列に配列する（環孔材）。孔圏外の道管は徐々にその径を減じると供に多数が不規則に複合する。3～5細胞幅のターミナル柔組織を認める。穿孔は単穿孔。チロースを認める。放射組織は異性で1～7細胞幅。

**クスノキ** *Cinnamomum Camphora* Presl （クスノキ科　Lauraceae）

道管はほぼ均等に分布する（散孔材）。多くは2～3個が放射方向に複合する。道管径は晩材に行くに従い若干減少する。周囲柔細胞の存在が顕著である。道管は単穿孔。放射組織は異性で、2～3細胞幅。油細胞の存在を認める。

**カナメモチ** *Photinia glabra* Maxim. （バラ科　Rosae）

やや角ばった楕円形の小さな道管がほぼ均等に分布する（散孔材）。道管の径は春材から夏材部へ移行によってもあまり変化しない。短接線状柔組織が顕著である。穿孔は単穿孔。放射組織は異性で1～2細胞幅。

**サクラ類** *Prunus spp.* （バラ科　Rosae）

道管はほぼ均等に分布する（散孔材）。道管の多くは楕円形であり、2～3個が放射方向あるいは斜方向に複合する。春材から夏材へ移行により道管径は若干変化する。穿孔は単穿孔。道管壁にラセン肥厚を認める。放射組織は異性で1～6個細胞幅。

**アカメガシワ** *Mallotus japonicus* Maell. Arg. （トウダイグサ科　Euphorbiaceae）

道管は、年輪界に沿って配列するが、所々で配列がとぎれる。春材部から夏材部へ移行するに従い、道管は除々にその径を減じる。孔圏外の道管の多くは、2～3個が放射方向に複合する。道管の膜厚は厚い。短接線状柔組織が顕著である。穿孔は、単穿孔。放射組織は異性で単列。

**マユミ** *Euonymus sieboldianus* Blume （ニシキギ科　Celastraceae）

道管は極めて小さく、その形はやや角ばった楕円形でありほぼ均等に分布している（散孔材）。春材から夏材への移行によってもその径はほとんど変化しない。穿孔は、単穿孔。放射組織は同性で単列。

トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　（トチノキ科　Hippocastanaceae）

楕円形から長楕円形の道管がほぼ均等に分布する（散孔材）。春材から夏材に移行するに従い道管径及び分布数は若干減少する。道管は単独のものと2～4個放射方向に複合するものがほぼ同数存在する。穿孔は単穿孔。ラセン肥厚を認める。放射組織は異性で単列、階層構造が顕著である。

ヤブツバキ　*Camellia Japonica* L.　（ツバキ科　Theaceae）

やや角ばった卵形の道管がほぼ均等に分布する（散孔材）。多くは道管は独立管孔であるが、2個が接線方向に複合するものも認める。道管径は徐々に減少する。接線状に柔組織が配列している。穿孔は階段穿孔。放射組織は異性で2～3細胞幅。巨細胞を認める。

サカキ　*Cleyera japonica* Tunb. pro parte emend. Sieb. et 2ucc.　（ツバキ科　Theaceae）

やや角ばった楕円形の小さな道管がほぼ均等に分布する（散孔材）。春材部から夏材部への移行によってもその径はほとんど変化しない。穿孔は階段穿孔。放射組織は異性で単列。

シャシャンボ　*Vaccinlium bracteatum* Thunb.　（ツツジ科　Ericaceae）

やや角ばった円形から楕円形の道管がほぼ均等に分布する（散孔材）。春材部から夏材部への移行によってもその径はほとんど変化しない。穿孔は階段穿孔と単穿孔の両方が認められる。放射組織は異性で単列放射組織。

アオハダ　*Ilex macropoda* Miquel.　（モチノキ科　Aquifolicaceae）

道管がほぼ均等に分布する（散孔材）。道管の多くは、2～4個が放射・接線・斜方向に複合する。穿孔は階段穿孔。放射組織は異性で、1～10細胞幅。

不明　1

大きな楕円形道管が年輪界に沿って配列する（環孔材）。道管壁の膜厚は厚い。孔圏外で道管は急激にその径を減じると供に数個が不規則に複合する。道管は単穿孔。放射組織は同性で4～6細胞幅。

不明　2

円形から楕円形の大きな道管がほぼ均等に分布する。夏材部で、道管は2個が放射方向に複合するとともに、若干その径を減じるが、年輪幅が狭く、材の組織的特徴を正確に把握しがたい。帯状柔組織を認める。穿孔は単穿孔。放射組織は異性で、1～2細胞幅、および、広放射組織が存在する。
アオギリに似るが同定しがたい。

## 4．結果

### 農具

一本鋤（1点）、組合せ鋤（1点）、広鍬（15点）、又鍬（1点）、狭鍬（1点）、横鍬（2点）、鍬の突起部（2点）、鍬（用材）（2点）、鍬片（1点）、杵（1点）及び竪杵（1点）が出土している。

鋤鍬類は未製品も含め27点について樹種の同定を行った。用いられている材としてはカシ（26点）、クヌギ（1点）であり、カシ類の利用が極めて多い。このような鋤鍬類へのカシの利用は高宮八丁遺跡に限ったことではなく各地の弥生時代の遺跡から出土する鋤鍬の大部がカシを用いて作られており材の強度の点から鋤鍬類の用材としてカシが選択して用いられたと考えられている。カシはその材がかなりの強度にも耐えるため現在においてもスコップ、鑿、金槌類の柄等強度を必要とするものに使用されている。

堅杵は、ヤブツバキが用いられている。

一般に杵類の用材としては、カシ、クヌギと言ったブナ科Quercus属及びヤブツバキ、サカキと言ったツバキ科の樹木の利用が目だつ。重くて堅い材を選択したと考えられる。

**工具**

砧（２点）、石斧の柄（９点）について樹種の鑑定をおこなった。

砧の用材としてはヤブツバキ、クスノキ各１点が用いられている。

出土している横槌、きぬた、槌等を用材の点からみると針葉樹、広葉樹の区別なしに多種類の材が利用されている。使用用途や目的により材を選択した可能性も考えられるが、手近にあった材を利用した可能性が高い。針葉樹が用いられることはあまり多くはない。他の樹種に比較してカシの利用が多い。一般的に重くて堅い材を選ぶ傾向が強いようである。

石斧の柄の用材としてはクヌギ（２点）、カシ（１点）、サカキ（５点）、カナメモチ（１点）が用いられている。一般に石斧の柄の用材としては、Quercus 属（カシ、クヌギ、ナラ）、サカキと言った重くて堅い材の利用が多い。カナメモチも材は重くて堅い材であり現在でも鎌の柄、扇の要、牛の鼻輪など強度を要するものに用いられており、石斧の用材としては適した物と言える。

**狩猟用具**

弓（14点）、ヤス（１点）、刺突具（１点）について樹種鑑定を行った。

弓の用材には、イヌガヤ（７点）、カヤ（１点）、ヒノキ（２点）、ヤマグワ（１点）、サカキ（１点）及びマユミ（１点）が用いられている。イヌガヤ、カヤ、ヤマグワ、マユミは丸木弓の用材としては広く用いられている樹種であるが、ヒノキ、サカキと言ったものの利用は少ない。

これらの用材のうちイヌガヤ、カヤと言った針葉樹の利用状況を全国的にみると次のような興味深い点が明かとなっている。つまり、関東以西では関東、中部、近畿の一部（奈良県・滋賀県、大阪府の一部）では、丸木弓の用材にイヌガヤが用いられ、近畿の一部（大阪府）以西ではカヤが用いられており地域により用材の利用状況が異なっている。

しかし、イヌガヤ、カヤの植物分布をみると、どちらの木も北海道、東北地方の一部及び高山地帯には分布していないが、他の地域ではほぼ同じ所に分布しており植物分布の点から理解することはできない。

ヤス、突刺具はそれぞれモミ、ヒノキが用いられている。大阪府下の弥生時代の遺跡からは多数のヤスが出土しているが、ほぼすべてがモミを利用している。

モミを選択した理由は現在明かではないが、ほぼ全ての遺物がモミを用いて製作していることから何等かの選択理由があったと考えられる。

**容器**

容器類としては、椀、高杯、皿、その他容器類、15点について樹種鑑定を行った。用材としてはシイノキ、ケヤキ、クスノキ、ヤマグワ、サクラ、シャシャンボが用いられている。容器類の用材としては、時期、地域、用途により多少異なるが、弥生時代の容器類の用材としてはケヤキ、クスノキ、ヤマグワ、トチノキなどの利用が多い。同じ容器類でも後の時代に広く用いられる曲物類ではヒノキやスギが用いられ、漆器ではブナ、ケヤキ、トチノキ、ホオノキなどが多い。

## 5．考察

高宮八丁遺跡から出土した木製遺物の用材は、鋤・鍬類におけるカシの利用、堅杵におけるヤブツバキの利用、石斧の柄におけるサカキの利用などに見られるように弥生時代の遺跡から出土する木製遺物の典型的な樹種の用いかたをしている。しかし、弓の用材に関しては見ると従来大阪府下からはイヌガヤで作られた弓はほとんど出土していなかったが、高宮八丁遺跡からイヌガヤで作られた多数の弓が出土したことからイヌガヤとカヤの弓の分布圏の境がこの付近に存在したことがうかがえる。

表5　鋤・鍬類の用材

| 時代 | 遺跡 | 時期 | 府県 | 鋤 広葉樹 ブナ科 Quercus属 | 鋤 広葉樹 その他 | 鍬 広葉樹 ブナ科 Quercus属 | 鍬 広葉樹 その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 弥生時代 | 千種 | 後 | 新潟 | | | カシ | |
| | 山木 | 後 | 静岡 | カシ(1) | | カシ(1) | |
| | 登呂 | 後 | 静岡 | カシ(2) | | カシ(4) | |
| | 瓜郷 | 中・後 | 愛知 | | | カシ(8) | |
| | 篠束 | 中 | 愛知 | カシ(2) | | カシ(5) | |
| | 朝日 | 中 | 愛知 | カシ(1) | | カシ(1) | |
| | 納所 | | 三重 | カシ | | カシ | |
| | 唐古 | 前・中 | 奈良 | カシ(4) | | カシ(8) | |
| | 深草 | 中 | 京都 | | | カシ(5) | |
| | 高宮八丁 | | 大阪 | クスギ(1) | | カシ(25)* | |
| | | | | カシ(1) | | | |
| | 東奈良 | 中 | 大阪 | | | カシ(4) | |
| | 西岩田 | 後～古墳前 | 大阪 | カシ(10) | | カシ(2) | |
| | 瓜生堂 | 前・中 | 大阪 | カシ(20) | | カシ(15) | |
| | 巨摩廃寺 | 中・後 | 大阪 | カシ(4) | | カシ(1) | |
| | 若江北 | 前～後 | 大阪 | カシ(2) | | カシ(2) | |
| | 山賀(その2) | 前 | 大阪 | カシ(2) | | カシ(2) | |
| | 山賀(その3) | 前 | 大阪 | カシ(2) | | カシ(6) | |
| | 山賀(その4) | | 大阪 | | | カシ(1) | |
| | 恩智 | 中 | 大阪 | カシ(17) | | カシ(15) | |
| | 瓜破 | 前 | 大阪 | カシ(1) | クスノキ(1) | | |
| | 池上 | 中・後 | 大阪 | カシ(35) | ケンポナシ(1) | カシ(54) | ケヤキ(1) |
| | | | | | シャシャンボ(1) | | |
| | 上東 | 中・後 | 岡山 | カシ(1) | | | |
| | | | | コナラ(1) | | | |
| | | | | アベマキ(1) | | | |
| | 板付 | 中・後 | 福岡 | | | カシ(8) | |
| | 門田 | 後 | 福岡 | | | カシ(2) | |
| | 湯納 | 後 | 福岡 | カシ(2) | | カシ(2) | ユズリハ(1) |
| | | | | | | | アオダモ(1) |
| | 拾六町ツイジ | 前・後 | 福岡 | | | カシ(9) | クスノキ(1) |
| | | 後～古墳前 | | | | カシ(4) | |
| | 土生 | 中 | 佐賀 | カシ(1) | | カシ(4) | |
| | 里田原 | 中 | 長崎 | | | カシ(3) | |
| | 辻田 | 縄文～古墳 | 福岡 | カシ(4) | | カシ(4) | |
| 古墳時代 | 菅生 | | 千葉 | カシ(3) | | | |
| | 北堀池 | | 三重 | カシ(3) | | | |
| | 東奈良 | 初 | 大阪 | カシ(2) | | | |
| | 巨摩廃寺 | 初 | 大阪 | カシ(1) | | | |
| | 若江北 | 前 | 大阪 | カシ(1) | | | |
| | 鳴神V | 前 | 和歌山 | カシ(1) | | | |
| | 音浦 | 前 | 和歌山 | カシ(2) | | | |
| | 門田 | | 福岡 | | | カシ(1) | |
| | 拾六町ツイジ | (5C前半) | 福岡 | | | カシ(3) | イスノキ(2) |
| | 拾六町ツイジ | 古墳? | 福岡 | | | カシ(5) | |
| 平安時代 | 下谷地 | | 岩手 | コナラ(1) | | | |
| | 落合II | | 岩手 | コナラ(1) | | | |
| | 湯納 | | 福岡 | カシ(1) | | カシ(1) | |

＊　鍬の用材2点を含む

表6　堅杵の用材

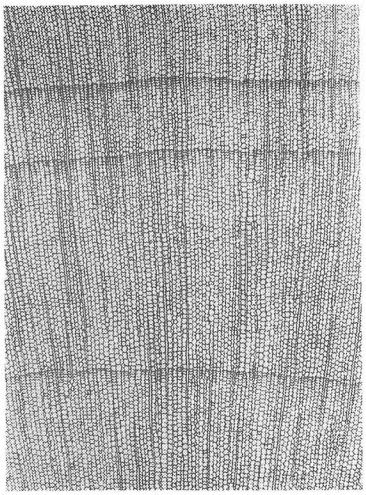
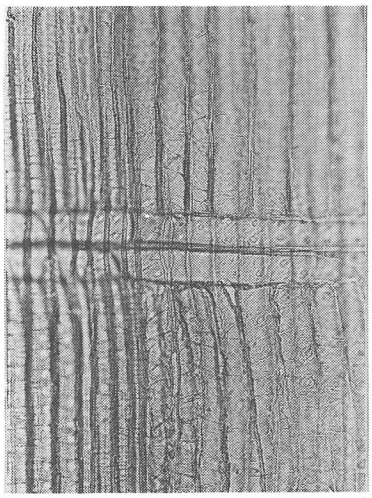
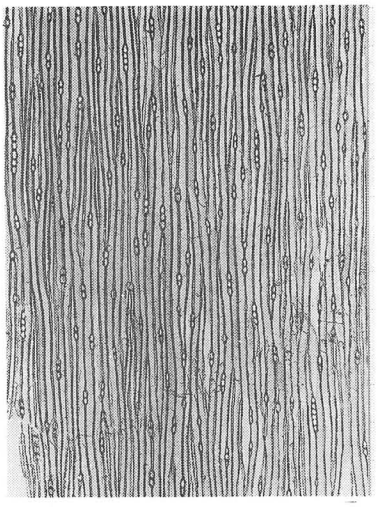
| 遺跡 | 時期 | 府県 | 針葉樹 | ブナ科 Quercus属シイノキ類 | ツバキ科 | その他広葉樹 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 新保 | 弥生中期～古墳 | 群馬 | | カシ類(2) | | |
| 江上A | 弥生中期～後期 | 富山 | | クヌギ(1) | | |
| | | | | カシ類(1) | | |
| 山木 | 弥生後期～末期 | 静岡 | | アラカシ(2) | | |
| 朝日 | 弥生中期 | 愛知 | | | ヤブツバキ(1) | |
| 唐古 | 弥生 | 奈良 | | クヌギ(3) | ツバキ(1) | |
| | | | | アベマキ(2) | | |
| 和爾・森本 | 弥生中期～古墳後期 | 奈良 | | | | カマツカ？(1) |
| 藤原 | 弥生 | 奈良 | | | ツバキ(1) | |
| | 弥生中期 | | | | サカキ(1) | |
| | 弥生後期 | | | | | イスノキ(1) |
| 高宮八丁 | | 大阪 | | | ヤブツバキ(1) | |
| 東奈良 | 弥生～古墳 | 大阪 | | クヌギ(1) | | シキミ(1) |
| 瓜生堂 | 弥生 | 大阪 | | クヌギ(1) | ヤブツバキ(1) | |
| | | | | | サカキ(1) | |
| 巨摩廃寺 | 弥生後期前半 | 大阪 | | クヌギ(1) | | |
| | 弥生後期後半 | | | | サカキ(1) | |
| 亀井 | 弥生 | 大阪 | | | | 広葉樹(1) |
| | 弥生中期～後期 | | | カシ類(1) | ヤブツバキ(1) | |
| 山賀 | 弥生前期 | 大阪 | | カシ類(1) | | |
| 四ツ池 | 弥生 | 大阪 | コウヤマキ(1) | | | |
| 池上 | 弥生 | 大阪 | | カシ(3) | | |
| 西岩田 | 弥生後期 | 大阪 | | カシ(1) | | |
| | | | | クヌギ(1) | | |
| 恩智 | 弥生前期～中期 | 大阪 | | カシ類(1) | | |
| 拾六町ツイジ | 弥生前期初頭 | 福岡 | | | | 不明(1) |
| | 弥生前期後半 | | | カシ(1) | ヤブツバキ？(1) | 不明(5) |
| | 不明 | | | カシ(1) | | 不明(1) |
| 鶴町 | 弥生 | 福岡 | | コナラ(1) | | ホルトノキ？(1) |
| | 弥生前期 | | | カシ(1) | | クスドイゲ(1) |
| 辻田 | 弥生中期～後期 | 福岡 | | シラカシ(1)スダジイ(1) | ツバキ属(1) | マンサク(1) |
| | | | | | | ヒメユズリハ(1) |
| 板付 | 弥生 | 福岡 | | カシ(1) | | |
| | 弥生中期～後期 | | | カシ(1) | | |
| 菜畑 | 弥生前期 | 佐賀 | | | | ユズリハ？(1) |
| | | | | | | 不明(1) |
| 里田原 | 弥生中期 | 長崎 | | | ヤブツバキ(2) | |
| 沢田 | 古墳 | 静岡 | | | | ケヤキ(1) |
| 北堀池 | 古墳 | 三重 | | カシ(1) | サカキ(1) | |
| 布留 | 古墳 | 奈良 | | | | 散孔材(1) |
| 利倉 | 古墳 | 大阪 | | | | ユズリハ(1) |
| 長越 | 古墳 | 兵庫 | | | | ヒメユズリハ(1) |
| 拾六町ツイジ | 古墳 | 福岡 | | | ヤブツバキ(3) | 不明(3) |
| | 古墳？ | | | | | モチノキ(1) |
| 落合Ⅱ | 平安 | 岩手 | | | | アサダ(1) |
| 寿能泥炭層 | 奈良～平安 | 埼玉 | イヌガヤ(1) | | | |
| 平城京 | 8世紀前葉 | 奈良 | | | | 不明(1) |
| 山囲 | 8世紀前葉 | 兵庫 | | | ツバキ(1) | |

## 表7　槌・砧の用材

| 時代 | 遺跡 | 時期 | 府県 | マキ科 Podocarpus属 | マツ科 Abies属 | コウヤマキ科 Sciadopitys属 | ヒノキ科 Chamaecyparis属 | ブナ科 Quercus属 | ブナ科 その他の属 | ニレ科 | ツバキ科 | バラ科 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 弥生時代 | 山木 | 後～末 | 静岡 | イヌマキ(1) | | | | | | | | | |
| | 瓜郷 | | 愛知 | イヌマキ(1) | | | | | | | | | |
| | 篠束 | 中 | 〃 | | | | ヒノキ(1) | | | | | | |
| | 朝日 | 中 | 〃 | | | | | | | | | | 広葉樹(1) |
| | 唐古 | 前 | 奈良 | | | | | クヌギ(1) | | | | | |
| | 野田・藤並 | 後～庄内 | 和歌山 | イヌマキ(1) | | | | | | | | | |
| | 高宮八丁 | | 大阪 | | | | | | | | ヤブツバキ(1) | | クスノキ(1) |
| | 池上 | 中 | 大阪 | | | | ヒノキ(1) | カシ(1) | | | ヤブツバキ(1) | | |
| | 恩智 | 中 | 〃 | | | | | カシ(1) | | | ヤブツバキ(1) | カナメモチ | |
| | 若江北 | 後 | 〃 | | | | | クヌギ(1) | | | | | |
| | 西岩田 | 後～古墳(初) | 〃 | | | | | カシ(1)<br>クヌギ(1) | | | | | |
| | 東奈良 | 後～古墳(初) | 大阪 | | | | | | | | | | ユズリハ(1) |
| | 上東 | 後 | 岡山 | | | | | カシ(1) | | | | | |
| | 西川津 | 前～中 | | | | | | カシ(1) | | | | | |
| 古墳時代 | 新保 | 弥生中期～古墳前期 | 群馬 | | モミ類(1) | | | クヌギ類(1)<br>ナラ類(3)<br>カシ類(3) | | エノキ(1) | | | カバノキ類(1) |
| | 菅生 | | 千葉 | | | | | カシ(1) | | エノキ(1) | | | |
| | 村田服部 | 前 | 〃 | | | | | カシ類(1) | | | | | |
| | 平城宮跡 | | 奈良 | | | | | | | | サカキ(2) | | シャシャンボ(1) |
| | 布留 | | 〃 | | | | ヒノキ(1) | アカガシ亜属(1) | | | ツバキ(1) | | |
| | 纒向 | 前 | 〃 | | | コウヤマキ | | | | | | | 横槌？カツラ（1） |
| | 瓜生堂 | 初 | 大阪 | | | | | クヌギ(1) | シイノキ(1) | | | | |
| | 斗西 | 古墳前期 | 滋賀 | | | | | カシ(1) | | | サカキ(1)<br>ツバキ(2) | | クリ(1)スギ(1)イヌガヤ(1) |
| | | 古墳中～後 | 〃 | | | | | カシ(7) | | | | | イヌガヤ(2)スギ(1) |
| 奈良・平安時代 | 落合Ⅱ | 平安 | 岩手 | | | | | コナラ(1) | | | | | ハクウンボク(1) |
| | 御山千軒 | 平安(前) | 福島 | | | | | | | | | サクラ類(1) | オニグルミ(1) |
| | | | | | | | | | | | | ザイフリボク(1) | 孔材(1) |
| | 野田 | 奈良(後) | 和歌山 | | | | | | | ケヤキ | | | |
| | 平城宮跡 | 8世紀(前) | 奈良 | | | | | アカガシ亜属(1) | | | | | 広葉樹(1) |
| | 〃 | 9世紀(前) | 〃 | | | | | 〃 | | | | | |

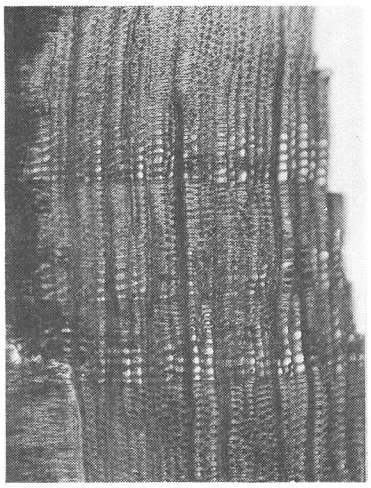
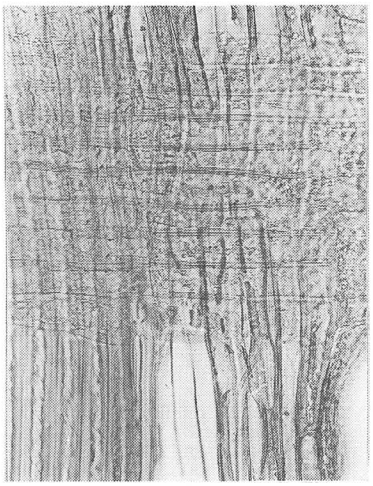
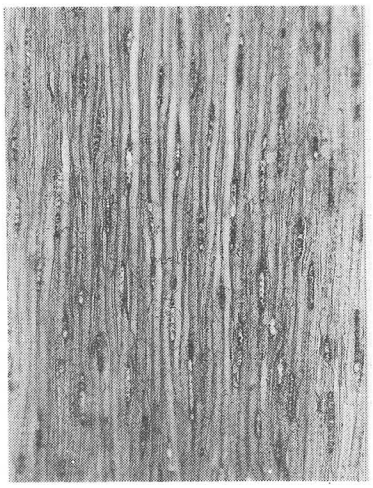
表8　片刃石斧柄の用材

| 分類 | 遺跡 | 時代 | 時期 | 府県 | 針葉樹 | | | 広葉樹 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | マツ科 | | その他 | ブナ科 | | ツバキ科 | | マンサク科 | その他 |
| | | | | | Pinurs属 (Diploxylon) | Abies属 | | Quercus属 | その他の属 | Cleyera属 | Comelia属 | Hamamelis属 | |
| 膝柄 | 登呂 | 弥生時代 | 後 | 静岡 | | | イヌマキ(1) | カシ(1) | | サカキ(1) | | マンサク(1) | ケヤキ(1) |
| | | | | | | | | | | | | | マユミ(1) |
| | 篠束 | | 中 | 愛知 | | | | | | サカキ(2) | | | |
| | 納所 | | 前～中 | 三重 | | | | | | サカキ(4) | | | |
| | 高宮八丁 | | | 大阪 | | | | クヌギ(1) | | サカキ(4) | | | カナメモチ(1) |
| | 東奈良 | | 中 | 大阪 | | モミ(1) | | | | | | | |
| | 若江北 | | 中 | 大阪 | | | | クヌギ(1) | | | | | |
| | 巨摩 | | 中～後 | 大阪 | マツ(1) | | | コナラ(1) | | | | | |
| | 瓜生堂 | | 後 | 大阪 | | | カヤ(1) | | | | | | |
| | 恩智 | | 中 | 大阪 | | モミ(1) | | カシ(1) | | | | | |
| | 池上 | | 中 | 大阪 | | | | カシ(7) | シイノキ(1) | サカキ(2) | | | ダイミンタチバナ(1) |
| | | | | | | | | クヌギ(2) | | | | | ヤツデ(1) |
| | | | | | | | | コナラ(1) | | | | | ケンポナシ(1) |
| | 上東 | | | 岡山 | | | | | クリ(1) | | | | |
| | 板付 | | 中 | 福岡 | | | | クヌギ(1) | | | | | |
| | タテチョウ | | 縄文～平安 | 島根 | | | | | | | | | タブノキ(1) |
| | 辻田 | | 縄文～古墳 | 福岡 | | | | カシ(1) | | | | マンサク(1) | |
| 直柄 | 篠束 | 弥生時代 | 中 | 愛知 | | | | カシ(1) | | | | | |
| | 納所 | | 前 | 三重 | | | | カシ(1) | | | ヤブツバキ(1) | | |
| | 恩智 | | 中 | 大阪 | | | | カシ(1) | | | | | |
| | 池上 | | 中～後 | 大阪 | | | | カシ(4) | | | | | |

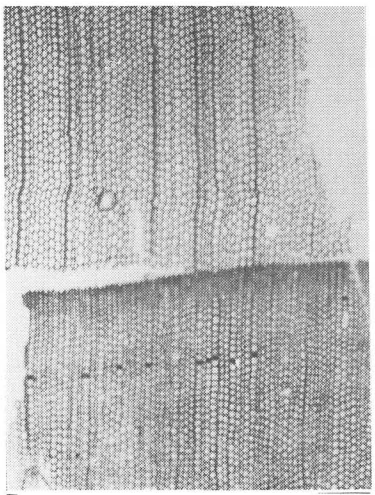
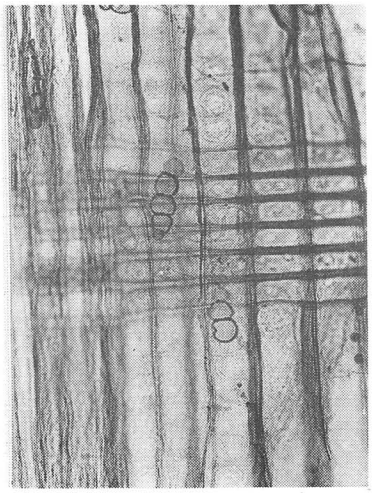
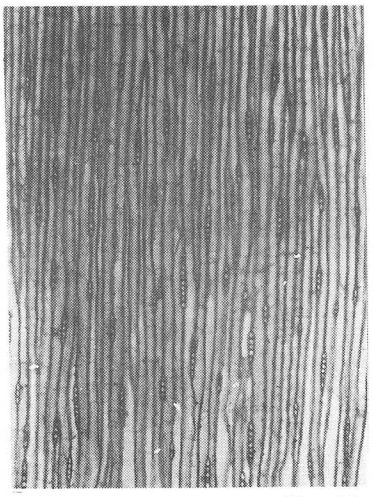
**1.** イヌガヤ　　C－30×　　R－200×　　T－50×

（**152.** 丸木弓）

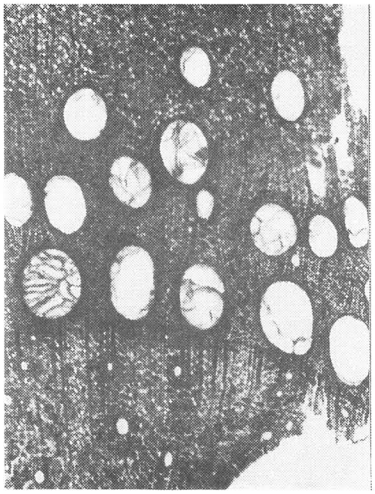
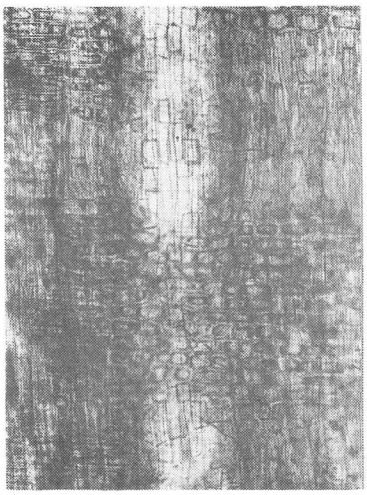
**2.** モミ　　C－30×　　R－200×　　T－50×

（**177.** 刺突具）

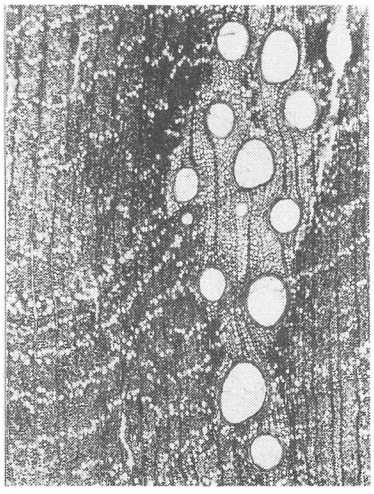
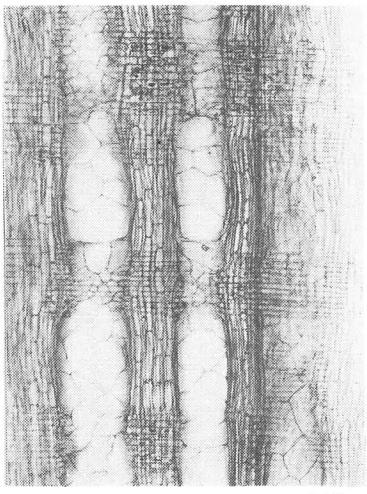
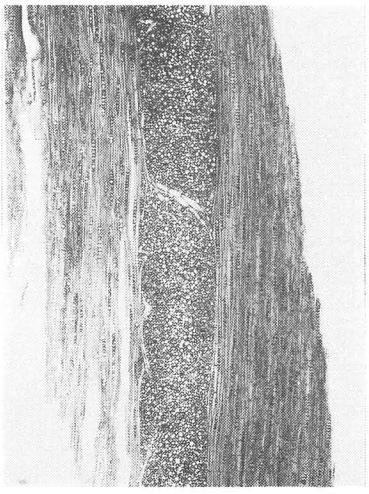
**3.** ヒノキ　　C－30×　　R－200×　　T－50×

（**204.** 用途不明木製品（有孔板）

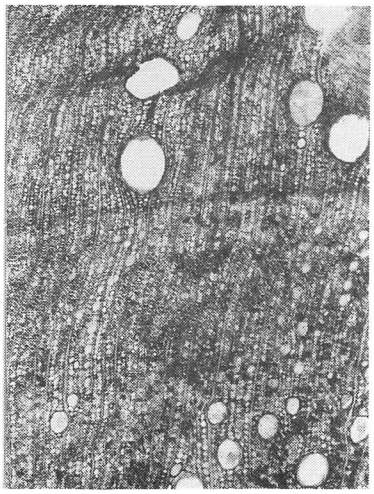
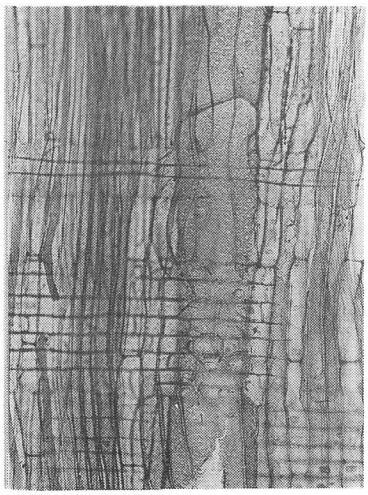
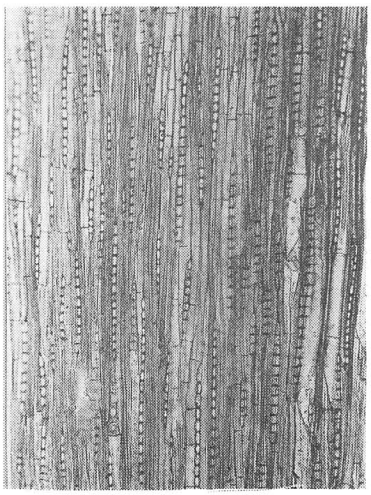
**4.** クヌギ　C－30×　R－100×　T－50×

（**89.** 柱状片刃石斧柄）

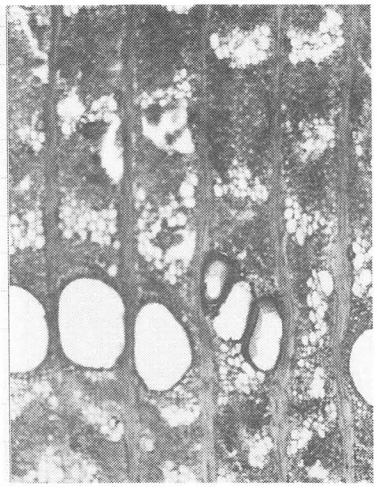
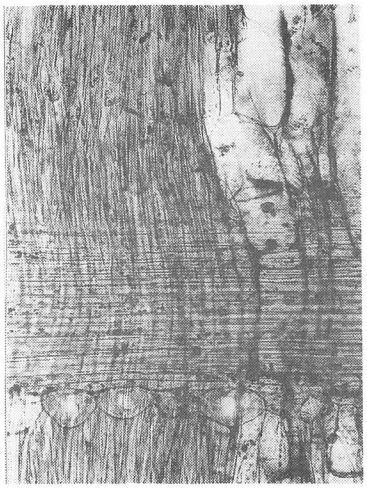
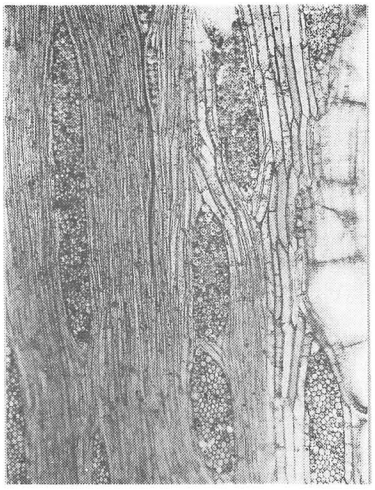
**5.** カシ　C－30×　R－100×　T－50×

（**44.** 鍬（破片）（着柄突起部））

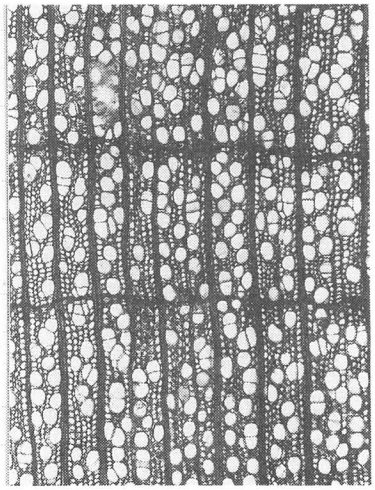
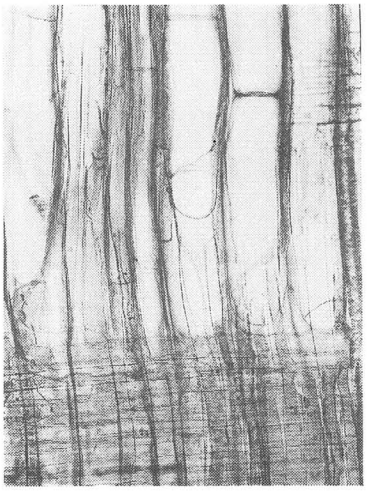
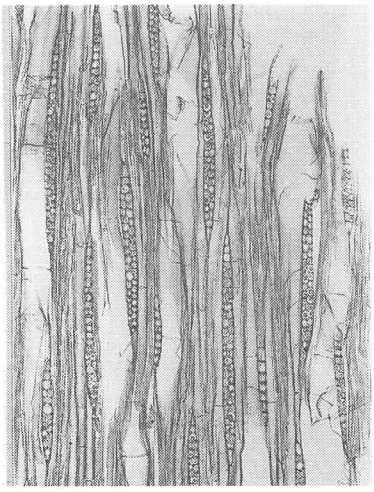
**6.** シイノキ　C－30×　R－100×　T－50×

（**109.** 方形容器（槽））

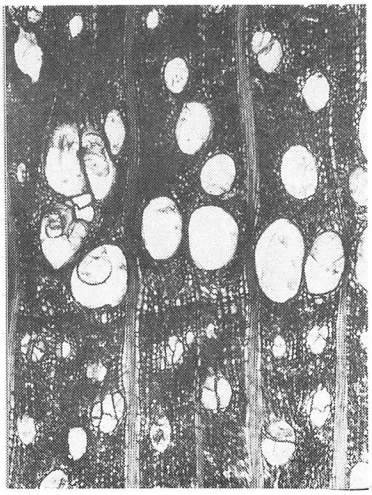
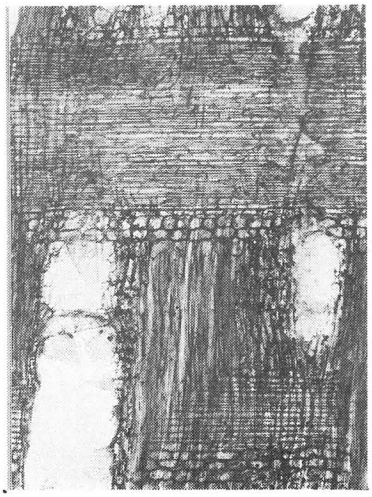
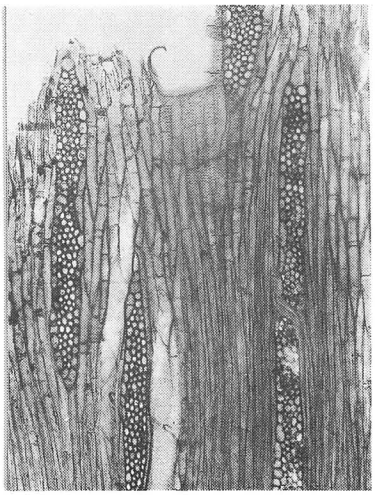
**7.** ケヤキ　　C－30×　　R－100×　　T－50×

（**130.** 不明容器）

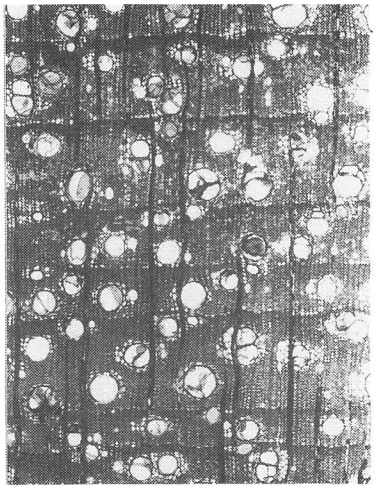
**8.** ホオノキ　　C－30×　　R－100×　　T－50×

（**40.** 横鍬）

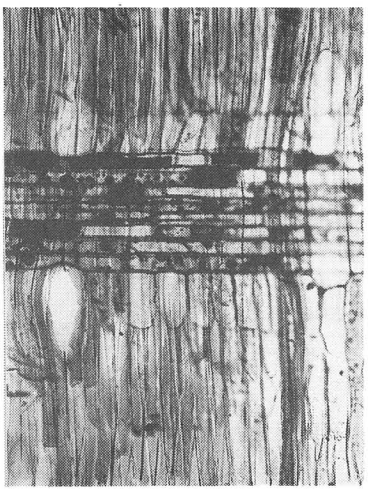




**9.** ヤマグワ　　C－30×　　R－100×　　T－50×

（**105.** 椀）



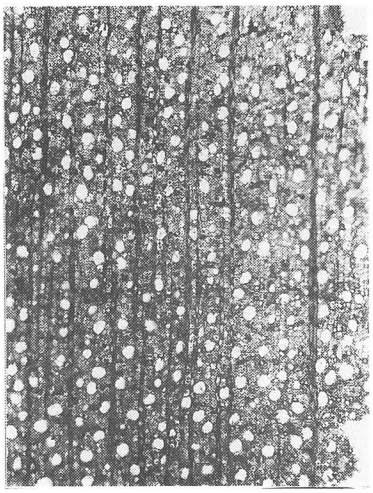
**10.** クスノキ　　C－50×



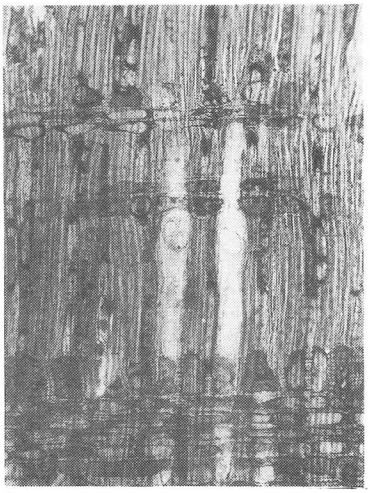
R－100×

T－50×

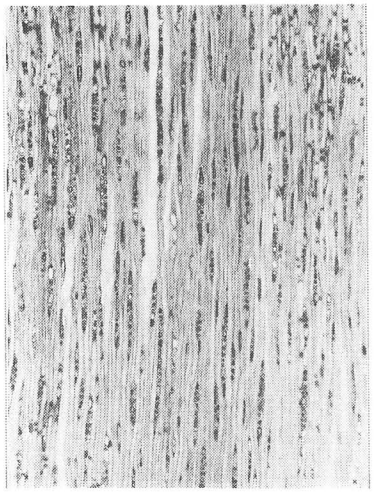
（**115.** 方形容器(盤状木器)）



**11.** カナメモチ　　C－50×

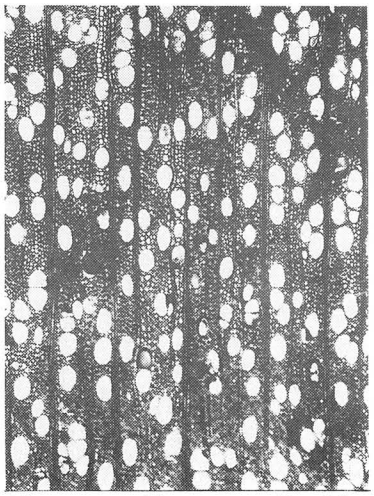


R－100×

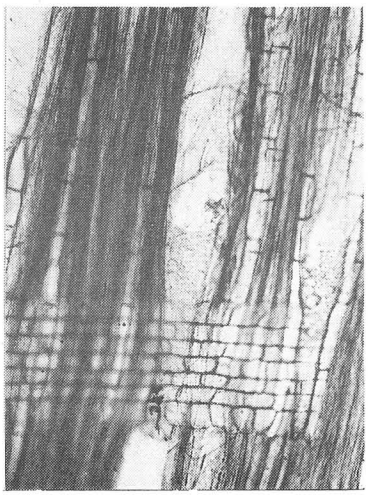


T－50×

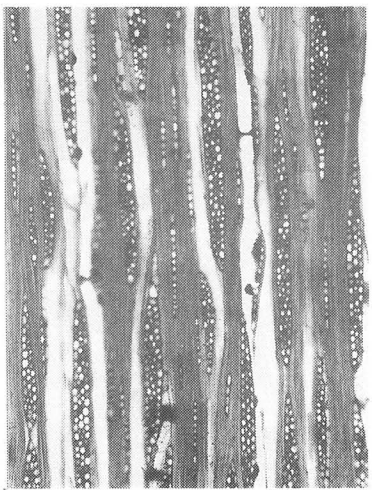
（**85.** 柱状片刃石斧柄）



**12.** サクラ類　　C－30×

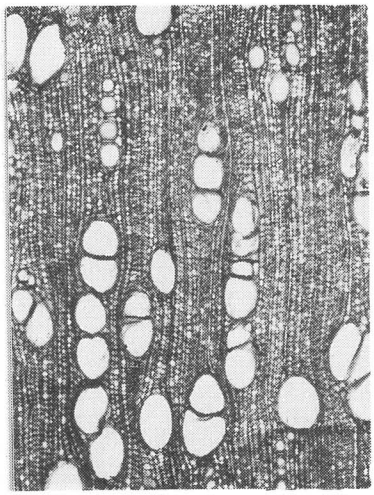
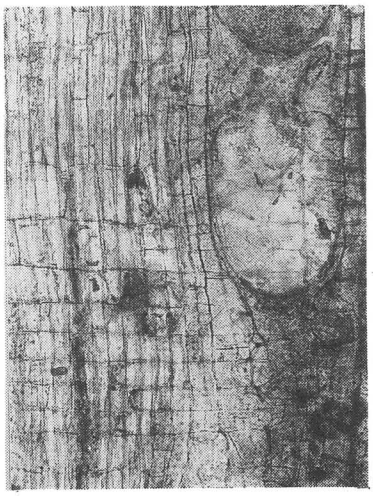
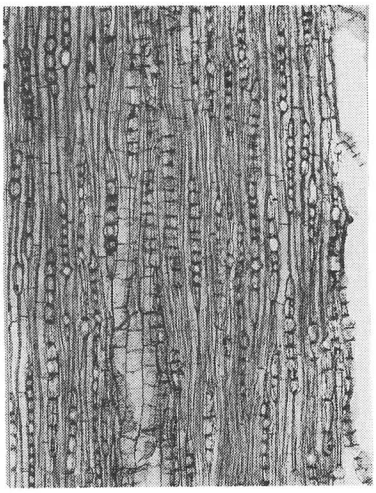


R－100×



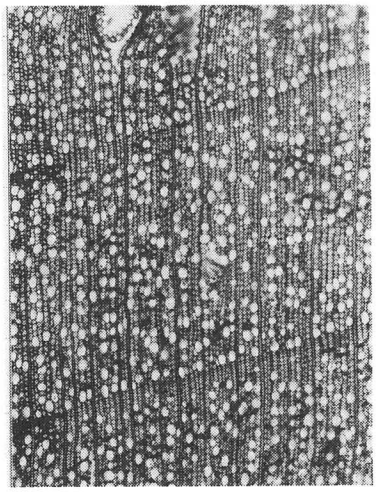
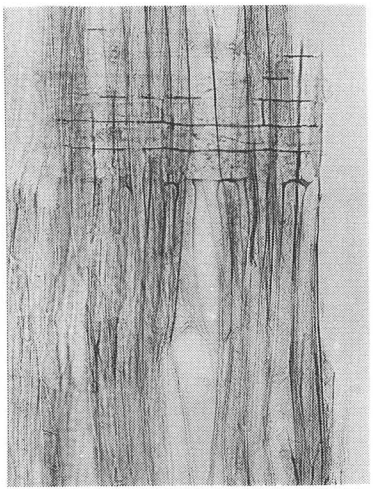
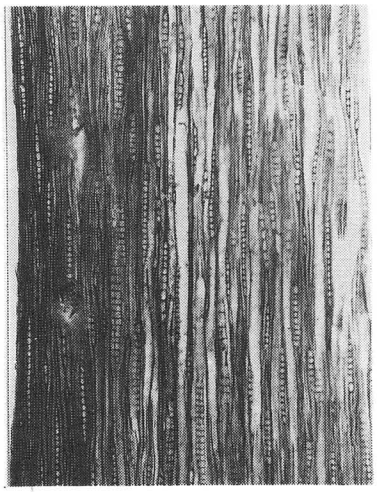
T－50×

（**119.** 高杯(杯～脚柱部)）

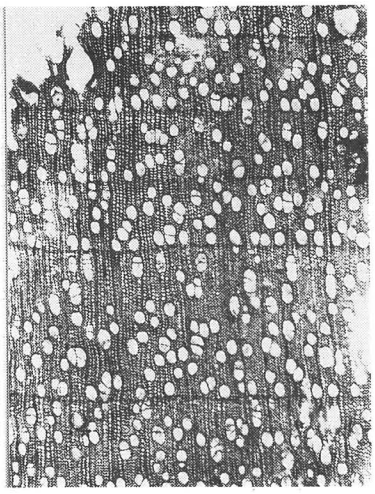
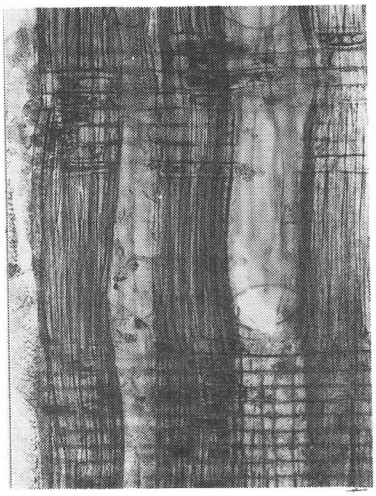
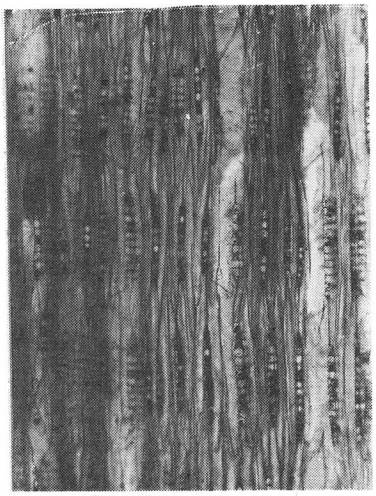
**13.** アカメガシワ　　C－30×　　R－100×　　T－50×

（**223.** 用途不明木製品（棒状木製品））

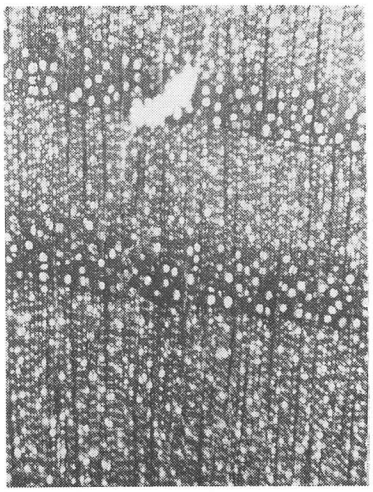
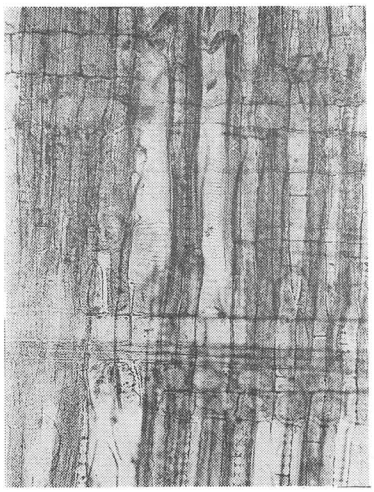
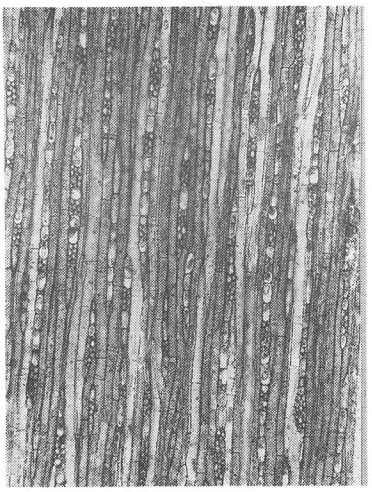
**14.** マユミ　　C－50×　　R－100×　　T－50×

（**149.** 丸木弓）

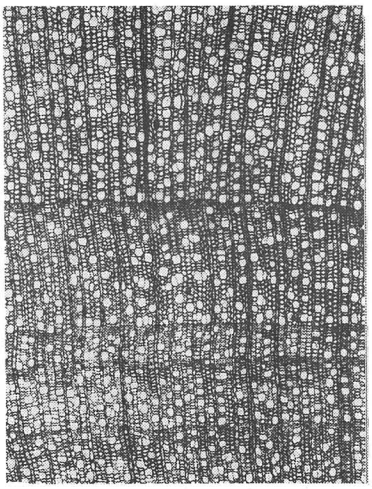
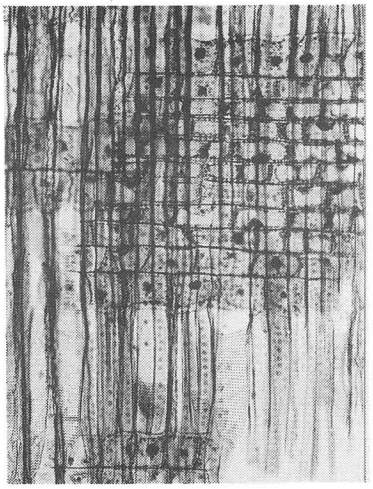
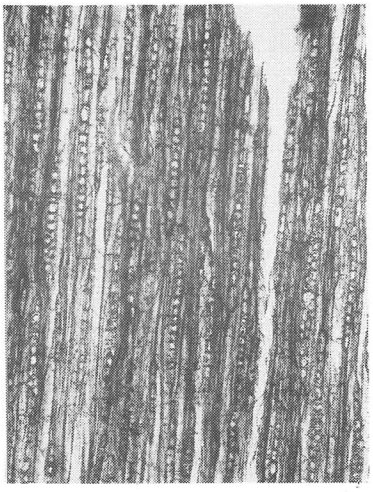




**15.** トチノキ　　C－50×　　R－100×　　T－50×

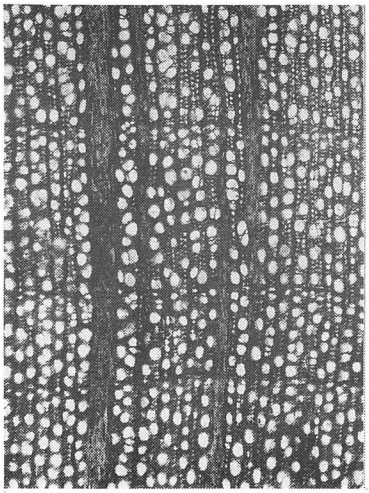
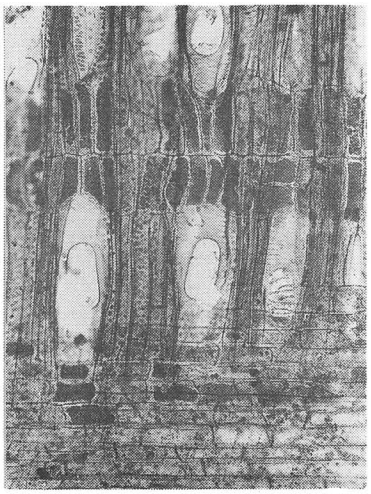
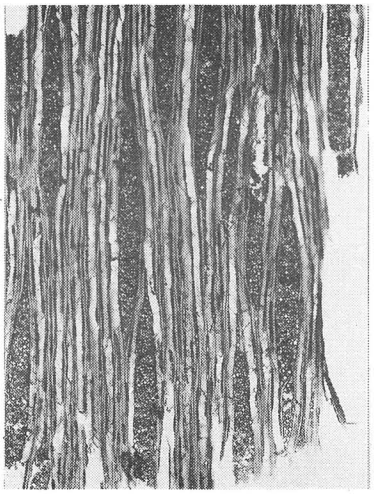
（**216.** 用途不明木製品（連輪状組合せ部材））

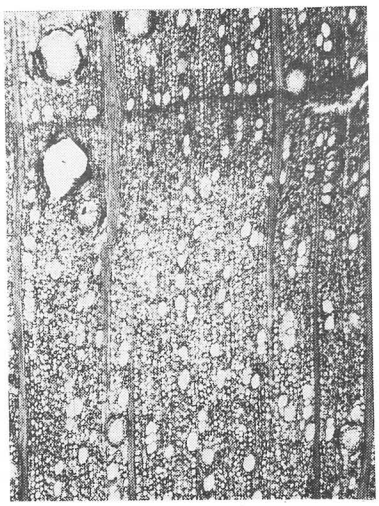
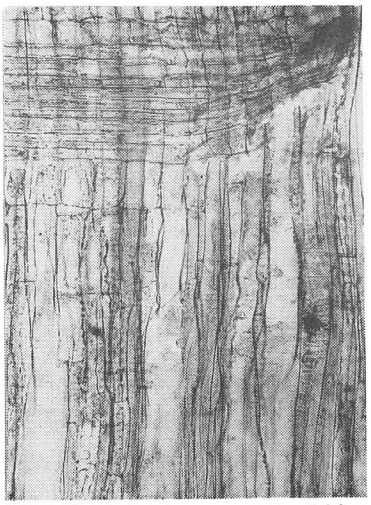
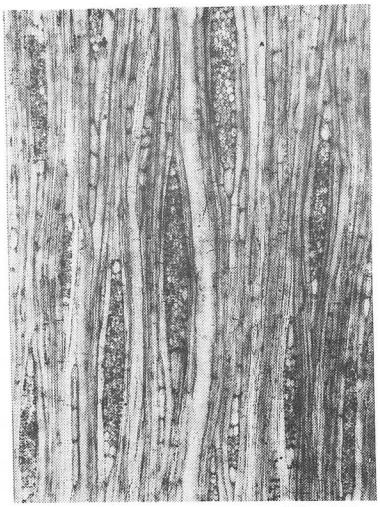
**16.** ヤブツバキ　C－30×　R－100×　T－50×
（**82.** 竪杵）

**17.** サカキ　C－30×　R－100×　T－50×
（**88.** 柱状片刃石斧柄）

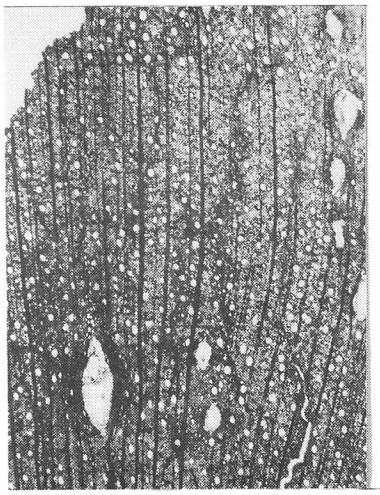
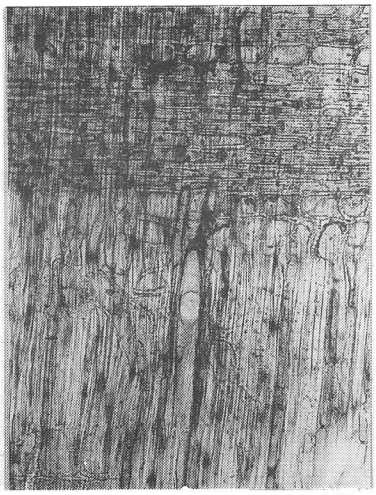
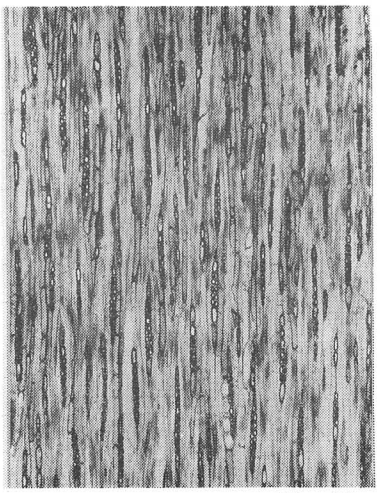




**18.** シャシャンボ　C－30×　R－100×　T－50×
（**108.** 方形容器(槽)）

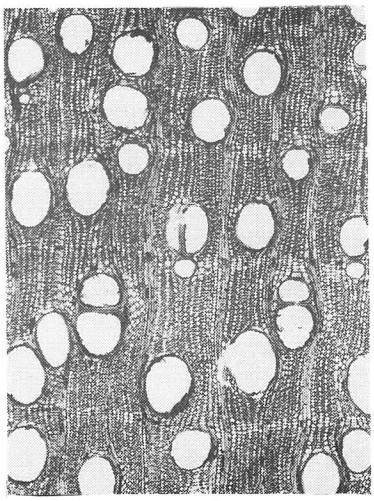
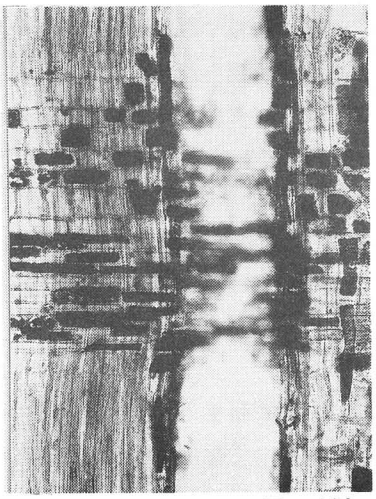
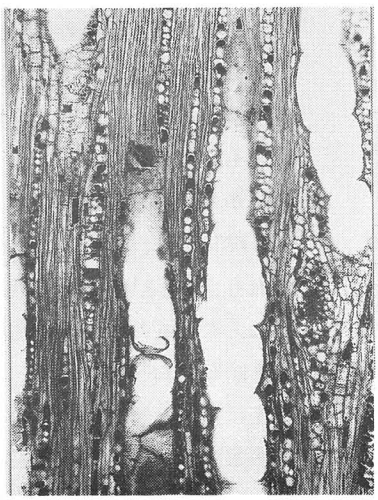
**19.** アオハダ　C－30×　R－100×　T－50×

（**98.** 鏝）

**20.** 不明1　C－30×　R－100×　T－50×

（**44.** 鍬(破片)(柄)）

**21.** 不明2　C－30×　R－100×　T－50×

（**106.** 椀）

# 第5章　考　察

## 1）高宮八丁遺跡における鍬の発展

今回報告した木器・木製品の主要な器種の一つに農耕具がある。特に鍬には形態的・時期的に様々なバリエーションを捉えることができた。今回初めて判明した淀川左岸（北河内）地域の弥生時代農耕具群を理解するためには、これまである程度解明されている淀川右岸（摂津）地域と、いわゆる中河内・南河内・和泉地域といった他の地域と関連させて検討してゆく必要がある。その検討を含めて、本遺跡の存続期間における鍬の時期的・機能的・技術的発展というものを、諸形態の把握を通して、仮説ながら述べてゆきたいと思う。この場合、地域を越えて述べてゆくことは単なる地域色に留まる危険性もある。しかしながら、これまで把握されてきた農耕具の変遷の技術的側面について、拙論ながら検討してゆきたい。

### 〔高宮八丁遺跡における形態からみた鍬の変遷〕

鍬の点数、分類基準については鍬の報告の中で述べた。広鍬は型式判明分28点と最も多く、変遷を考える上で一番適当である。従って、本稿の検討を広鍬中心に進める。

〔着柄突起における変化〕

着柄突起（柄壷）の形態は、鍬の変遷が顕著に認められる要素の一つである。

本遺跡の場合、着柄突起と着柄隆起の区別は明確で、着柄突起はａ～ｃ種の３種類に分類できる。ａ種は広鍬25点・狭鍬１点（用材の突起は１点として数える）、ｂ種は広鍬19点・狭鍬１点を数える。ｃ種は広鍬２点を数える。

ａ・ｂ・ｃ種とも大半は下層に集中するが、木製遺物が比較的下層に集中していたため、層位別の数量的判断を避けたい。むしろ、上・下層両方に三種の突起が併存していたことこそ重要であろう。木製農耕具を出土した主要遺跡を概観した場合、そのほとんどは一種類の突起と隆起の併用が多い[(1)]。本遺跡における遺構の細かい前後関係がまだ整理中であるが、この三種が併用され続けたとは考え難い。後述する地域性の検討から、南北に接する地域の影響とする見解もあろうが、農耕具を自給自足していた事実は出土遺物・遺構を見ても明らかで、主だったａ・ｂ種とも未製品が出土している。仮に、一方から一方への発展過程として考えて見た場合、ａ種の着柄突起の中にｂ種の突起の特徴に近いものが認められる（９・46・49・50・52・53・54)ことから、a種→aとbとの中間種→b種という変化が形態の変遷として考えられる。なぜなら、b種の突起にはc種に近いものが存在する(61・62・64・66)のみだからである。層位的に見ると、本遺跡の場合第Ⅰ様式新段階の土器を上・下層に含んでおり、a種とb種の突起も上・下層に分散するため、この変化は第Ⅰ様式新段階の時期におさまるものと考えるのが妥当であろう。

〔平面形における変化〕

先に見たａ・ｂ種の着柄突起の変化を踏まえて、平面形の変化について検討する。

平面形の変化は器種構成の変化と併せて弥生時代木製農耕具の変遷・発展として捉えられてきた[(2)]ため、本遺跡出土例についてもその形態の変化を抑える必要がある。広鍬Ⅱ類にはⅡａ・Ⅱｂ類の平面

形に相違が認められる。その相違は頭部の形状に最も顕著に見られる。広鍬Ⅱａ類の頭部形状は上辺が直線的で幅広く、Ⅱｂ類の頭部形状は変化に富み、全体に占める面積が前者に比べ狭い特徴をもつ。事実報告におけるⅡｂ－ａ・Ⅱｂ－ｂの一括の由縁である。頭部形状の違いという変化が、ａ・ｂ種の着柄突起の変化に伴うものと考えられよう。従って、ａ→ｂ種の着柄突起の変化・頭部面積の減少の２点を、大筋として捉えておく。

広鍬Ⅱｂ類については、側辺の形状からⅡｂ－ａ・Ⅱｂ－ｂと細分した。Ⅱｂ－ａは側辺の形状がⅡａに近いもので、Ⅱｂ－ｂそれと異なるものである。Ⅱｂ－ａは頭部面積の減少が認められるが頭部幅は幅広く、Ⅱｂ－ｂは頭部幅まで狭くなる。Ⅱｃ類については、頭部幅が狭くⅡｂ－ｂと同系列に考えるべきであろう。

着柄突起・平面形を含めて整理すれば、Ⅱａ→Ⅱｂ－ａ→Ⅱｂ－ｂ・Ⅱｃという変化が形態の上から考えられる。中期農耕具の特色である「ゲタ」はⅡｂ－ｂ以降出現すると考えられ、「ゲタ」の出現は第Ⅰ様式新段階の時期と考えるべきであろう。なお、狭鍬Ⅰ類のⅠｂについては、広鍬Ⅱｂ－ａに併行するものと思われる。

## 〔地域的にみた高宮八丁遺跡出土鍬類とその技術的側面〕

次に、他地域の様相にこれまで述べてきた変化を併せて考える必要があり、大阪平野周辺を中心に比較してゆくことにする。

まず、近畿地方の鍬の変遷について概観すると、前期の様相としては、九州において主流を成す諸手鍬が近畿地方にも若干認められ、奈良県唐古遺跡[3]・多遺跡[4]、三重県納所遺跡[5]、大阪府鬼虎川遺跡[6]の４遺跡で出土している。諸手鍬自体が中期初頭（第Ⅱ様式）まで認められる器種であるから、そこにつく平面形レンズ形のａ種着柄突起は古い様相を示すものと言える。同時に、広鍬Ⅱａ類の側辺の内彎については、北九州地方に認められる平鍬Ｂ型・諸手鍬Ｂ型（前期後半）のａ種着柄突起＋側辺内彎の類[7]と軌を一つにするものであろう。弥生時代早期から認められる円形ないし楕円形の着柄突起を有する平鍬は九州で存続したが、近畿地方では九州の一型式であるａ種着柄突起を有する鍬が広鍬Ⅰ類（組合せ鋤）と併用して先行し、前期末（第Ⅰ様式新段階）にはｂ種着柄突起を有する平鍬が出現する[8]。その他、又鍬・横鍬・丸鍬があり、特に丸鍬は近畿地方に初現が認められると考えられている[9]が、地域的には山陰地方を西限とする鍬[10]である。

中期前半になると、もはや頭部幅の広い鍬は認められなくなり（本遺跡広鍬Ⅱｂ－ａに類似する滋賀県大中の湖南遺跡例[11]・大阪府恩智遺跡例[12]はその前段階の所産であろう）、近畿地方に限っても多様化してくる時期である。しかしながらその変化（頭部面積の減少など）は一様であり、北九州地域においても同様である。実用品である農耕具の故、機能的・技術的要因を考える必要があろう。「鍬は半里にしてその姿を変える」多様性の一方で、大きな同一の流れというものを理解するべきである。

大阪平野周辺に限ってみた場合、前期の広鍬Ⅱａ類にあたるものは、本遺跡の以北では大阪府安満遺跡[12]や兵庫県戎町遺跡[13]などいわゆる摂津から播磨地域にかけての地域に認められる。一方、本遺跡以南では、大阪府瓜破遺跡[14]などでⅡａ類が、鬼虎川遺跡[15]や瓜生堂遺跡[16]、恩智遺跡[17]や池上遺跡[18]などでⅡｂ－ａ・Ⅱｂ－ｂが認められる。その他近畿地方の遺跡にはⅡａもⅡｂも認められるが、ⅡａとⅡｂのそれぞれの違いは時期にあり、前者は前期末、後者は中期初頭に見られるものが多い。従って本遺跡

のⅡａからⅡｂへの変化（第Ⅰ様式新段階）というものを、近畿地方における前期末～中期初頭の様相と捉えてよいと思われる。

さて、この変化の機能的・技術的側面にはどのようなことが考えられるだろうか。未製品や用材に遡れば、本遺跡における鍬祖型段階（鍬用材78・79）にみられるように、割材の次の段階の加工として、厚い板材の表面に着柄突起を削り出す工程が推測できる。その場合加工の成りゆきに左右され、本遺跡出土例のように向かい合わせにつくり出されたり、刃部の十分な長さを確保できない可能性が強い。また加工に要する時間も相当なものと考えられる。Ⅱｂの加工段階は不明であるが、中期初頭の池上遺跡の例をあげると、池上分類の広鍬Ⅳ類（未製品）PL. 7－3・43－4のように、側縁形を加工するようになる。当遺跡の広鍬Ⅳ類は着柄隆起を有するものではあるが、本遺跡の広鍬Ⅱ類も同様のものと考える。即ち、加工工程における不要部分の淘汰が考えられる。

次に、形態から認められる機能性についてみると、先にあげた頭部面積の減少がまず第一に考えられる。この後、「蟻じゃくり」の溝を有する組合せ式の直柄の広鍬[19]、膝柄がつく組合せ鍬[20]、直柄の鍬全てに頭部面積の減少が進む。鬼虎川遺跡の平鍬ＢⅡｂからＢⅡａ類の変化にも頭部面積の減少が捉えられる。その後の風呂鍬も今日用いられる金鍬も、身の最上部に着柄するものである。従って、広い頭部は元々不要であったのである。

頭部面積が大きくつくりも大きい前期の広鍬（Ⅱａ類）は、使用上の利点としては反動おもりといった要素しか有しておらず、それとて諸手鍬という優れた打鍬があった。あるいは、打引鍬であるとしても引鍬に近いものであったと考える。安満遺跡のまた鍬未製品（平鍬未製品の転用）がその良い例である。そして、Ⅱｂ類になるとつくりが軽くなる一方、刃部は頑丈なつくりに変化し（Ⅱｂ－ｂ）、「蟻じゃくり」の溝に先行する「ゲタ」を設けるようになる。

諸手鍬が鬼虎川遺跡の14Ｌ層（第Ⅱ様式）出土を最後に消滅するのも、広鍬・狭鍬が打鍬の要素を充実したためと考えるべきではないだろうか。本遺跡は広鍬の発展の過渡期の様相が中心であり、もはや諸手鍬は廃棄されたのではないか。

狭鍬については、大筋で広鍬と同じ発展を遂げるものと考える。それは、「平鍬」と一括されがちな点からも明らかである。着柄隆起を有する鍬については、踏み鋤としての機能[21]も考えねばならず、本稿の鍬の発展からは除外した。点数的には狭鍬Ⅱ類を含めて多いので、これからの検討課題としたい。又鍬・横鍬については点数も少なく、従来の様相に違わないため今回は言及できなかった。広鍬Ⅳ・Ⅴについては類例も少なく、着柄隆起を有する鍬や横鍬と併せて考えてゆきたい。

製作工程や形態における不要部分を消去・統合することは、技術的発展の定石である。

弥生時代の木製農耕具についてもその例外ではなく、先に述べた変化というものが、この技術的発展として捉えられてもよいはずである。

まとめて言えば、形態からみた着柄突起や平面形の変化の裏には、鍬としての機能に内包されていた不要部分の淘汰が存在し、製作工程におけるそれを含めたかなり大がかりな変化であったのである。

器種構成における打鍬・引鍬・打引鍬の占める役割についても、打鍬（諸手鍬）の消滅ということが捉えられる。一器種が２つの要素を包括し、全体的な構成をより少数のものにしてゆくことは、作業的・生産的に見て発展と言えよう。

これは、弥生時代全体の鍬の変遷を見ても明らかである。特に中期後半から後期にかけての器種構成の変化・減少には著しいものがあるが、この前期末から中期初頭にかけての変化も捉えておく必要

のあるものである。即ち、形態的に言えば地域色は芽生えてくるものの、機能からみて分類できるバラエティについてはその構成要素を減じているのである。

本遺跡出土鍬類は、そういった前期末～中期初頭の間の発展の過渡期にあたる様相を示したものであり、近畿地方における木製農耕具の技術体系導入後初の変化・発展というものを表す資料であると言える。

本稿は、実用的生産用具である農耕具の発展について、その一要因である技術的側面を考えたものである。全て形態からの大まかな推測に過ぎないため機能論としては成りたたないものである。また、層位的な細分析も欠落しており、時期的発展と捉え難い。しかし、実用品である以上推測困難な間接的要因を払拭でき、機能的・技術的・土壌的要因に基づく変化が直接、形態や様相に表われてくると考える。

（露口）

## 2）高宮八丁遺跡における木器の生産

1985～86年にかけて行われた高宮八丁遺跡の発掘調査によって得られた重要な知見の一つに、淀川左岸（北河内）地域における弥生時代前半期の木器群が、その生産の様相も含め良好な資料を得た、ということがあげられる。これは、地域的にもある程度様相が判明してきている中、南河内と摂津の両地域との中間位置に在り、土器だけでなく木器に関しても良好な資料の発見が必要とされていただけに、この高宮八丁遺跡の発見は大いなる成果といえよう。

今回、高宮八丁遺跡出土木器・木製品の整理・分析を行い、それによって得られた成果を元に本遺跡出土木器群の意義を考えてみたい。本稿においては、木器群の検討からその様相と生産の実態を明確にし、高宮八丁遺跡の特質を導き出すことにする。

### 〔木器群の様相とその生産形態〕

高宮八丁遺跡から出土した木器は、農具・工具・織機具・容器・武器・狩猟具・漁撈具・運搬具等多岐にわたっている。これはとりもなおさず、高宮八丁弥生集落の安定した木製品の生産、製作場であることを示すものである。そしてその生産を示す最も明確な資料は、未製品の存在である。

未製品・製品共に出土したものは10種、製品のみが９種、未製品のみが８種である。それぞれ各器種に分散している。

生産用具の一つである農耕具の鍬と鋤については、ある傾向が認められる。鍬は先の第３章第１節で述べたごとく広鍬５類、狭鍬２類、又鍬、横鍬に分類できる。広鍬Ⅰ類は製品・未製品共にあり、広鍬Ⅱ類はⅡaが、製・未製共にあり、Ⅱｂは未製品のみ、Ⅱｃは製品のみ、Ⅲ類は製・未製両方があり、Ⅳ・Ⅴ類は未製品のみである。狭鍬はⅠ類が成品のみで、Ⅱ類は製・未製品両方を有する。又鍬は製品のみ、横鍬は未製品のみである。広鍬Ⅱｂ類は未製品のみではあるが、ｂ種着柄突起を有する鍬（破片）が多数出土していることから、製品も相応にあるものと考える。

鋤については、一木鋤が製品、組合せ鋤が未製品であるが、共に１点のみの出土である。

形態以外の点からみた農耕具の分類には、鍬に限れば打鍬・打引鍬・引鍬という分類[22]と、鍬・鋤をまとめると水田耕作用農耕具と開墾土木用農耕具という分類[23]とが考えられている。本遺跡出土鍬類を前者の分類にあてはめると、まず打鍬としては狭鍬Ⅰ類、打引鍬として広鍬Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳ・Ⅴ類・狭鍬Ⅱ類、引鍬としては又鍬・横鍬というふうに分類できる。打引鍬が多い点は近畿地方の農耕具の様相の特徴であり、用途的器種分化が未発達であった表われであろう。

鍬・鋤をまとめて後者の分類にあてはめると、水田耕作用農耕具に規定できるものには広鍬Ⅰ～Ⅴ類・狭鍬Ⅱ類、又鍬・横鍬・一木鋤と多種にわたるが、開墾土木用農耕具にあてはまるものは狭鍬Ⅰ類、組合せ鋤のみである。数量的にも、水田耕作用45点に対し、開墾土木用はわずか2点を数えるに過ぎない。34点を数える鍬（破片）も、水田耕作用の広鍬の可能性が考えられる。

高宮八丁遺跡の遺構の一つに溝内貯木状遺構があげられるが、概して木器製作遺構を検出した遺跡においては、水田耕作用農耕具のみ製品・未製品が認められ、開墾土木用農耕具は製品のみ、といった傾向があった。

この傾向が生産用具としての農耕具について、その生産と所有形態の違いとして受けとめられ、労働単位に異なる表われとされた。そして生産に関しては、着柄鋤（スコップ等）や狭鍬か他の器種より高度な製作技術があるとし、そこに鉄製工具を持つ集団の可能性を見い出してきた[24]。

ここで、本遺跡を含めて弥生時代木器製作遺跡の特質について再考してみる。比較資料として、本遺跡と黒崎直氏の提示した3遺跡、さらに数遺跡をあげ、水田耕作用と開墾土木用農具の点数と未製品に関して提示した（表10参照）。本遺跡においては、狭鍬Ⅰb類と組合せや鋤以外は全て水田耕作用農耕具であり、点数的にも水田耕作用79点に対し開墾土木用2点である。表10の備考としては主な検出遺構の要目を併記したが、大筋において水田を含めた居住地域付近には水田耕作用が未製品を含めて集中し、開墾土木用は溝（環濠含む）や方形周溝墓などその他の地域を中心に製品のみ認められる。

製作工程に遡って考えると、広鍬と狭鍬の境目は未製品段階と考えるのが妥当である。組合せ鋤でさえ、製材段階までは同じものであろう。即ち、生いたちは同じ原材・整材なのである。作業的に計画性のある水田耕作に対し、溝の掘削や造墓活動は季節と無関係である。農耕具全体で考えれば、貯木遺構に貯えた用材を、開墾土木用農耕具の場合はその用材のまま持ち出し、いわゆる現場において完成させたと見るべきではないだろうか。方形周溝墓や溝内で工具が検出される例はその表われであろう。持ち出しに関して、着柄鋤は柄の長さの調節うんぬん[25]よりも、分割されている方が原材の持ち運びも容易であり、分業すれば生産性も向上する。あるいは、貯木・製作遺構でつくり上げた一木鋤を担いで、現場に向かう者もいたかもしれない。

従って、農耕具の生産・所有には、大中の湖南遺跡で認められた労働単位の差異といった点も考えられるが、全体的には同一集団による自給自足体制を考えるべきであろう。

工具については、太型蛤刃、柱状片刃・扁平片刃それぞれの石斧柄が出土しており、鉄斧柄と考えられるものはない。昨年度報告した石斧の点数と併せて考えると、その傾向には違いが認められる。太型蛤刃石斧は59点に対し柄2点（内1点は他の要素が考えられる精巧品）、柱状片刃石斧は小型のもの2点に対し柄は6点、扁平片刃石斧は34点に対し柄は2点である。太型蛤刃石斧柄の明確なものは未製品であり、破損廃棄品は認められない。また、本遺跡においては丸太材が出土していない。いわゆる「みかん割」は伐採地で行ない、原材の形でこの地に搬入されたものだろうか。

柱状片刃・扁平片刃石斧柄については、数的には相反したデーターが示されているが、今後の検討課題としたい。

容器類については、弥生時代の主要な器種はほとんど出土している。加工技術的には刳物がほとんどであり、挽物についてはやや疑問のある高杯を1点数えるのみである。

使用樹種については、ヤマグワ・シイノキ・ケヤキ・クスノキ・サクラ・シャシャンボといった加工容易で耐久性の高い広葉樹が選ばれており、器種毎の選択性はあまり認められない。ただ、花粉分析で検出されなかったヤマグワが比較的多い点は、単一遺跡内での生産以外の要因を考える必要がある。

本遺跡出土の弓は全て短弓である。弓については山田昌久氏が述べられているところによると、弥生時代の弓は完形ないしそれに近い程度で残ることは少ないと言う[26]。本遺跡においても完形品は少ない。しかしながら、破片を含め数多く出土していることは、600点以上出土している石鏃と合わせて、本遺跡の弥生人の生業の1つとしての狩猟活動を想起できよう。

本遺跡の特色の1つは、諸手の櫂を含めた漁撈具の出土である。櫂の出土は、舟こそ検出できなかったが、河内潟における漁撈活動を想定し得るものである。石製漁撈具である石錐が5点しか出土しなかった点からすれば、ヤスないしは弓を用いた漁猟が中心であったと思われる。それは、未製品を含めた刺突具の多量の出土からも考えられることである。諸手の櫂は全国でも初めての出土例であり、他の遺跡で出土しているいわゆる掘棒（ふぐし）としたものの再検討の必要があるのではないだろうか。

木器の生産を考える上で重要な位置を占めるものに用材がある。本遺跡においては各加工工程に属するものが出土しているが、丸太材は皆無である。みかん割材は20～30度程度のものがほとんどであるが、刳物の容器についてはもっと広角度の板目材が用いられている。用材の材質は樹種同定分が全てカシ類であることは、この貯木・製作の中心が農耕具の生産であったことを示す。しかしながら、縄文時代からつながるみかん割の技術を用い、他の器種も未製品が含まれていながら、この農耕具のための用材の集中という問題については、農耕具生産の特殊性を認めざるを得ない。それは、農耕具が後進的なもので、かつ生産に関して需要に対する計画性を必要としたためと考えられる。

## 〔高宮八丁遺跡における木器生産の特質〕

高宮八丁遺跡における木器生産の性格は、生産用具の一つである農耕具の生産がその中心であったと言えよう。農耕具についてみると、そのほとんどで全部が先述のごとく水田耕作用農耕具の生産である。

これは、調査地の南の遺構が稀薄になる地域に水田があった可能性を合わせて考えると、この製作遺構と水田の関係を提示できよう。両者に共通する点としては水の供給であり、集落の一要素である水田と木器製作遺構が相接するのも当然であろう。木器製作遺構とその周辺域の検討は、他の遺跡について今後とも検討課題とすべきであろう。

そして、本遺跡においては、農耕具以外にも狩猟・漁撈用具・容器類等様々な生産・生活用具が生産されており、それらを製作する工具類の製作も行なわれていた。そうして、衣食の要素に属する木器の生産活動は全て行なっていたものの、住の要素として登呂や山木遺跡で多量に出土した建築用部材が出土していない点を特筆できる。これは、この製作遺構（調査地）が、集落における居住地域か

ら、比較的離れた場所に位置するためではないかと考える。同時に、開墾土木用農耕具をより必要とする環濠や墓域からも、同様に離れた位置にあるものと考えられる。

周辺の古植生について、本書では花粉分析の結果を掲載することができなかったけれども、それによるとアカガシ、シイノキ、スギ、モミなどを中心とした木器の原木となり得る森林が広がっていたことが伺える。その恵まれた生活環境の中で、高宮八丁弥生集落の生業活動が盛んに行われていたと考えられる。そしてさらに後に、本遺跡の東約800ｍの丘陵上に形成される大規模な高地性集落である太秦遺跡の母胎として、本遺跡の様相には充分なものがあり、多量の需用に基づき生産された木器群といったものもそれを位置づけるものである。

（露口）

註

（1）具体的な例として、

池上遺跡…ｃ種（若干ｂ種を含む）

唐古遺跡…ａ種

安満遺跡…ａ種

大中の湖南遺跡…ｂ種（若干ｃ種を含む）

未製品のみａ種が存在しており、ａ→ｂ種の過程を裏付けるものと言える。

鬼虎川遺跡…ｂ種・ｃ種

（2）①黒崎直「木製農耕具の性格と弥生社会の動向」『考古学研究』第16巻第３号　1970

②　同　「くわとすき」『弥生文化の研究５』　1985

③山田昌久「くわとすきの来た道」『新保遺跡Ⅰ』　1986

④谷口徹「近江を中心に見た農具（鍬・鋤）の変遷」『木製農具について』埋蔵文化財研究会第14回資料　1983

（3）末永雅雄・小林行雄・藤岡謙一郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告第16集　1943

（4）寺沢薫他『多遺跡第10次発掘調査概報』奈良県立橿原考古学研究所　1988

（5）『納所遺跡－遺構と遺物－』三重県教育委員会　1980

（6）『鬼虎川の本質遺物　第７次発掘調査報告書　第４冊一』（財）東大阪市文化財協会　1987

（7）山口譲治「福岡における弥生木製農具」『月刊考古学ジャーナル』No. 292　1988

（8）本遺跡出土鍬類の検討から、この時点にまで遡るものと考えられる。

（9）註（2）文献の③に同じ。

(10) 柳浦俊一「山陰の弥生木製品」註（7）文献と同じ。

(11) 水野正好『大中の湖南遺跡』滋賀民俗学会　1968

(12) 原口正三・田代克己「安満遺跡」『月刊文化財』第66号　1967

(13)『戎町遺跡第一次調査現地説明会資料』神戸市教育委員会　1987

(14) 杉原荘介・神沢勇一「大阪府瓜破遺跡」『日本農耕文化の生成』　1961

(15) 註（6）文献の他　第12次、第29・30次調査でも出土している。

『鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告』　1987

『鬼虎川遺跡第29・30次発掘調査報告』　1988

(16)『瓜生堂遺跡Ⅲ』瓜生堂遺跡調査会　1981

(17)『恩智遺跡Ⅰ』瓜生堂遺跡調査会　1980

(18)『池上遺跡　第4分冊の2　木器編』㈶大阪文化財センター　1974

(19) 黒崎直「西日本における弥生時代農具の変遷と展開」『日本における稲作農耕の起源と展開』日本考古学協会　1988

(20) 組合わせ鍬…註（6）文献所収

(21) この手の鍬を「踏みすき」と考えるのは実質上困難であると考える。力学的にみて、柄と同軸方向に向かう力を、足によって踏みこまなければ「踏み込み」にならず、土の反転、耕起も容易ではない。腕による柄のおさえこみ＋利き足の踏み込みでもって初めて、すきは土中深く掘り込めるのである。

(22) ～ (25) 註（2）文献の①、②に同じ。

(26) 山田昌久「縄文・弥生時代の木製品」『シンポジウム弥生人の四季』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編　1987

表9　高宮八丁遺跡出土農耕具一覧表

| 器種 | 用材 | 未製 | 使用廃棄 | 小計 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 広鍬　Ⅰ類 | 2？ | 2 | 5 | 9 | 鍬用材76・77含む |
| 広鍬　Ⅱa類 | 2 | 4 | 3 | 9 | |
| 広鍬Ⅱb－a類 | | 1 | | 1 | |
| 広鍬Ⅱb－b類 | | 1 | 1 | 2 | 未製品2か？ |
| 広鍬　Ⅱc類 | | | 1 | 1 | |
| 広鍬　Ⅲa類 | | 2 | | 2 | |
| 広鍬　Ⅲb類 | | 2 | 3 | 5 | |
| 広鍬　Ⅲc類 | | 1 | | 1 | |
| 広鍬　Ⅳb類 | | 1 | | 1 | |
| 広鍬　Ⅴ類 | | 1 | | 1 | |
| 狭鍬　Ⅰ類 | | | 2 | 2 | Ⅰbは開墾・土木用？ |
| 狭鍬　Ⅱ類 | | 1 | 4 | 5 | |
| 又鍬 | | | 3 | 3 | |
| 横鍬 | | 3 | | 3 | |
| 鍬（破片） | | | 34 | 34 | 着柄突起部・刃部片 |
| 一木鋤 | | | 1 | 1 | |
| 組合せ鋤 | | 1 | | 1 | 開墾・土木用 |
| 総計 | 4 | 20 | 57 | 81 | |
| 水田耕作用農耕具 | 4 | 19 | 56 | 79 | 総計内訳 |
| 開墾土木用農耕具 | | 1 | 1 | 2 | 総計内訳 |

※刃部片は全て廃棄段階

表10　主要遺跡水田耕作用農耕具と開墾土木用農耕具の出土状況

| 遺跡名 | 水田耕作用農耕具 | | 開墾土木用農耕具 | | 総計 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 製作 | 使用・廃棄 | 製作 | 使用・廃棄 | 水田 | 土木 | |
| 高宮八丁 | 23 | 56 | 1 | 1 | 79 | 2 | 貯木・製作遺構、溝<br>水田？ |
| 唐古 | 7 | 4 | 0 | 5 | 11 | 5 | 貯木・製作遺構 |
| 大中の湖南（第1号家族） | 32 | 23 | 0 | 13 | 55 | 13 | 水田・柵列<br>住居 |
| 大中の湖南（第2号家族） | 62 | 16 | 0 | 12 | 78 | 12 | 水田・柵列<br>住居 |
| 登呂 | 0 | 15 | 0 | 0 | 15 | 0 | 水田・灌漑施設<br>住居 |
| 瓜生堂 | 0 | 7 | 0 | 15 | 7 | 15 | 方形周溝墓群 |
| 鬼虎川（第12次） | 0 | 4（鋤1） | 0 | 2 | 4 | 2 | 方形周溝墓（3：3の可能性有り） |
| 鬼虎川（第19次） | 2 | 9 | 0 | 6 | 11 | 6 | 環濠・土坑 |
| 鬼虎川（第7次） | 9 | 55 | 0 | 9 | 64 | 9 | 住居、貯木・製作遺構<br>貝塚 |
| 恩智 | 4 | 9 | 0 | 8 | 13 | 8 | 溝、貯木・製作遺構？<br>木棺墓・土坑墓 |
| 池上（第Ⅱ様式） | 22 | 22 | 0 | 18 | 44 | 18 | 溝 |

※黒崎直氏論文（註2）に加筆改変。分類基準についても同論文に準ずる。

# 第6章　まとめにかえて

今回の高宮八丁遺跡で出土した多量の木製品は、北河内地域における弥生時代前半期の木器文化の様相を知り得る多いなる資料となった。

本遺跡出土の木器の製品及び未製品は、農具・工具・織機具・容器・武器・狩猟具・漁労具・運搬具など多くの種類があり、今回報告した約350点の他に数百点を数える。しかし、従来から多くの人々によって指摘されているように、木製品本来の姿あるいは使用されていた状態で出土することは少なく、部分あるいは部材また遺存状態が悪く断片として出土することが多い。また破損した後他の用途に転用される場合もあることなどからも、いわゆる「用途不明木製品」というのが多くなっていることがうかがえる。

本遺跡においても、表1「木器種類別点数一覧表」に示したごとく、今回報告した木器の3分の1が用途不明木製品で占められている。このことは、木製品、言い換えれば「木」のもつ残りにくいという性質であり、遺跡の立地条件に大きく左右される木器研究の限界なのかも知れない。

高宮八丁遺跡においては、製品はもちろんのこと各種にわたる多くの未製品の出土がみられた。特に農具の鍬を一例にみると、みかん割りの原材→粗加工→未製品→完成品という製作・加工工程を示す遺物が出土している。さらに、本遺跡において注目すべきものとして、溝内貯木状遺構があげられる。この遺構は、木器製作のために原材や粗加工材や未製品あるいは製品を水漬けにして保管するものである。

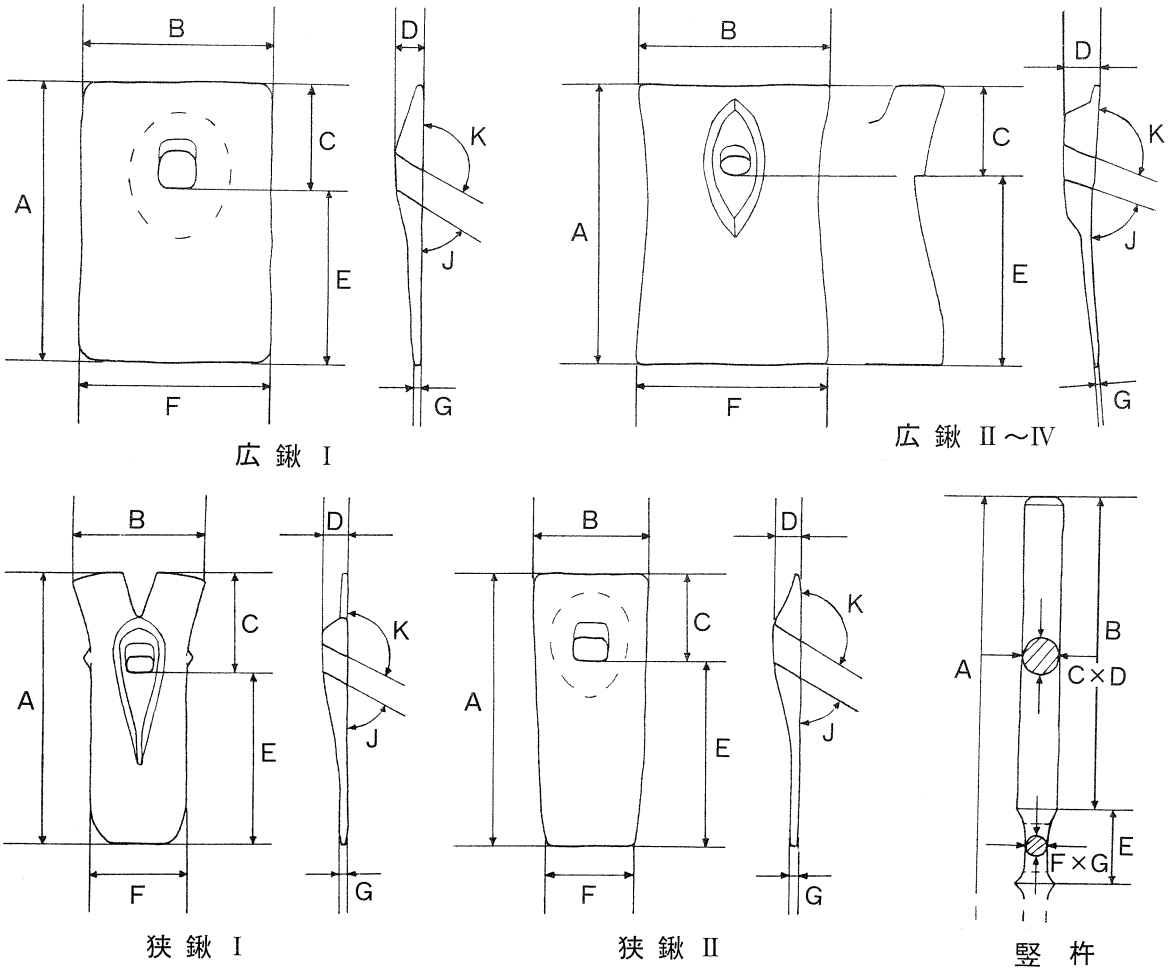
これらのことは、本遺跡において木器の生産·製作が日常的に行われていたことを如実に物語っており、高宮八丁遺跡が、弥生時代前期の北河内地域における拠点集落であったことを想定させるものである。

高宮八丁遺跡出土の木製品のなかでも注目すべき遺物の一つに両端に水かき部分のある櫂があげられる。両端に水かき部分のある櫂の出土は、我が国における初出例である。カヌーの「パドル」に相当するものであり、民族例として現在でも北アメリカのエスキモーが使用しているカヌーの櫂に大きさ・形状等非常に酷似している。このことは、丸木舟以外の形態をもった舟、とりもなおさず「カヌー」のような軽量な形態の舟の存在を考えなければならないのではないだろうか。さらに、舟の形態の違いに伴う弥生時代における漁法の検討も必要になって来ると思われる。また、先述のごとく他の遺跡（大阪府東大阪市鬼虎川遺跡、奈良県田原本町唐古・鍵遺跡等）で出土している掘棒あるいは櫂状木製品あるいは片方だけに水かきのある櫂の再検討の必要もあるのではないだろうか。

高宮八丁遺跡は、古代河内潟の北岸に形成された低湿地の遺跡であるため、遺存状態の良い多くの木製品の出土をみた。このことにより、北河内地域における弥生時代前半期の様相が徐々に明らかになってきたと言える。また、今後発掘調査の機会が増え、木製品の出土資料の増加に伴いその様相も変化するものと思われる。

本遺跡における遺構等の細かな検討が現在整理中であり、今後これら木製品と出土石器類との関係等も含め詳細な分析を行って行きたいと考えている。

（塩山）



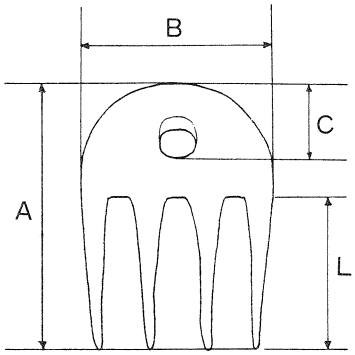

挿図 7　木器計測区分(1)

〔鍬 類〕

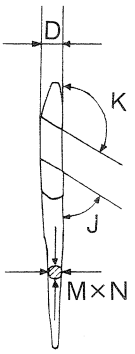
A：全長
B：頭部幅
C：頭部長
D：頭部厚
E：刃部長
F：刃縁幅
G：刃縁厚
H：着柄孔径(長)
I：着柄孔径(幅)
J：着柄角度(A)
K：着柄角度(B)
L：歯部長(又鍬)
M：歯部径(幅)
N：歯部径(厚)

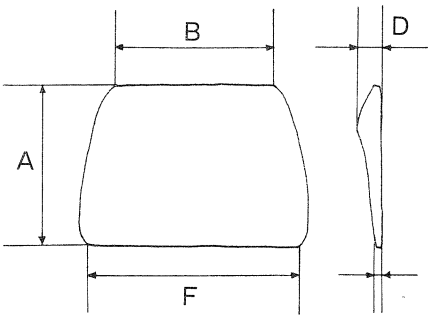
〔竪 杵〕

A：全長
B：搗部長
C：搗部径(幅)
D：搗部径(厚)
E：握部長
F：握部径(幅)
G：握部径(厚)

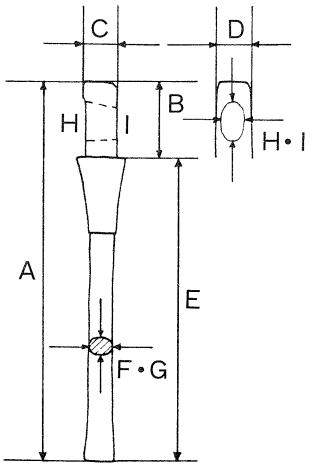



又　鍬

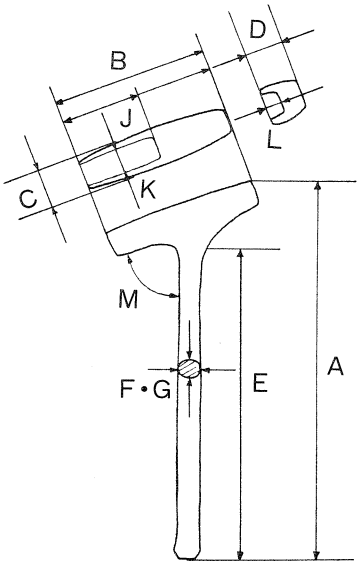


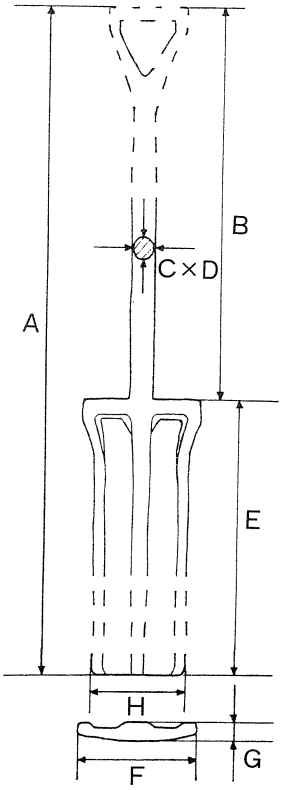

横　鍬




太型蛤刃石斧柄




扁平・柱状片刃石斧柄




一木鋤

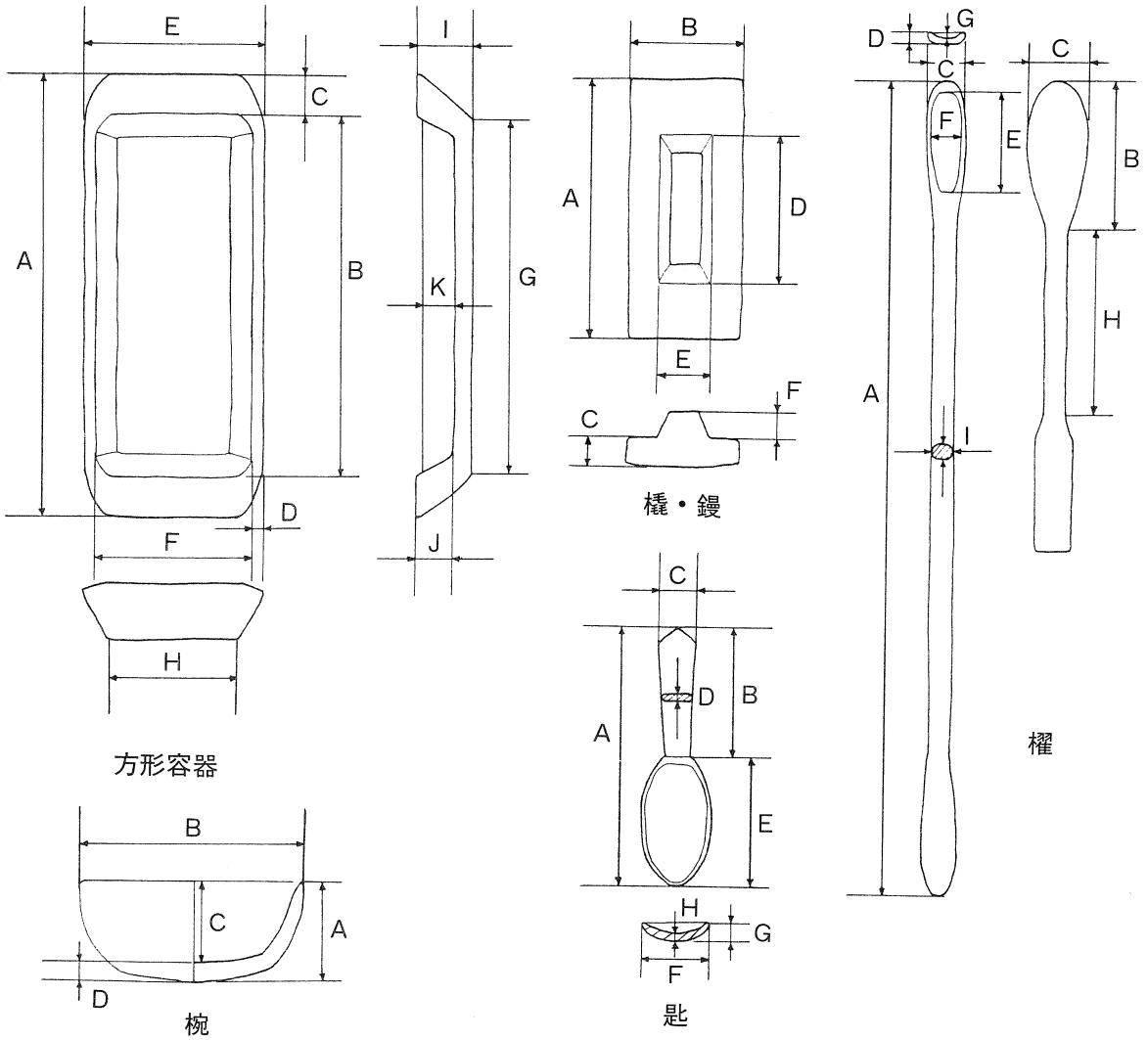
挿図 8　木器計測区分(2)

〔石斧柄〕

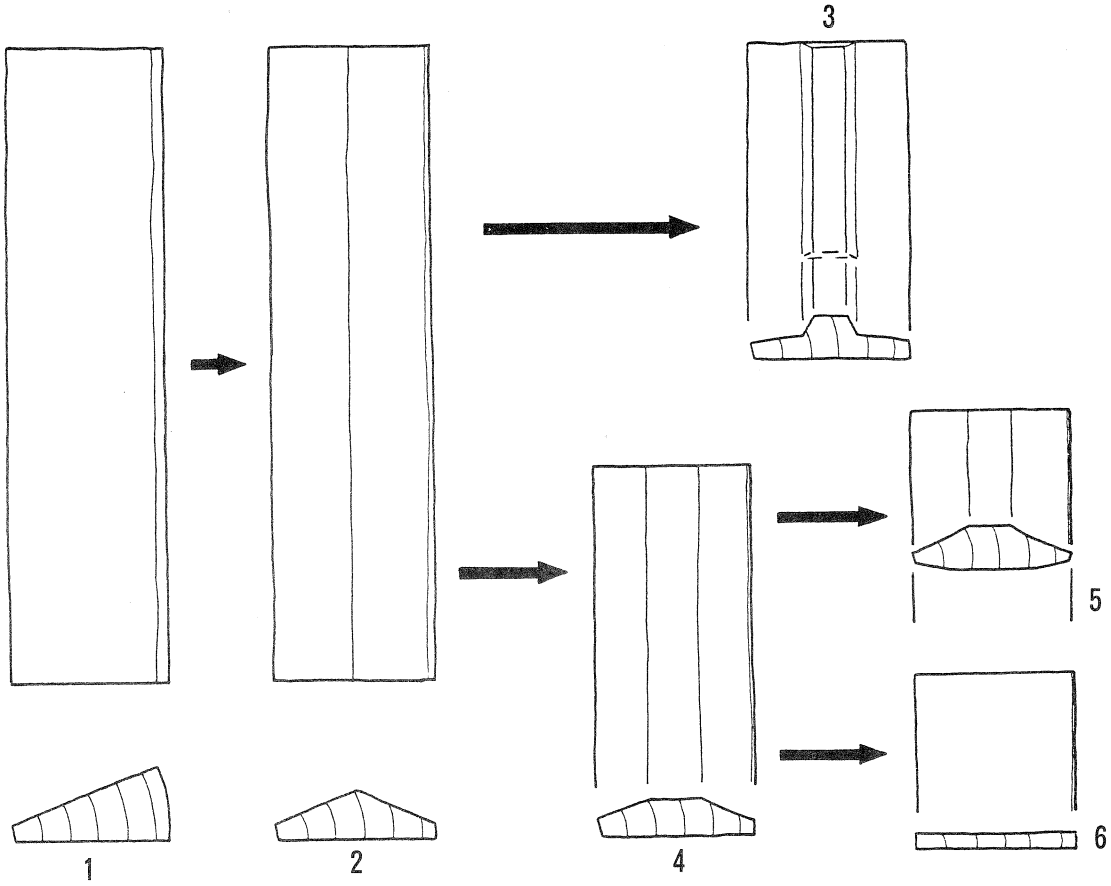
A：全長
B：台部長
C：台部幅
D：台部厚
E：握部長
F：握部径(幅)
G：握部径(厚)
H：着装孔径(先端側)
I：着装孔径(基端側)
J：着装溝長
K：着装溝幅
L：着装溝深
M：着柄角度

〔一木鋤〕

A：全長
B：柄部長
C・D：柄部径
E：身部長
F：身部幅
G：身部厚
H：刃部幅

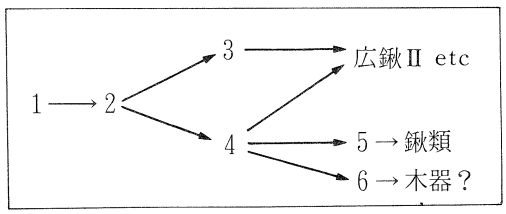

E
C
A
B
D
F
H
方形容器
I
K
G
J
B
A
D
E
C
F
椀・鏝
C
D
B
A
E
H
G
F
匙
G
D
C
C
F
E
B
H
A
I
櫂
B
C
A
D
A：全長
B：内長
C：口縁部厚(A)
D：口縁部厚(B)
E：全幅
F：内幅
G：底部長
H：底部幅
I：器高
J：深さ(A)
K：深さ(B)
〔椀〕
A：器高
B：口径
C：深さ
D：底部厚
〔匙〕
A：全長
B：柄部長
C：柄部幅
D：柄部厚
〔椀・鏝〕
A：全長
B：全幅
C：厚
D：突起部長
E：突起部幅
F：突起部高
〔櫂〕
A：全長
B：櫂部長
C：櫂部幅
D：櫂部厚
E：櫂部内長
F：櫂部内幅
G：櫂部内深
H：柄部長
I：柄部径

挿図 9　木器計測区分(3)



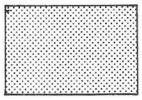

挿図10　高宮八丁遺跡における製材加工工程図

1．みかん割材(322、326、338)
　(1と2の中間的な位置にあたるものに335がある)
2．原材段階(336、337)
　(第1段階)
3．鍬祖形段階Ⅰ→鍬(用材)→広鍬Ⅱ類、狭鍬Ⅰ類
4．原材段階(333)：断面は完全にカマボコ形を呈する
　(第2段階)
5．鍬祖形段階Ⅱ→広鍬Ⅰ類、狭鍬Ⅱ類、又鍬・横鍬
6．板材(320、321)→木器(特定できず)

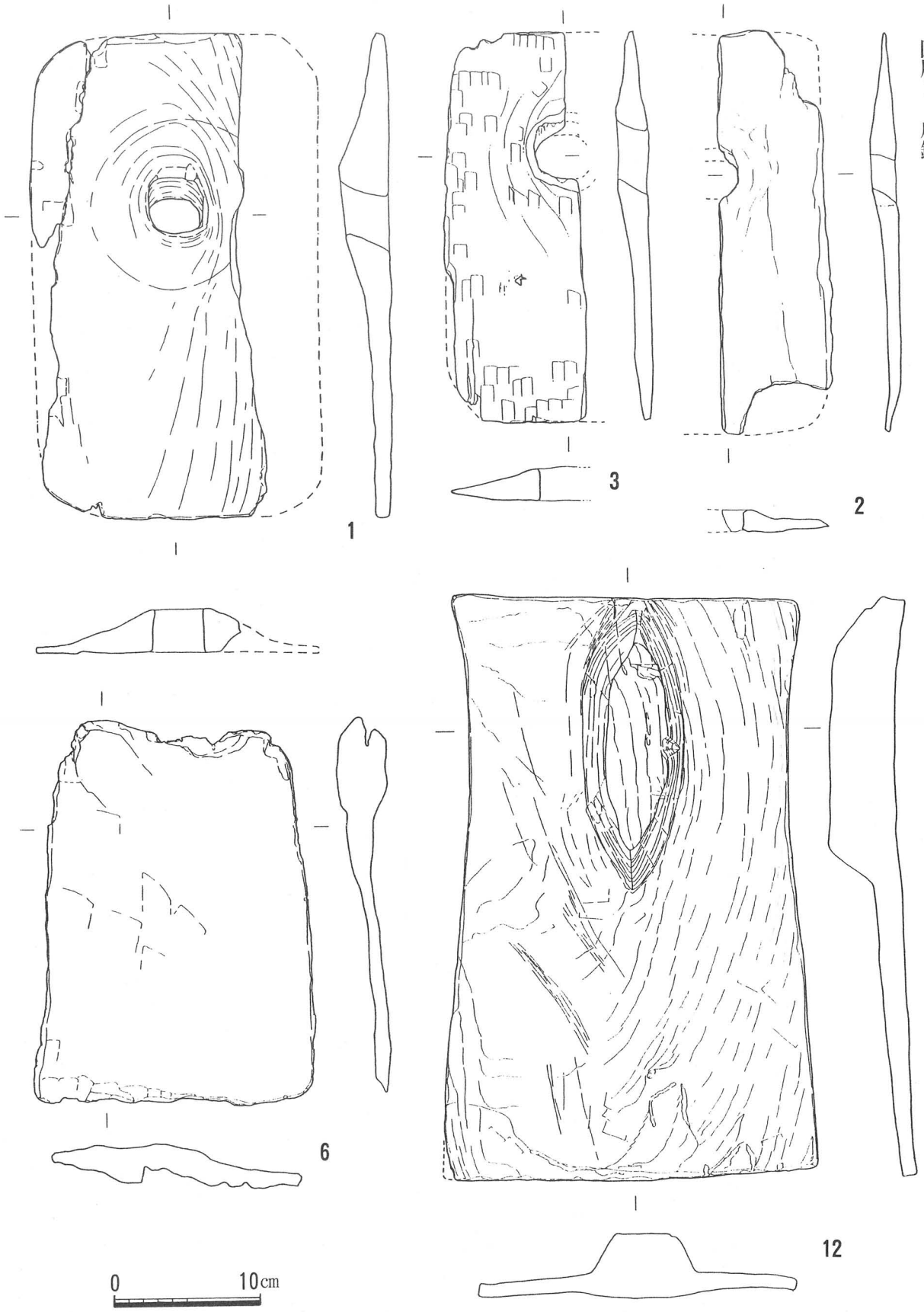



注記）この工程図は出土用材の分析であって、その背後にある弥生人の製材体系・習慣等を内包するものではない。1～6で示した過程も同時性を持つものを十分考えることができる。

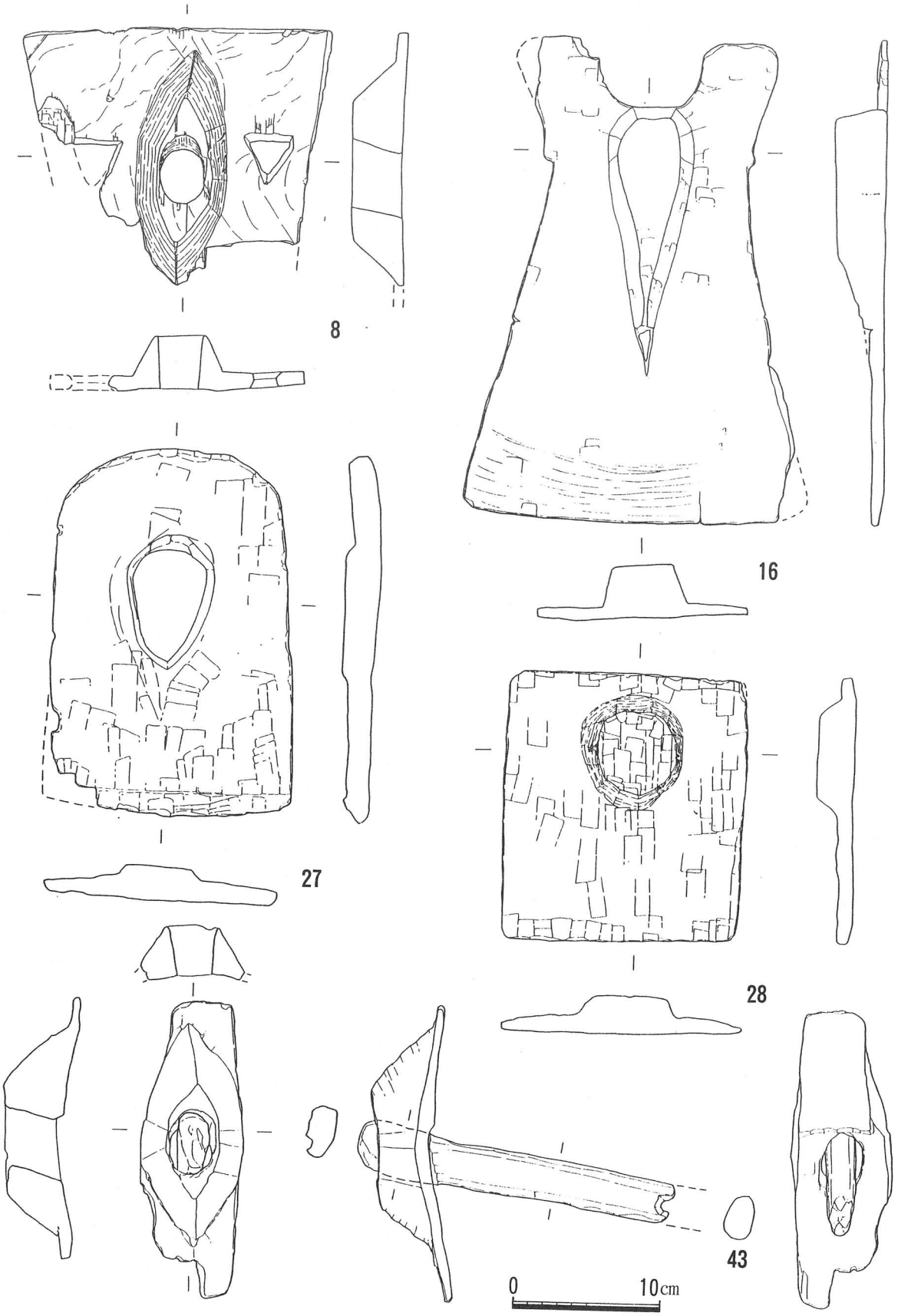
# 図　　版



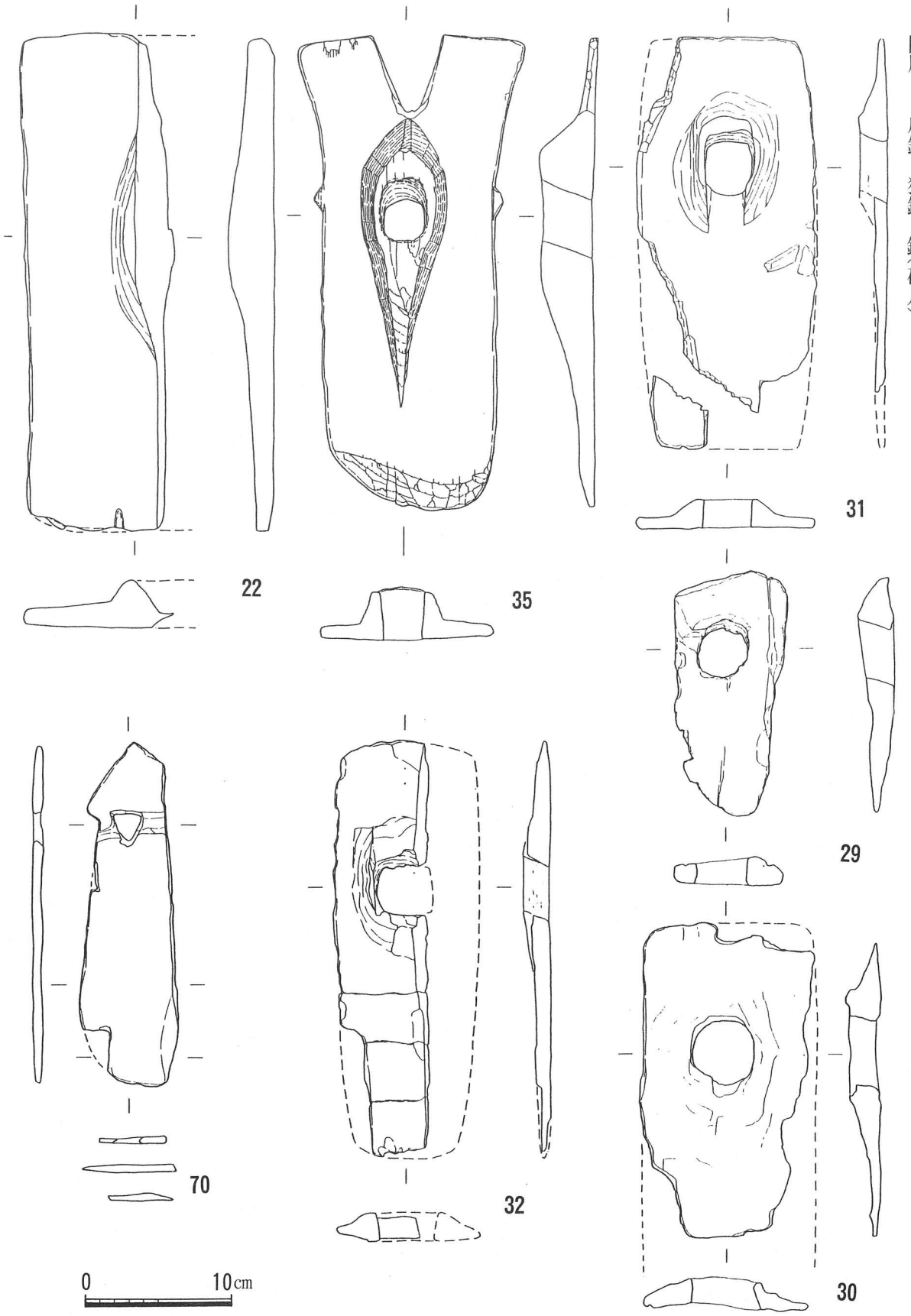
⇨炭化部分を示す。


1
2
3
6
12
0
10cm

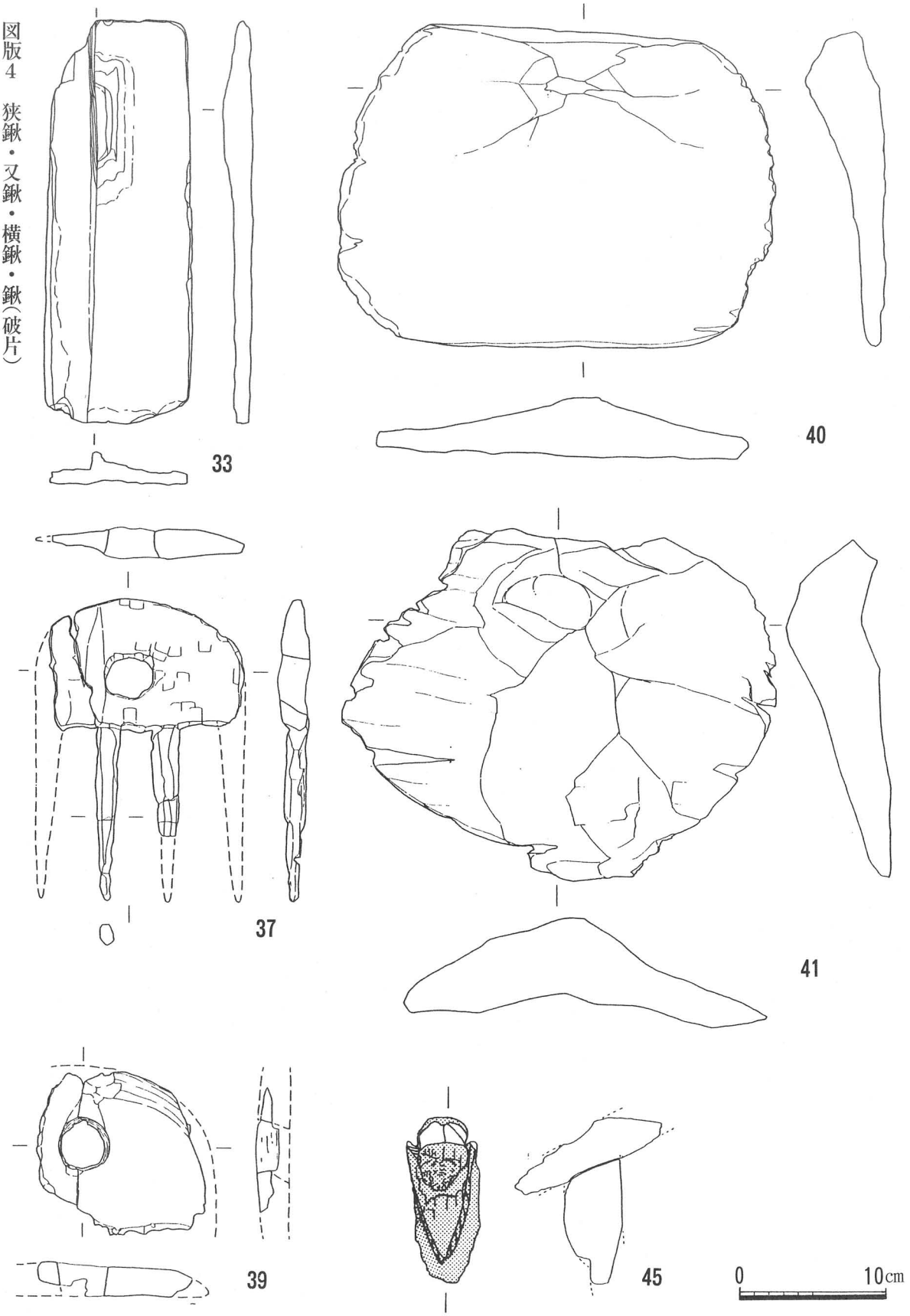
図版2　広鍬・鍬(破片)



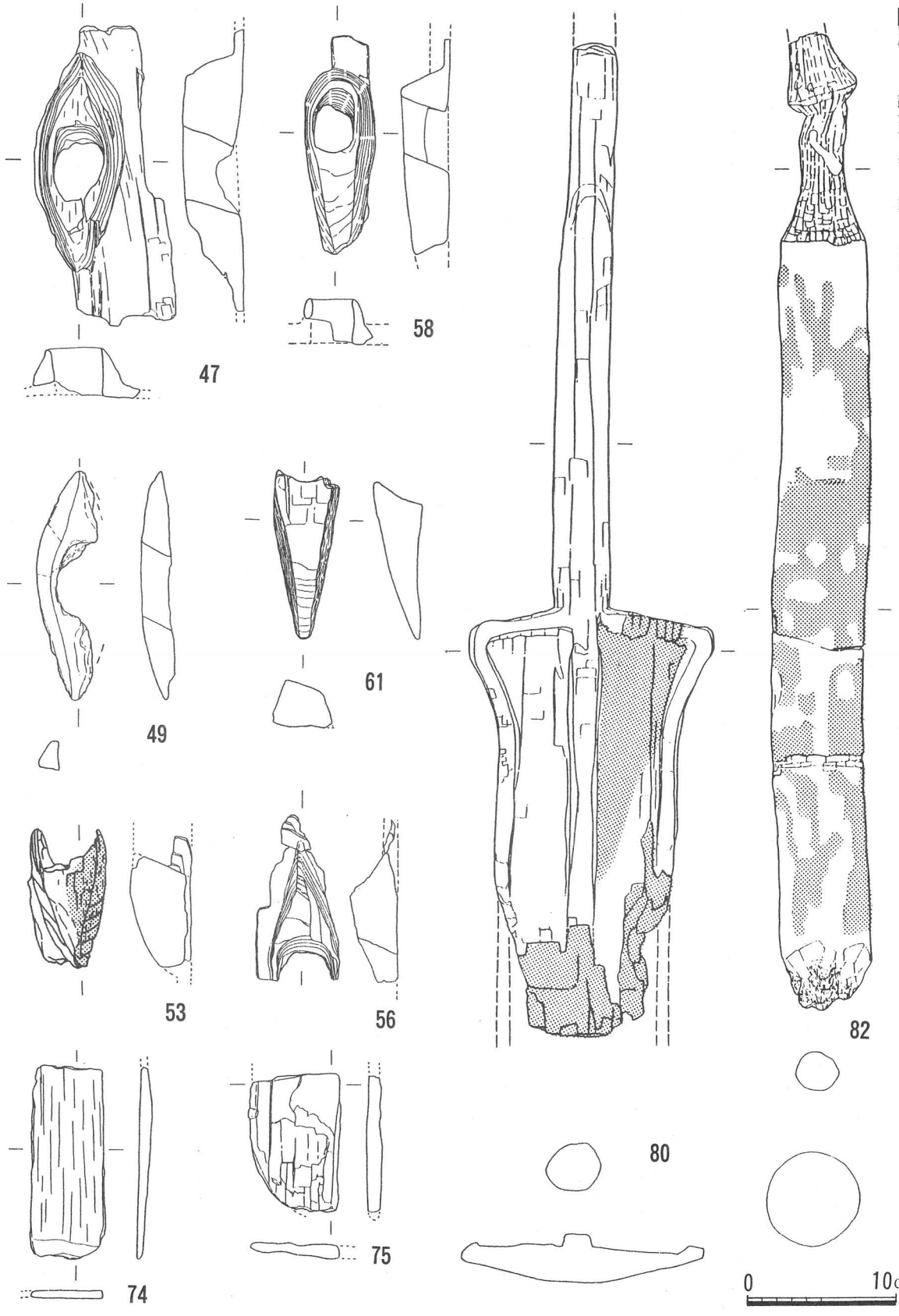
図版3　広鍬・狭鍬・鍬(破片)



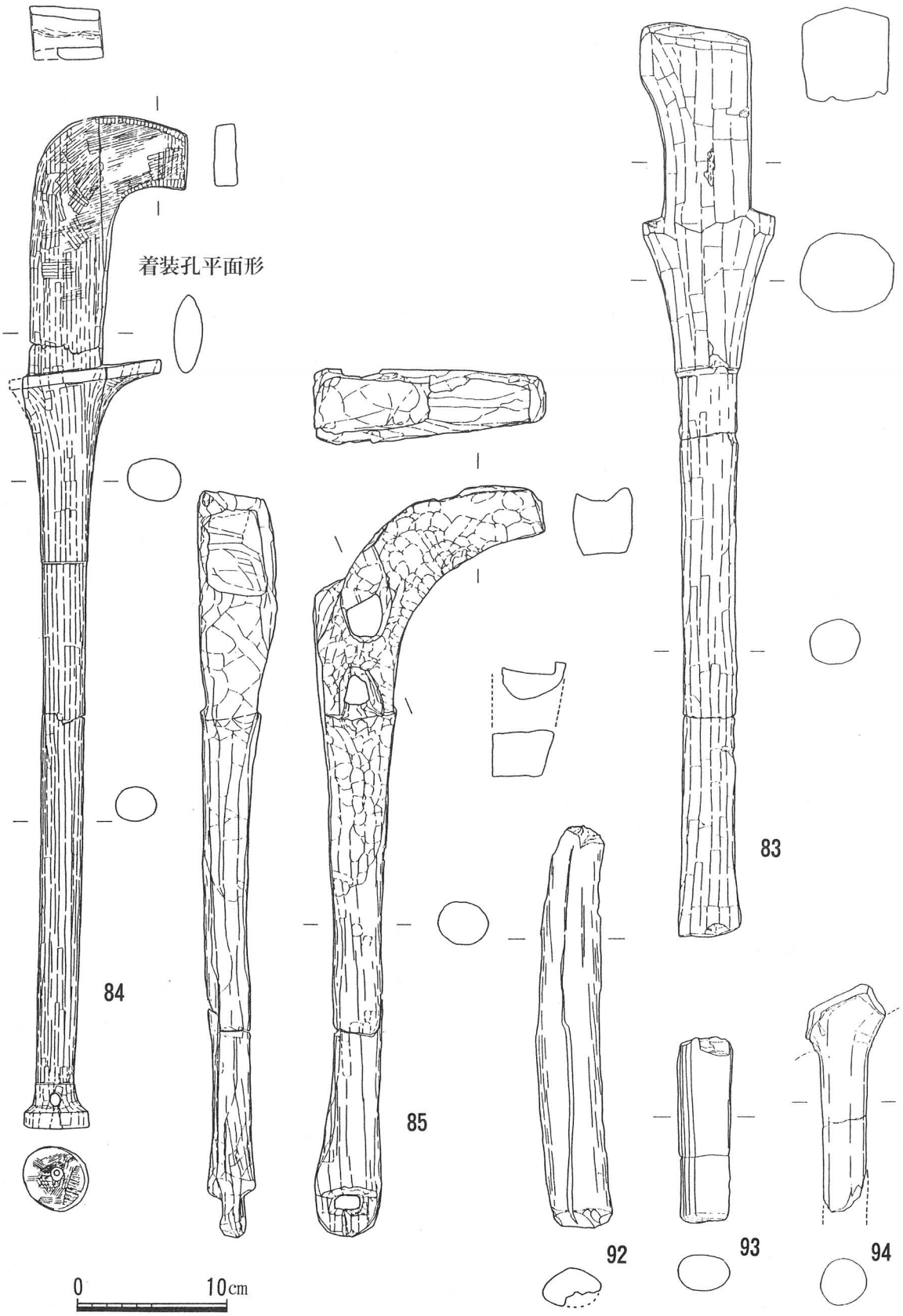
図版4　狭鍬・又鍬・横鍬・鍬(破片)

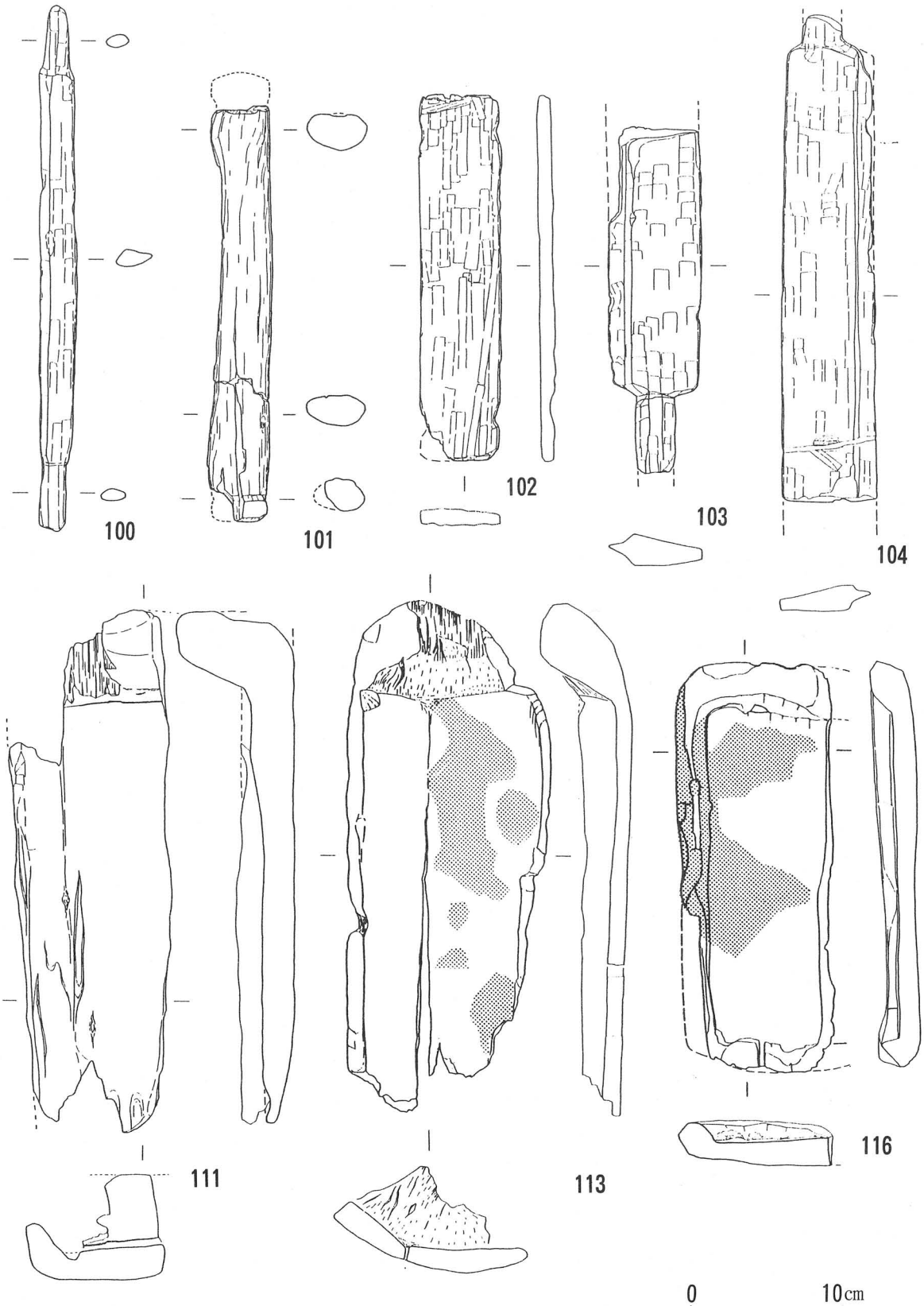


図版5　鍬(破片)・鋤・竪杵

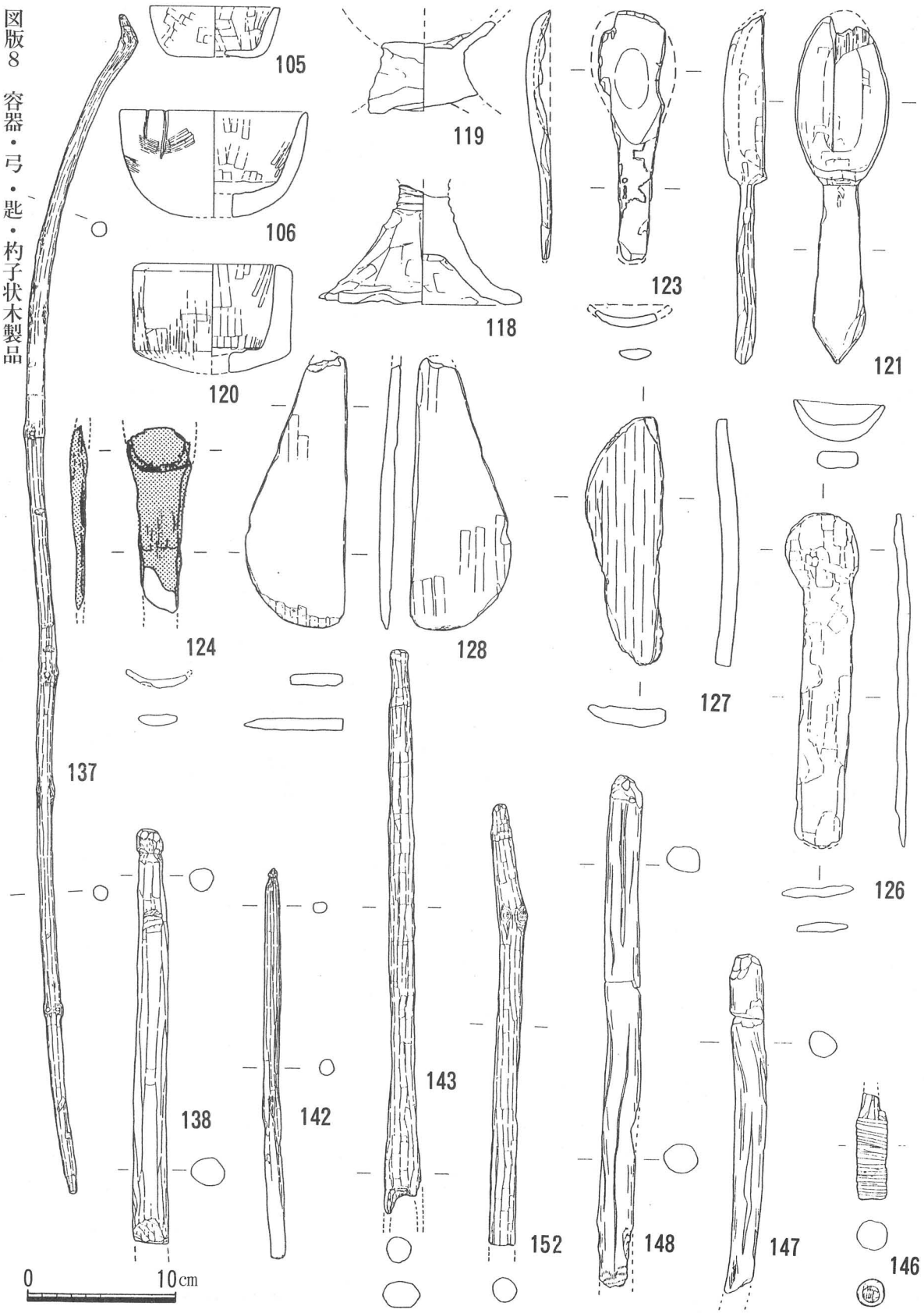


図版6　石斧柄

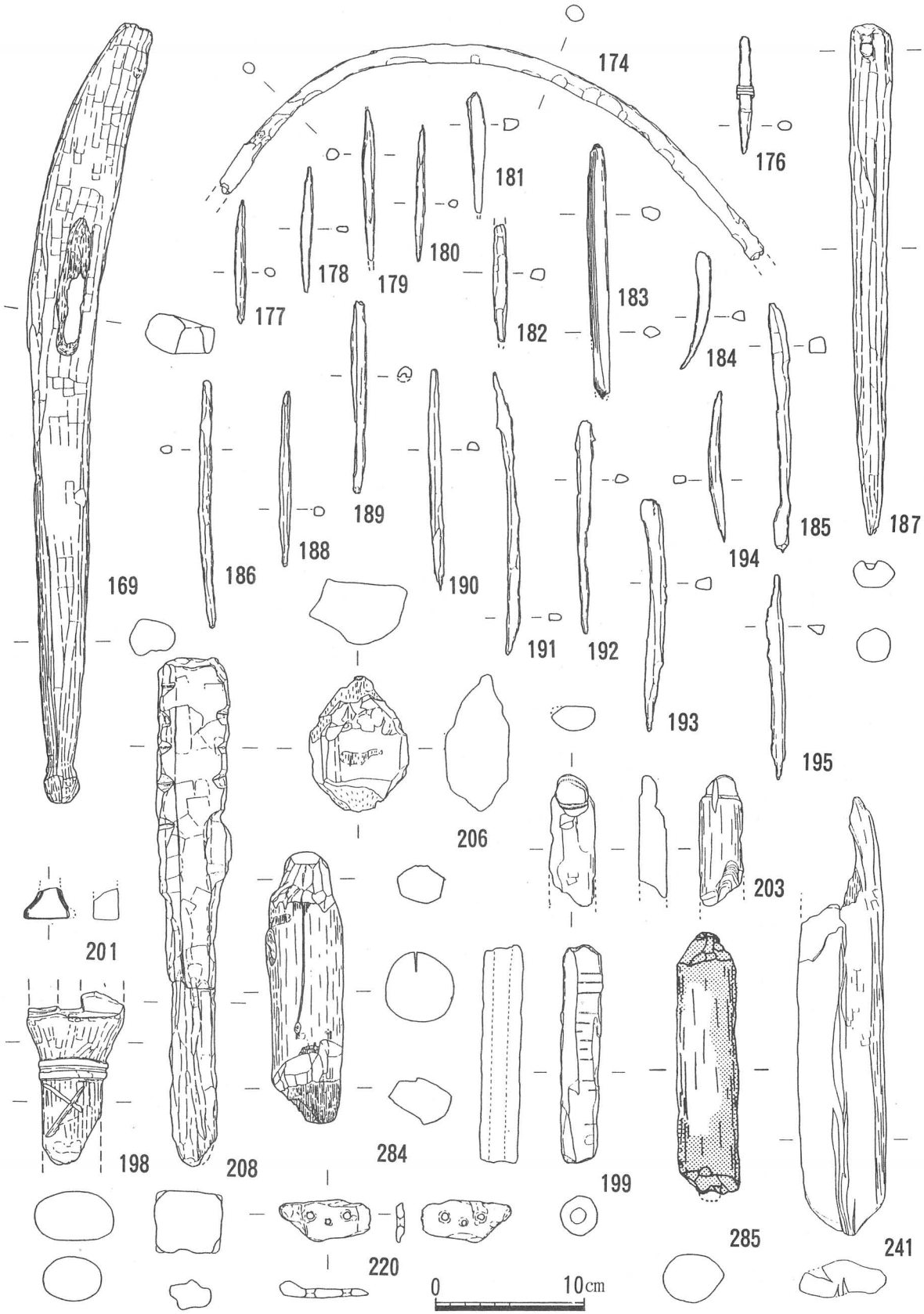



100
101
102
103
104
111
113
116
0
10cm

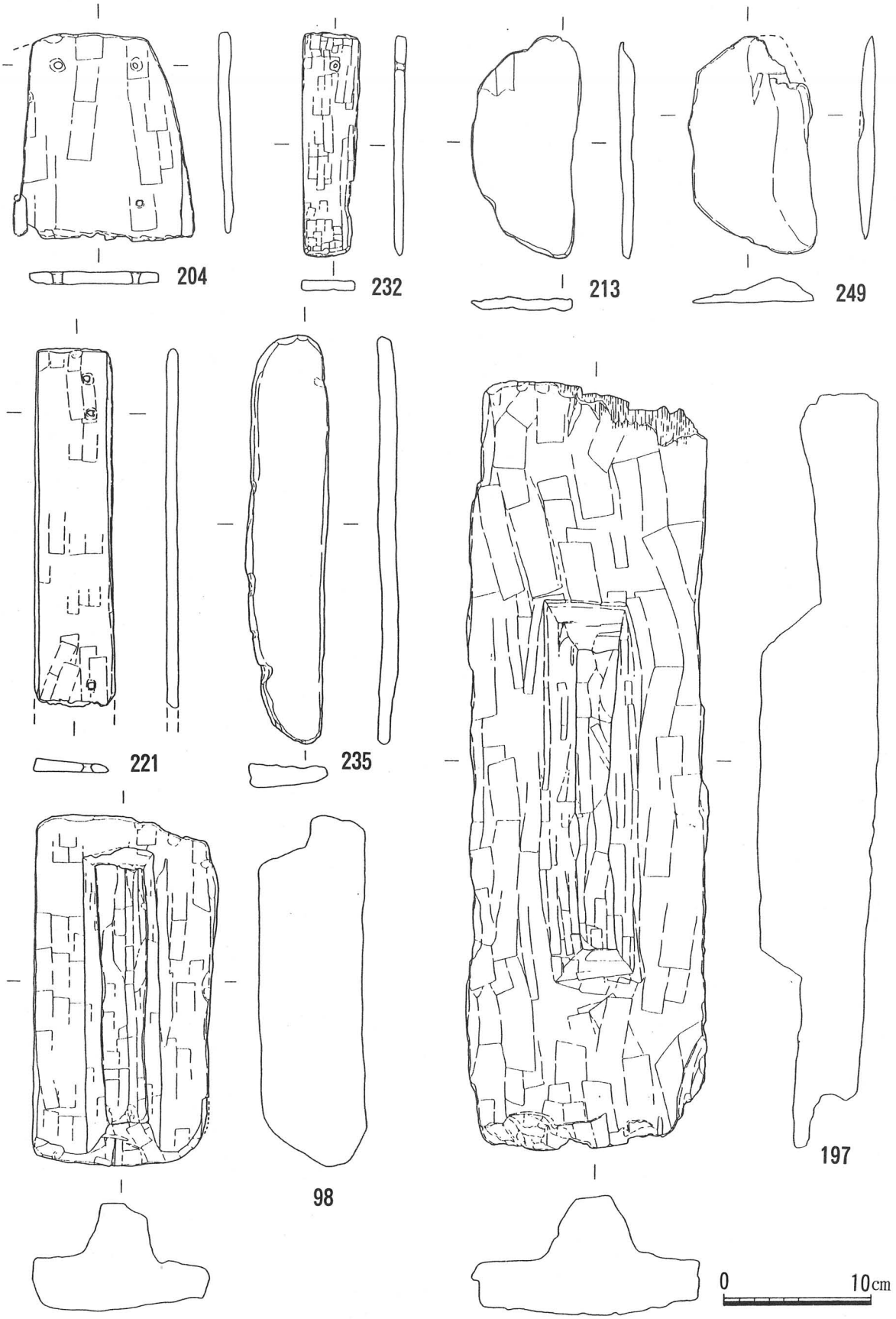
図版8　容器・弓・匙・杓子状木製品



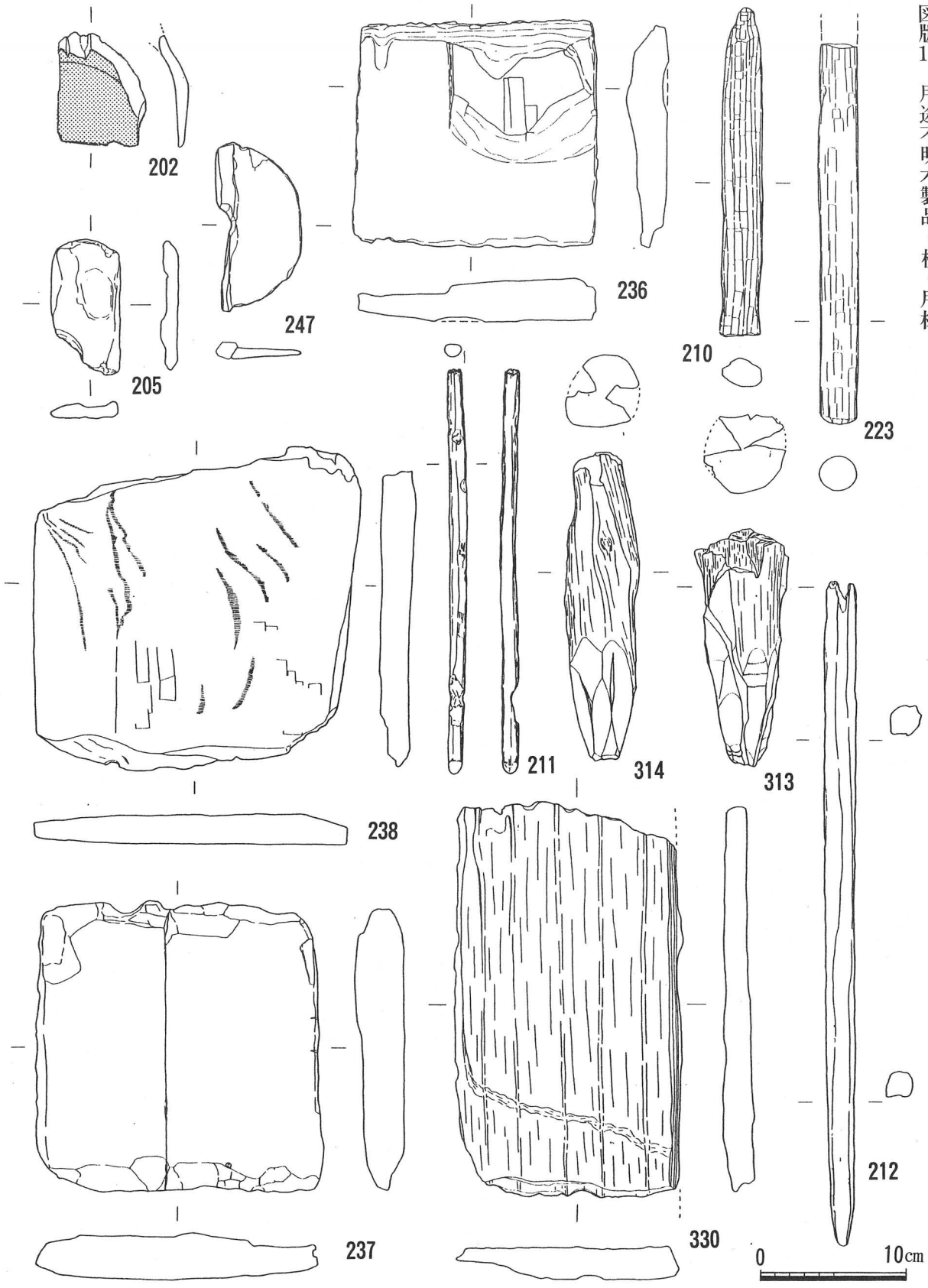
図版9　武器形・タモ枠・刺突具・用途不明木製品



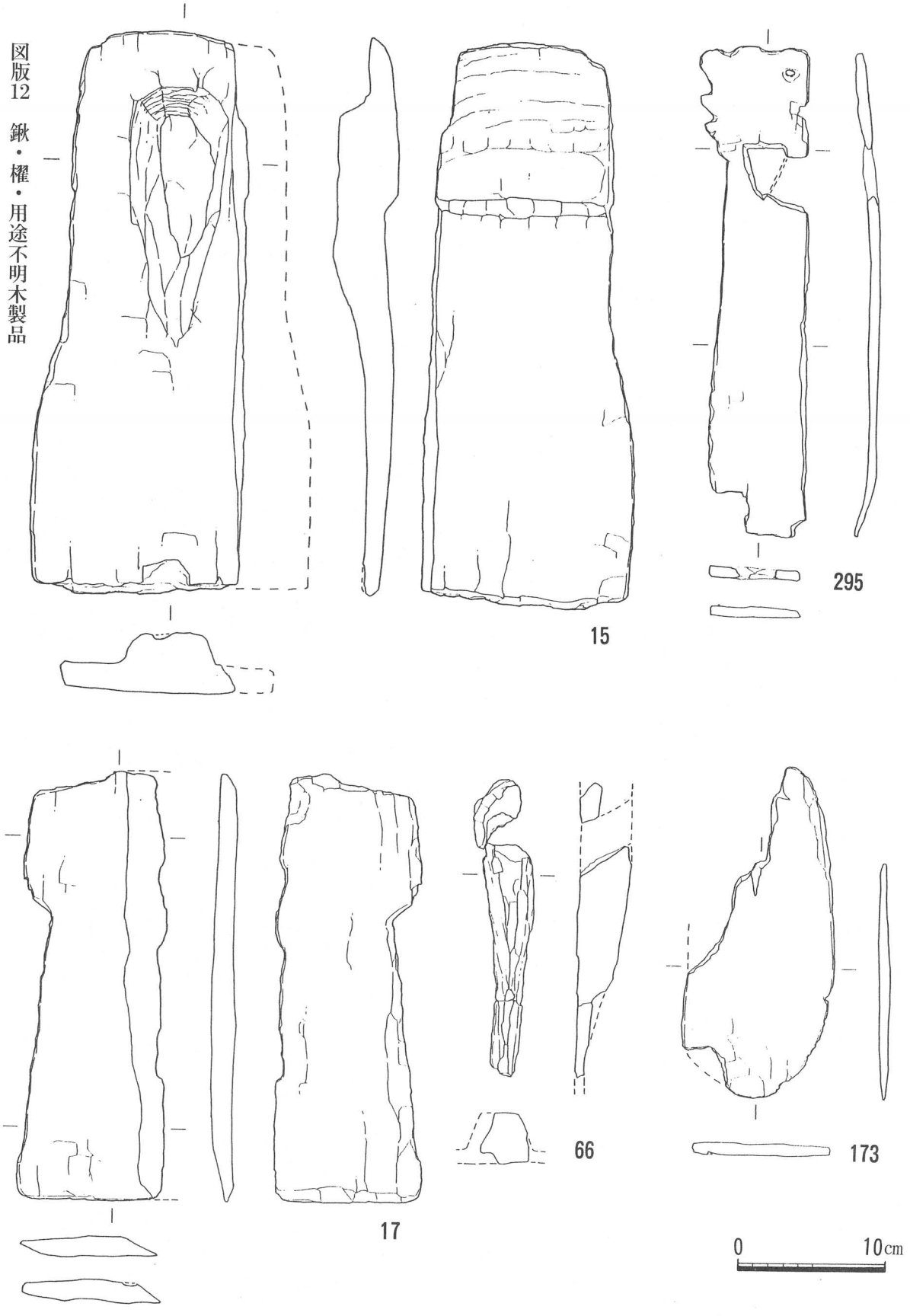
図版10　用途不明木製品・鍬・櫂



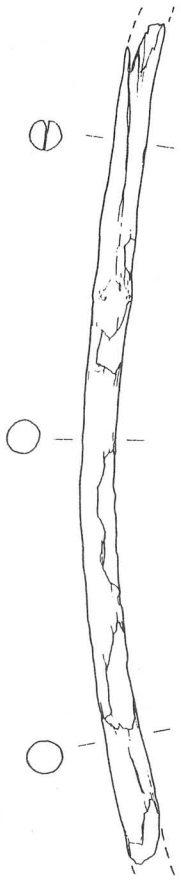
図版11　用途不明木製品・杭・用材



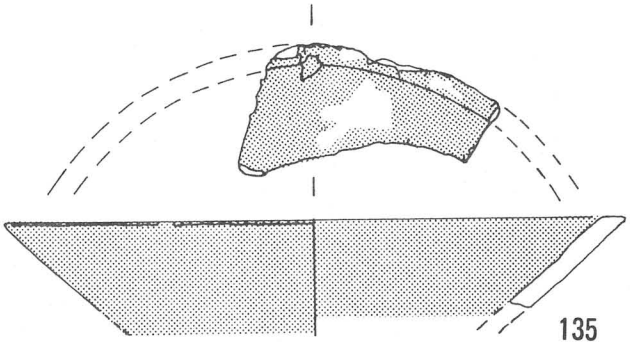
図版12　鍬・櫂・用途不明木製品



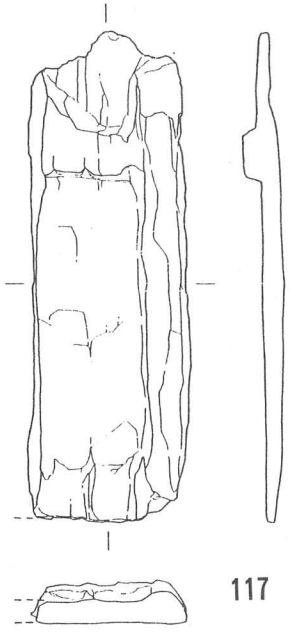
D－3区出土編物　344



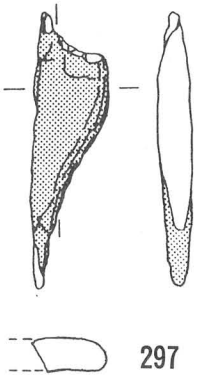
159



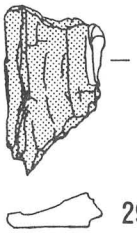
135



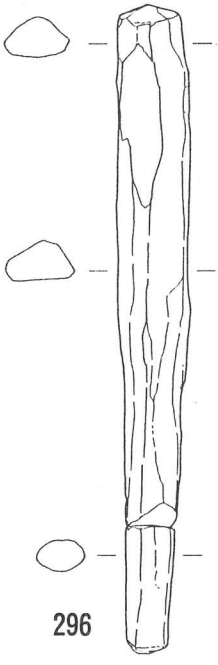
117



297

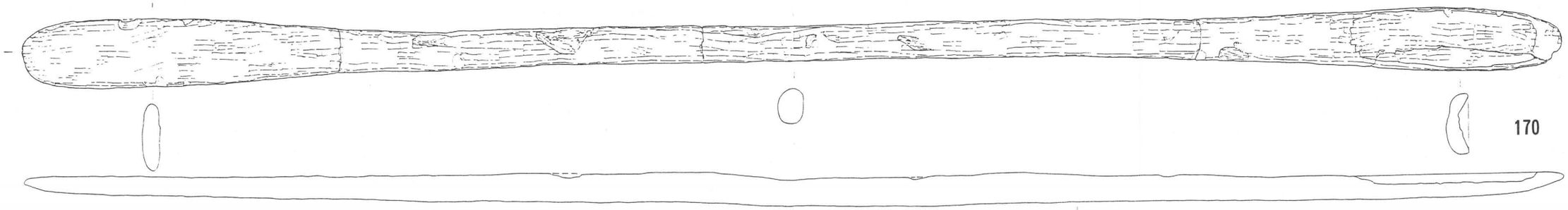


298

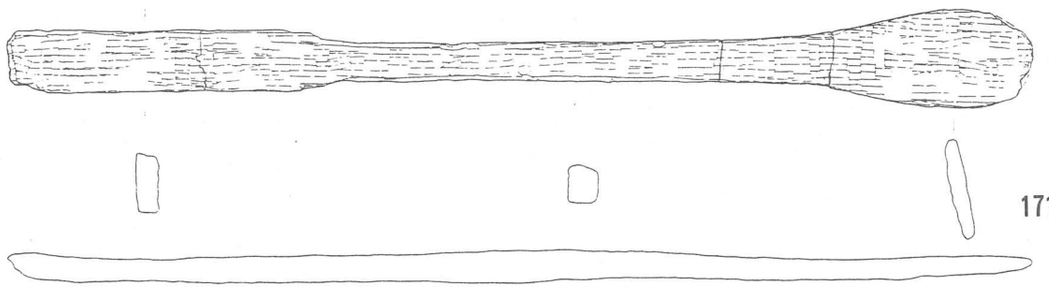


296

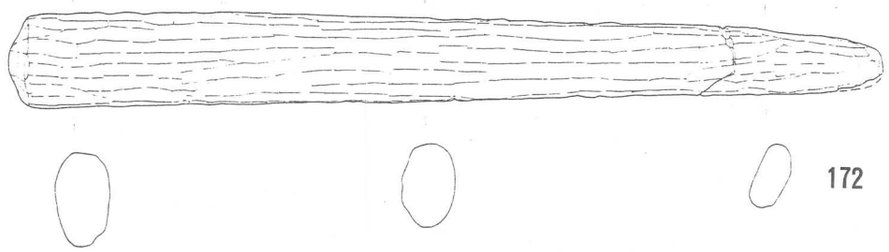
0　10cm



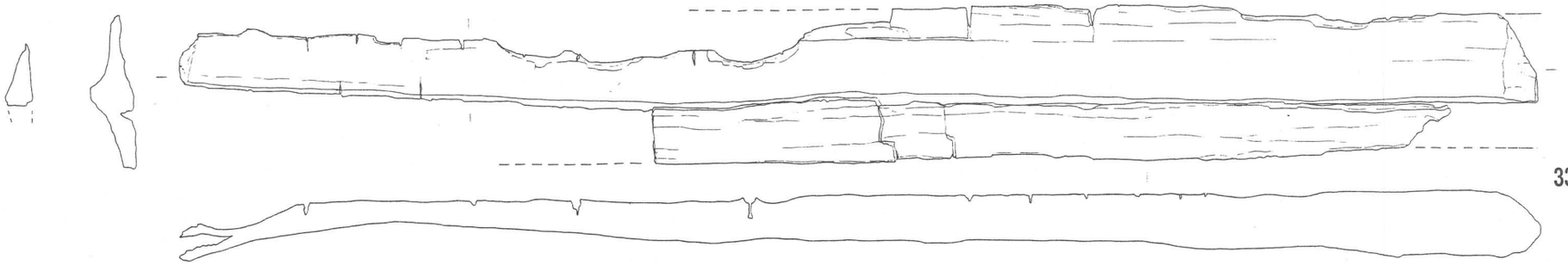
170



171



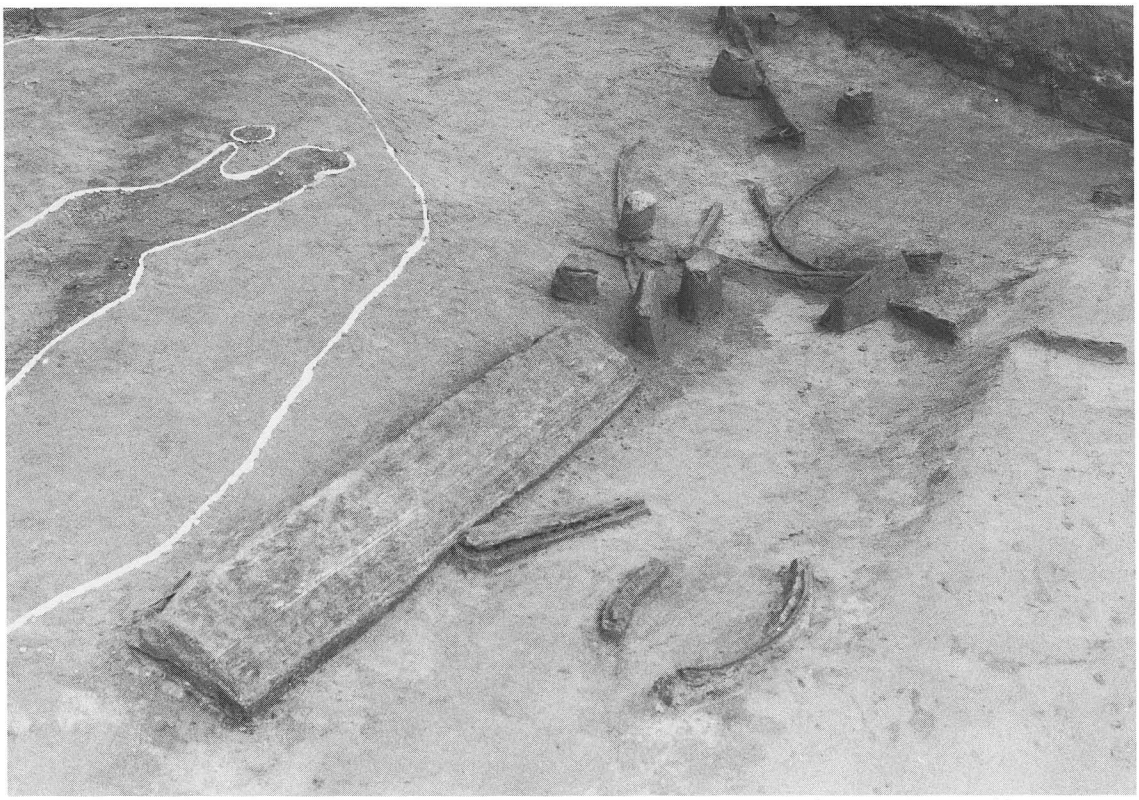
172



339

0　10cm

（E－7区落ち込み216〈北東より〉）

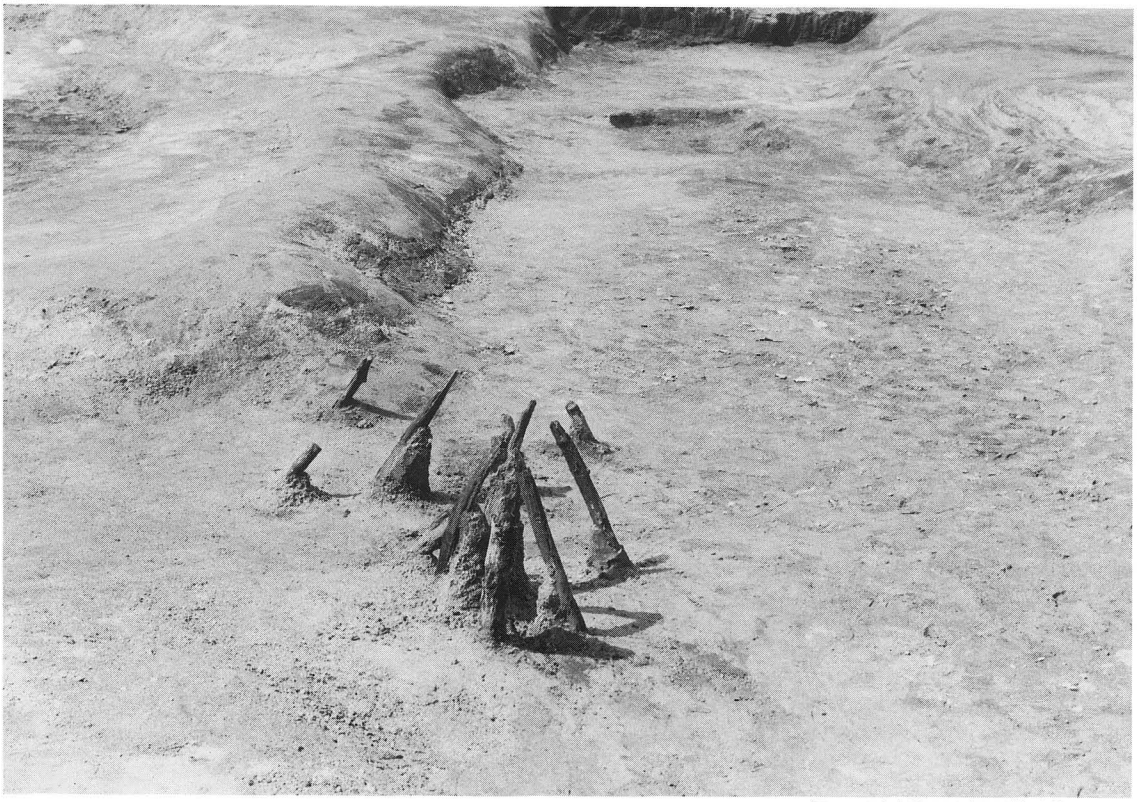


（F－8区溝101用材等〈西より〉）

（E—7・8区溝240〈西南より〉）

（E—7・8区溝240〈北東より〉）

（E－7・8区溝101〈西南より〉）

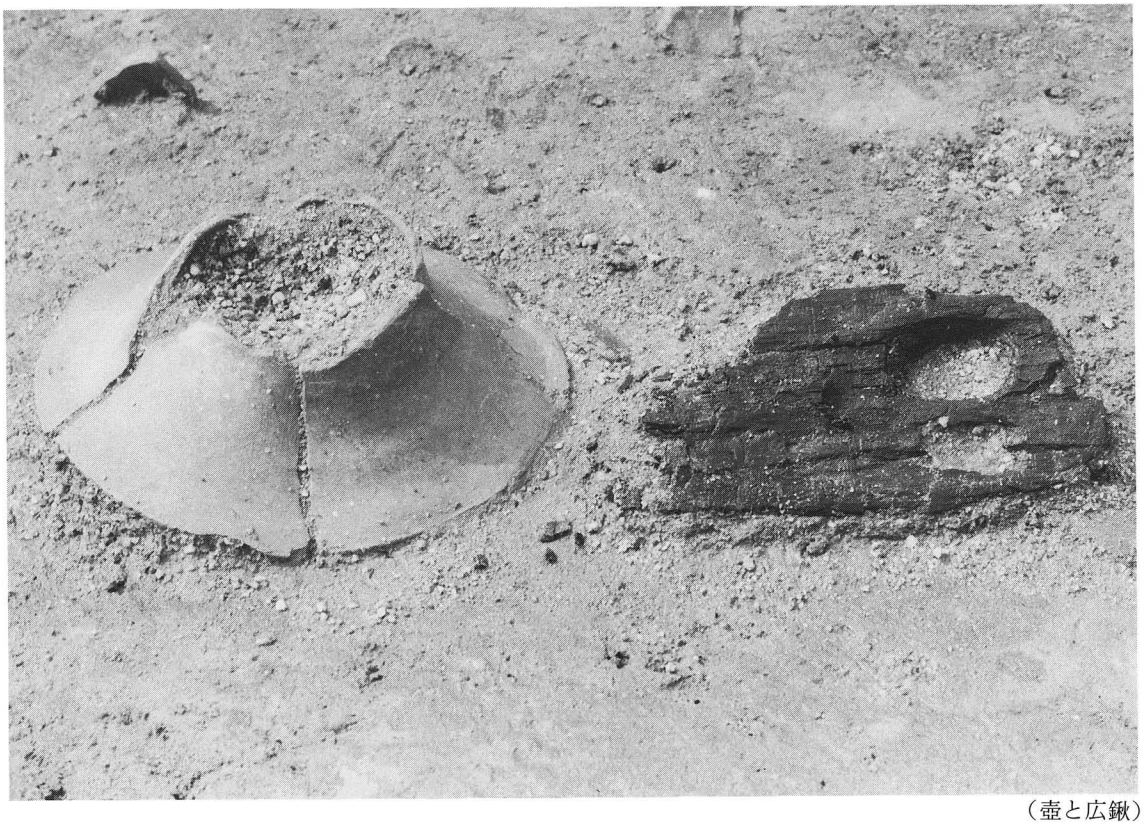


（D－7区溝101柵列状〈北より〉）

（C－3区落ち込み214〈上層〉）

（C－4区落ち込み214〈上層〉）

（広鍬〈Ⅰ〉）



（壺と広鍬）

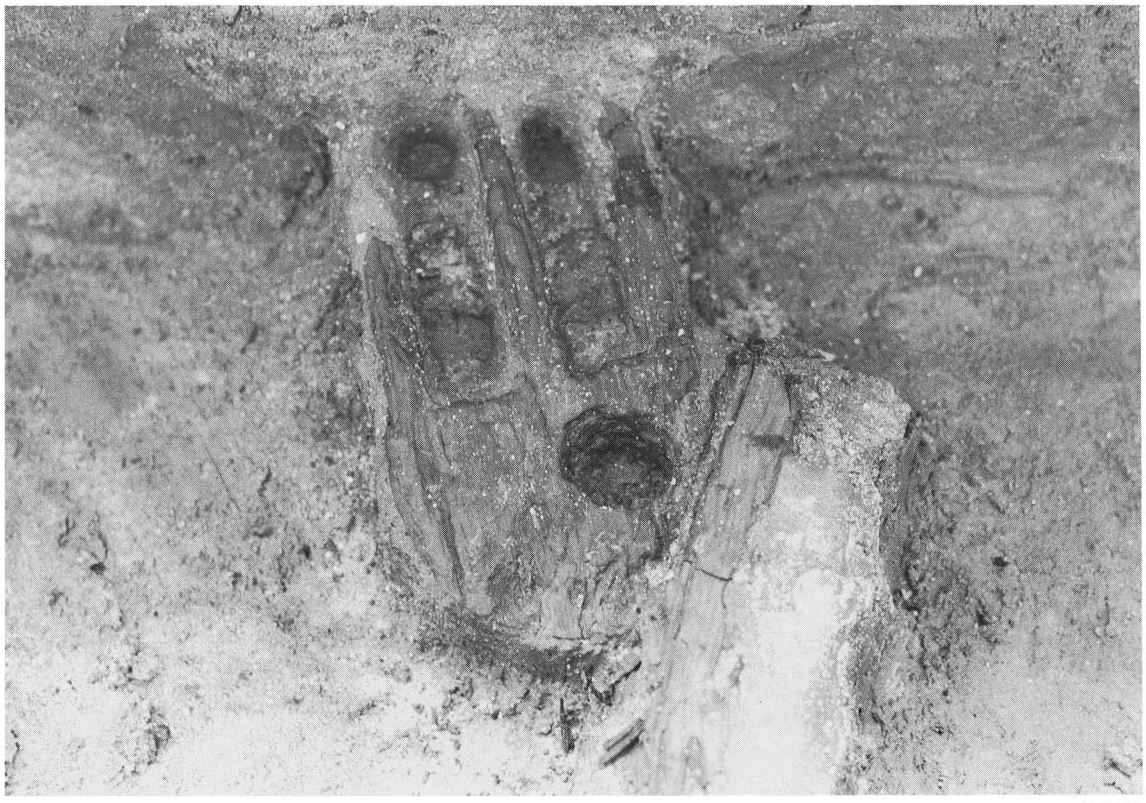
（広鏃〈Ⅱa〉未製品）

（広鏃〈Ⅱa〉）

（広鍬〈Ⅱb－b〉未製品）

（広鍬〈Ⅱc〉）

（狭鍬〈Ⅰb〉）



（又鍬）

（鍬装着状態出土状況）

（鍬装着状態出土状況）

（鋤）

（柱状片刃石斧柄）

（柱状片刃石斧柄）

（柱状片刃石斧柄）

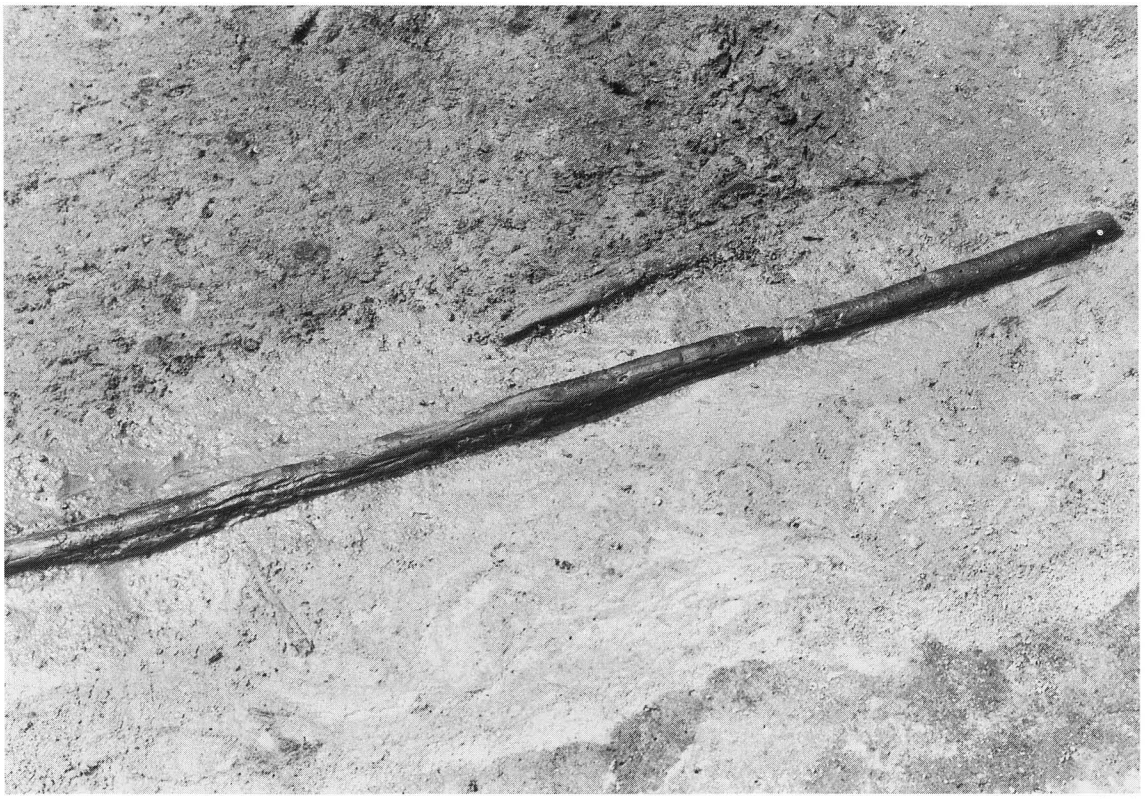
図版26　遺物出土状況

（容器）

（容器）

（容器）

（匙）



（弓）

（弓）

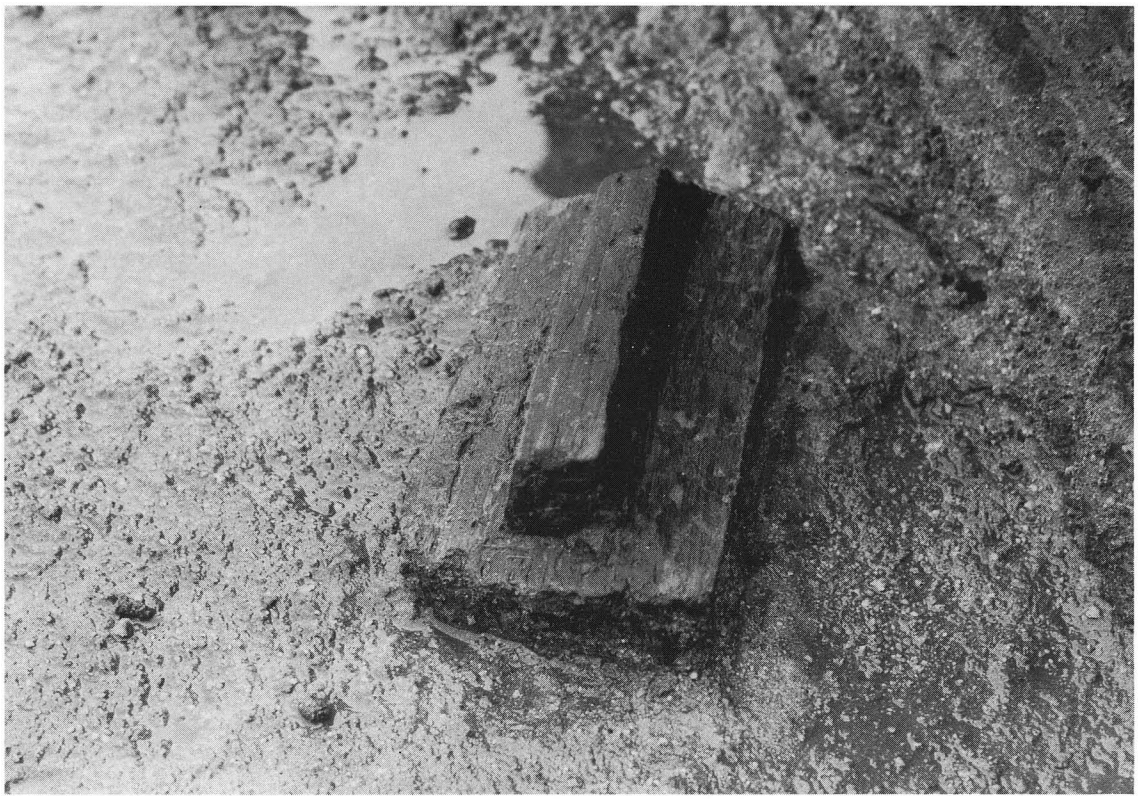
（飾り弓）

（武器形木製品）

図版30　遺物出土状況

（櫂）

（櫂）



（鍑）

（刺突具）

図版32　遺物出土状況

（竪杵）

（F－9区井戸枠検出状況）

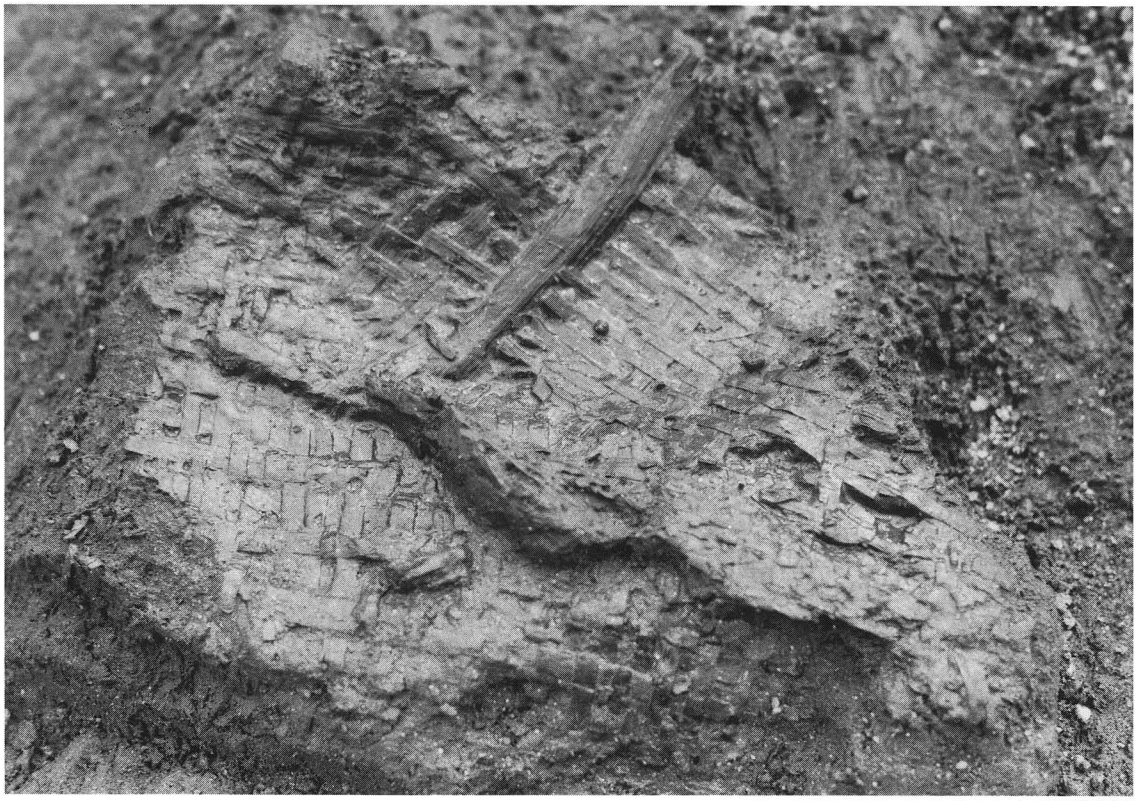
（容器未製品と用材）

（用材）

（D－4区溝105石斧柄等）

（D－4区編物・タモ枠・つる等）

（編物）

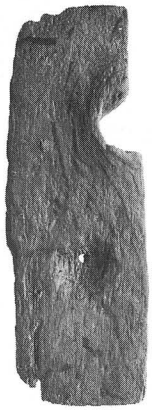


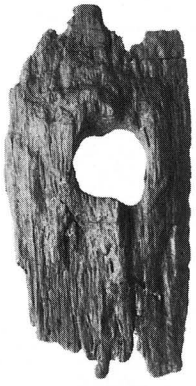
（編物）

図版36　広鍬

1

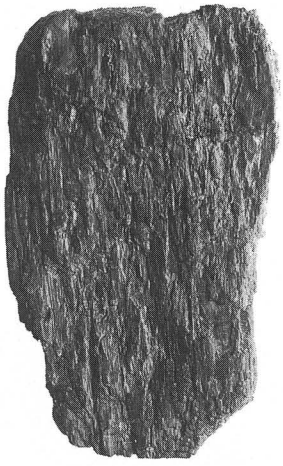
2

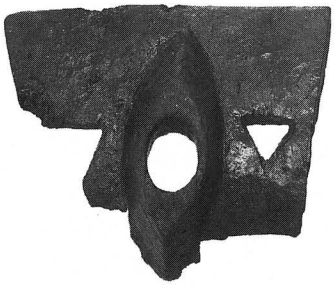

3


4

5

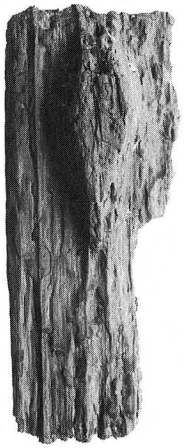
6


7

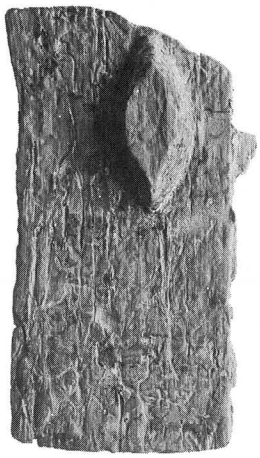

8

9

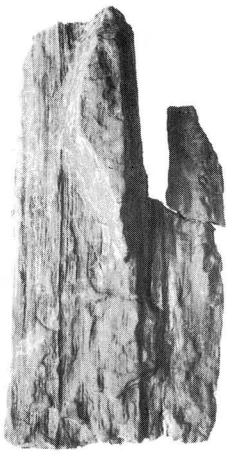
10


11

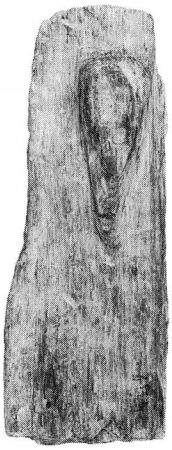
12



13



14



15（表）

15（裏）

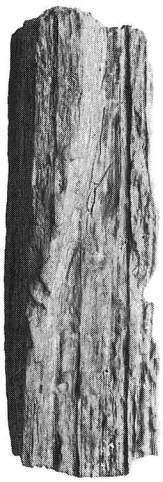
15（裏面細部）

16

18

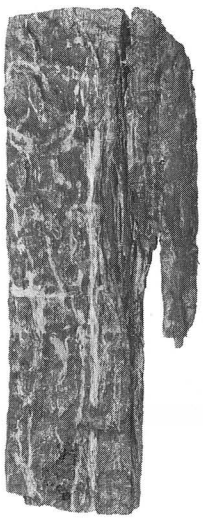
19

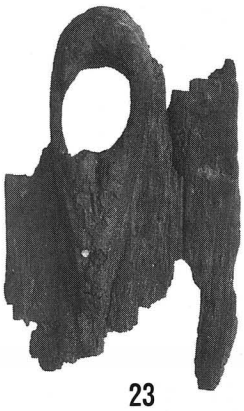
20



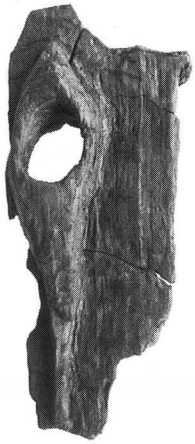
21

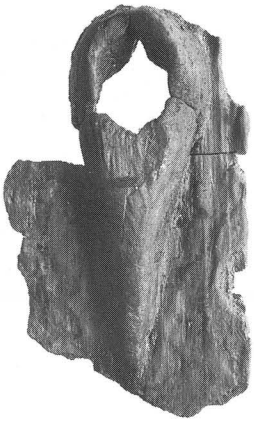
図版38　広鍬・狭鍬


22


23

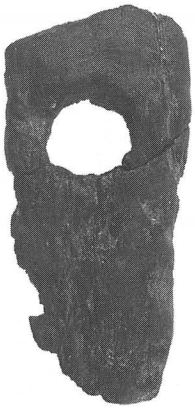
24

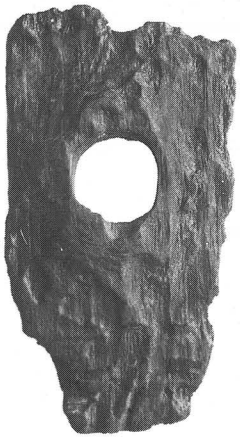

25

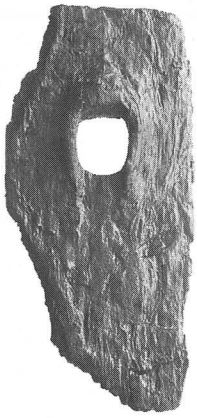

26

27

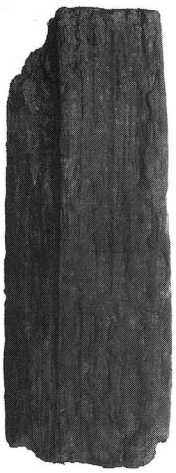
28


29


30

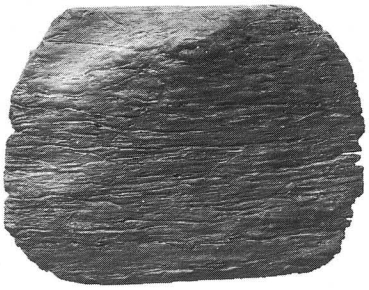

31

32



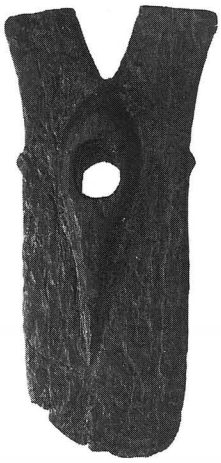
33

34

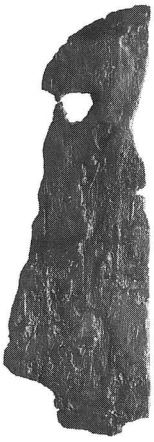


40

41



35



36

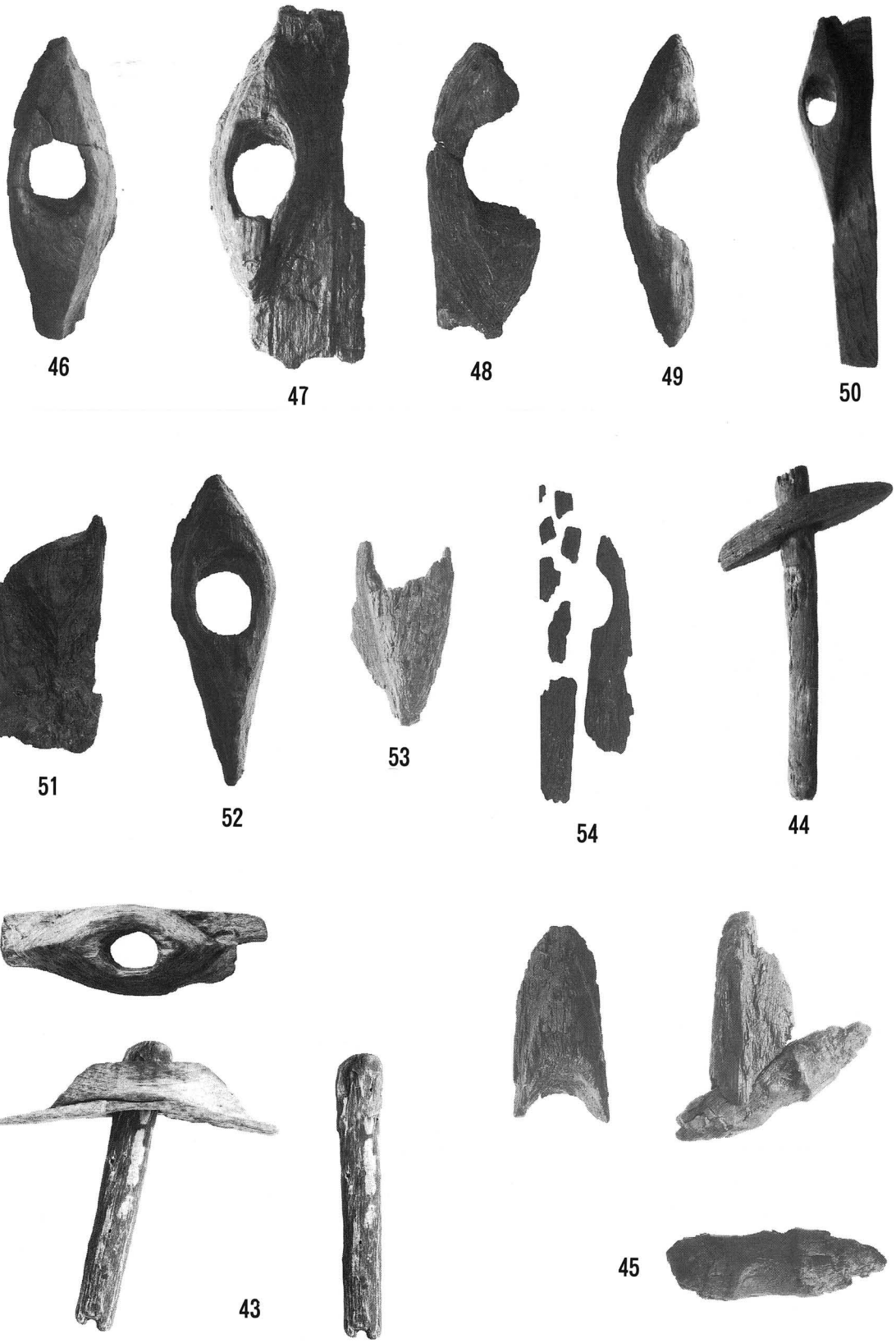
42

37

38

39

図版40　鍬（破片）



57

58

59

60

61

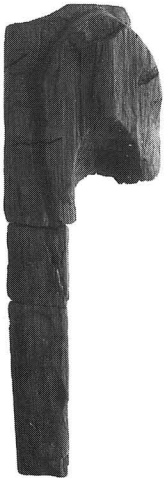
62

63

64

65

66


67

68

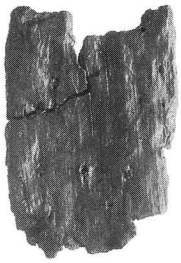
69

図版42　鍬(破片・用材)・鋤

70

71

72


73

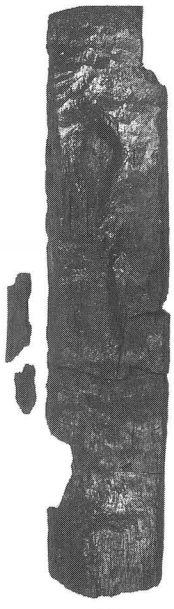
74

75

76

77

78


79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

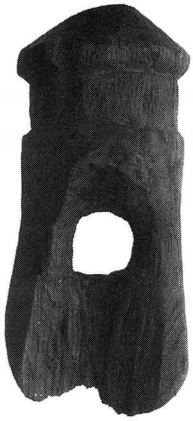
91

図版44　石斧柄・砧・鏝・織機具

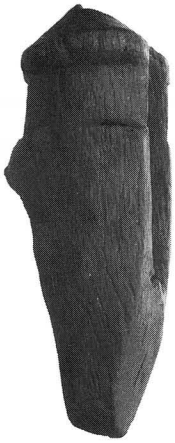
92

93

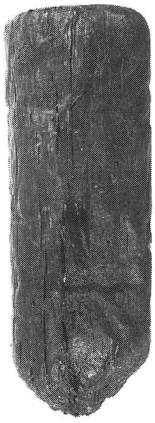
94



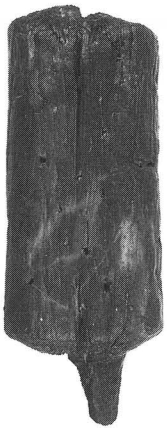
95



95′

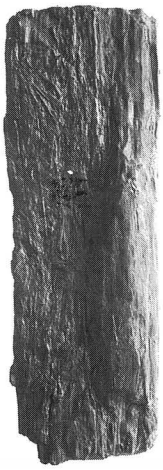


96



97

98



99

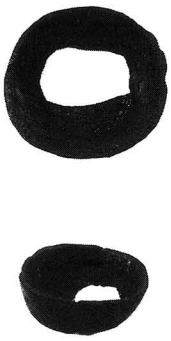
100

101

102

103

104

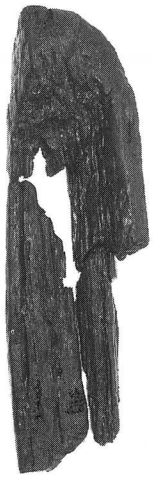


105

106

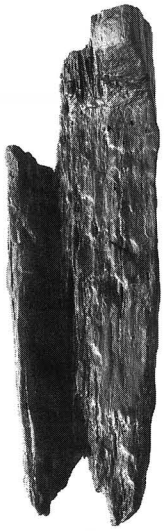
107

108



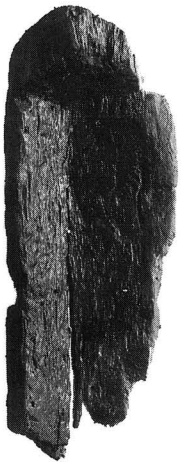
109

110



111

112

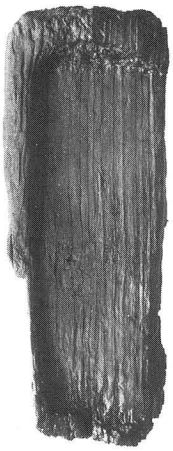


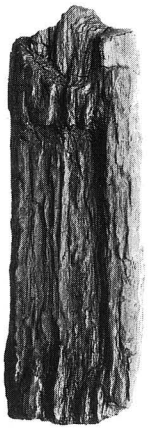
113

114

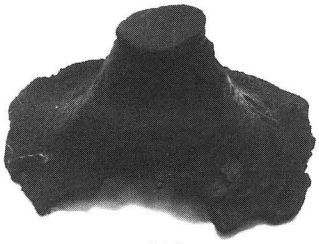
115

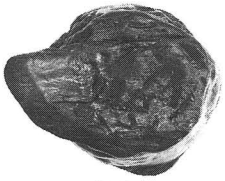
図版46　容器・高杯・匙・杓子状木製品

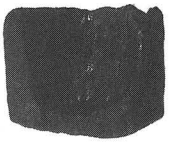

116


117

118′


118


119′


120

119

136

121

122

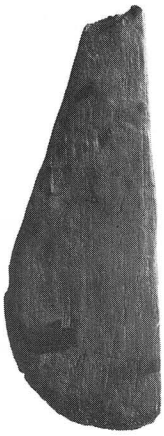
123

124

125

126

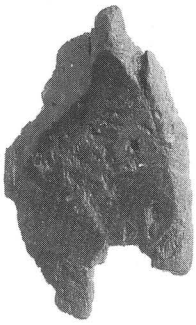
127


128

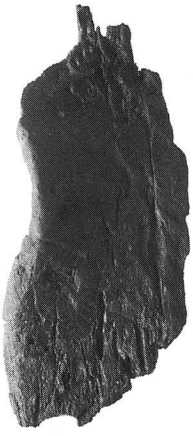
129

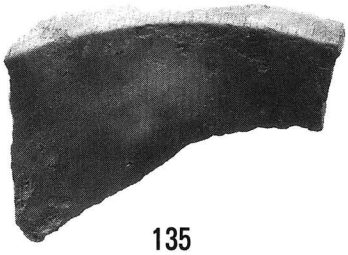
130

131

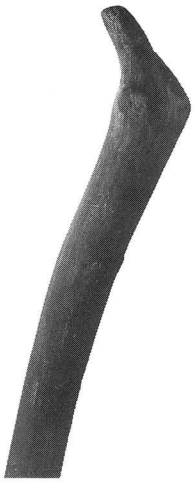

132

133


134

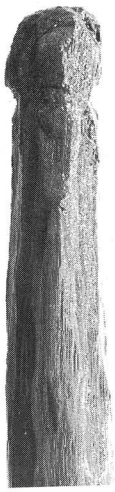

135

137


137 a（細部）

137 b（細部）

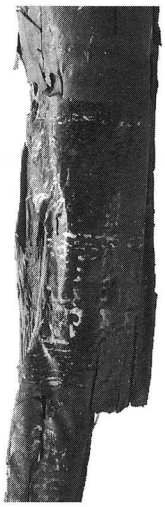
138


138（細部）

139

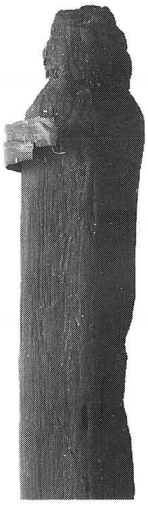
139 a（細部）

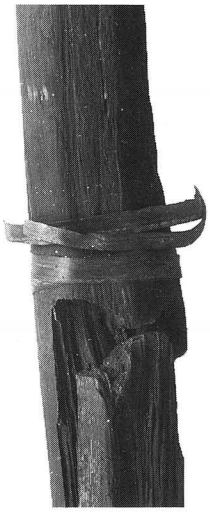
139 b（細部）


139 c（細部）

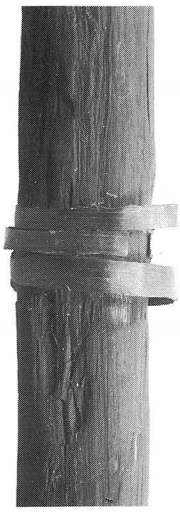
140

141


141 a（細部）


141 b（細部）

141 c（細部）


141 d（細部）

142

142（細部）

143

143 a（細部）

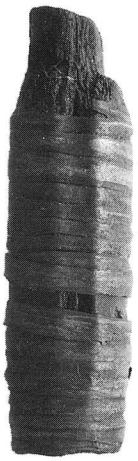
143 b（細部）

144

144（細部）

145

145（細部）



146

147

147（細部）

148

149

149 a（細部）

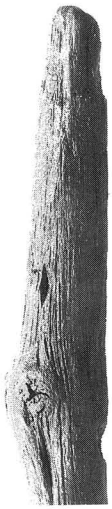
149 b（細部）

図版50 弓

150

151

152


152（細部）

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

170

170 a

170 b

170 c

170 d

171

172

175

175（細部）

174

176

177

178

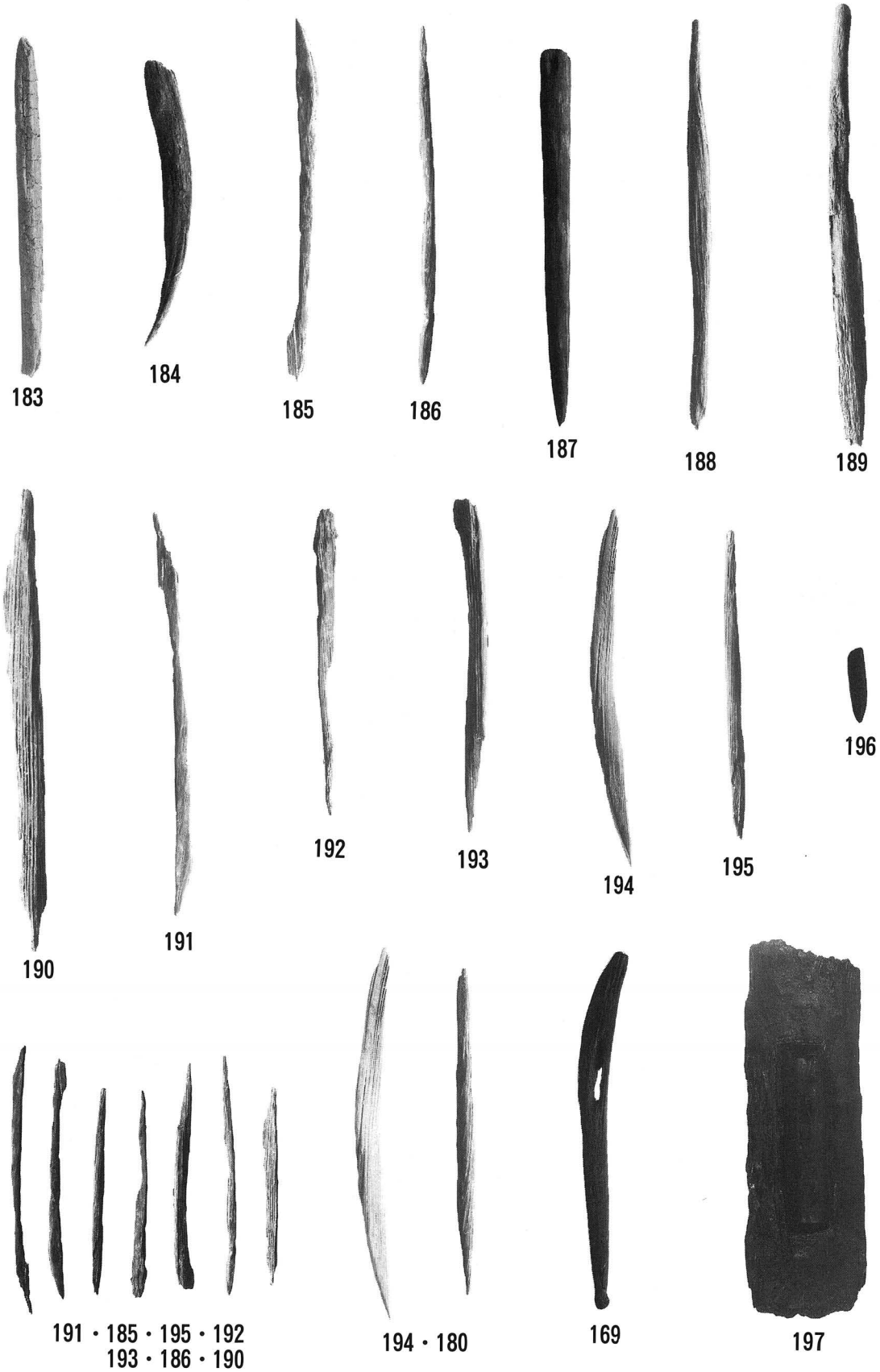
179

180

181

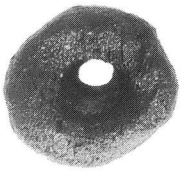
182

図版52　刺突具・武器形木製品・耰

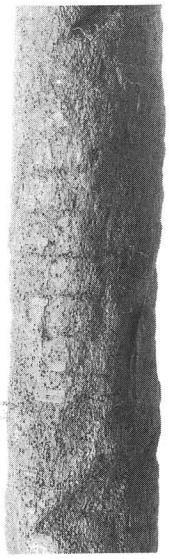


198

199



199（下面）

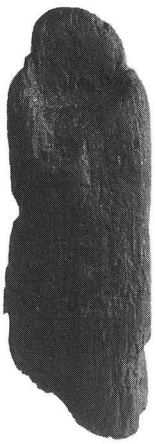


199（細部）

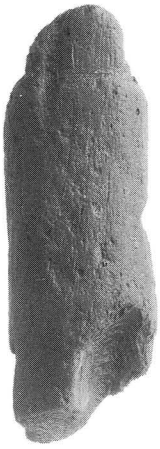
200

201

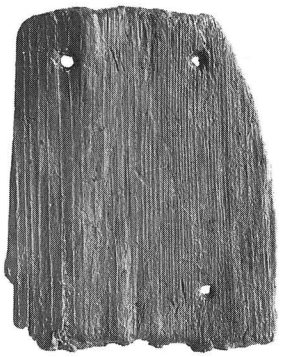
202



203



203′



204

205

206

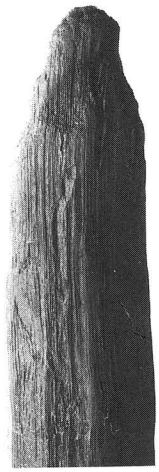
207

図版54　用途不明木製品

208

209

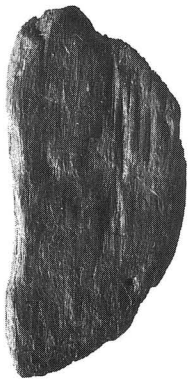
210


210（細部）

211

211（細部）

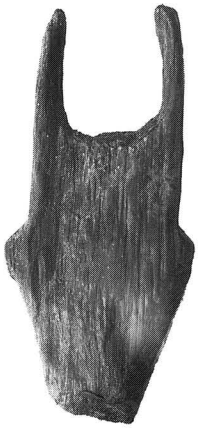
212


213

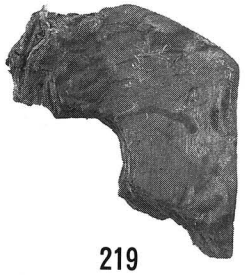
214

215

216


217

218


219

220

221

222

223

224

225

226

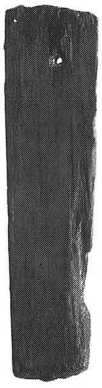
227

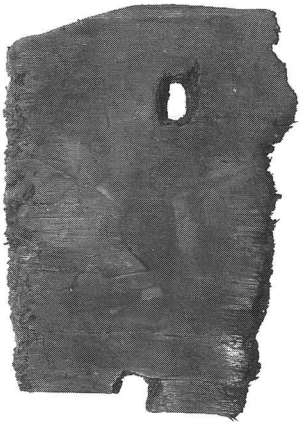
228

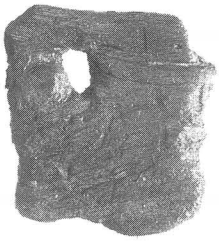
229

230

231

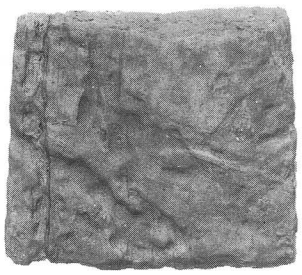

232


233


234

235

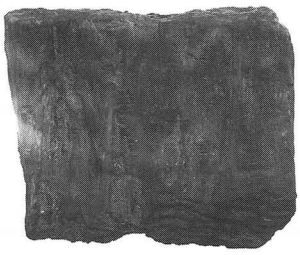
図版56　用途不明木製品



236

237

238



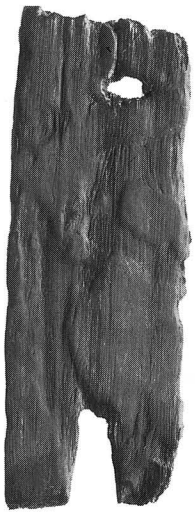
239

240

241

241（細部）

242



243

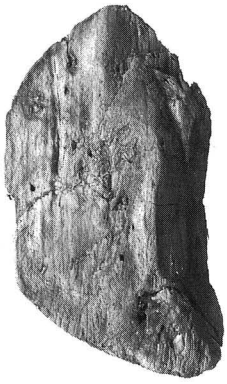
244

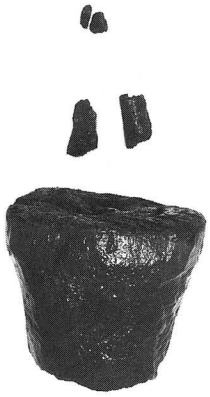
245

246

247

248


249


250

251

252

253

254

255

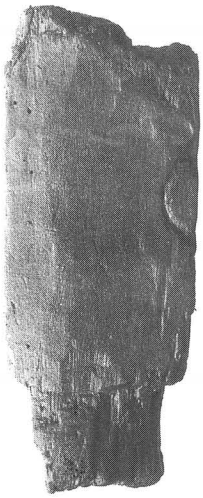
256

257

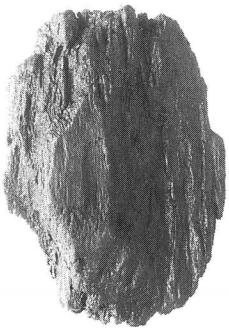
258

259

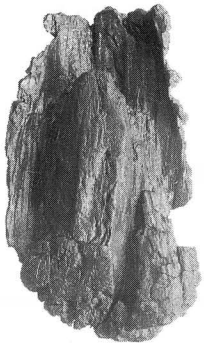
図版58　用途不明木製品



260

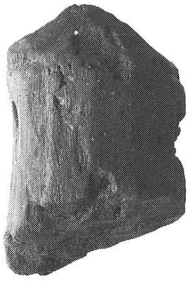


261

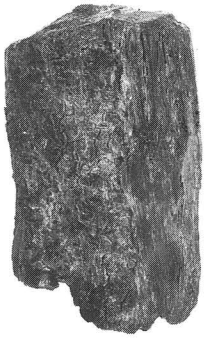


262

263



264



265

266

267

268

269

270

271

272

273

274

275

276

277

278

279

280

281

282

図版60　用途不明木製品

283

284

284（細部）

285

286

287

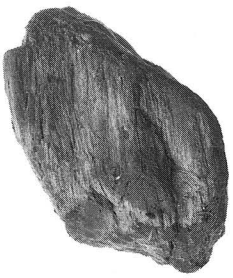
288

289

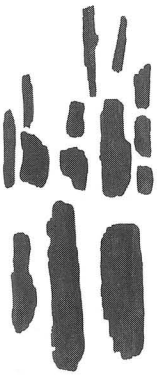
290

291

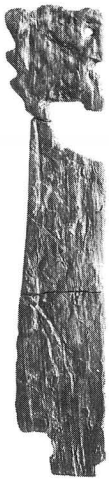
292



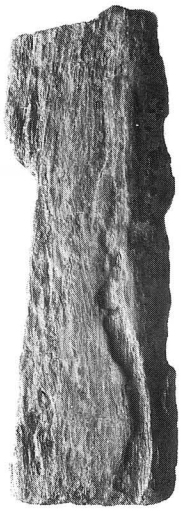
293

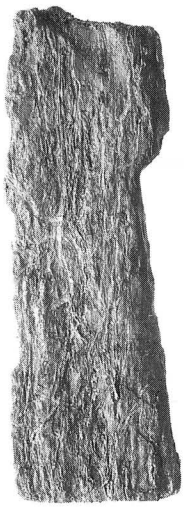


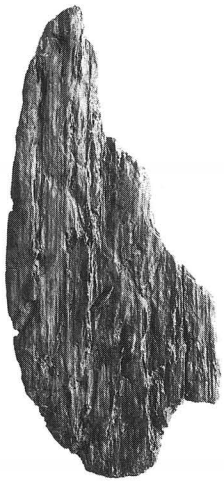
294


295

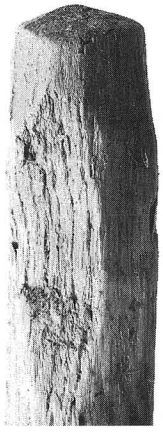
295（細部）

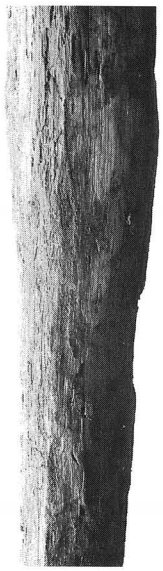

17


17′

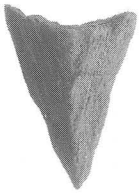

173

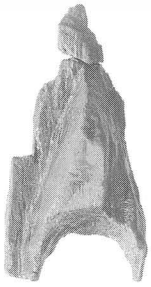
296


296 a（細部）


296 b（細部）

296′


55


56

297

298

341

図版62　用途不明木製品・井戸枠

299

300

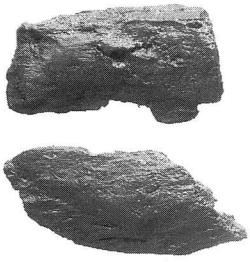
301

302

303

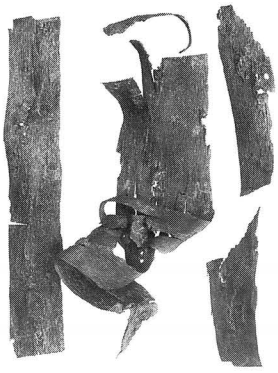
305

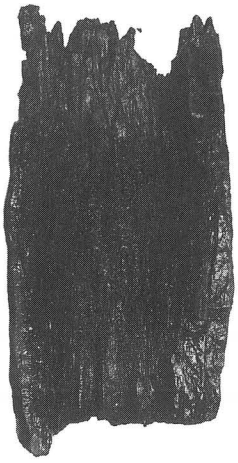
306

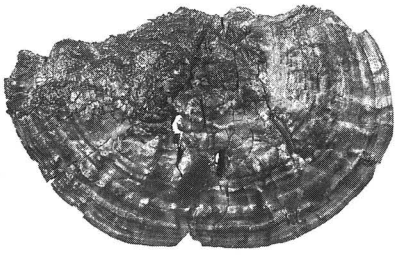

307

304

308


342


309


343

309′

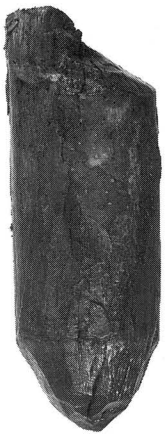
310

310 a（細部）

310 b（細部）

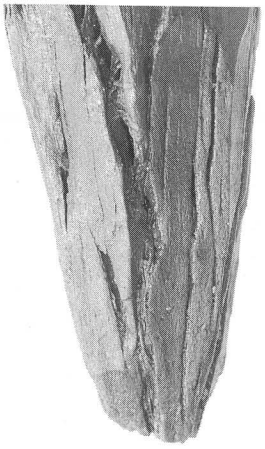
311

311（細部）



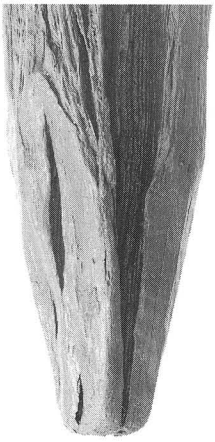
312

313

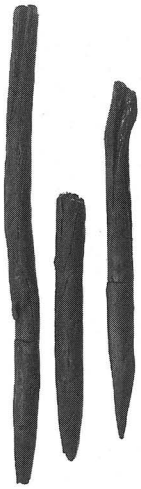


313（細部）

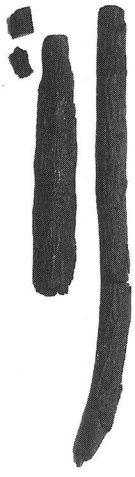
314



314（細部）

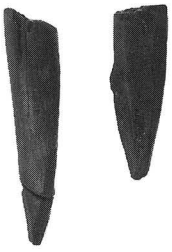


315



316

317



318

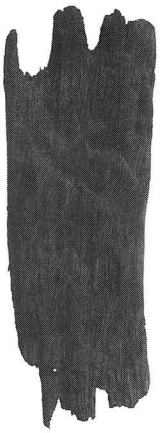
319

図版64　用材

320

321

322

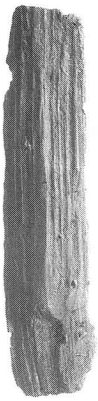

323

324

325

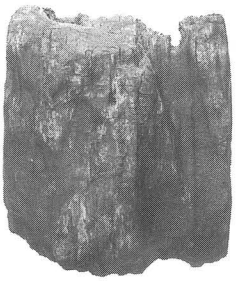
326

327


328

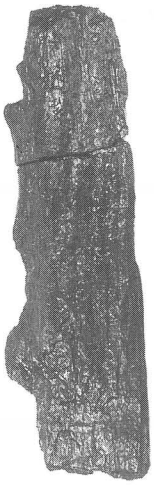
329

330


331

332

333



334

335

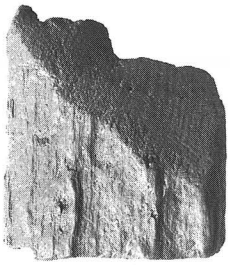
336

337

338

339

339（細部）



340

# 高宮八丁遺跡

## 木器編

平成元年3月

編集
発行　寝屋川市教育委員会

大阪府寝屋川市本町1番1号

印刷　サツキ印刷株式会社